岳山

卷一十才
号十才

黑部鐘川

岳　山

（號　父　秩）

第十一年第一號

大正五年十月

甲武信岳と奥千丈岳　森　喬……九二
武藏通志（山岳篇）　河田　羆……一〇〇

雜　錄

○奥秩父の登山に關する注意（木暮）○笛吹川の上流（東澤と西澤）（木暮）○秩父の印象（南日）○秩父旅行の思ひ出（南日）武奈岳の裏山道に就て（黑百合生）○鈴岳に就いて（伊藤德之助）○ハヒマツの生長の割合（H・T）○燒岳山麓の原生林保護（鵜殿）○穗高の三山說に就きて（鵜殿）○雲に對する疑問（山本德三郎）○山腹傾斜地の濕氣に就て（山本德三郎）○再び前の篇に答へて（ツルモドキ生）○L. Amateur の科學（森の人）
新著紹介
○霧の王國（鞭生）○日本アルプス登山案內（梅澤親光）○信濃鐵道案內（岳雄）○黑部峽谷（岳雄）○登山の栞（岳雄）

雜　報

○東久邇宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる○秩父の慘事○秩父慘事餘錄○落合海軍屬の死

會　報

○日本山岳會第八大會之記○名古屋の有志晩餐會○名古屋の山岳會○神戸講演會の記○第十六回有志晩餐會記事○會員芝川又之助君の死を悼む○會員登山報○編輯係より○寄贈新入會者○退會及び除名者

附　錄

日本に於ける氷河問題（第九回本會大會講演速記）　大關久五郎……（通頁）二三五
「マッターホルン」最初の登攀に就て（第九回本會大會講演大意）　工學士　岩村圓……二四四
會員名簿　別冊

目次

（大正五年十月二十日發行）

表紙……富田溪仙氏筆

挿圖

白岩三角點より和名倉山（白石山）を超えて甲武信岳を望む　辻本滿丸氏撮影……一六頁
雲取山頂より大洞山を望む　同　上……三二
三峯奥宮より雲取及白岩の二山を望む　同　上……四八
一五二三米の峯より南方に白岩山を望む　同　上……六四
雲取山頂より西望　木暮理太郎氏筆……八〇
The first ascent of the Matterhorn　（通頁）二四八
ウヰンバーが下山の途中見たる幻影　同　二五六
M. A. Croz 及び A. Seiller 並びに J. A. Carel の肖像　同　二六〇

本欄

秩父號

秩父の旅　文學士　南日重治……一頁
奥秩父の山旅日記　木暮理太郎……三八
三峯より白岩及雲取越へ　工學博士　辻本滿丸……八二

秩父號

本欄

金峯山から雁坂峠まで　南日重治
奥秩父の山旅日記　木暮理太郎
三峯より白岩及雲取越へ　辻本滿丸
甲武信岳と奥千丈岳　森喬
武藏通志（山岳篇）　河田羆

雜錄

○奥秩父の登山に關する注意（木暮）○笛吹川の上流（木暮）○秩父の印象（南日）
○秩父旅行の思ひ出（南日）

私達日本山岳會の會員一同は、秩父の奥に斃れたる、方々の死を悲しんで居ります、同じ道を歩む方々の死を聞いた時は心より哀れに物悲う御座いました、私達一同は此「秩父號」一册を秩父の天にかける方々の御靈に捧げまつりたいと存じます、

日本山岳會　會員一同

秩父の旅

南日重治

一　金峯から雁坂峠まで

あこがれて居た五月下旬の旅は、午後十一時飯田町發の名古屋行の列車にはじまる。新宿で乘り込んで木暮君中村君と會合すれば三人の話がもう山に移つて、各自背負つて來た荷物の重いことをかこつ。梅澤君が飯田町へ見送つて、我々の爲め持つて來て呉れた甘酒の罐詰二つは汽車の棚に置かれる。之が自分一人で平げる結果にならうとは誰が思ひがけやう。(外にお多福豆の罐詰を一つはなむけにされたことを南日君は忘れてゐる。木暮)

話が中々はづんで、昂奮しきつて居る心は、早く夜の明けんことを待つ。それでも汽車が小佛峠を過ぎてからは少しうとうととして來たのが、笹子トンネルで眼がすつかりさめて氣がえらだつ。鹽山と日下部との間で、破風から古禮山までの秩父連嶺がありありと見えるが、それでも低い雲が甲府平一面にかゝつてゐるのが氣にかゝる。

甲府の町で着眞莖、マッチ、蠟燭、草鞋等を買ふて、天氣はどうでしやうと問へば、今日は上天氣になりますと云はれて、もう嬉しくて堪らない。町を離れてしたしみ深い御嶽さして和田峠に向へば、空が日の出るに從ひすつかりはれて、樂しい聯想が浮んで來る。白峰三山が、殘雪を頂いたまゝ南アルプスの深い深いかなたに嚴かな姿をあらはして來るのに、たゞたゞ深い深い林と、其間に流るゝ青い青い溪流と、どこまでも深く高く登つて行く山の姿のみが頭の中にありありと浮ぶ。天神森で朝食

をたべる。此のあたりから、惡澤岳が源氏山と黑河内との間に見える。美はしい御嶽の景色は、追々せまつて來て、いつ見ても天狗岩や昇仙橋や仙娥の瀧は美はしい。しかし自分等の憧憬れて居るところは、もつと幽寂の境であつて、そこには嘗て人の氣色のしたことのない、平素からさぞ深からうと想像にあらはるゝことが夢となつて、覺めて居る間もあらはるゝやうに、自分等に取つて深い實在をもつてゐるところである。

石の門を通れば、川が俄かに開いて、處々落葉松のあらはれるのも嬉しく、村を通り過ぎて御嶽近くになれば、昨夜寢ねなかつたのと荷が重いのと暑いのとで、からだがふらふらしてならないのを、前途の樂しみを夢みつゝ勵まして進んで行く。御嶽の村で小休みもしないで、黑平の方へと急ぎ行けば、やうやう路が急になり、水清く、美はしい落葉松が林立して、躑躅の花が處々に咲いて居る。猫坂にかゝる手前の落葉松の下で休みながら、飯を焚く。時に一時頃であつた。

峠道のつゝじと落葉松とは、御嶽あたりに見られぬ深みとうるほひとがある。峠に登つて仕舞へば、黑平の谷が前に開けて、金峯が雄大なる姿を其背後に開展して居る。麓の方に萠黃色に見ゆるは新綠、箒を倒まに立てたやうに見ゆるのはまだ若葉せぬぶな林で、頂に近い方には、殘雪が處々に見えて其下は悉くの針葉樹である。黑平の村は萠黃の色に充ち紅の色其間を飾れるは躑躅で、清い水が谷の間を一面に潤してゐる。黑平の紅葉の美は嘗つて見たことはあるが、若葉の色も紅葉の色のよいだけにうるはしい。

下黑平を經て、右へ少さな峠をうねると上黑平に出づる。右に見ゆるは荒川であつて、川と平行に上黑平を過ぎ村の神社を過ぎれば最早無人の境に入る。

少さな峠を過ぐれば道は河畔をうねつて行く。川向ふの山は、針葉樹が鬱蒼と茂つて金峯との山つづきを想ひ起さしめる。道はどこまでも川に沿ふてやがて橋を渡れば、右に折れて峠にさしかゝる。

小徑は落葉にうづもれて一足ごとにすべりさうなので、氣づかれが甚だしい。暑いのに綿入を着て來たのと荷物が重いのと睡眠不足のため登りが中々こたへる。密林の間をかさこそと音たてゝ、只三人物も言はず進んで行くと、やうやう熊笹があらはれて、左の深い谷の青葉はぶな林の間から織りなすやうに華美やかに、其深い奥から轟々の溪流の音が聞える。何處見ても無人の境、もうすつかり深い深い奥へはいつて仕舞つた。行けど行けど林は深くなるばかり、熊笹のさはさはとする音が心の奥にひゞく。

斯く自分等は、金峯に一歩一歩近づきつゝあつた。迂回そして迂回、隨分行つたと思ふがやうやう水晶鑛への分岐點へ來たに過ぎない。數年前の秋木暮君と二人で川端下から金峯を越えてこゝまで來て、日が殆んど暮れかゝつた時、木蔭に立つて居た獵師の姿を見て、熊笹を分ける我が音にも寂しさを感じつゝあつた自分等はいさゝか不意なのに驚いたことがあつた。

これから御室川には程無いと云ふうろ覺えは間違つて居つた。分岐點から間も無く道は凹んだ濕地へ出る。そこらあたりには落葉松が多く、見上げる限り大きな栂や落葉松が限りなく立つて居る。小さな溪流が其間に流れて居て、こゝらあたりで泊れぬこともないが、御室川までは是非今日中にと勇氣を奮ひ起して行く。

幾ばらく行くと俄かに左の方の窪みから何物が飛び出す音に少したぢろぐと、五匹計りの鹿が美しい姿を峯の方へと一目散に運び行く。それは今宵の寢床に就かうとするのを驚かされたのであつた。道は俄かに登つて、登り切ると再び下る。此時日が暮れて、道は溪流を通る。所々殘雪があつて風が冷たい。道が再び登ると、栂の林が一層深く、風が凄い音を其間に鳴らして居る。暗い中に道を求めながら下れば初めて御室川原に出づる。

御室川はこゝで下流れとなつてゐて、白い河原は暗を縫ふて白く光り、寒い風が吹き渡つて居る。

金峯の登口には水が無いに定つて居るので、こゝからは河原を下る方が水に近からうと云ふので下れば、瀨の音が近くに聞える。二三丁にして俄かに多量の水が溢出してゐる處があつたので、其あたりの林の中に野宿の場所を定める。そこいら一面に岩が多くて空地が餘りないので、背を大きな岩によせかけて川を前にして焚火をする。ひどく疲れたと見えて、足が立たないのを引き立てゝ御飯の用意をする。飯を喰つて仕舞へば、睡氣が頻りにするが、寒いので中々寢られない。夜中に火をかきたてて甘酒をこしらへて二人を起せど、二人とも性氣がない。梅澤君の三人に對する折角の好意は殆んど自分一人で讃斷せざるの止むを得ざるに至つた。(其代り豆の罐詰は南日君の寢てゐる間に中村君と自分とで平げて仕舞つた。木暮)しかし甘酒の罐詰二つを、何うして自分一人で平らげたかは、今日湯にとかす分量を眞に知つた自分には、可笑しくて堪らない。

次の朝四時に起きて、御飯の用意をする。今日は晝飯をたく水が無からうと云ふので一度に炊いて置く。七時前に出掛けたが昨日の疲れが直つて居ないので、足がはかどらない。御室川を遡ぼつて金峯へ登りかけると瀨の音が遠くなつて、幽寂の趣があたりを込めて、途中南アルプスの姿が見える毎に中村君が怒鳴る。(中村君が感極つて排泄を催したのは此時である。木暮)殘雪が處々にあるやうになるのが六合目あたりからだらう。段々樹木が小さくなり大きな岩石が壘々として重なり合ふてゐるのを登り行けば、間もなく頂上に着く、其時は十時頃であつたらう。

川端下から初めて金峯に登山した數年前の時は霧にまかれて何物をも見ることが出來なかつたに引きかへ、今日は何たる好日和であらう。東海の富士は斑雪が扇のひだのやうに美はしく、六合目以下は横に霞が三段にかゝり、南アルプスの雄大なる山系は云ふに及ばず、八ヶ嶽の右には北アルプスが眞白に齒立して、上州の山々は殘雪を帶びて更に其の右に光つて見える。

八ヶ嶽の裾野から南信へかけての初春は、やうやう動きつゝある。凄いやうに白く冴えてゐる八ヶ

嶽の頂から漸次に黑く、そして樺色に、やがては蒲黃にうつりかはる山の色合は、渾然として雄大なる五月の山姿をまのあたりひろげる。

頂上の三角臺の石に仰向になつてゐると、二人の登山客がやつて來る。今朝黑平を出掛けたのだと云ふ。行手の秩父方面を見やると、甲武信岳、三寶山等の主峯は、國師の向ふに遠く見えて前途が頗る遠い感じがする。しかしそれだけ渡るべき山々の多いのが嬉しい。天氣は申し分がない。これが永く續けばよいと只それのみが願はしい。奥仙丈の方へ向ふ。密林を分け行くにつれ、殘雪脛を沒する。特に比較的脛の短かい木暮君を惱ますので、木暮君頻りに嘆聲を洩らす。(此時二人の向ふ脛を五寸許り叩き切つて遣りたいと思つた。木暮)朝日岳へ到着したのは一時頃であつた。

こゝで晝飯を喰つて、甲武信岳は愚か國師岳を見ても、中々まだ遠い。甲武信岳まで金峯山から一日で行かうと云ふ計畫は、何と云ふ無謀なことを考へたものだらうと今更可笑しくなつて來る。近いやうに見ゆる國師岳も今迄の經驗によると容易に行かれさうもない。白檜の間をわけて、峯を二つばかり越えると、國師の頂上が前方の國境に聳立し、それよりも近く、國境を離れて甲州方面に、やゝ國師よりも高いと想はるゝ一峯が立つて居る。之が大嶽山の奥の院(大嶽山の奥の院は國師岳より五六丁下の岩窟のある所がそれであらう、此頂上に石碑はあるが奥の院とはいはない樣である。木暮)である。先づ後者から登り始める。山容は慥かに國師よりも豪壯であつて、餘派は遠く川浦方面まで延びて二千二百米突より二千四百餘米突に至る間の幾多の高峯を派出してゐる。もう四時に近い、何れこゝいらで水を探らなければならないと云ふので、あちらこちら踏み慣した足跡について行つて見たが、どうも水がありさうにも見えない。かうなると雪が何よりの賴みである。こゝから見ると國師岳の甲州方面に向つて居る斜面には、一面の殘雪が樹間にきらめいて居るので、頂上から降りて、元と來た道を下り國境の切分に沿ふて國師岳の殘雪多い斜面へ向ふ。來て見ると野宿に屈强な、柔らか

さうな、乾燥した平地が殘雪のほとりにある。そこに荷物をおろして、木暮君と中村君とが焚火の材料を集め、自分は殘雪を掘る。殘雪は深いところは三尺位もあつて、大きな倒木を蔽ふて堆かくなつて居る處の綺麗さうなのをかいて居ると、俄かに片足が雪の間に落ちて股位も踏み込む。其殘雪の下には澤山の雪解の水が流れてゐるのであつた。思ひがけなく水を見付けたので、もう第一の心配が無くなつて、火が盛んに燃やされる。あたりに矛を立てたやうに突立つてゐる白檜は、強い風の爲め殆んど枯れて、少しゆすぶると直ぐに倒れて、焚火の間へ入れられる。こゝはどんなに低く見ても、國師岳下僅かに二丁位、海拔八千百尺以上はあらう。風は盛んに吹いて、火が時々毛布に飛ぶので、氣が氣でないが、それでも火が盛んに燃えるのと、燃料が豐富なので割合に暖かい。下が笛吹川にのぞんだ一帶の栂の深林、耳をすませば深い風が林間を通うて、時鳥の聲もあまり聞えない。恐らくは木賊山の溪間に寢た夜と此夜とは、自分が今まで野宿した內での最も深い、最も緊張した一種の感じを體得せしめたやうに想ふ。すれ合ふ木と木から生ずる一種の哀音の情調、現實から遠ざかつて遠い地平線上に退いて、そこに何物かを獲得するやうな、そこらあたりに彷徨ふ感じ、此等は深い森林の中で自分を離るゝことの出來ないものである。

明くれば次の日四時起床、朝食の仕度にかゝる。天氣は依然として日本晴である。出掛ける時に焚火を消して、頂上へ向ふ。頂上の豪壯は大嶽山の石碑のある處にこそ及ばないが、中々立派である。これから甲武信岳へ行くのが何處を向いて行けばよいのか一向目當がない。切分があるが、隨分下つて行きさうなので、果してそれなのか知らんと大きに間誤つく。しかし何うも外にはつながりがありさうにもないので、やゝ躊躇しながらも低く低くと切分を下つて行く。下つて行くにつれて、梓川の上流が深く深く谷を押し分けて入り込んで、自分等の通つて居る嶺を最後にして居ることが分つたので、やうやう胸をなで下す。栂の林が段々密になつて來る、中村君は頻りに栂の香ひがすると云ふ。

途中殘雪のある所で雪を融かして御茶を煮る。(此處から甲州方面と信州方面へ下る道らしいものがあつた、果して夫が道であることは後に東澤から此處へ上つた時に判然した。木暮)こゝらあたりは一面に笛吹川の方面は傾斜が急で、梓川の方面は容易に降りて行かれさうである。もう此處あたりが一番低い所らしい。追々切分が登りかゝる。笛吹川の方面の傾斜が益々嶮しくなつて、遂には急激な絶壁を作成して、宛から巖峯を聳立させてゐる所がある。こゝからは笛吹川の全容が一眸の内に入つて鷄冠山が向ふに聳え、笛吹川の釜澤が、深い流れを深林の内に閃めかせて居る。恐らくは甲武信岳を中心として見た一帶の深林中、眞に深い人跡の未だ到らない、斧を入れたことの無い、そして入れることも出來ない深林は、釜澤の流域のそれであらう。巖峯に座して釜澤を窺き込んだ人は、必らず釜澤に這入り込まなければならないやうな魅力を感ずる、そして之を試みる人は、必らず其到底不可能なことを悟るに相違ない。何となれば、それは名の示す通り、全部瀑の連續だからである。

えばらくにして切分が二つに分れて、一つは五郎山となつて梓山村で終る分脈の上を走る、其最高峯は二千三百八十米突餘に上つてゐて、分岐點からは餘り遠くない。自分等は荷物をそこに卸して最高峯に向ふ。廿分にしてそこに達し、遙かに五郎山を見る。あれが梓山の戰場ヶ原のそばよと想ふと、何となくなつかしい。日が晝過ぎ可なり進んだやうな氣がして氣が忙がしく、甲武信岳までは未だどの位あるだらうかと内々氣にかゝるので急ぎ引き返す。分岐點から少し行くと又少し登つて一峯を峙てゝゐる。恐らくは二千四百米突位はあるだらうと想はれる。それから少し降ると今度は甲武信岳の斜面にかゝる。甲武信岳の頂上へついたのは四時頃であつた。自分等はこれでこゝへは三度目である。初めて來たのは安十郎に案内して貰つた明治四十二年十月であつた。次は木暮君と二人で雁坂峠から縱走して來た時で、其時にはこれが甲武信岳と云ふことを忘れて、すつかり道を間違つたものと思ひ込んで、ひどく間誤ついたやうに覺えて居る。

ばらく頂上で休んだ後で、麓の小舍で寢ることゝして降りかける。あの暗い林を分け殘雪をふみながら、倒木を越えながら、靜かな太古の溪谷を降りて行く、實は十丁位のものだらうが、いつも疲れた時に降りるので、可なり遠いやうな氣がする。小舍について荷物をおろせば、丸で自分の家のやうな氣がする。小舍其物が全部燃料の堆積であつて重に白檜である。あたりに堆かくなつてゐるかんな屑、材木の切屑が、小舍のあたり半町位に取り散らかされてあるので燃料に世話が要らない。小舍の下敷は全部かんな屑で、如何にも温かさうに出來て居る。千曲川の流れは丁度こゝから始まつて、此小舍の前でやうやう米が磨げる位の分量が出て居るが、之が一里下れば奔湍激流をなし、三里餘にして國師から來る梓川と合し、次に金峯からの川端下川を入れて千曲の本流を形作る。百里の信濃川も源に遡れば、僅かに此小舍の前の清水に還へさるゝ。大きな信濃川の洋々たる流の盡きない所以は、此小舍の前の清水の盡きない所以であつて、因襲と妥協とに生を送る人間は、朝夕眺めてゐる大きな河川の姿を見て、其永久盡きることない流れの源を遠い遠い深林の彼方にしのぶことがあるだらうか。

小舍の鉋屑をしとねとして、三人共寢に就く。綿のやうに疲れた三人は、寒いにも拘はらず、割合によく睡る。眞夜中過ぎ目が醒むれば、小舍の上に頻りと雨聲をきく。東京を出て以來毎日珍らしい好晴が續いて、もう一ふりが來さうなものと待つて居たのが、甲武信岳の小舍で出會はしたのが何と云ふ天祐であつたらう。之が國師岳の下の野天での出來事であつたら、何といふみじめな且つ危險なことであつたらう。しかし未だ豫定の行程は澤山殘つて居る。甲武信から雁坂、それから唐松尾、未だ二日はかゝりさうだ。二人も目を醒してゐる。仕方ない梓山へ降りやうかと云へば、二人とも異議はないと云ふ。梓山へ降りることには、自分は內々嬉しさを感じて居た。あの數年前の秋見て、其後の夏木暮君と二人で通つた戰場ヶ原の若葉は、どんな色を以て自分等を迎へるであらうか。梓川河畔の宿屋は、今はどうして居るだらうかと云ふ考は、甲信國境の連山へはいつてから始終自分の頭の中

を往來して居た。そして初めて見て親しみを感じた場所は、毎も其後特別離るべからざるやうに、美はしい物、親しい物の内にいつも其面影を浮べて、其昔しの附帶的な微細な點までも想ひ起さしめる。

南信の音樂！梓山の紅葉を見た人、其すき透るやうな白樺の若葉を見た人は、必ず節奏美はしき音樂の漂ふ感じを、そこに想ひ起さずには居られない。中村君にいつかは御伴しやうと云つて居た梓山を、今日三人で音づれることが出來ると云ふ其事は、寧ろ自分には今日の雨を有難いものと想はしめるやうになつて來た。梓山まで今日一日の旅なればとゆつくり構へて、ゆるゆると仕度をして午後一時に出發する。雨具はない。之には少々困つたが、幸ひに自分の大きな油紙がある。之を三つに切つて、頭から被つて、鉢卷をする。ほかはゴザを着てゐるので大體濡れることは無い。只自分は和服を着けて股引が密林をかき分ける際に幾度となく引かゝつて裂けて仕舞ひ、膝がすつかり出て居るのには少し閉口である。

小舍から下は立派な林道が出來て居る。木暮君が眞先に行く。梅の林の暗い中を、どこ見ても、岩あれば苔むした岩の寂しさと靜けさとの間を、霏々とふる春雨の間を小走りに行く。中村君は頻りに大井川にでもありさうな立派な深林だとほめる。もう戰場ヶ原を一里位にしてから、そろそろ濶葉樹が出て、下草が少しづゝ深くなる。木暮君と中村君とは、頻りと草の話しをはじめる、初めて甲武信岳へ來た時、安十郎が此の邊で大きな松茸を取つて呉れたところだと當年のことを話す。八町ヶ原の入口の小舍は人が這入つて、焚火をしながら、自分等の異樣な姿を見て居る。

俄かに明るくなつたやうな氣がすると、自分等は八町ヶ原へ來る。十文字峠の入口は、右の方に見ゆる。春雨ははれて、原が一面の霧でうすく蔽はれて居る。水々しい白樺は、今こそ新らしい生命を自覺したかのやうに、山の側々までも千曲川のうねつて居る此原を若々しい裝ひを以て閃めいて居るしかし戰場ヶ原の美はしさは、之に優つて居た。一面の薄い靄がかゝつてゐる中を、夢のやうに立つ

てゐる落葉松の深い神秘的な姿、南信の一帶の音樂を一層引き立てゝ自然の妙工のたゞならぬことを敎ふるかのやうな白樺と落葉松との美はしい配合等は、殊に此原の特徵となつて、嘗て十文字峠を越えた幾多の旅客の杖をとゞめしめたらう。どこ見ても梓山は白樺と落葉松との村である。そして色彩の村である。誰でも十文字峠を越えて秩父の色彩を見て來た人も笛吹川を遡つて甲州の色彩に深くみとれて來た人も、等しく梓川の溪谷へはいつて驚駭の目を以てしみ入るやうな深い、內密的な、象徵的な、神秘的な、人間の最後の感情を開展するやうな千曲川の色彩にみとれるのが常である。畵家は最も最後の氣分を表現すべく、歌人はかのウエルレーヌのやうな氣分を歌ふべく、哲人は、最も深い自己を內觀すべく、梓山に走つて、此の優越な自然の色彩を味はなければならない。

梓山へ着いたのは四時過ぎであつた。村の氣候は未だ冬に近く、火燵へはいつて茶をのむ。晩に酒の肴に椎茸を喰ふ、其大きさはかれこれ小供の頭ほどある。安十郎を呼んで貰つて山の話を聞く。もうすつかり白髮になつて見遂へるほど年が行つた。晩になつてから空がはれて來る。明日は何うするかと云ふ問題が起つて來る。八ヶ嶽の裾野を通つて日野春へ出て歸らうと云ふ說から、黑森峠を越えて歸らうと云ふ議から、無穩に十文字峠を越えて行かうと云ふ案から色々出たが、此等は結局皆打消されて、十文字峠の途中から信武の國境に沿ふて再び甲武信岳に登り、それから雁坂峠まで縱走し、それから栃本へ出て東京へ歸らうと云ふ案が、最も積極的で面白からうと云ふことで、之には異議がなかつた。

明くれば次の日すつかりはれ渡つて、山氣冷やかに、宛ながら東京の十月のやうな心地がする。七時前に宿を出ると、村はづれから八ヶ嶽の皚々たる雪の姿を見る。戰場ヶ原の美はしさはいつ見ても變らない。今日は山々の際々まですつかりはれて、行方の十文字峠の綠りの色の積み切れない堆積が、行方の山を壓し、秩父の最高點三寶山は、平たい山頂をあらはしてゐる。

千曲川を渡つて、道は草深い間をわけて爪先上りとなる。流れに遠ざかるに隨ひ、道は幽邃な栂の林を分けて行く。ボーボーボーの鳥の聲は、相變らず聞え、武信の境から出る流の音が遠く轟々の音を立てゝ居る。峠を一段登り切る頃から、石楠の深紅の花があらはれて來る。毎もあとで考へて見ると峠をざつと登り切るまで近いやうに思ふが、實際歩いて見ると中々遠い。千曲川を渡つてから峠を登り切るまでは十五六丁位に考へて居たが、實際登り直して見ると三十丁餘りもあるやうに思ふ。

峠を登り切ると、道は平らな嶺の上をどこまでも通つて行く。武藏と信州との國境に程なくついて、こゝから國境について切分を探りながら右に迂回する。嘗て木暮君と二人で、はじめて此峠を通つた時、甲武信岳へすぐこゝから達せられるやうな、暢氣なことを考へて潛り込んで斷念したのもこゝいらであつた。自分等の通つて居る所は、荒川と千曲川との分水嶺であつて、荒川の方面へは盛んな峭壁を形成して、荒川の支流股ノ澤に向つて三つ計りの巖峯を聳立せしめて居る。其最高峯は二千三百米突に達し、之から荒川に俯して見れば急峻な流れは、初めの間は針葉樹の間を、後は燃ゆる樣な濶葉樹の間を走るのが見える。盛んな荒川の流れ、之を探つて見たいとの心は、其時から生ずるに至つた。こゝから見た梓山の戰場ヶ原は、平らかな平地に、夢のやうに柔らかい落葉松を散在せしめて、平和な夢をむさぼつて居る。

巖峯の手前で飯を喰つて、三寶山を目當てに切分をわけて行く。暗い天日を洩さない物凄い斜面を登ると、白檜の身動きもならぬ中に迷ひ込むともう頂上に近い。左の方へ少し迂回して切分を見附けて右行すれば頂上に達する。三寶の登山は、之で二度目である。最初の登山の時に、甲武信岳から來て、身動きもならぬ木の間へはまり込んで、熊の糞を拾つて安十郎に鑑定を乞ふたのは、直ぐ頂上から甲武信岳へ向つた方の下であつた。今は十文字峠から直接に甲武信岳へ林道が出來て、三寶山の荒川に向つた側面を横切つて走つて居る。

こゝから甲武信岳へは甘く行けば三十分で行かれる。しかし今度は切分が甘く見附からぬので、彼是一時間かゝつて行く。一昨日登つた山に又登つたわけである。越え來た方を見れば金峯から國師、それから梓山、十文字峠、三寶山と隨分迂回したもの哉。そして、憶へば、甲武信から金峯までを一日で越えられさうに考へて居た可笑しさよ。此處に立つて四方を大觀すれば、秩父も流石に廣い。秩父の最高峯は、今迄に一通りは歩き盡したやうなものゝ、鷄冠山の怪奇、笛吹川の秘密、荒川の紛糾は、未だ探られずに殘つて居る。殊に甲武信岳から見た笛吹川の幽寂、眞ノ澤の雄大は何うして探らうと云ふ心が生せずには居られやう。

もう三時過ぎである。木賊山か破風山のうしろで水を求めて野宿しなければならない。急いで出掛ける。三寶山、甲武信岳、木賊山（安十郎の雲切山）の三山は、遠くから見れば、一つ山と思はるゝ程に近いので、木賊山へは忽ちにして達する。其標高は二千四百六十八米突であつて、甲武信岳より低いこと十米突位のものだらう。此山から鷄冠山（二千百十二米突）が笛吹川の溪谷へ深くはいり込んで、其笛吹川へ向つた方面は悉く急峻な峭壁を形成して居る。三寶山や甲武信岳から出る水は、荒川の本流眞ノ澤となり、木賊山から出る流は、木賊澤の流れとなつて眞ノ澤に合し、之がやがて股ノ澤をも合するやうになる。

自分等は、木賊山の荒川へ向つた方面の、水のありさうな所を探る。頂上から少し破風に近い方の荒川に向つた方の山の皺について、荒川の方へ降りて見る。皺が追々深くなつて水の無い溪流の形ちになり、それが一丁位下の方で光つてゐる。初めは雪のやうに見えて居たのが、近づくに隨つて水であることが分つた。幸ひに水のあたりに平坦な土地がある。そして其邊りには燃料が澤山ある。恐らくはそこは、頂上から約五丁位のものだらうと想はれる。もう今夜は最後の夜營であると思ふと何となく物寂しい。今日は國師の下の夜營よりは遙かに寂しく、一層の趣がある。焚火をしながら飯をたい

て居ると、頻りにカッコーの聲をきく。今迄時鳥の聲は毎夜聞いたが、カッコーの聲を聞いたのは今初めてゞある。飯をすまして横になれば、萬感頻りに往來する。耳をすませば、栂の林の風靜かに、何とも云へぬ森嚴な感情が枕のほとりに漂ふてゐるやうな氣がする。そしてカッコーが依然として鳴いてゐる。時々襲ふて來る睡氣も、しばらくしては寒さの爲めに追ひ退けられて、睡つたり覺めたりして一夜を過ごす。

明くれば又も上天氣である。今日はゆるゆると栃本までの旅かと思へば、暢氣なやうな哀れなやうな感じに充つる。晝飯は雁坂峠下の一杯水で炊かうと云ふので、朝飯を喰つたまゝで出掛ける。破風へ登りかける所の難處も難なく越え、磊々たる斜面を登つて頂上に達する。こゝは二千三百十七米突で、これからは雁坂峠へは雜作ない。しばらく危ない馬の背のやうな處を通つて、時々通り切れない處は後へ絡んで、しばらく降りて登ると雁坂山の頂上である。こゝは海拔二千二百八十九米突であつて、眺望は樹木の爲め遮られて割合に少ない。これから降る一方で、雁坂峠の頂上へ午前十時頃についた。峠を甲州方面へ降りること二三丁で一杯水と云ふところがあつて、清水が湧いて居る。こゝで御飯を炊く。もう栃本へ行つて宿る外に何もすることはないので、持つて居る喰物はすつかり平げる。御茶の餘りも飲んで仕舞ふ。可なり休んだ後で出掛ける。頂上から左の舊道をとつて行くと、大きな栂の木が見渡すかぎり限りなく林立して居る。木暮君がそろそろ特意な摘草をはじめる。(自分は此時梭葉草と燕オモトを少し堀り採つた爲に中村君から薫風園の仇名を頂戴した。其癖中村君は朴、栃、楓、山卯木の類から草の類まで、一抱へもある荷物を拵へて、田端まで擔ぎ込んだ、どつちが薫風園に近いか譯の分る人に判斷して貰ひたい。木暮)道はやがて熊笹の間を走つて、さわさわと我が身に觸れて音たてるのにも、我知しらず恐れながら行く。濶葉樹があらはれて來ると瀨の音が遠くに聞えて來る。二人は道草で遲い。自分は一人先へ先へと行く。やがて荒川の橋を渡つて栃本の村へついて大村

興一方にはいると、桑つむ乙女の歌聲が後ろの方から頻りと洩れて來る。御茶を飲みながらワナグラ山を見て居ると、しばらくして二人が大急ぎでやつて來る。時鳥の聲が頻りと聞える。

二　笛吹川を溯る

汽車で甲府平を通る時、笛吹川の荒凉たる流れの姿を見て、誰れか想ひを甲信の境にはせて、渾然として潤ひに充てる其源の面影や、人爲の跡の入込んだことのない完全や、自然それ自身の純一なる調整を想像しうるものがあるだらうか。

嘗て中村君、木暮君と共に、金峯から雁坂までを縱走した時、秩父の範圍で最も自分等を牽き付けたのは、鷄冠山の異樣なる風姿と、其麓にいやが上に深くくひ込める其流域に立ち並ぶ、とけて滴たりさうな落葉松や白樺の五月の色彩とであつた。甲信の境から巖峯にもたれながら此風貌を俯瞰した時、自分等の願ひは期せずして、いつかは笛吹川の谷に分け入りたい、そして此谷を甲信の境に攀ぢて更に信州梓山に拔けて見たいと云ふことであつた。其翌年大正三年、自分等は若葉の色に牽かれて金峯山から梓山へ拔け、それから十文字峠を越えて秩父へ出たことはあるが、遂に此願ひは果されずに殘つて居た。

其翌年の五月は晴やかに、又もや宿望の遂げられざる憾みを、一層切實な色彩の濃艶と翠綠とを以て現じて呉れるので、三人は今度こそ笛吹の奥へ是非行かうと決心する。

新宿の停車場へ三十分も早く行つて待つて居ると、藝術家的衝動が漸やく充ちかゝつて來た中村君の發作が、今までの決心を飜へしやしないかとの心配で氣が氣でなかつたが、しばらくして元氣よくやつて來た。待遠い汽車がやつて來て、木暮君が鐘馗面を汽車の窓から出して呉れてゐるので、もうそれで心が落着く。汽車が午後十一時三十分に動き出す。中村君は今度は大層おとなしい。

國分寺あたりから睡氣が頻りに襲ふて、八王子とよぶ驛夫の聲がおぼろげに聞える。初鹿野笹子を夢の中に過ぎて、勝沼で二人が怒鳴るので目をさますと、夜は既に明けはなれて、南アルプスの主峯斑々たる雪膚を甲府平にあらはしてゐる。それから金峯、それから秩父山脈と、中々忙しい影燈籠の中を、汽車は鹽山について、自分等は降りる。

我等を祝福した五月の天候、どこ見ても水々しい青綠のうるほひある色彩、もう心は甲信國境にかける。

五月といふ月は、毎も自分等には抑へることの出來ない自然に對する興奮と憧憬とをそゝる季節である。燃ゆるやうな青葉の綠のいやますにつれ、綠りを綴る花の色が深い永遠のかなたから、暗示的な閃めきを以て無言の響をさゝやくにつれ、自分等にはいつも自然の最も深い、其生命のとゞろき返るたゞ中に透入しなければならないと云ふ必然的な願望が起つて來る。五月の色彩の音樂的融合は、十月の色彩の象徵的な閃めきと共に毎も力强い渴望の對象となつてあらはれて、かのギリシヤ人の所謂前生の戀の昔しに立還らんとする執念さを以て、自分等の心はいつもそこへ牽き付けられる。

停車場附近の町らしいところをはなれて家がまばらに立つてゐる町がゝつた村の茶店で、饅頭と古生層のやうな色をした駄菓子をたべる。いつも秩父山塊の中へ這入るときには、古生層のやうな駄菓子を喰ふのが自分等の常規となつてゐる。

想ひ起す數年前、木暮君と二人で七月二十日過ぎ、矢張り此の汽車で此道を通つて、雁坂峠から甲武信岳へ縱走をしたことがある。しかし其時は、すつかり曇つて居て見ゆるものは笛吹川の流れと向ふ岸の人家とで、前途心元ないやうな想ひをしながら、重い荷物を咀ひながら重い足をすゝめて行つた。それに引き換へて、今日の天氣は何と有難い日だらう。どこを見ても青い空、青い森、青い草、青い水、顧み見れば、青い膚を白く斑にせるは、南アルプスの連峯である。

笛吹川の兩岸が漸次に迫つて、青葉の谷が段々深く、山つゝじの色其間を點綴する。鹽山から柳澤峠へ通ふ道の潤ひなきなつかしみなき道とは異つて、此道は趣むきに富んでゐる。途中右手にある茶店にしばらく腰かけて山の上から落つる瀑を見る。足がはかどつて川浦溫泉場をいつの間にか通り有名な一の釜の景色も特別に見やうとする氣もなく過ぎ、十時圓川へ着いて、そこで間食をたべる。

圓川から向ふは人家が無くなり、道は爪先上りとなつて、やうやく勝れて來る笛吹川の流れを俯瞰する。半里餘りで廣瀨に達する。今迄の狹い谷が急に廣濶な平原狀を呈し、道の兩側に廣瀨の人家が點在して、如何にも寒村らしい面影をもつてゐる。眞向ふには、秩父の木賊山が殘雪を頂いて聳立し、破風雁坂へと連なつて、秩父の最深の一部を露出せしめてゐる。川を距てゝ國師岳から派出して居る丘の綠は、しみ入るやうに靑く、雁坂峠の頂上から廣瀨の平原へと卷き降す綠の波は、まだ芽生えせぬ赤味を帶びた枝をとりませて、いやが上に高くから、幾つも幾つもうねつて來る。十月の紅葉は何うだらうと、たゞそれのみを想ひつゞけて笛吹川の奥へと急ぐ。

廣瀨の村を過ぎてから右を行けば雁坂峠、自分等は左に笛吹川に沿ふて道を求めながら行く。

道は山の腰にぶつかると、俄かに川は左に迂回する。そしてこれから川はそろそろ、其神秘のとびらを開きはじめて、甲府平で見た笛吹川に對する想像は、全く破れて仕舞ふ。仰ぎ見る限り、壓するばかりに重り合ふ兩岸の靑葉の間を、盛んな音を立てゝ幾多の溪流が笛吹川に流れ込むで、白う閃めく厚朴の花は、水の音に絶えず震のいて居る。小さな澤を横切ると道を左に下りて河原傳ひに行く。行方を見やれば、水靑く、白い河原は靑葉の谷に埋もれて、はてしも知れず永遠の奥にとかくれて行く。名も知れぬ花が、綠の間を綴るうるはしさは、梓川の溪谷にも勝つて美はしく、限りなく續く若葉のトンネルはいつまでとも分らぬやうに續いて居る。

流れは二分せられて自分等は東澤を行く。甲信の境から盡きぬ深林を、曲り曲つて來る東澤の流れ

辻本滿丸氏撮影

白岩三角点より和名倉山(白石山)を超えて甲武信岳を望む

は、初め想像して居たよりも、遙かに豐富な水量と、遙に雄大な規模とを以て、流れて來ることがやうやく分つて來た。若葉の谷が少しづゝ暗鬱の氣分を帶びて來ると思ふと、そろそろ針葉樹が增して來て、前方には鷄冠山が殆んど登攀不可能の絕壁を以て流れを威壓して居る。笛吹川の流れは、一方は甲武信岳から、一方は國師岳から、も一つは國師岳と甲武信岳との間の連嶺から、密生せる栂の深林を切り拔けて、鷄冠山の麓をうねりうねつて、未だ人間に知られぬ幾多の深潭と瀑布とを形作つて來て居るのであらうと云ふ考が絕えず襲ふて來る。

豐富な流れは、幾ら行いても減じて行きさうな樣子もない。美はしい谿谷は、針葉樹のために暗さが增して來て、兩岸が益々高く、今迄美はしいと思つて居た景色に、段々凄味がさして來る。かう云ふ時に、いつでも前途の不安の感じが自然に働らいて來て、それが實現さるゝ場合が多い。谷が益々狹つて來る。そして水は益々深くなる傾きがある。笛吹川の流れは、遂に人跡を印すべからざるやうにと、自分等の行手に、打勝つことの出來ない障害を置くのではなからうかと云ふ考が浮んで來る。

果然笛吹川の神秘は俄かに其端を開いた。そして此神秘は永遠に開き盡すことの出來ないものであつた。峻嶮なる山相と凄慘なる溪谷は、絕えず此事あるを暗示はして居たが、斯の如き優秀な形式と、斯の如き高邁な形姿とを以て、顯はるゝとは思はなかつた。見よ笛吹川の溪谷は、狹り合つて上流の方へ見上ぐるかぎりの峭壁をなし、其間に湛へる流れの紺藍の色は、幾尋の深きにしみこんでゐる。流れはいつまで斯の如き峭壁にさしはさまれてゐるだらうか。此疑問が自分等の胸中に幾度も繰り返された。そして當分は先づ、河原を行く見込のないことが明らかになつて來た。それは、見上ぐる限り遙々と鷄冠山と國師からの分脈とが抱き合つて作つて居る笛吹川の溪谷は益々峻しく、そして鷄冠山の主峯を通り拔けるには未だ程遠くて、其間の流れが殆んど全部深潭を形作つてゐることが想像さるゝからである。

自分等は一たびは悲んだが、又嬉しいやうな氣がした。秩父の山（自分等の考による秩父の山）の美は、寧ろ溪谷にある。しかし之ほど壯絶な、而もアルプスに見られぬ潤ひを有する溪谷は、何處に見出すことが出來るだらうか。秩父は誇るべき一景を加へたことを喜ばずばならなかつた。

三人はこゝで國師の方から來て居る分脈を、なるべく河に沿ふて迂回するに決した時は、二時過だつたと思ふ。しかし之すら容易のことではない。道と云ふものは無論なく、すべり落ちさうな斜面を幹につかまりながら、落葉になやみ、枝に着ござを捉へられては引きかゝり、石楠花のうるはしく咲いてゐるのを無理やりに押し分けて行く苦しさには、花の色を味ふひまも無い。時々タラの木につかまつて惱んでゐると、直きに二人の姿を見失ひさうになる。

三時間も斯うして歩いたと思ふ頃、傾斜やゝゆるい溪流があつて、之を降れば笛吹川に出られさうなので、笛吹川の瀞も今頃は無くなつて、精々深くても股位のものだらうと高を括つて降りることに決する。しかし降りるに隨つて、兩岸の狹つてゐるのが分つて來たが、今更引返すわけにも行かないのでどこまでも降りて行く。溪流とは云ふものゝ、殆んど一枚岩をすべりさうに降りるのである。河原に近づくと、急に一丈餘りの崖になつてゐて、容易に降りられさうもない。日はやうやう暮れかゝつて來たので、氣が頻りにせく。降られなくても、何とかして降なければ、轉げ落ちさうな崖の上で、木につかまつて一夜を過さなければならない。よくあたりを注意すると、崖を瀑になつて落つる水の途中に石がある。之に足をかけて、斜めに身體を崖にもたせて水を浴びながら降りる。斯くして自分等は再び笛吹川の岸へ出た。見よ、驚くべき笛吹川の神秘！

僅かに開けたと思つた川の流域は、擂鉢のやうになつて、こゝから見た川の上流は、驚くべき奇觀を呈して居る。國師から派出されて居る分脈と、鷄冠山の餘派とが深く抱き合つて、トンネルを形作り、笛吹川の東澤の全流が其間に壓搾されて、それから流れが藍のやうに凄い色に吐き出されて、大

きな釜をなしてゐる。此トンネルがどの位續いてゐるだらうかゞ分らなくて、只暗い青い水の色が、奥深く光つてゐる。此處から下流へ降ることも等しく不可能である。全部見おろす限り、流れは絶壁の間を行く靜であつて、之が自分等が流れに別れた地點まで連續して居ることは、想像するに難くない。つまり自分等は全く死の谷へ這入り込んだのである。

かう云ふ際に自分等は豐富な糧食を持つて居なかつたら、第二の大黑茂谷の悲劇を演じたかも知れない。しかし自分等は、兼て此の樣なことがあるだらうとの豫想で、充分の用意をして置いた。日はやうやう暗くなつて來たので、此の谷間に一夜を明かすに決した。何しろ狹い谷間なので、平たいところは無い。岩と岩との間の稍や平らかなところの、邪魔になりさうな石を取り除いて、焚火をする。流れの緣の岩の上に腰を下してトンネルを窺けば、物凄い色どりは、日の暮れるにつれ一層地獄のやうに光り、凄慘な流の音には坐れる岩も搖り動く。そして暮るゝ間を彩筆を振ふて居る中村君は、凄い目をしながら泡立つ水を眺めて居る。

前と後とに物凄い靜をひかへて、左右に蜓立つ山を控へて、明日の不安を心に抱いて、而も生命の充分なる保證を以てかう云ふ處に一夜を明かすのは何と愉快なことだらう。仰ぎ見れば左右の山が狹り合つて、枝がすり合ひさうに見え、毎も今頃は盛に時鳥の鳴音をきくのであるが、こゝでは慘として鳥と云ふ鳥の鳴音は一つも聞えない。火は盛んに燃やされ、御馳走が開かれる。

東京から持つて來た豚肉を煮て、酒をのみはじめ、中村君も繪を仕上げて加はる。疲れたからだに酒はよくしみわたり、甘い味噌汁に飯が盛にのどを通る。笛吹川の一夜は、今思ひ出してもぞつとする程愉快であつた。

飯を喰つてから、毛布を被つて横になる。自分の塲所は比較的一番いゝが、中村君のは一番惡い。一番よいと云つても眞蓙の下では澤山の石ころだらけである。時々睡氣を催ほすが、色々の考が浮ん

で來る。恐らくは人間あつて以來笛吹川の此谷へ迷ひこんだ者が無からう。いや慥かに來ることはない。來る用がない。來ることが出來ない。全く偶然に自分等は迷ひ込んだのである。溪谷を上の方で殆んど蔽ふてゐる樹木の間からちらつく星が、時々雲にかくれる。雨が降つたらどうしやう。其時こそ絶對絶命だらう。しかし自分は今迄五月の旅に降られた試めしはあまりない。大抵大丈夫だ。こんな事を考へてゐる内に、うとうととして睡りはじめる。夢の中から消えては燃える焚火がちらつき、枕元には東澤の釜の地獄のやうな響が聞える。

翌朝四時木暮君が起き出して自分を起す。よく寢たやうだが、未だ疲れは癒つて居ない。見上ぐる空はすつかり晴れ渡つてゐるので嬉しさ限りない。流れに臨んで米を磨いで居ると、釜の色が瑠璃色を帶びて來る。飯を喰ひ終つてから六時過ぎに、又昨日降りた澤を登りはじめると、昨日の未だ癒らぬ疲れにからだがふらふらする、澤を登りつめて右へ廻つて、また木の間にはいつて石楠を分ける。密生してゐる木の間を分けた跡は慥かに熊の通つた道に相違ないと思つて居ると、處々熊の糞がある。木暮君は昨日通つた跡だと斷言する。(南日君は此附近の絶壁の下、自分等の行先正面に徑三尺もある熊の穴のあつたことを書き落されたから附け加へて置く。木暮)危ない斜面を通つて、岩燕の巣をくつてゐる高さ五六丈もあらうと思はるゝ岩壁の下を通り終ると、谷は俄かに開きえぐれて、向ふの出張りに達することが非常につらからうと思はれるのに、下を瞰下すと翠綠の間から河原が可なり廣く光つてゐるので、三人はもう今度こそ降りても差支なからうと降りるに決する。割合に傾斜はゆるくて降りるに易いので足がはかどる。降りて仕舞へば、石ころの多い河原へ出てそこで暫らく休憩する。

何たる天祐であつたらう。自分等は今少し早く降りることも、今少し遲く降りることも出來なかつたのである。東澤の靜は、丁度自分等の降り切つた處から約一丁許りの處で終つたばかりである。そして行手は流れにのぞんで急激な直下數丈の峭壁をなしてゐるのであつた。

玄ばらく休んだ後で、河原を又ものぼりはじめる。東澤の流れは未だ豐富ではあつたが、之から上流は徒渉することの出來ないほどではなかつた。今迄の流れの奇は到底窺ふことの出來ないものであつたが、之からはうるはしい流れの中の人となつて、流の奇を縫ふて行くのであつた。いつでも自分は笛吹川を想ひ出す毎に考へる。あの深い深林、鬱蒼とした少しも荒らされたと云ふ形跡のないそして如何にも自然の心の奥底からとけて流れて來たと云はんばかりの流れが、何うしてあゝ云ふ風に、之でも未だ美はしさが充分でないか、之でもまだ足りないかと矢つぎ早に秀麗な景色を見せるのだらうと。

兩岸、川床、共に全部一枚の花崗岩である。兩岸の絶壁は幾十丈いや鷄冠山の方は幾百丈と云ふのだらう。此の絶壁に艶めかしい花をつけた無數の石楠と清楚な日蔭つゝじとが、植ゑ付けたやうに綺麗に並んで、間を流るゝ笛吹川は何と云つて形容したらよからう。見上ぐる限り流れは釜の連續である。どこを見ても河は全部一枚岩を神斧を以てほどこした遊戯の跡をとゞめる。花崗岩をすべる水は澱んでは釜をなしすべつては斜めに緩い瀑のやうにはせる。今迄遠くから見て居た牙のやうに峭立してゐた鷄冠山の中樞は流れに露出して、川床から直上數千尺の花崗岩を屹立させて、くろがねのやうな膚にはもゆるやうなつゝじを飾り、ところどころ露を滴たらせて居る。

斜めに川床をはしる水の珍らしい波紋、澱む流の若葉の影をうつす瑠璃の色は、何時行けば盡きるのだらう。流れは蛇のやうに鷄冠山の麓を迂回する。そしてどこまで行つても流れが釜の連續である。鷄冠山を離れ切つた時分に流れは三つに分れる。右の流れは甲武信岳から、左のは國師岳から、そして中央の流れは兩者の間の鞍部から滴たる水を集めて來るのであつた。中央の流をのぼつて行くと、其中に白樺や落葉松があらはれて來て、流れが小川のやうに細くなつて來るが、秀麗な釜が依然として續いて、今迄よりも一層巧妙な細工をあらはして居る。

もう正午に近いので河畔で焚火をして飯をたく。(此處で樺がゝつた色に黒點を交えた一尺許の小蛇

を獲た、今もアルコール漬になつて中村君の机上に秘藏されてゐる。木暮）もうこゝらは二千米突に近いだらうと思はれるが、どこが鞍部の頂上か一向に見當がつかないばかりか、まだ鞍部らしいところに近いと云ふ感じもしない。隨分急いで來たやうに思つたが、未だまだ前途が遠い。果して今日の內に甲信國境を突破して梓山へ出られるだらうかと云ふ疑問も時々起らないでもなかつた。

段々上つて行く內に、針葉樹が漸次に增して來る。水がもう無くなりさうなものだと思ふが、處々中々深い。白樺や落葉松が全部無くなつて全部栂の深い中を行くと、流れが一層えぐれた形をもつて、依然として小さな釜が連なつてゐる。其內に二丈ばかりの瀑を登り切ると、やうやう笛吹川の終りが近いやうに思はれる。晝も尙ほ暗い栂の林の根のぶくぶくした苔の間からにじみ出した水のえぐつてこしらへた皺が、最早鞍部の頂上約二三丁位のところで盡きて、自分等は不可思議な笛吹川の流れに別れをつげて栂の林の間に躍り込む。（其實はのたり込んだも同然であつた。木暮）

美はしい栂の林を幹につかまりながら、深い苔を踏んで行けば、もう瀨の音が遠く、幽寂なる林を笛のやうな深い風がそゞろに吹き通ふ。四時前に國境について密林の中に腰を下ろす。見廻せばどこを見ても栂の林、林の外には何一つ見えない。只じつと坐つて居れば、栂の香が身に迫つて、寂しい奧深い何物か胸深くしみ入る。

こゝから國師へはあまり遠くないが、甲武信へは中々厄介である。梓山へ落つる梓川は國師から出で稍迂回してこゝのところで丁度東澤の信州澤と背中合せになつてゐる。こゝから直ぐに信州側へ降りれば、梓川に入るわけである。栂の林の暗い中を信州方面へかけ降りて行けば、雪が中々殘つてゐる。（三尺以上の深さであつた。木暮）半里も降れば溪流の音がして來て、しばらくすると林道がある。安十郎から梓川の林道が國師近くまであることを聞いては居たが、こんな奧まで來て居ることは知らなかつた。暮れるには間もなからうと云ふので飛ぶやうに下る。流れのさまは甲武信岳から千曲川を

下るに頗ぶる似て居る。針葉樹の林から拔け出ると國境から出て五郎へ連なつて居る嶺が右に見えて、未だ若葉しないぶなの林が少し紅味かゝつた枝を箒を倒立せしめたやうに突つ立てゝ居る。道は平たいあかるいところへ出て仕舞ふと、樵夫の廢屋が一つあつて、柔らかい春がそこらあたりにみち、山櫻の花が一杯咲いてゐる。音樂の南信がそろそろあらはれはじめて、やがて道は全く廣いのびのびした牧場へ出る。

深い谷間や鋭どい岩を辿つて來た自分等には、これは何と柔らかい、平和な、音樂的諧調に充ちた綠の配合をもつ平原だらう。梓山の方へとなだらかに平原を横斷する此道の左右に立てる落葉松と白樺との色は、南信の音樂を象徵するものである。柔らかな平原は十文字峠の下の戰場ヶ原に劣り、落葉松白樺の配置は彼のに劣れど、夢のやうにおぼろに立てる落葉松の色、洗ひそめたやうな白樺の葉の色は、憧憬れて居た南信の音樂的な自然を想ひ起させるに充分である。梓山の村は千曲川の白い河原と共に向ふの山ぎはに見えるが、五郎山の大きな岩が村の直ぐ傍に見えるやうになるまでは未だ遠い。追々十文字峠が國境の山から五郎山へ連なる嶺を越えて向ふに、未だ若葉せぬ林の嶺をうねらせて居る。

五郎の嶺、十文字峠の嶺の綠や此平原の綠が五月頃の終り全部蒲黃色にもゆる時、十月の半ば頃、此綠が全部紅ゐの切迫した色彩にもゆる時、冬其彩の消えて木々が骨をあらはし、嶺も平原も全部荒涼として鳥一つ鳴かない時を自分は心に描いて、南信の音樂の力强いうなりの音を想像した。秩父から笛吹川の上流へかけて、そして南信へかけての複雜な地球の皺は潤ほひある豐富なる音樂のたゞずまゐであつて、自分は斯う考へてゐる此瞬間にも偉大なる音樂は、變化ある鼓動を波打せつゝあるのである。

足がはかどつたので、六時頃梓山へついた。思へば甲信の國境から梓川に沿ふて二時間半にして梓

山へ達し得たわけである。慥かに梓山から甲武信岳へ行くよりも、金峯山へ行くよりも、甲信の境へ梓川を溯ぼる方が遙かに近いやうに思はれる。

梓山の白木屋の主人が死んでから丁度一年になる。十一二の娘の子が水を取つて呉れる。暫らくにして未亡人が馬を引いて田圃から歸つて來て、自分等は火燵へもぐり込んで色々の話をきく。其中の重大事は、十文字峠の下の戰場ヶ原の立木を村で全部賣ることになつて、我々が毎もあこがれてゐた夫の音樂的な景色も、今年を限りと消滅するとのことであつた。どの位の年數で元の樣になるでしやうかと問へば、百年も經つたら見られるやうになりましやうとの答をきいて失望する。自分等は兼てより恐れて居た、梓山の戰場ヶ原の最後を見に來たわけである。考へて見れば、此の現代と遠ざかつたやうに見ゆる遠い千曲川の最奥の村にも絶えず變化が襲ひかゝつて居るのであつた。去年の五月には、梓山の二つの名物が無くなつた。一つは安十郎のお爺さんで一つは白木屋の主人であつた。そして梓山の名物たる落葉松も、愈々衆て斯くなるだらうと恐れて居た運命に遭遇すべき時が來たのである。

晩にお神さんの手打のそばをたべる。料理は全く山奥の料理ではあるが、自分等のやうに山に慣れたものには却つて甘い。火燵にあたりながら色々の追懷談やら戰場ヶ原を弔ふ言葉やらで話が賑ふ。

次の朝七時に宿を出る。今日は愈々戰場ヶ原の立木に別れを告げねばならない。朝の冷たい風に吹かれながら、殘雪斑々たる八ヶ嶽を後ろに見て、梓山を戰場ヶ原へと向ふ。村はづれの右手の白樺の林にもぐりこみながら道を遠廻りして、小松多い道に出てしばらく行くと、やがて戰場ヶ原へ出る。美はしい原も、昨年よりは大分傷つけられてある。想ひ起せば、此原へ初めて來たのは明治四十二年十月であつた。甲武信岳へ登攀の志を果した時、目的の甲武信岳よりももつと自分等を刺戟したのは、奥深い十文字峠と、戰場ヶ原から見返つた峠の紅葉と、此原の落葉松と白樺との配合が十月の夕日をあびて一層の音樂的色彩にもゆる有樣と、金峯山下の川端下村の牧場の紅葉とであつた。しかし二度

目に通つた時の川端下川の源は、大分趣を異にして、川端下原の水々しい最初の有様は、再び見られぬ夢となつて仕舞つて居た。目前の功利の間違へる考が、千曲の奥にもはいつて、いつしか自からの不幸と災害の源を造りつゝあることを知らない。しかし梓山には、未だ人間の破壞が入り込んでは居なかつた。二度目に木暮君と雁坂峠から甲武信岳までを縱走した際に此原を通つた時、それよりも中村君との三人で金峯から甲武信までを縱走して春雨にぬれながら此原を通つた時、雨の晴れ間から夢のやうに浮ぶ落葉松や洗つたやうな白樺の色が、自分等の想像をどの位昂奮せしめたことだらう。四度目に四人で此原を通つた時、閒として靜かな此原には、鳥が頻りと鳴き、遠くには雉子の鳴く聲が郭公の咽ぶやうな音と雜つて聞えた。そしてしたゝるやうな綠の若々しい色どりが、白樺の白い幹と共に永く忘れられない印象となつて腦底に深く印せられてゐる。しかし外から見ては靜かな千曲河畔の此村も、刻々變化しつゝある。二つの名物を無くした梓山は、今亦戰場ヶ原の美を無くしやうとしてゐる。

見上ぐれば十文字峠から三國山へ連なる嶺の一面の立木が、未だすつかり若葉しないで、樺色を帶びた枝が薄のやうに連なつて居る。之がもう二三日の春光を浴びると、樺色の間から綠が光つて來る。見るが内に綠が今迄自分の持つて居た生命の力を俄かに氣付いたやうに無限に增して來る。さうなると、時鳥が盛になき、郭公が頻りに叫び、雉子が切るやうなひゞき聲を立てゝ、綠深い一方に千曲川をうねらせて居る一里八丁と云ふ此原が、あふるゝばかりの生命に燃えかへるのである。

原が千曲川の方へ次第に低下して白樺を散在させて居るあたりは、一夜の夜營をそゝる。未だ降りて見たことは無いが、眺めは中々平凡ではないとのことである。戰場ヶ原を過ぎると八町ヶ原が續いてあらはれ、双方合せて一里八丁と云ふのである。戰場ヶ原の立木が無くなつたあとは、せめて此原によつて慰められるより外に仕樣がない。八町ヶ原を通つて千曲川を渡ると道は十文字峠に登りかけ

る、千曲川の流れもいつまで斯の如く美はしきを得るであらうか。

道はやうやう爪先上りとなり、はじめは雜草を分けて行けばところどころ舊い道がくづれて、新らしく踏まれた跡をたどり行く。段々川を遠ざかつて、栂の林の間を縫ふて登り行くと、二聲三聲ポーポーの鳥の聲が林の間を過ぎ行いて、靜けさが一層切實に感ぜられる。秩父に興味を感じて以來、今度は三度目の十文字峠越である。そして此峠にかゝる時、いつも栂の林をなき行く鳥の聲を聞いて、いひしらぬ深い感じに打たれぬことはない。七里の人跡なき此峠を蔽ふ栂の林の幽寂を考へ、戰場ヶ原を考へ、千曲川の溪谷を考ふることが、どの位自分等に取つて樂しいことだらう。實に秩父は幾年かの間自分等に取つては大なる實在となり具像となつてゐる。梓山の靜寂、十文字峠の幽邃、秩父山塊の包容は、其內部に笛吹川の如き千曲川の如き荒川の如き限なき生命を踴躍せしめつゝある。アルプスの姿が永遠の憧憬を象徵し、海は大なる人生を包んだとすれば、潤ほひに富む鬱蒼たる秩父の山容は、渾沌たる神話時代と、無限に向上し發展せんとする生命のとゞろきの內部的充實を象徵してゐる。そこには神秘があり、温かき人生がある。

峠の途中を一息登り切ると、眞紅の花をつけた石楠が、路傍に一面にあらはれて來る。笛吹川の河綠では苦しさに見るいとまも無かつたが、こゝではゆるゆると見つゝ登つて行く。栂の林を通ふ風の間から、右手の方信州と武藏との境から出る千曲の支流の鳴る音が、時々とぎれて聞える。見渡すかぎりどの山もどの峯も、栂の林で一つばいになつて居る中を、十文字峠は帶のやうに長く峯から峯へと登つたり下つたりして續いて居る。中津川の谷は徑の左に深く新綠もゆるやうに、瀨の音かすかに聞える。處々栂の樹の一かたまりが、嵐のために根こぎにされて、橫に倒れて居る間を徑は通つて行く。此峠から見た荒川の溪谷が何と雄大なものだらう。赤澤、股ノ澤、眞ノ澤、木賊谷から大洞谷のうねりまで悉く一眸の內に集まつて、約五千尺以上は栂を以て黑く、それから以下は濶葉樹を以て萠黃

に、今にも荒川の溪谷が青いほのほをあげて燃え出しさうである。峠を半分も栃本へ降りると、二箇所ばかりに水があつて自分等はそこで辨當をたべる。

荒川の眺めは白妙岩に至つて最も奇絶である。傳へ云ふ百年の昔此岩の附近に茶店があり、其頃は江戸への近道と云ふわけで一日に百人の旅客があつて、梓山に今も旅舍の多いのは其故であると。岩の上に腰をかけて荒川の流れを見、ふりかへつて北アルプスの英姿をしのべば、かすかに雲かとあやまたれる白雪とおぼろな外形が大空に浮ぶ。

もう峠を大分降つて來た。一丈もある山つゝじが、そろそろ道傍にあらはれ、大きなぶなが處々に立つて居る。段々笹があらはれ、雜草が茂くなつて來ると、人界に近くなつたことが分る。其内に炭燒小舍が見えて來る。燒畑の烟が立つて居る。人工の植林が見える。兩面神社へ來れば、栃本の村が下に見えて、荒川の流れは、白く岩を嚙んでゐる。五月の山村は養蠶に忙がしく、美はしい野調を歌ひながら桑の葉をつむ乙女の瞳子は、若葉のやうに色が深い。秩父小林區署所在大村與一方の座敷にすわり込めば、ワナグラ山の栃の花が白く荒川の流の上にをのゝき、越えて來た秩父の山々は、綠濃い中を處々殘雪が白く光つて居る。

三　笛吹川から荒川へ

五月へはいると共に、笛吹川を遡ぼつて荒川の眞ノ澤を驀地に下ることが、去年からの懸案になつて居ることを想ひ起した。中村君が居ない、木暮君と二人きりではどうも寂しい、薄氣味が惡い。しかし之だけは是非決行したいと云ふ考で、思はしくもない天候にも構はず、下旬二人が飛び出す。

相變らず飯田町夜の十一時發の汽車にのる。今度は殆んど明方迄通してよく寢る。鹽山で下車すると少し雨が降つて來たが、しかしさう悲觀した模樣でもない。二三年前の夏雁坂から甲武信へ縱走し

た時も矢張りこんな空であつたが、山へはいつては別に降りもしなかつたと慰めて行く。可なり足がはかどつたが、今年は久しく歩かなかつた所爲か、どうも身體の具合が惡い。そして休むと直ぐに睡む氣がする。今迄幾度となく通つた道なので、別に興味をひくと云ふわけはないが青葉の間から所々洩れるつゝじの色は何時見ても嬉しい。今迄一の釜の勝景はどこにあるのか氣も付なかつたが、今度は目につく所に「一の釜入口」とあるので降りて行つて見る。此の物凄い一の釜こそ、笛吹川の上流の姿の全部を暗示して居ると云つてもよからう。

最後の廣瀨村についたのは十一時前頃であつたらう。雁坂峠から軌道が出來て材木が運搬され、村には宿屋が出來て寒村の面影が聊さか融和されて居る。村から離れて笛吹川に沿ふてうねつて行くこと約半里位で川を渡つて向ふ岸に達する。丁度そこは西澤との合流點から少し上流へ登つたところである。

自分等は昨年此川の縁をからんだ時の困苦に鑑みて、參謀本部發行五萬分一の地圖が道のあることを示してゐる國師岳から東澤へひいてゐる尾根（石塔尾根）を地圖に道のある所まで登つて、そこから東澤の畔約千五百米突まで下つて、そこに野營をする計畫を立てたのである。登り口を見付けてそこで晝飯をたべた時は十二時過ぎであつた。今迄にもういゝ加減に疲れて居るところへ、彼是五百米突を登ることが隨分辛いと思ひながら登りはじめる。道はある、すゝむに從ふて林が深くなつて來て流れの音が遠い。しばらく行くと向ふから釣竿をもつて來る男がある。三角臺まで未だ遠いかと問へば、まだまだ大變ですと云ふ。東澤を樂に登る道は無いかと問へば、向ふ岸の中腹に昔しこしらへた道があつて、それを行けば小舍まで日の暮れぬ内に行ける。道の入口まで送つて上げませうと云ふ。扨ては大に助かつたと思つて、一緒に元來た方へ降りる。西澤を遡ぼるのが辛いかと問へば、これは全然不可能であると云ふ。此人の話によれば、東澤も信州へ行く澤だけが樂で、國師へ行く澤も一通

りでなく、甲武信岳から來る澤を登ることは全然不可能であるさうである。

川端へ降つてから東澤を向ふへ渡つて、右の方から來る澤（鷄冠谷）へはいると東澤に沿ふて行く道がある。こゝで此人と別れて登る。少し行くと道は二つに別れて自分等は左に行く。道は可なりよい。これから先は流れを下に見ながら行く。笛吹川も斯うして上から見れば、去年感じたやうな威嚴と辛峻の氣味は大分そがれる。途中一個所道が崩れ落ちた處があつて、上を廻らうか下を行かうかと考へる。上を行くことは全然不可能らしいので、下へ降りて流れを一度渡つて少し登つて又流れを渡つて元の道へ登る。此の場所から少し行くと、道は河の中へ出づる。河は大分廣くなつて淺い。よく考へて見れば、こゝは去年釜の下で泊つた次の朝九時頃、やつとの事で到着してほつと一息ついた所である。此時午後三時で、去年七時間を費やして來た距離を約二時間餘りで來たのである。それから川傳ひに約三十分位で左側の樵夫小舍へ着く。

小舍の周圍には燃料が澤山あるが、雨と霧とで皆濕りついて中々火を作るに手間がとれる。降りさうで降らない空は段々少しづゝよくなつて、夕やけが綺麗なので、明日の天氣がよいと云つて喜ぶ。何しろ今日會つた人の御蔭で大分助つたが、甲武信岳へ登れないと云ふことを聞いて、それが氣にかかつた。

晩食後毛布にくるまつて寢る、燃料が澤山なのと小舍のありかが未だ低い（千三百米突位）ので比較的温かい。火が消えさうになると木暮君が燃やしたてる。

夜が明けると天氣は大分いゝ。今日愈々問題の釜澤にかゝると思ふと元氣が出る。小舍を出たのは七時前頃であつたらう。藍のやうな流れに沿ふて岩を越え水にひたり、やがて流れは二分せられ自分等は右折する。愈々これから問題の釜澤にかゝつたわけである。一丁位行くと先頭に立つた木暮君が大聲あげて怒鳴るので行つて見ると、釜澤の流れは行方に全部物凄い五六丈位の瀑布となつてかゝり、

仰げば其上で又々數段の瀑布となつてゐる。自分等の前途は斯の如くして全く遮斷されて仕舞つた。恐らくは此上流れは甲武信の下までも斯の如き瀑布となつて連續してゐるのであらうと想はれる。

斯うなれば何とかして迂回して國境に達し、それから甲武信岳に達しなければならない。自分等は流れの左の嶺に取り付いて之によつて國境に達しやうと考へた。幸ひに切分がしてある。初めの間は石楠を分けて行く中にいつしか栂の深林の中にはいつて行く。切分がどこまでも續いて、深林が段々幽に奥ゆかしくなり、栂の幹が益々太い。しばらくすると少しなだらかに降りになつて、右の方への傾斜がやゝゆるやかに、恐らくはこゝから釜澤の支流に降りられるのでは無からうかと想はれる。それから又登りになつて、道は左の方へ迂回すると國境の低いたるみに近くなつて來て、氣味惡い不明の動物の鳴く聲が左の方の林間から聞えて來る。(ドドドドと大きな動物が身振ひするか地團太でも蹈むやうな音が二度許りして、すぐウヰー〳〵と豚の鳴くやうな聲がする。夫が五六度繰り返された。木暮)國境へついたのは十一時であつて、道の跡方は梓川の方面へ續いて居る。恐らくは之は梓山へ行く最も近い道ではなからうかと想はれる。たるみの上には中村君と三人で雪を融かして御茶をわかした焚火の跡が未だ殘つて居る。

自分等は右に折れて國境を辿りながら甲武信岳へと急いで行つた。切分は少しづゝ登りになる。此の時は霧がすつかり取卷いて辛うじて切分を當にしながら登つて行く。五郎山へ派出する一脈との分岐點を通つて、切分を辿りながら行くと何となく以前通つた時と勝手が違ふのでよく調べると、何時の間にか五郎山の方の嶺(富士見)へと來つゝあつたのである。以前に來た時によく調べて置いたのに、どうしてこんな誤りをやるのだらうと可笑しくて堪らない。元の道へ歸つて甲武信岳の方へ行く。此時霧が益々深くなつて方向が全く分らない。白檜の折れたあとが切分と間違へられて、下の方へずんずん降りて行くと切分がない。國境がどこへ行つたらうと倒木の間を潜りながら探すと、自分等はい

つの間にか國境と五郎山へ續く嶺との間に降りかけて居たのである。やうやう國境を見つけて次の高地に達する。こゝは約二千四百米突であつて、もう甲武信岳はいつもならば二時間位で達せられる處なのである。切分を辿つて行くと道は少しづゝ下つて行つて、二つの嶺が前途に開いて居る。木暮君は左の嶺に、自分は右の嶺に道を探す。右の嶺を下つて行くと所々焚火の跡があり足跡がある。道は之に間違ないと木暮君を呼んで一緒に下つて行く。しかし餘りに下り樣が盛なので、木暮君はこんなに下る筈がないと云ふ。其内に道は俄然無くなつて、前途は急激な峭壁をなして居る。日は暮れるに程もない。今迄通つた道だのにどうしてこんなによく間違ふのだらうと二人とも首をひねる。腹が大分すいて來た。右に降りても左へ降りても笛吹川の釜澤であつて、之に降ることは死の谷に降りるに等しい。さればどうしても戻らなければならない。可なり下つて來た道を辛い思ひをしながら又登つて行つて、やうやく國境の高地へ戻りついたのは五時頃であつたらう。もう之からは甲武信岳行の考は捨てゝ、早く千曲川の流源へ降りやうと二人が決する。甲武信岳から千曲川の小舍へ行くよりも、こゝからの方が遙かに近い。

甲武信岳は明日小舍から直接登ることゝして、千曲川に下りかける。地圖で見る通り成る程近い、二十分もかゝらぬ内に小舍が前に見える。之が嘗ては中村君と三人で寢たことのある小舍である。二三年前とは異なり、小舍の周圍は隨分切り拂はれて、白檜の大きな材木があちらこちらにごろごろして居る。今まで清水をうけるやう出來て居た桶は破れて、水を汲むに一通りならず都合が惡い。初めて來た時に暗く生え茂つてゐた林も今はすがすがになつて、甲武信岳の頂上もこゝから見えさうである。場所は海拔七千五百尺もあつて、且つ例年より時期が少し早いので、日が暮れると寒い。白檜はいくらもやしても燃え終ると共に灰が黑くなつて仕舞ふので、絶えず燃やして居なければならない。今夜と明朝さへ過せば、晝は甘く行けば栃本まで行けると高を括つて、厄介さうなものを殘りなく平

げる。

毛布にくるまつて小舍の片隅を陣取つてころがると、二時間位で寒い爲め目が覺める。起き出して火をこしらへて、何でも燃えさうなものをどしどし燃やす。小舍が大分温まつて來ると火のほとりにころがる。木暮君も起きて火を盛んにする。其内に夜があけて來て、初めて久し振りに青空を見る。今日は愈々荒川下りと想へば、何となく氣がゆつたりして、出立の用意も何となく暢氣に、やうやう七時に小舍を出る。

甲武信までの約十七八丁は四十分位で登る。今日は初めての天氣なので展望に時間がとれる。八ヶ嶽から北アルプス方面は開いて居るが、笛吹川から國師方面は一面に雲に蔽はれて、開きさうになつて容易に開かない。幾ら待つて居ても木暮君の是非見たいと云ふ國師嶽は姿をあらはさないので、遂にあきらめて眞ノ澤を降ることにする。甲武信岳から十文字峠へ續く林道を少し行つて、丁度三寶山の下あたりから右に折れて白檜の林の中へはいる。暫らく行くとさゝやかな流れの音がする、流れに從つて行くと所々川床は全部巖から出來て居て、進むに從ひ段々河相が不穩になつて、河が處々三丈四丈と云ふ瀑布となつて居る。一通りならざる困難を以て河岸を絡んで之を避けて行く。しかし流れが笛吹川のやうに險惡と云ふ程でもなく、どこかに柔らかい感じがある。木賊澤と合するまでは頻々として瀑布が續いて居る。合流點から少し下ると木びき小舍があつて、大分大仕掛に出來て居る。掛樋の水も整然と運ばれ、積み立てゝある材木ももつと温かくなつてから運ぶのでもあらうか。小舍のほとりは溪谷が俄かに開いて、それから先は又々狹ばまつて行く。もうこゝいらから道がありさうなものと、足跡に注意する。しかし初めは道らしく見えても後には直ぐに消滅して仕舞ふ。しばらくすると木暮君が道だ！と叫ぶので、振り返ると川の左の山側に道らしいものが見える。登つて見ると立派な林道である。もう之で安心と一休みして行く。地圖を見るとこゝらあたりでやうやう栃本までの間

辻本満丸氏撮影

雲取山頂より大洞山を望む

の四分の一位を來たに過ぎないので、矢張り急いで行く。河が一轉回しさうになつて急に狹くなる、大きな釣橋がかゝつて流れが大きな瀑布となつてゐる。橋ぎはから木につかまつて瀑壺をのぞいて見ると、凄くてからだがふるへる、しかし瀑が二段になつて居て、上から見える瀑壺は一段目の瀑壺らしい。橋を渡つて行くと瀑が木の間から窺はれる。瀑が明らかに二段に折れて、合はせて二十丈以上は無論あるやうに思はれる。木暮君は栃本の獵師から聞いた木賊の瀑とは之らしいが、眞ノ澤、木賊澤を合せた流れで出來た瀑布だから、木賊の瀑とは可笑しいと云ふ。(栃本の獵師山中卯吉は木賊瀑の高さ三十間、其上に長さ八間の橋があると敎へた。橋は四五間しかないが、瀑は上下合せて三十間を超えてゐる。木暮)

道はどこまでも右の山側に沿ふて行く。石楠の紅ゐの花が澤山咲いてゐるが、大抵は咲き過ぎて居て、未だつぼみのまゝのを辛くも集めて、やうやう四五枝を片手にして行く。道は中々よい。白檜を橋梁にして針金で結ひてある釣橋が澤山かゝつて居るが、皆な渡るにつれふらふらとゆれる。中に約一丈餘りの橋が木暮君の通つた時は別に何の異狀もなかつたのが、自分が登ると間もなく眞二つに折れて自分は空澤に落つる。具合よく落ちたので身體に怪我が無いのみか、左手にもつて居た花さへも其儘であつた。それからあとは釣橋を渡るごとに神經を惱ますこと一通りでない。荒川(栃本では荒川の本流を入川谷と唱へて、破風山と雁坂嶺から流れ出して合流したものを荒川と稱してゐる。木暮)の流れを終ると、道は河岸へ出づる。木暮君はこゝで壹飯を喰ふことを主張する。米はもう合せて二合位のものだらう。河岸で火を焚いてやうやう御飯をこしらへる。もうこれで喰物は全部おしまひである。道を尋ねて右の河岸をどこまでも登つて十丁位行くと、道は段々山へ登る。山へ登るわけは無い、途中で道を失したのではないかと元の河岸の方へ還つて見るが、どうも外に道はありさうにも無い。それでは元の道でよかつたのだらうといふので、又還つて道をすゝむ。今度は更に遠くまで行つ

て見るが、登る許りでなく、少しく元へ戻りさうな氣味がある。木暮君は之は雁坂方面へ行く道ではなからうかと云ふ。地圖を參照して見るが、一向要領を得ない。笛吹川の道を書いてなく、雁坂峠の道も二つあるのに、一つしか書いて無いのだから全く信用が出來ない。もつと河岸近く道を探らうといふわけで、又々河岸の方へ行つて見るが、どこにも道がない。只道が元とあつたらしい跡があるが、途中道が河へ陷落して仕舞つて居る。今度といふ今度こそは、間違つても構はないから道のある方へ行かうと云ふので、三度目に山へ登つて行く。大分のぼるが、一向川に沿ふて行きさうもない。川に沿ふて行けさうもない處を迂回するのならば分つて居るが、眞直に行けるところを斯く上に且つ元の方に戻ると云ふことは、全く矛盾してゐると云ふ意見は二人とも一致する。自分は元の河岸へ戻つて河向ふの道を行くことを主張する。慥かに向ふ河岸には、道のあることを地圖に明記してあるからである。二人はそこで決心を翻がへして、又々下つて河岸へ降りる。もう可なり疲れた。彼是三時に近い。もう精々歩いたところで、四時間しか歩く時がない。河を渡つて向ふ岸へ行いて、岸を上る。道はあるが之が河に沿ふて下へ降るのならばよいが、登るばかりで且つ上流の方へ向ひさうである。若し之が股ノ澤の金坑へ行く道ではなからうかと云ふ考が頻りに起る。若しさうすれば之から日の暮れる迄登つても、金坑へ達することは疲れ切つたからだには六ヶ敷い。そしてそれから人家に達することは容易でない。荒川！案外暢氣に考へて來たのは誤まつて居た。何處へ行くにも非常な難苦を忍ばなければならない。河身に沿ふて下ると云ふことは全然不可能である。先頭に立つた木暮君は「駄目だ降る道は無い」と叫ぶ。自分は此の時大分疲れて來て、斯うなればリュクサックの荷物を出來るだけ減ずるより外に仕樣がないので、なるべく餘計なものを悉く捨てゝ、手に持つてゐる石楠もなげうつて登る。それから半丁も登つたと思ふ頃木暮君が道だ！と叫ぶ。成る程登つて見れば立派な道が山腹を河に沿ふて堂々とうねつて居る。自分は石楠の花を捨てゝ來たことが大變口惜しくなつて來たが、

もう仕方がない。木暮君の姿は見えぬ、しかし足跡がついて居る。何しろ非常な速力で驅けたに相違ない。自分も驅る、段々道は峠の下り道のやうに下る。木暮君はなるべく近道を行つたらしく、所々すべり下りた跡が殘つて居る。下り切ると赤澤を渡る。

自分等は十文字峠の白妙岩の上から赤澤の流れを見て、其潤ほひを想像して居たが、斯くほどまでに水量の多い、樹木鬱蒼として水が如何にも重さうに流れて行く流の姿を考へては居なかつた。流れに架せる橋を渡つて、之が時間の餘裕があつて、中村君も一緒に居たらどんなに面白からうと思ひながら行つた。道は向ふ岸へついてからやゝ逆行する氣味になつて登つて行く。此の時木暮君の姿が霧の間から近くに見ゆる、オーイと呼べばオーイと答へる。お互ひに遲れると困ると想ひながら、息急しげに上つて行く。登り切つてから又々下り氣味になつて、木暮君は又々驅け出す。自分も亦續いて驅け出したが、木暮君の姿が到頭見えなくなる。美はしい入川谷を包む深い林、所々横合からはいる溪流の姿やそれを蔽ふ翠綠のとけるやうな濶葉樹の色合は、惜いと思ひながら味ふこともなく、足の拔ける程驅けて行く。ヤタケ澤を渡ると栃本に近いと聞いて居たが、それらしい流を渡つても栃本へ近いと云ふ氣色もない。ワナグラ山らしいものが前方にあらはれると、それが自分が迂回して通らなければならない山であることが分る。幾度か斯かる失望が繰り返された後にも、まだ可なりの溪流が十文字峠から荒川に向つて突入して居る。もう栃本に近いと思るゝ時分になつて植林があらはれて、大瀧村國有林植林地の札が立つてゐる。もう栃本に近いと思ふて少しく速力をゆるめる、しかし栃本のありかは無論、ワナグラ山さへ見えない。又しても又しても道はうねうね迂回して行く、そして慥かにあれこそワナグラ山と思ふ山が見ゆると思ふと、麓に見ゆる流がどうも逆にうねるやうに見えてならない。それも道理、之も矢張り自分の進んで行く道の通らなければならない山なのである。日はもう暮れかかつて來た。大分不安な氣持になるだけ自分は走る、大分走つたと思ふ頃、果然ワナグラ山は明らか

に向ふに見えて、自分と其間を慥かに荒川は切斷して居る。山の斜面には小舍があつて、其中から焚火して居るのが見える、しばらくして檜の植林の間を通り拔けると、雁坂峠へ導びく道と一緒になる。其内に人聲が聞えるので谷の方を見ると、小舍が見えて薪料をどつさり背負つて登つて來る人がある。もう栃本へ來た。やうやく胸をなで下す。道が左の方へ一迂回すると栃本の村がもう眞近にある。なつかしい栃本、あこがれて居た栃本、此村のあるが故に六ヶ敷い荒川の深き水源をも雜作なく考へさせた栃本、水清き栃本、五月の若葉のやうに深い眼の乙女の多い栃本へ到頭到着した。大村與一方の玄關へはいると、木暮君が足を洗つて自分を持つて居る所で、自分を見て「風呂が出來るよ」と云つて、にやりと笑ふ。足を洗つて上れば今日は二階の奥の部屋に通される。新築の部屋らしく新らしい疊の香ひがする。足が梯子段を上る毎にいたむ。部屋の片隅に木下尙江の「良人の自白」がある。秩父の最奥の村と云へば如何にも山奥のやうなれど、言葉付の雅びやかさ、一擧一動のしとやかさ、山奥には見られぬゆかしさは、之を秩父の栃本に見ることは出來る。(自分がにやりと笑つたのは此時である。木暮)。

二人で酒を汲んでお互ひの健康を祝ふ。五月の山の椎茸の甘さは之を何に譬へやう。中村君との大黑茂谷の悲劇以後初めての難苦を經驗したのは、今度の旅行であらう。自分等は今迄隨分秩父を跋涉した。そして大抵は何等の間違ひなくして通つて來た。しかし今度の登山は初めから間違ひに充ちて居た。幾度も通つた處でも、どう云ふわけか今度は間違ひが多かつた。つまり自分等は未だ本當に秩父と云ふものを飲み込んで居なかつたのだらう。今迄は上天氣に通つたのみであつて、よし複雜とは思つたけれども此程とは思はなかつた。今度の登山には天氣が初めからよくなかつた。今迄無いと思つて居た所にも思はぬ分脈があり、今迄心配がないと思つて居た所にも思ひ掛ぬ難所がある。或る意味に於ては秩父にはアルプス以上の複雜な所がある。自分等は嘗て霧に卷かれた爲めに黑部五郎か

ら上ノ岳へ行く道が分らなくなつたことがあつたが、霧にまかれて國師岳から甲武信岳の間にまごつくことに比べて遙かに厄介の程度が少なかつた。登山者は秩父の山だからと思つて輕く見たなら、非常な運命に遭遇する。荒川の上流、笛吹川の上流、甲信の國境は慥かに幾ら綿密なる注意を以てしても、未だ足らないことを記憶しなければならない。そして甲信國境から遁れやうとするには、甲州方面を斷念して信州方面へ下りるやう心懸けなければならない。さも無ければ生命を失ふに至る危險があることを自分は特に注意する。

荒川の水源から半日で栃本まで達することは無理である。慥かに一日を要する。即ち梓山から甲武信、或は梓山から金峯までの距離の約倍以上はあるだらうと思ふ。規模の雄大な點に於て、其複雜な點に於て、そして立派な濶葉樹林が見らるゝ點に於て、それは慥かに如何なる一流の川にも比較すべき素質を有する。

木暮君は「いつもこんな事がある毎に、何とかして切り拔けて來るのが不思議だ」と云ふ。しかし自分は切拔けられなかつたことがあるのだから、斯う云ふ事があると愈々又かと胸に浮んで來る。風呂へはいる時に與一君からきいた說明によると、自分等は引き返した道を行けばそれでよかつたんだと云ふことである。つまりあゝ云ふ風にして約三十丁計り迂回するのだと云ふ。與一君曰く「十月二十日頃來てごらんなさい、荒川の紅葉は全くよーございます」と。

風呂を出てから二人とも床につく。餘りに疲れすぎて却つて寢られぬまゝに、色々今度の旅のはなしを繰り返す。(繰り返したのは旅の話許りではなかつた。南日君はわが胸奥の琴線を栃本乙女に搔き鳴された嬉しさに、頻りに俳句をよむ。此時こそ自分はほんとうにニヤリと笑つた。木暮)しばらくうとうとする內に夜があける。丁度山を出てから今日こそは幸に本當の天氣といふべきであらう。木暮君は眞先に床を飛び出す。自分も續いて起きたが、足が未だ延びない。左の足は未だ梯子段を上下す

る際に手で助けてやらないと延びない。七時過ぎに大村方を出れば、愈々人界から人界、清らかな水に離れ、若葉の眼の色は段々にかはつて行く。日は暑い、強石まで早く早くと氣がせかれてならないが未だ未だ遠い。三峯山塊を迂回して強石に達すれば、もうこれからは馬車、それから汽車、斯の如くして喜んで去つた塵の都に又しても喜んで歸る。

奥秩父の山旅日記

木暮理太郎

私が始めて秩父の山々から受けた最も強い印象は、其色彩の美しいこと及び其連嶺の長大なることであつた。水蒸氣の代りに絹針でも包んだやうな上州名物の涸風が、木の葉色づく十月の半過ぎから雪の白い越後界の山脈を超えて、收穫に忙しい人々の肌を刺すやうに吹きすさむ日が續くと、冬枯の色は早くも樹々の梢に上つて、日蔭には霜柱が白く、咽ぶやうな幽韻な音を間遠に送る大和スズの聲を名殘として、大地は漸く靜寂の眠に就かふとする。此頃からして秩父の群山は其翠綠の衣を脱ぎ捨てて、最も目覺ましい絢爛の粧を凝らすのである。「秩父山が見えて來た」里人の口から出る此の無造作の一言の中に、どれだけの深い意味が含まれてゐるかは、斯ういふ人達の日常の言葉を注意して味はつてゐる人には、容易に洞察することが出來やうと思ふ。

實に秩父の山々は、私の生れ故郷東上州から眺めては、初冬から一月下旬にかけて素張らしく豐富な色彩を現はす、そして其色には深い々々神秘が包まれてゐる。美しいと共に崇高である。然しそ

れは北アルプスの雪の山が、山それ自身が高大である爲の崇高ではない、或は杉並木の奥からほの見ゆる丹塗りの御社の「神」を豫想した爲の崇高でもない。全く山の色の深さのみから生ずる崇高である。山に雪が深くなれに連れて此の豐富な色彩は次第に其量を減じて來る、二月から三月にかけて白雪山谷を埋めた頃が、最も色彩の乏しい時であるのは云ふ迄もない。

十月は麥蒔の畑打ちに忙しい、男も女も皆仕事に出る、頰冠りの男の中に交つて赤い襷の女も一緒に礫を打つてゐる。振り上げる鍬の刄先がキラリ〳〵と光る向ふには、秩父の山々が美しく聳えてゐる。晝に辨當とお茶を持つて其處に行くと、皆が畔に腰を掛けて食事を始める。立て丶置いた鍬の柄に赤蜻蛉が止つて、其尻つぼの先が高い山の巔とすれ〳〵になつてゐる。何か羽蟲を見付るとすういと飛んで行く、そしてスミスの飛行よりももつと巧妙に一つくるりと宙返へりを打つて復たすういと戻つて來る。秩父山は依然としてこの小さな活動の舞臺に美しい背景を與へて、夫が日毎に繰り返される間に、山の色の深い秘密といふやうなものが、小供心の何處かの隅に朧げながらも印象の痕を殘し止めて、何かの機會を捉へては急激に鮮明の度を增して行くらしい。

十二月に入ると薪取りや木の葉掻きが始まる。寒い赤城嵐に吹かれ冷い朝霜を踏んで凍へた體を、焚火に暖めてからゆつくり仕事に取懸る。私は家の男達に連れられて林に行くのが樂しみであつた。人並に研ぎすました大鎌を腰にさして兎や雉子を追ひ出しては遊んでゐる。小松林の上や楢林の木の間に濃い鮮な秩父山の姿が浮き出したり織り込まれたりするのを見ると、大きな木の上に登つて邪魔な枝を叩き切りなどして譯もなく喜んでゐる。私の目と高い山とを維ぐ絲の上を渡り鳥の群れが往つたり來たりする。時には一羽の鷹が不圖私の魂をのせて紫紺色の透明な肌を持つた山の方へ矢のやうに飛んで行くことなどもあつた。晝餉の時には茜さしたさるとりいばらの滑かな莖で箸を造る慣はしであるが、何處か山の色に似た懷しい色合を持つてゐるのが氣に入つた。七つ下りになると人より先

に歸つて來る、此頃の晴れた日の夕暮に途々望まれる秩父山の色ほど美しい色は、どの山にも見られない。鬼が棲んでゐるといふ淺間山、天狗が出るといふ赤城山、袈裟丸、奥白根、男體山、さては岩菅から上越國境の山々、皆鮮かに望まれるが一として秩父山に似た色彩を持つてゐる山は無かつた。殊に日が落ちてから三十分間許の間が最も美しい。入日の名殘の光が山々からふつつり消えると、秩父山は輪廓のはつきりした透明な紫紺色の雲のやうになる、そして奥の方からは後からも〳〵も異つた色の雲が湧き出して、それが一つに溶け合つて、深みのある美しい崇高な姿を、冴えた華やかな夕暮の空に靜に横たへてゐる。

この眺めは門の前に立つてゐても二階に座つてゐても見られた。然し草鞋をはいて遠い林に行き、焚火で煮たお茶で晝飯をすまし、一日遊び暮して家に歸る途すがら眺めるのに比べて、どちらが感興が深く印象が強いかは云ふに及ばないことである。

此時頃私の腦底に烙き付けられた秩父山の美しい色彩の印象は、年と共に鮮かさを加へて、其後冬休みに歸省する毎に鎌を腰にさして林の中を一日ほづき歩いては歸りに山を見るのが樂しみの一となつた。其當時名も知らなかつた山の大部分は既に踏破し、その山々に包まれた溪谷の秘密も少しは窺ひ得た今日となつても、そのかみ謎の山から受けた強い色彩の印象は少しも衰へないのみか、今尙ほ昨の如く懷しさに變りはない。

夏になるとこれも上州名物の一つである大夕立が、七日も續いて迅雷豪雨を飛ばすのは珍らしくもない。特に私の地方では俗に「御荷鉾の三束雨」と唱へて、恐ろしく雨足の早い大夕立の起ることが年に四五回はある。雲が起つて雷鳴を聞いてから、刈り取つた麥を三把束ねないうちに雨が落ちて來るといふので、古くから斯う言ひなされてゐた。この夕立が北に向はずして、まつしぐらに東の方へ驀進して行く時の光景を横から眺めゐてると秩父山脈の長大なることが今更のやうに強く印象される

のである。

霧の深い朝は午後に夕立の起ることが多い。其霧が西北の風に吹かれて、日光が洩れて來るやうになると時として白い虹の立つことがある。そん時には乾度大夕立の起る前兆だといはれてゐる。日が高くなるに連れて空は名殘なく晴れ渡るが、積雲の塊は早くも山の端に屯してゐる。午後になると夫がそろ〳〵動き出す。遠雷の響に晝寢の夢から覺めて、門の前に立つて四方を見渡すと日光、赤城、榛名、御荷鉾の各方面に夕立が始つてゐる。中にも御荷鉾山のあたりのものは殊に勢が激しいと見えて、銅色をした雲の峯がむく〳〵湧き上る後ろでは、電光が頻りに閃いて、遠雷の音が空氣よりも大地を傳つて響いて來る。さては來るなと思つて見てゐる中に、長大なる卷層雲の先驅は眞綿を繰り出すやうにどん〳〵東の方へ延びて行く。嵐を孕み霹靂を載せた眞黑な潑墨の雲が蓬勃として自ら止まるにも止まれないといつた勢で、噴泉の如く下から湧き上つては横に崩れる。それが次第に白味を帶びて來ると、初めて電光の火柱が地上に向つて頻りに突立つ。ドス黑い色をした低い雲が四方から何時ともなく湧き出して其方へ驅けて行く。忽ち水晶簾を捲き下ろしたやうな雨脚が、此時まで頭の上で騷亂してゐる雲の運動を餘所に湛然と控へてゐた秩父山の濃藍色の肌に白く立つたと見る間に、谷を埋め峯を越えて、連嶺の半にさし懸つた頃には、後の方は早くも碧空を顯はして、奇峭な兩神山の姿がちぎれ〳〵の斷雲の間から望まれる樣になる。この大夕立が秩父山を通り過ぎて、東の地平線上に銀の繰りを着けたやうな一塊の雲となつて、東京の空あたりに餘勢を逞しふするのは、三時間も經つた後である。私は夕立が秩父山を通り過ぎるのを見る毎に、其山の長大なることを嘆賞せずにはゐられなかつた。

Over his keys the musing organist,
Beginning doubtfully and faraway,

First lets his fingers wander as they list,
And builds a bridge from Dreamland for his lay:
Then, as the touch of his loved instrument
Gives hope and fervour, nearer draws his theme,
First guessed by faint auroral flushes sent
Along the wavering vista of his dream.

これは私の好きな米國の詩人で且批評家であるローエルの長詩「The vision of Sir Launfal」の冒頭の句であるが、若し斯樣な塲合の音波が線や色で思の儘に表はし得たならば、恐らく北方から望んだやうな美しい色彩を持つた長大な秩父連嶺の面影が髣髴として現はれることであらうと思ふ。

東上州は東京灣の中等潮位から僅に五十米突の高さを有するに過ぎない平野ではあるが、試に路傍に立つて南方武藏野の平原に眼を放つと、低い地平線上には遙として展望を遮ぎる何物もない。其視界の盡くる所に輕い一抹の雲烟のやうなものがふわりと浮んでゐる。此の夢のやうな夫とも分らない薄い藍色の山は、恐らく御前山塊の大岳と御前山であらうと思ふ。遠い夢の國から浮き上つた微妙な線は淡い幻の國に引き返して、少しの間現に顯れて來ないが、やがて水面に浮ぶ大魚の背の如くに再びゆらりと姿を顯はすと、根に籠る若草の力が莖となり葉となつて伸びて行くやうに、若しくは又苔の下に咽んでゐた淸水の滴りが岩間に走り出て、忽ち潺湲の響を立てながら一道の迅流となつて驅け下りて行くやうに、後から〳〵と次第に力が加はつて、大空の一點を指して或る高さまで達すると、茲に始めて長短曲直各種の線が離合集散の妙を盡して、一連の大山脈即ち東は雲取山から西は三寶山に至る長大なる連嶺を天半に聳立せしむるのである。そして終には彼の兩神山の奇峭を掉尾に振ひ起して、この大山脈を龍頭蛇尾に終らしめない所に、自然の用意の周到なることが窺はれる。秩父山は實に上

州方面より望む可く造られたものであつて、其色彩の美、其連嶺の長大は、他の如何なる地點より眺めても、到底此方面に於けるが如き充分なる印象を享受することは不可能であらう。

友人の中村君は、南アルプスの聖岳から此連嶺を遠く望まれて「古典派の詩のやうな韻律を合はしてゐる」といはれた。誠に至言である、秩父を能く知つてゐる人でなければ、此譬喩は思ひ浮ばないことである、私は北方から眺めた秩父山に對しては、萬葉の古調に新古今の華麗を加へたものであると言ひたい。

私は早くから日夕其姿に接して、強く腦底に燒き付けられた此等の印象を齎らして、秩父の山や谷に分け入つたのである、そして實地を蹈んで見て、此等の印象を裏切りされなかつた許りでなく、長大に加ふるに更に深奥といふ、遠く望んだゞけでは得られなかつた新らしい一つの印象を腦底に燒き付けたことを喜んでゐる。

曾て本誌九年二號の紙上に「秩父の奥山」なる記事を書いた時、私は今日の秩父山が、溪流の澄澈と、森林の蓊欝と景趣の幽邃とに於て、其權威の絶頂にあるものであると曰ふた。連脈の長大と深奥とは、自然の結果として此三者となりて現れ、此三者は相俟つて色彩の美を喚發する要素であることは、別に多言するまでもない。

更に地帶排列の上からいふと、秩父の奥山は大畧之を四つの弧に分つことが出來る。第一は西の小川山から甲武信岳の附近に至る金峯、奥仙丈山塊を含むもの。第二は甲武信岳附近から雁坂峠に至る甲武信山塊、破風、雁坂嶺を含むもの。第三は雁坂峠から將監峠に至る古禮山、唐松尾の連脈を含むもの。第四は將監峠以東白岩山附近に至る龍バミ、大洞、雲取の諸山を含むものである。第一は全部花崗岩、第二は花崗岩と古生層と相半し、第三は山腹以下花崗岩（石英閃綠岩）にして其以上に古生層を戴けるもの、第四は全部古生層から成つてゐる。此等を源頭とせる各溪谷の特長、相互の比較等、

擧げ來れば面白い幾多の問題が存してゐるが、さらでも長くなり過ぎた此冒頭に於て、今一々之を論じてゐる譯にゆかぬ。他日秩父風景論といふやうな見出しの下に此問題を取扱つて見たいと思つてゐる。若し秩父山を旅行したいと思はれる人達が、私が分けたやうに四つに區切りして、一つ宛山や谷を探られたならば、必ず面白い結果が得られるに相違ないと信ずる。

二三年このかた、新聞などにも折々秩父の紀行文が見られるやうになつた。そして見出しには必ず奥秩父なる文字を用ゐてゐるが、其文を讀むと、大抵三峯あたりより奥へは行つてゐない、栃本や中津川迄蹈み込んだ人さへ甚だ稀であるやうだ。尤も山登りが主眼でない所爲もあらうが、雁坂越え、十文字越え、或は中津川を遡つて三國越えを試むるか、又は少くとも奥秩父と云ふからには、三峯から雲取山さもなくば將監峠を經て、多摩川の上流に達する位の旅行をして貰ひたいと思ふのである。

然しこれは只奥秩父を旅行せんとする人に對しての希望であるに止つてゐることは言ふ迄もない。奥秩父の登山を目的とする人は、武甲山や三峯に登つた位では、決して秩父の山を大觀したとはいへない。是非とも西は小川山金峯山から東は雲取白岩の附近に至る間の、甲信武甲の國境山脈に聳立してゐる山々に登られんことを希望する。都を離るゝこと三十里に足らず、四五日の手輕な旅行で、可なり深い山の旅らしい感興を齎し歸ることの出來る誂向きの所といふては、先づ秩父を第一に推すことは、誰も異存の無い所であらうと思ふ。晩近登山の氣風の勃興と共に、都の若い人達が奥秩父の山山に登られるやうになつたのは、大に意を强うするに足るものがある。南北アルプスの諸山を縱走する塲合のやうな大袈裟な登山では、人夫の雇用其他の準備で多くの費用を要するが、秩父では殆んど人夫などの必要は無いといふても好い位である。其上四月下旬から十二月迄の間なら、何時何處へでも自由に登山することが出來る。そして山の高さから言へば、二千米突から二千六百米突に及んでゐる。雪の多い時が望みなら、四月中旬以後五月上旬迄に甲武信金峯の連脈に登れば、十丁や二十丁の

間四五尺の雪を蹈むのは普通である。唐松や白樺の若葉が見たいと思へば、五月の梓山川端下の戰場ケ原がよい。紅葉は十月の梓山川端下黑平。石楠花は殊に秩父奥山の名物である、瀑布は入川谷の支流荒川の權太瀑、眞ノ澤に木賊瀑が懸つてゐる。花崗岩の侵蝕谷には笛吹川の上流東澤西澤の奇峽がある。花崗岩と古生層との侵蝕谷には入川谷瀧川谷がある。入川谷の幽邃と險恠、東澤西澤の壯大と瑰美、共に秩父の澤の中では第一に位するものである。どう考へても奥秩父の山や谷は、都の山岳宗徒の前にのみ置かれた山の据膳である。ちよい〳〵抓み喰ひをしやうと、片端から平げやうと、夫は人々の勝手であるが、唯だ遠く眺めるだけで箸が下せないとあつては、誠に其人の爲に勿體ない譯だ。そこで私は自分が如何に此膳部に箸を下したかといふことを、飾なく諸君の前にさらけださうとして、此稿を草した次第である。料理の旨い部分は南日君の箸いや文に詳しい。私のは捨てるには流石に惜くさりとて食ふには肉のない所謂鷄肋の類である。

目　次

一、夏の秩父奥山。二、三ノ瀨より栃本へ。三、霜柱と柿。

茲に附記して置きたいことは、私等は初めて甲武信岳に登る時案内者を同伴しただけで、其他は單獨若しくは二三人で案内も人夫も雇はずに遂行して、幸に無事に濟んでゐるが、最近秩父の山や谷を探る度數が重なる連れて、益其奥深いのに驚嘆してゐる。好晴の日は言はずもがな。若し運惡く途中で霧か雲にでも捲かれると、思の外の大困難に遭遇しないとも限らない。若し案内無しで登られるやうな場合には、天候は勿論、其邊の用意は尤も肝要であることを御注意申上げて置きます。

尙ほ山貌や登路や山中の模樣などに就いては、今となつては甚だ粗雜なものであるが、曾て自分が本誌九年二號に書いた「秩父の奥山」の記事と對照して下されば大いに幸ひである。

恐ろしい長い冒頭もあつたものだ、之から本文。

一　夏の秩父奥山

明治四十五年七月二十三日より二十七日まで。
飯田町――鹽山――川浦――雁坂嶺――破風山――木賊山（雲切山）――甲武信岳――梓山――三國峠――中津川――兩神山――小鹿野。

明治四十二年の十月、南日君と二人で秩父の栃本から十文字峠を踰え、梓山に下つて其處から初めて甲武信岳へ登つた時のことである、金峯山と國師岳との間は既に縱走されてゐるにも拘らず、國師岳と甲武信岳との間は誰もまだ縱走を試みた人は無いやうである、ことによると人跡未到の地かも知れぬ、よし夫なら私達が眞先に蹈み込んでやらうといふ考が心の中に閃めいた。然し樣子が知れないので愚圖々々してゐる間に三年は過ぎて仕舞つた。折角手を付け始めた秩父奥山の跋渉を他人に先鞭を著けられてしまふのも殘念であるといふので、今年南日君が上高地へ行くといふのを幸に、連れ立つて先づ雁坂嶺から甲武信岳まで縱走し、天候其他に差支がなかつたならば、更に金峯山まで縱走しやうと相談が決つて、七月二十二日夜九時飯田町發の汽車で東京を出懸けた。

今年の三月下旬に南日君は中村君と同道して、丹波山村から大菩薩嶺に登り、誤つて大黑茂谷に迷ひ込んだ爲に、危く大洞院殿南日居士と崇められやうとした程の苦い藥を嘗めさせられてゐるので、さしもの構はず屋が用心深いこと夥しい。やれ米は五日分許り餘計に持つて來いとか、マッチを十箱用意しろとか、煉齒磨を忘れるなとか、シャツ、脚胖、草鞋と數へ立てれば際限がない、まるで此髯男を小供か何ぞのやうに思つてゐるらしい、御心配を懸けて誠に濟まなかつた。が、荷が重くなつたのには大に閉口した。

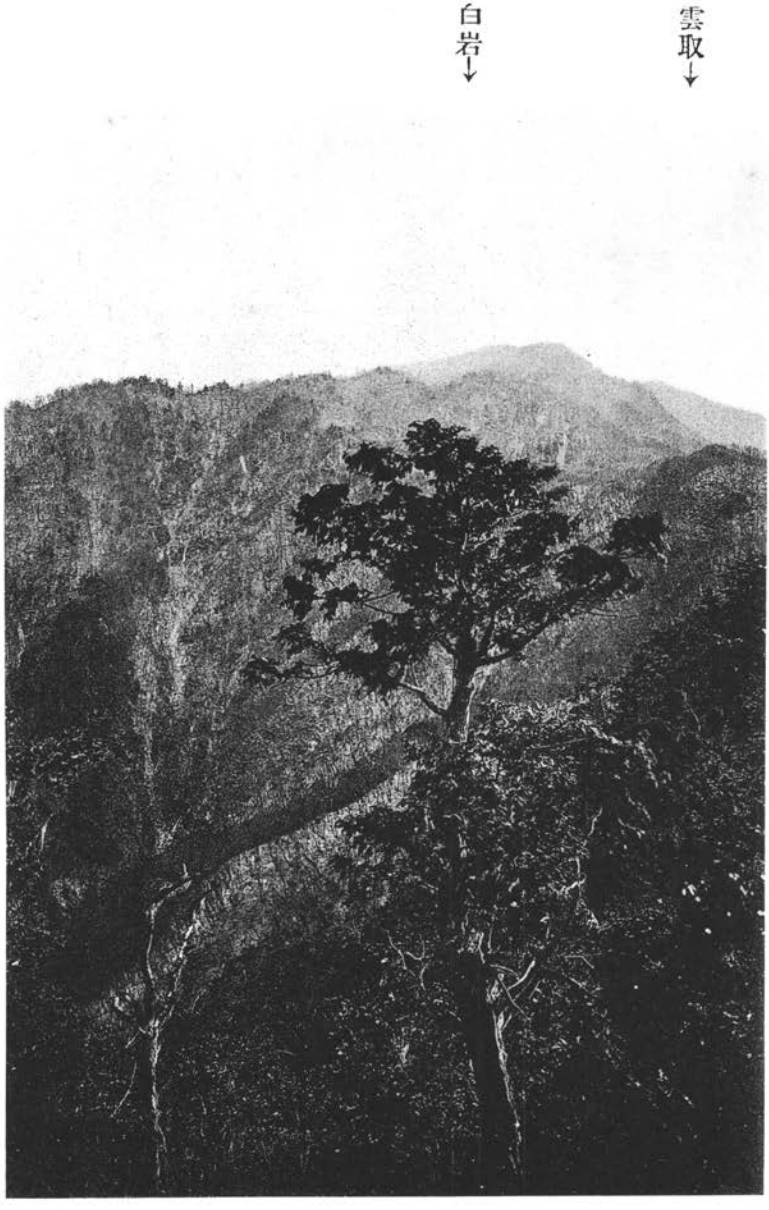
二十三日。午前四時過ぎに鹽山に著いて、荷物を直すとすぐ出懸る。町の眞中頃で柳澤峠への道と

別れ、向嶽寺の前を通つて井尻村にさし懸つた頃には、停車場を離れる時からポツ〳〵落ちてゐた雨が大分降り出して來た。名高い惠林寺は知らずに通り過ぎ、藤木村最終の一軒家を後に見なすと道は清冷な流を湛えた用水堀に沿ふて、笛吹川を左下に見ながら、澤胡桃、栗などが並木のやうに列んでゐる間を通つて行く、雨は小降りとなつたが雲が低く垂れて、近い前山の頂きさへ其處とも判らない、荷が重いのでよく休む。南日君の背嚢は蛙の腹のやうに膨れ返つて、何かはみ出してゐるものさへある。聞いて見ると上高地で勉强する爲に舶來の本を五六冊詰めて來たのださうだ。今迄一緒に旅行して遂に汗らしい汗を流したことのない南日君も、今日は洋服の上著を透して滲み出してゐる、此時初めて南日君も汗をかく人だといふことを知つた。

下荻原で橋を渡つて笛吹川の右岸に移つた、川の景色は惡くない、三四丁歩いて道端の飲食店で朝飯を炊かして食事を濟す。一時間休んで九時に出發した。雨は歇んだが道が濘るので足が重い。十一時天科に著いて水を入れる用意に一升入れの石油鑵を買つたなどは、奇想天外から來たと自慢する價値はあらう。廣瀨に行く途中雲が切れて雁坂嶺と破風山を望むことが出來た。長く伸びた山の鼻を廻つて少し登ると、原のやうな平に如何にも見窄らしい人家が十五六軒あるのに氣が付く、峠下の村であるから秩父の栃本位の處かと想像して、其處で晝食にする積りのあてはすつかり外れたので、振り返りもせずにサツサと通り過ぎる。然し今は峠の澤の製板業が盛になつたので宿屋なども出來て、聊か面目を一新した形である。すべる赤土道を登つて午後一時赤志に著く、此の赤土道の通つてゐる山の鼻が小佐野君の所謂赤ッバ尾根といふのであらう。二軒しかない上手の方の家に寄り込んで米を出して晝食を炊いて貰つた。笛吹川は此下で分れて西の方へ折れ曲つてゐる。ドス黑い雲が重く垂れてゐる溪谷の入口に素張らしい岩山が右から突き出してゐるのが目を惹く、爺さんに聞くと鷄冠山だと教へて呉れる、恐ろしい山だと思つた。

二時二十分に此處を立つて、少し行くと道は急に細くなり、登りも稍や激しくなる。唐松尾根といふのは此邊であらう。針葉樹や濶葉樹の入り交つた林の中を辿るので、漸く山の旅らしい感じが起る。燕オモトが多い。同じやうな道を二時間許り登ると、少しの間溪流に下りて河身を辿るやうになる。立派な小屋が河の中の岩の上に建てゝあつた、御用品中繼所の看板がある所から推して、御料局で建てたものだらうと思ふ。

溪を横切つてから草原を七八丁も登ると左から谷川が落ちて來る。栂の大木や楓などが茂り合つて、稍や深山の趣がある。谷を渡つて又登りに懸つたが、考へると恐らくこれから上には水があるまいとの懸念から、引き返して川のほとりの廢屋の跡へ野宿する仕度の最中に下から二人上つて來た。そして峠のすぐ下に一杯水といふ冷たい泉のあることや、小屋の骨組のあることを話して、もう幾丁も離れてゐないから其處へ行つて泊る方がよからうと付け加へる。早速其言葉に從つて一緒に登り初める。疲れてゐる上に急なので骨の折れること甚しい、南日君はとう〳〵一緒に登つて行つたが、私は後へ殘されて仕舞つた。少し登ると木立が途切れて左手に美しい靑草の斜面が現れる、落葉松の大木が三々五々、蠶々天を突いて雲の中にぼうつと滲み込んでゐる。夢のやうな景色だ、好いなと目が云ふ、ほんとに好いなと直ぐ足が贊成して立ち停る。五丁程登ると右に折れて道が少し平になる、其處に針木樹の一叢茂つた中から清冷な水が湧き出してゐる、二十間ばかり東に離れて山腹を切り取つた一坪位の平に均された所に、栂の枝で造つた至て無造作な獵師の鳥屋(トヤ)のやうなものが立つてゐた。一緒に來た二人は今から栃本迄下るのだといふて、私達が夕食の仕度をしてゐる間に清水の傍で辨當をつかつて、御大事にといひながら別れて行く。もう六時を過ぎてゐる、あの人達は四里の峠路を而も夜になるのを承知で、隣村へでも行くやうに氣が輕いのは羨しい、などゝ話しながら温い食事を始める。今度は頭の上でガヤ〳〵騷ぐ聲がして、峠の方から七八人下りて來た、私達を見て怪しむやうに足を



辻本滿丸氏撮影

三峰奥宮より雲取及白岩の二山を望む

留める、川浦の人達で、山の境界の爭ひからごた〳〵が起つて、栃本へ行つて話をしたが一向埒が明かない、といつたやうなことを話して、一服してぞろ〳〵下りて仕舞つた跡は急に淋しさが增したやうに感じた。

油紙を一枚屋根に掛けて雨の降つた時の用意に備へ、茣蓙を敷いて其上に寢轉びながら、銘々の持つて行つた蝙蝠傘を擴げて入口を圍ひ、風の當らないやうにして眠に就いた。南日君は晝の疲れで蟒のやうな鼾を立てゝ睡つてしまつたが、私にはどうも旨く寢つかれない、枕元の叢の中でコト〳〵茶たて蟲のやうな音を立てるのが耳障りで仕方がない、棒切れで無茶苦茶に引搔き廻してやるが、暫くすると復たコト〳〵はじめる、此音は一晩中止まないで一方ならず私を苦しめた。

宵には淡い月影が前面の木立を洩れて雲間に姿を見せる、星の光が海底の眞珠のやうに三つ四つ二つ燦めいてゐたので、やれ安心と思ふ間もなく密雲忽ち天を閉ぢて、幽靈のやうな白い霧が時々すうと小屋の中まで這入つて來る、バラ〳〵と雨が落ちては又止む。斯うなれば火がないと妙に心細い。起きて焚火をする音に南日君も目を覺して、二言三言話したかと思ふと又ごろり横になつて鼾聲小屋を搖かさんばかりであつた。

二十四日。四時頃から仕度にかゝつて六時に朝飯がすんだ。西から南の方の雲が切れて國師岳や富士山の頂上などが碧空に現はれる。此時一人の行者が下つて來た。峠の向ふ側で蕎麥粉を舐めて一夜を明かしたのだといふ、水を飲んで人家までの里數を聞いた後、復よた〳〵下りて行つた。晝飯の分も炊いて飯盒に入れたまゝ背嚢に押し込まふとしたが、到底餘地がないので南日君が腰の周りに縛り付ける。私は水を入れた石油罐をぶら下げて、七時二十分に峠に向つて草原を右に左に登り始めた。直徑にすれば二丁位なものであるが、斜面が急である爲に五六丁は登らなければならない。峠の上で道が二に分れる、右すれば新道の方へ、左して少し上つた後に右に山腹を搦めば舊道の方へ行かれる。

私達は左に山稜を辿つて、雁坂嶺の頂上を指して急いだ。雲が又湧いて眺望は皆無である。晝も暗い針葉樹の林に這入ると、木の間に霧が鼠色の網を張つて犇々と捲き寄せて來る、此儘何處かの谷底へでもさらはれて、體が溶けて水になるのではないかといふやうな氣がする。三尺許りの杭に査何號と書いて頭に釘を打つた標木を唯一の頼りとして、切明けの跡を失はぬやうに登つて行く。一の小高い所を越えて八時二十分雁坂の嶺頂に達した、櫓は切り倒されて三等三角點の標石だけが埋めてある。十分間程休んで破風方面の雲の晴れるを待つて見たが、少し明るくなつたと喜ぶ甲斐もなく、すぐ又暗くなるので磁石と切明けを力に思ひ切つて西に下り始める。梭葉草が非常に多い。風採めの爲に立ち枯れた木が時々骸骨のやうに白くされて途に倒れてゐるのもあるが、下生えの若木が無いので甚しく邪魔にもならない。下り終つて登りに懸ると切明けの跡が覺束ないものになつて、灌木が茂り出す。秩父方面を搦みながら暫く横を辿つた。然し山稜の最高所を餘所にして歩いては、他に紛れ込んでも氣が付かずにゐる恐れが多いので、密生した石楠を押分けて再び山稜の上に出た。何といふ大きな岩だらう、嶄巖磊砢とはこんな光景を指していふのであらう、そして其岩が皆花崗岩であるのには更に驚かざるを得なかつた。岩間には岩鏡、一葯草其外名も知らぬ紅や白や桃色の花が咲きこぼれ、特に一面に叢生してゐる石楠の大木は、殆んど白に近いほど極めて薄い桃色のさした花を枝も撓む許りにつけて、今や眞盛りに咲き誇つてゐる。快い香りが鼻から入つて腸の奥まで泌み込む。岩頭に立つて甲州側を瞰下ろすと、足早に驅け下りて行く霧の絶間から大きな岩が幾つか顯れたり消えたりして、米栂などの灌木性の針葉樹が岩の肌にべつとりと綠をなすり付けてゐるのが、霧の中で溶けたり固まつたりしてゐる。二人の神經はこの高山的な景象に刺激されて頻りに興奮するので、石楠の花の中に顔を埋めるやうにして其香を味ひなどした。

此處が或は破風山の頂上であるかも知れぬ、兎に角三角點の有無を確めて置く必要がある、そこで

南日君は後戻りをして横に搦んだ山の頂上を見に行つた、暫くして無いよと言ひながら歸つて來た。其處が東破風の頂上であらうと推測し得たので、安心して此處を出懸けた。

雁坂嶺の頂上から破風山までは一里位のものであらう、道々數へて來た國境の小標木は七十八本であつた。約三十間に一本の割合位に立てゝあるやうだから、三十五六丁といふ見當に大した相違はあるまい。

岩から岩を傳つて、或時は美しい米躑躅の花を蹈みしだいたり、或時は密生した石楠の枝に引き留められ、其花の香に醉はされたりなどして、險しい山稜を西に辿る。手に提げた水入れの石油鑵が邪魔で仕方がない、其癖今朝からまだ一滴も口に入れないのだ、寒い位涼しいので水など少しも欲しくない。忌々しいので岩の上をガラン〳〵引摺つたりなどしても、不思議に滾れもしなければ又壞れもしない。東破風に著いたのが十時四十分で、十分許り休んで十一時十分西破風の三等三角點に達した、小さな櫓が殘つてゐる。其側にドッカと荷物を卸してゆつくり晝飯にする。展望がないので却て氣が落ち著いて好いなぞと貧惜みを言つてゐたのは誰であつたか忘れてしまつた。

頂上は廣くはない。東寄りに少し木立があるが西から南は開けてゐる、脚の下の青苔の間から顯れてゐる岩は、研きをかけたやうに白く滑かで、黑雲母が散點してゐるのが誠に美しい。野營でもしたものか秩父側に寄つた木の繁みの下に燼さしの木が散らばつてゐる。見る通りの岩山なので、植木屋が眞柏を採りによく登るといふことを後に聞いた。しかし最早採り盡されたさうである。此焚火の跡は察する所其人達の仕業ではあるまいか。

曾て本誌九年三號の雜錄欄に、東京市中からは此山は雁坂嶺に隱れて見えないといふやうに書いた。其後極めて好晴の日に凌雲閣へ登つて、此山が雁坂嶺の左木賊山の右下に姿を顯はしてゐることを發見した。尤も東破風だけで西破風は終に見分が付かなかつたが、雲取山から寫した辻本博士の寫

眞から推して、東京からも西破風が見えるに相違ないといふ斷定だけは付けられる。

正十二時に頂上を辭して西に向つて下り始める。一歩蹈み出すと足は釘付けにされて、驚異に睜つた眼のみが空しく其邊をさ迷ふに過ぎない。巨大な岩塊の堆積した同じ樣な斜面は、灌木性の針葉樹を同じ樣に粧ふて、傾斜が同じ樣に急である、蓬勃たる霧の海は汐のさし引きするやうに音もなく押し寄せては音もなく退いてゐる。强くはないが冷い西北の風が山頂より吹き下ろして、霧が薄らぐと二三百米突もあらうと思はれる綠の斜面が遙かの下まで續いて、末は何處にどういふ風に連なつてゐるか其處までは目が屆かない。右の方に尾根らしいものがちよい〳〵姿を見せる、しかし是は松葉澤の源頭に當るものらしい。二人で左右に別れて切明けの跡を探した。盆栽でよく見かけるイトヒバに似たやうな拗けた恰好のいゝ針葉樹の一尺ほどのものが、梭欄繩で枝を撓められたまゝ岩間に生えてゐる、植木屋の仕業に相違あるまい、やがて堀り取られる運命を持つてゐるのかと思ふと可哀想になつて、人には氣の毒であるが、目に付いたものは悉く解放してやつた。辛くも切明けの杭を探し出して其方へ下りて行くと次第に人の通つた跡らしい形迹が目に入る。三丁程も下つた頃茂りに茂つた米栂の上を渡る拍子に足を蹈み外して一二間横に拋り出された。手に當る枝を力に起き上ると、生々しい松脂の香がぷーんと鼻を襲ふて來る。怪しんでよく見ると紛ふ方なき偃松の枝である。私は小躍りして喜んだ、秩父の山でこの懷しい植物に遭はふとは夢にも思つてゐなかつたのである。南日君の來るのを待つて、あつた、あつたと落し物を探し出しでもしたやうに見せびらかす。南日君も喜んだ。珍らしくもえらいことでもない發見であるが、兎に角嬉しかつた。東京に歸つて話をすると屹度口の惡るい連中のことだから、五葉の松を見て來たのだらうなどゝ冷かすに決つてゐる、其時に痛いほど鼻先に突き付けてやらうといふので、枝先を折つてカバンに入れた。しかし案じた程もなく眞面目に話を聞かれたので松葉攻めの計畧は畫餅に歸してしまつた、何といふ運の好い人達であらう。

下り著いた鞍部は入川谷の木賊澤と子酉川のヌク澤との分水點に當つてゐる。唐檜や白檜の密生した梭葉草の多い小山を二つ踰えて、三つ目の山に懸つた。この登りが飽き々々する程長い、切明けはあるが若木が足に絡まつて大に困難した。午後一時半に岩が露出して甲州方面に赭い砂の瀧を頽れ落してゐる處に著いて一休みする。砂の上には生新らしい熊や羚羊の足跡が縱横に印してゐる、餘り好い氣持ではない。風が汗ばんだ體にひやりと冷いので、十分許り休んで出懸けた。又針葉樹の密生した薄暗い林の中を切明けを辿つて眞直ぐに登る、二時一の峯頭に著いた。正面に恐ろしく幅の廣い切明けがある、測量當時に切り倒したものらしい針葉樹の大木が縱横に狼籍して、足の入れやうがない。左の方にも亦切明けがあつて、狹いが樂々と通れる。此山は木賊山の東の肩に當る隆起で、左の切明けは子酉川の東澤に合流する鷄冠谷に沿ふて登る道であることは後に知つたが、其當時は孰れを取つたものか隨分迷はされたものである。

これだけ大仕掛に木を切り倒した點から推すと、近くに三角點があるに相違ないから、其處へ登るのが安心であると相談を決めて、廣い切明けの方へ足を運ぶ。三尺程の高さに入り亂れて倒れた木の間を通行する面倒臭さは、一度經驗した人でなければ想像にも及ばない。木の上を渡ると枝が邪魔になる、下を潜れば荷物が支へる、僅の距離を登るのに一時間を費した。果して測量の櫓が現れて來る。頻りに跪いてゐる南日君を待ち合せて、三時に櫓の下で休みながら晝飯の殘りとビスケットを平げた。當時は此山の名を知らなかつたので、多分四十二年の十月甲武信岳に登つた時、其處から東南に眺めたあの山であらうと想像的斷定を下し得たに過ぎない。

三時十分、西北の斜面に沿ふて下り始める、少し行くと左にガレがあつて、其緣によく蹈まれた道らしいものが通じてゐる。南日君は夫に跟いて下らうと主張したが、どうも少し方向がマヅイので、南日君もとう〳〵我を折つて右の方の林莽中に幽かに殘つた切明けの跡らしいものを目當に下つた。

今考へると南日君の主張した道らしいものは、實際道であつたかも知れない、一概に獸の路ともいはれないやうな事情がある。然し其時若し此道を下れば、あの恐ろしい釜澤に迷ひ込んで、今の半分程もあの附近の地勢を知らぬ二人は、よしや食糧が豐富であるにしても、第二、第三、乃至第五の大黑茂谷の悲劇を演出したかも分らない。釜澤、釜澤、奥秩父に數多い澤の中でも、青葉に埋められた美しいこの澤は、同時に又最も恐ろしい澤の一である。

間もなく鞍部に下り著いて又登りにかゝる、相變らず薄暗い林の中を杭を見付けては夫に導かれて行く。暫くして岩の露出した斜面に出た、林ばかり見慣れてゐた目には、多少なりとも高山相を帶びたこの登りが頗る氣に入つた。破風山を除いては今迄に此山が一番高山的であるなぞと話し合ひながら、岩を登り切つて石楠の茂つてゐる狹い山稜の黑木の間を辿つて行くと、忽ち前面が開けて、三尺ほどの高さに石を眞四角に積み重ねてある山巔に達した。四時である。どうも見たやうな處なので、よく考へると三年前に登つた甲武信岳の頂上であるらしい。何だ甲武信ぢやないかと大笑ひをしたものゝ、あの時は秋の末で今は夏の盛りである。山谷の模樣が一變してゐる上に雲で遠見がきかない、近いと思つた三寶山が雲の爲に遠く見えたり、眞直ぐであると思つた尾根が著しく曲つてゐたりするので、疑つて見れば甲武信らしくないやうでもある。サア心配になつて來た。其處らをほつき歩いて特長のありさうな木や岩を仔細に吟味して、古い記憶を呼び覺さうとするが駄目だ。然しこの四角に積み重ねた石の壇が何よりの證據である、他に斯樣のものがあらうとは想はれない、甲武信に相違あるまいといふことになつた。其中に北の方の雲が一度綺麗に剝げて、三寶山が全容を曝露すると南に面して屹立した巨岩の塊が目に入つたので、心が漸く落ち着いて來た。

此處から更に國師金峯と縱走する豫定であつたが、天候も思はしくないし、切明けの有無すら探つてない未知の地に蹈み入るの危險を慮つて、今回は雁坂甲武信間の縱走を仕遂げたので滿足すること

とし、梓山に下山することに決めて、碌々飲みもせずに提げて來た石油鑵の底を傾けてのの字を書き、中の水を盡く彼の積み上げた石に灑いで甲武信岳の靈に手向け、四時頂上を辭して下山の途に就いた。

此道は既に記載されてゐるし、殊に本號所載の森君の紀行に詳かであるから、私達は七時に十文字峠の追分に達し、八時に梓山の白木屋の前で草鞋を脱いだことを書いて置けば充分であらう。いや一つ忘れてゐた、あの途々眺めて來た美しい石楠の花は是非紹介して置かなければなるまい。

私は石楠といへば、黄花石楠、姫石楠の外は、五月淡紅色の花を開く普通の石楠を知つてゐたゞけである。然し破風山の頂上や甲武信岳の中腹以下に生えてゐるものは、七月下旬が花盛りで、色は黄味を帶びたやうな白に心もち紅味がさしてゐるかと思はれる位である、淡紅色の花が褪せかゝつた時に少し黄味を加へたものと思へば大抵想像がつく、幹も葉も新らしいものは黄の勝つた緑である。八町ヶ原から甲武信岳に向つて一里程も行く間は、針葉樹主に栂の大木で、其下に目立つて美しく感じられる花は、此石楠と車百合である。つくししやくなげといふ名は聞いてゐるが、花は見たことがないから、これがそれと同じ物であるか如何か判斷がつかない。私は餘りの美しさに堪らなくなつて、殊に見事な枝を二三本折り取つて擔いで來た。段々疲れるに從つて一本棄て二本棄て、梓山まで持ち込んだのは、僅に一本の尤も小さな枝に過ぎなかつた。

明日は別れだといふので其夜は酒を汲みながら、安十郎や測量當時測量部の人夫となつてゐたといふ男を呼んで貰つて、いろ〳〵山や澤の話を聞いた。安十郎に據れば甲武信岳の東南の山は雲切山と呼ばれ、鷄冠山は其山から南に派出されてゐること、十文字峠から出る澤は股ノ澤三寶山から出る澤は眞ノ澤、甲武信と雲切とから出る澤は本賊澤と呼ばれ、東に流れて秩父の荒川となること、眞ノ澤と股ノ澤との間の尾根をナカミネ尾根と稱すること、甲武信から國師、金峯、小川山に至る迄國境の切明けあることなどが判然した。もう一人の男は甲武信の西の山をミヅシといふことや、甲武信附近の

山を總稱して三方山と呼んでゐたことなどを敎へて呉れた。尙ほ安十郎は奥仙丈岳の絶巓は甲州に屬してゐることを話したが、當時朝日岳を奥仙丈と信じてゐたので、餘り氣にとめて聞かなかつたのは殘念であつた。

二十五日。午前七時半白木屋の前で南日君と左右に別れた。南日君は八ヶ岳に登つて上高地に行き、私は中津川から兩神山に登つて歸京しやうといふのである。別れる際に南日君から呉々も血氣の勇に逸つて冒險してはいけないと誡められたので、すつかり小供に返つて何だか悲しいやうな氣がした。村はづれで十文字峠への道と分れ、左を取つて三國峠に向ふ。白樺の木立に沿ふたり稻田の畔りを步いたりして、十五六丁行くと河原に出て千曲川を渡つた、河原撫子、女郎花、藤袴、何やら舛麻、車百合などの花が露重たげに頸垂れてゐる、左手の草の斜面は高天原で、昔し盤古の神と建御名方神と戰場ヶ原で戰つた時、諏訪明神の軍が屯してゐた所だと傳へられてゐる。細い溪流について四五度夫を横切りながら登つて行くと草原に出て、間もなく大きな岩が現はれる、出がけに白木屋の主人に書いて貰つた畧圖の通り、此岩を左に見て右下に谷川の音を聞きながら少し登ると、緩い傾斜の原の中を道が通じてゐる、右の谷間の平地に鮮黃色の花が一面に咲いてゐる。金梅草のやうであつたが、側まで行つて確める程の勇氣はなかつた。道は急に爪先上りとなつて、樹や楢の大木が茂つた中を九十九折に上つてゐる。樂な登りで木立にかゝつてから十丁許りではや頂上に著いて仕舞つた。村では好いお天氣であつたが、此處まで來ると東の强風が頻りに雲を送つて、すつかり眺望を遮ぎる、眞後ろの小川山だけが黑木を鎧ふた尨大な山容を紺碧の空に悠然と横たへてゐるのが、振返へる毎に目を樂しませたが、夫も押し寄せる雲の波を幾度か切り拔けた後、終に姿を沒してしまつた。

當時私は此處を三國山とは知らずにゐた、名は三國峠であるが、山は西の方半里許に聳立してゐる千九百七十八米突の蟻ヶ峠をそれと信じてゐたので、其頂上を窮めないのも殘念であるから、切明け

を辿つて暫く山稜を西に傳つた。二つ許り峯頭を越えて三つ目の登りにかゝつた時、パラ〳〵雨が落ちて來た。之を登り切れば頂であらうと信じてはゐたものゝ、雲が深いので少し心細くなつた所へ、今朝の南日君の言葉が胸に浮んで來た、「やめよふ」と獨言して峠に引返した、時は十時である。往復一時間を損した譯だ。

峠の頂上から山の北側を辿つて二三丁下り氣味に東へ行くと道が二つに分れる。右は山道で主に下駄を運び出すのださうだ、三里半も行くと上州の人家のある所へ出られるさうだが、一里許行くと殆んど道の形はなくなると白木屋の主人が話した。右に入つて尾根の南側を稍や急に下ると尾根に出る、栂に交つて唐檜、樹、白樺なども少しはあるが、十文字峠の幽邃なるには及ばざること遠しの感がある。馬酔木の大木が多いのには驚嘆した。登降の少ない極めて緩傾斜の尾根の上を二十丁も下ると尾根の分岐點に出た、道は左の方に通じてゐる。五六丁と思ふほど下つた所に初めて岩の露出してゐるのを見た。石の崩れなども二ヶ所ほどあつて、道の形は次第に怪しくなるが、他に紛れ込むやうな恐れは無い。又三丁も下つたらう、すると突然雲の領を脱して、前面に中津川の谷が見渡された。右には十文字峠の連嶺が雲の厚衾をすつぽりと被つて、重苦しい暗綠に包まれた肌からは、霧のやうな雲がもく〳〵と湧いては上の方へ擴がつて行く。水音が下から幽かに聞えて來る。もう河も遠くはないなと思つたので、岩崩れのした側崖を横切ると荷を卸してゆつくり一休みした。

五六丁行くと道は急に下りとなつて、而も尾根の鼻を眞竪に下るので膝がガク〳〵して閉口した。約二十丁も下つたらうと思ふ頃、右と左から澤が流れて來て落ち合つてゐる所へ道も落ち合つて、爪の字になつてゐる。左の澤は小さいが奔湍をなして、青葉の奥から白い布をさらしたやうだ。右は即ち中津川の本流で、少し上手に七尺許の瀑が奔下してゐる、下に大きな瀑壺がある。左手の崖に登つて瞰下ろすと、青い淵の中には山女魚や岩魚が幾十となく群をなして、チラリ〳〵と白い腹をかへし

てゐる。小なるは五六寸、大なるは尺餘もある、惜しいものだと思つた。時は十二時に近い。

此處から一里半許りの間、道は主に河原傳ひである、河原は割合に廣く、兩岸に木立が少ないので、山奥の澤といふ感じに乏しい、栃本の入川谷などとはとても比較にならない。岩魚釣りの架けた丸木橋が要所々々にあつたので足を濡すにも及ばなかつたが、徒渉するにしても膝より上を越す氣遣のない所許りだ。中津川の奇景は上流よりも寧ろ中津川村の下流、中雙里附近から鹽澤村に至る二里の間にあるといはれてゐるが、新篇武藏風土記稿に書かれたやうな絶勝の地でないことは、畧ぼ想像が出來る。

晝食は飯を炊くのが面倒臭いから、持合せの麥粉を頰張つて水を飲んで濟した。兩岸に時々絶壁が現はれて來たので、もう岸に登つても好い頃と注意しながら河原を辿つて行く、果して左岸に道があつた。斯うなれば心配はないのでぶら〳〵遊びながら歩く、竹籔が現れる、畑が出て來る、二十丁も來た頃には中津川村の人家の前に出てしまつた。三時少し前である。梓山から五里と稱せられてゐるが、半里位懸値があるらしい。

十五六戸の人家が些かの平地に寂しく散らばつてゐる所は、何處の山村も同じであるが、此處は何となく潤ひのない、丁度雁坂峠の下の廣瀬といつたやうな村で、私が勝手に想像してゐた美しい山村の面影は、何處を探しても見られなかつた。然し私は自然の賜物が初めから此山村の人達にのみ薄かつたとはどうしても思はれぬ。彼等の祖先が何時の世にか爭鬪と迫害との絶えざる平原を後にして、此山奥に最後の隱家を見出した時、其處には生存競爭塲裡の敗者に向つて、平和と安樂とを與ふるに充分なる自然の同情があつたに相違ない、不肖なる彼等の子孫は此同情に裏切りして空しく逸樂に耽つた、彼等が桃源の夢から目が覺めた頃には、自然が既に彼等を見棄てた時であつた、鳥が舞ひ鹿が遊んでゐた鬱蒼たる森林は、見る影もない平蕪と化してしまつた。驚いた彼等は肉を炙つて脂を絞る

やうに、手近の山に火を放つて地膚から慘み出した貴い脂を稗や粟に變へて、荒んだ淋しい生活を送らなければならなくなつた。斯くて山は禿げ地は痩せて、人は益々自然から遠ざかつて行く。私が中津川に愛想を盡かしたのは、獨り「五月の若葉のやうな深い眼をもつた乙女」が見られなかつた爲ばかりではない。

路傍の家に寄り込んで兩神山へ登る路の樣子を聞く、よぼ〳〵した爺さんが出て何か口の中でもぐもぐ言ふてゐるが薩張分らない。此奥の小神流川の上流に金鑛が開けてから、若い者は皆其處へ稼ぎに出て、村には女子供や老人の外は殘つてゐないらしい。幸嶋（さちしま）とかいふ家は此處の草分で、十五人や二十人泊れるとは聞いてゐたが、私は嫌氣がさして來た時なので、中雙里から山越しに白井差へ出て其處から兩神山に登ることに決め、振り棄てるやうに此村を離れた。山百合が非常に多い、中には一莖にして三十餘花を著けてゐるものもあつた。後で聞くと栽培してゐるのださうだ。小神流川を渡つて山の鼻に懸ると、道が二つに分れて、「左兩神村、右落合。幸嶋」と書いた標木が立つてゐる。左の方の燒畑の中に小屋が一軒あつて、蕎麥を蒔いてゐた男が手を止めて私を見送つてゐた。道が急に下つて川を渡ると又登りになる、このあたりの景色はさう捨てたものではない。河に下りては山の鼻に登つて、二三度同じやうなことを繰り返すと、道は河の中に通じた儘兩岸をいくら物色しても更に見當らない、中津川から標木のあつた山の鼻まで十五丁、其處から二十丁は來たらう、河の中を一丁も下つて見たが、兩岸は四五丈の絶壁で、水の深さも股まである、これが急流ならば危險であるが流れは緩かである。再び引き返して右岸の道を登つて行くと、これは切畑への路であつた。時は五時に間もないので思ひ切つて先き見た小屋に泊り、明日大峠を越えて白井差に行かふと思案して、元の路を引き返して小屋に著いたのは六時少し過ぎであつた。河の中を今一丁も下ると路に出るのだつたと主人が話した。「百兩もかけりや山へ路がつけられるのだが、村が貧乏だから如何もならねえ。」全く其通

りかも知れぬ。

主人の名は山中房吉、二三年はまだ此處で畑を作つてゐると話した。村では馬鈴薯が常食ださうで、今夜も煮たもの、燒たもの、胡麻あへ、串にさして燒いて味噌をつけたもの、といふ風にくさ〴〵御馳走になつた。串刺しの味噌燒だけは馬鈴薯嫌の私にも旨く食べられた。逆卷の瀑も序に探りたいと思つて其話をすると、瀑はすぐ近くにあるが小さなもので、一昨日金山の工夫が來て爆裂彈を瀑壺に拋り込んで、魚を皆捕つて行つたといふ。空模樣が少しよくなつて夕燒がした。夜になると夜鷹が近くで喧しい程鳴き立てる。時鳥と同じ鳴聲であるが、調子が高くつて鋭い。今迄私が時鳥だと思つて聞いてゐた中には、大分此鳥の聲が交つてゐたことが想ひ出される。作物を荒す惡い鳥で、傍へ來たら打つて呉れると主人が舊式の鐵砲を取り上げてひねくり廻す。明日の山案内をして貰ふことに賴んで、蓆の上に横になつた。

二十六日。西の空は晴れてゐるが東は一面に曇つてゐる。小屋を立つたのは七時だ。主人は鐵砲を擔いで先に立つ、餘り扮ちが仰々しいので可笑しくなつた。これで頂上まで僅に一里半しかない山に登るのだから誠に呆氣ない、焦茶色の耳の立つた小さな犬が二疋、後から蹤いて來る。畑を横切つて細い道を山の鼻にかゝると、いつか向ふ側に踰えて脚の下に小溪が瞰下ろされた。車前草などの繁つた日當りのよさゝうな平に出ると、斯ういふ所には蝮蛇が甲良を干してゐるものだといひながら、犬を啞けたり杖で草を叩いたりする、私はまた可笑しさを堪えなければならなかつた。五六丁も來たらうと思ふ頃左から來る溪を渡つて少し登ると亦溪に出た、此邊は蔓草が繁つてゐるので、夫を切り拂ひながら進むのは可なり厄介であつた。右側に白井差へ踰える大峠の路が落葉に埋れて幽かに見分けられる、私達は澤について何處までも登るのである。肥後田（ヒゴンダ）といふ所で、元は切畑があつたさうだが、今では雜木が可なり大きく育つてゐる。十丁も登つたらう、溪に岩が多くなつた、或所では水が

一枚の石灰岩の溪底を深く抉つて一丁近く續いてゐた、幅は僅に一間位であるが深さは二三丈から四五丈もある、名は石船澤。此處へ落ちると出られないと案内者が話した、全く出られさうもない。武藏風土記稿にも兩神山の名所の中に石船澤の名が載つてゐる。

水の無くなつた溪は淺くなり廣く開いて幾つかに分れ始める。樹の大木が繁つた枝を指し交はしてゐる行手の方が少し明るくなつて來た、朽葉の化けた土の香の清い山腹をひた登りに登つて、尾根の上に著いたのは九時であつた。この案内者は足も達者といふ方ではないらしく、兎角遲れ勝ちなので、割合に時間がかゝつたやうだ。

私達の登つた尾根は肥後田尾根といはれてゐるさうだ、万塲圖幅の兩神山から南へ延びた尾根がそれであつて、私達は白井差へ越える大峠の路と兩神山との間に聳えてゐる千五百米突の圏を有する峯の直ぐ北のたるみへ上り著いたのである。小屋から一里、兩神山頂まで半里だといふ、眺望はないが木が茂つてゐるのは嬉しかつた。兩神山も此邊の高さになると一帶の大森林で、流石に秩父の山たる資格を備へてゐる。

小笹を分けて傾斜の緩い尾根を北に五六丁も登ると、岩が現れて間もなく頂上に達した。左へ尾根傳ひに行けば狩倉と稱する壁立の岩峯に達せられるといふ。谷を隔てゝ西に見ゆる赭色の懸崖は、所謂赤岩で百米突近く屹立してゐる、其下に路があつて上州の野栗へ出られる。即ち赤岩峠である。うすのろい雲が今日ものろ〳〵其邊を匐ひ廻つてゐた。行く手に大きな岩が出て來る、嶽の岩といふのだ、攀ぢ上つて之を踰えると、今度は小屋塲の澤の大岩といふのが息も繼がせず突立つ、其下を左に三十間許り下ると七八人は泊れる洞窟があるさうだ、岩の名はこの泊り塲所を指示する爲のものらしい。同じやうな大岩を更に一つ越すと路が二つに岐れる、左の方を登つて行くと峯頭が鋸の齒を刻んで、路は齒と齒の間を右に左に搦むのであるが、危險だと思ふやうな所は一つもなかつた。其實の如く名

も鋸岳と呼ばれてゐる。絶巓はつまりこの鋸の齒の一つが高く大きくなつたものに過ぎない。二等三角點の標石と何かの石像が二つ許立つてゐる、二坪たらずの廣さだ。五六間北に離れて一段低い岩の上に御嶽神社が祭つてある。此處から山稜を尙ほも北に傳つて行くと龍頭山に出て八町峠へ下れるさうであるが、筍のやうな峯頭を三つ四つ越さなければならないから、樂ではないさうである。

此山は標高僅に千七百二十三米突の低い山ではあるが、秩父奥山の主脈を離れて獨立高聳してゐるので割合に眺望は開けてゐる。西北から東北にかけては上野州の平原を隔てゝ淺間山から日光火山群に至る幾十の峯巒を指點し得る筈であるが、今日は雲が多いので何一つ見えない。唯秩父奥山だけは三寶、甲武信から唐松尾、和名倉山まで、斷續せる雲の間から望むことが出來た。南日君も今頃は八ヶ岳に登つてゐる筈なので、遠く其方面に眼を放つたが、八ヶ岳は勿論北アルプスの大嶺は、霧々たる雲海の下に沈んで、終に一度も尨顏を顯はさないのは殘念であつた。

十時前に絶頂に著いて留まること三十分、晝寢をしてゐた案内者を呼び起して、下山の途に就いた。分岐點まで戻つて東へ四丁近く下ると、水のある所へ行く道だといふのが左に分れてゐる、三丁も行けば其處へ達するさうだ。少し上りになつて尾根をつたふこと一丁、又下る一丁ばかりの所に石佛が立てゝある。尙も下ると小森村で建てた兩神神社の祠の前に出た。其處から少し左に離れて薄村で建てた祠がある。兩祠とも各其村の方に向けて建てるのださうだ、祭神は伊弉諾、伊弉冊尊。此事實から推して此山に八日見山、龍頭山等の異名はあるが、畢竟兩神山から轉訛したものであることが分る。案内の房吉は絶巓の北の方に龍頭山なる峯があつて、之をリウカミ山と唱へることは、前に記した通りであるから、中津川方面では今は兩神龍頭を區別してゐる者と見える。

薄村の祠の前を右に一丁も下ると東覗きと稱する懸崖の上に出る、十文字峠途上の白妙岩と能く似てゐるがあれ程眺望はない。然し絶壁の高さは百米突以上もあらう、先年親子連れの岩蕈採りが此崖

から墜ちて死んだが今に屍は見當らないさうだ、西覗きは案内者も位置を知らないので、二人で探して見たが遂に分らなかつた。少し戻つて右に下る路の側の木の根に腰を掛けて晝飯をすまし、此處で案内者を返へした。

此山の頂上附近は、一面に霧藻の垂れ下つた五葉松や、ひねつこびた梅が多い。房吉の話によると、年の暮には東京から植木屋が來て、松の枝や梢を切り取つて、荷造りして運び出すさうだ。「東京の人つてえ、氣なもんだ、根もない枝を鉢に植ゑてさ、それで買手があるちうからうまい商買が出來るなア」。植木屋に戯談でも聞かされたらしい。正月の生花に使ふのだと話してやつたら、漸く納得した。

二つの石像を左に見て一丁も下ると又石像が立つてゐる、察するに登山の盛んであつた頃には、一丁毎に立てゝあつたものらしい。中には何丁目なぞと記してあるものがあつた。此處から四丁ばかりの間が最も路の急な所で、岩壁の横を搦むことも一二度あつた。頂上附近は石灰岩らしかつたが、この岩壁は硅岩ではないかと思つた。

間もなく一の鞍部に達した。路が左右に分れる。右は白井差に下るものであらう。左に折れて岩壁に沿ひながら、うねりうねつて七八丁も下ると初めて少し水のある澤に出た、地圖には不動瀧と記してあるが、岩の上に不動の像がある許りで一向瀧らしくもない。此邊までは大木が茂つて下草は餘り生えてゐなかつたが、此處から頭の上が透いて薊や木苺が所嫌はず生えてゐるので、手足がチク〳〵刺される。四五丁下ると石像の側に虚空藏童子と書いた碑があつて廿八丁目と記してあつた。もう廿八丁下れば麓へ出られるのだ、急げ々々と獨言して、薊、車前草、木苺などの繁つた道を、澤について右に左に五六回水を渉りながら、飛ぶやうに驅け下りた。餘り調子に乘り過ぎて本道に出る二三丁手前で路を失つてしまつたが、構はず林や草原の中を突き拔けて、十二時十分漸く廣い道に出て一休みした。夫からゆる〳〵と五六丁も行つた左手の高みに人家が見える、暫くして路は河近く下りて、向ふ

岸へ登つて行く路がある。後で聞くと其處が日向大谷で、兩神神社の祠官の家の在る村だとのことであつた。地圖には私の通つた道は記入してないが、集人から河の右岸に沿ふて廣い道の在ることは慥だ、恐らく之は近く造られた林道であらう、私はつまり地圖に小さなガレの記入してある少し上手で河を左に渡らずに、其儘澤に沿ふて下つたものらしい。

其日は更に六里歩いて吉田町に泊つたが、馬糞に蝶の群がる大道よりは、細い山路の方が矢張り懐しかつた。

二　三ノ瀨より栃本へ

大正元年八月廿六日より廿八日まで。

飯田町――鹽山――柳澤峠――三ノ瀨――唐松尾――雁峠――袴腰山――古礦山――雁坂峠――栃本。

ふと目が覺めた、山に憧憬れながらもうつら〳〵として、遠く身邊を離れ得なかつた魂は、夜の寂寥を破つて山々に反響する鋭い汽笛の音に、吃驚してわれに還つたものらしい。午後九時飯田町發名古屋行の列車に乘つて鹽山に向ふ途中である。外を覗くと行手の高い所に見覺えのある猿橋發電所の電燈が赤く光つてゐる。心配であつた空模樣もどうやら持ち直したらしく、暗い層積雲の大きな塊は、例へば伊太利の空におこがるゝ北歐の詩人の如くに、南へ々々と動いて、見る々々大空の何處へか吸ひ込まれてしまつた。山の端近く殘つてゐた十三夜の月は、薄絹に包まれた蘭燈のやうな光を投げて、平凡な桂川の谷を一幅の畫に仕上げた。初秋風が晴れた空からそよ〳〵と吹き下ろして來るらしい、連日の旱に弱り切つた草木が懶い眠から醒めて、來る可き凋落の悲しみの先驅である此風の前に、快げにそよいで居るのが見える。

丁度此歳の春三月、南日、中村の二君は丹波山村に行かれ、其處から大洞山（飛龍山）に登られて、此

辻木滿丸氏撮影

一五二三米の峯より南方に白岩山を望む

方面に於ける暗黑なる奥秩父の山脈に一道の光明を與へられた。就中龍バミ山、牛王院山、唐松尾などといふ名を聞くのさへ初めてゞある二千米突以上の山が、一ノ瀨部落の奥に聳立してゐることを確めて歸られたことは、よしや兩君は大黑茂谷に於て不慮に遭遇された事變の爲に登山を果されなかつたにしても、後の登山者の爲に開路の手引となつた績は、彼の七絶山を横斷した西遊記の猪八戒にも劣らぬことゝ思ふ。天の配劑妙なる哉で、兩君と惡緣を結んだ私が最も其恩惠を蒙らうとは、中村君の脛長しと雖も南日君の鼻高しと雖も、更に思ひかけぬことであつたらう。私は今その唐松尾に登らうとして、汽車が鹽山に著くまで一人旅のつれ〴〵なる儘に餘計な無駄口を叩くのである。

廿六日。午前四時十五分鹽山著。改札口を出て先づ仰ぐ南方の天には、羅馬の滅亡を豫知して色を變じたといはれてゐる天狼星の閃光が、叢の奥から覗いてゐる狼の目玉のやうに凄い、其上にはオリオン星座が燦として輝いてゐる。鴿になつて夫から星になつたといはれる七人娘のプレヤディース、金牛角上のアルデバラン、五星井に聚つて漢の高祖が天下を取つて以來緣起の好い雙子宮のカストルとポラックスは勿論、ヘラクレスに吸はれて驚いてもぎ放した拍子にジュノーの乳房から乳が迸り流れて出來たといふ天の河、星といふ星は針の頭程の小さなものまで能く見える上天氣なので、安心して青梅街道に向つて歩き出す。

此道は萩原村の附近で南アルプスの殆んど全部を展望し得る壯觀を除いては、誠に平凡で面白くもない道の一だ。桑畑で草雲雀が小さな銀鈴を鳴らすやうな涼しい聲を振り立てる、金雲雀が時々テヤテヤ〴〵リリーと浮かれ調子で混つ返してゐる、柳澤峠の中途まで登つて振り向くと、襟を重ね合せたやうな裾山の上に富士の頂が見えた。其富士が次第に迫り上つて、峠の入口正面に前山を跨いで白い雲の上に全容を顯はした時には、峠の頂上に著いてゐた、八時である。峠を少し北に下つた所から破風山、雁坂嶺、次で其東に黑木の繁つた幾多の峯巒が見えた。其中の一つが目指す唐松尾であるに相

違ないが、どれが夫であるかは知らう筈がない。九時落合着。十時出發して高橋川に沿ふて暫く遡ると高橋村に出た、手近い家に聲を懸けて唐松尾への道を聞くと、黒暗天女のやうな顔をした四十許の女が出て來て、「わしは知らねえだよ、一ノ瀬へ行つて聞いたらようがんしよう」といはれて、早々に逃げ出す。好い工合に向ふからお爺さんが來たので一ノ瀬へ行く道を聞いて、犬切峠といふのへかゝつた。風がないのと草いきれがひどいのとで、暑いこと甚しい。其處を蝙蝠傘をさしてすた〳〵登つて行く、「高野聖」の越中の藥賣のことを思ひ出して可笑しくなつた。病犬を切り殺したので、犬切峠と呼ぶやうになつたのだといふ。峠の頂上からは先き眺めた黒木の繁つた山が正面に直つて、いかめしい連嶂を押し立てゝゐる。中央の一段高い臼のやうな形をした峯が唐松尾であらうと思ふ、其東の尖つた岩峯の後から雲が湧き上つては鋭い鋒先に劈かれてゐる。隨分高く見える。ザラ〳〵に霧爛した白砂の上をすべりながら、急な道を下り切ると一ノ瀬の人家の前に出た、十一時である。右に折れて二ノ瀬を過ぎ、七八丁も行くと三ノ瀬だ、十一時四十分。

村は養蠶の眞最中である。名は忘れたが蠶室の設備があるから泊ることも出來やうと敎へられた家へ寄つて、晝飯を炊いて貰ひながら、山の話を聞いた。午後一時出發、家の後を通つて一丁も行くと道が左右に分れる、右は將監峠へ行く道だ、川に沿ふて左を進み、草山の尾根を登つて、水の多い溪川を更に遡ると澤の二分する所に來た、村から三十分の距離である。此二つの澤に挾まれた尾根が唐松尾の登路で、始めは路もさして惡くはなかつたが、中頃から篤竹が蔓り出し、熊笹が繁り、終には岩が顯はれて、梅の林に抱き込まれた。登りが恐ろしく急になる、二十たび以上も立ち停つて休みながら、三時漸く絶頂に達した。雲が湧き出して少しも眺望がない。測量の櫓は既に伐り倒されて、古生層の岩片狼藉たる中に花崗岩の標石が取り殘されてゐる。三時十五分西をさして山稜を下り始めた。石楠の多い岩蔭を三丁も下つたと思ふ頃、左の谷から登つて來る立派な道に出た、どうも樣子が少し

變なので再び頂上へ戻つて仔細に吟味すると、國境の切明けの跡は三角點より三十間も離れた所にあつて、今下つたのとは殆んど反對の方向に走つてゐる。夫に跟いて岩の露出した挾い山稜を下つて一つの鞍部に著いた。此邊に野宿する積りで兩側の溪を探して水を覓めたが、更に見當らない、見當つたのは羚羊の足跡と其糞位のものだ、霧は大粒になつて今にも雨が落ちさうに重くたゆたつてゐる。止むなく連嶺の縱走を思ひ切つて三度頂上に引き上げた時には丁度五時で、空しく一時間半を費した譯である。六時三ノ瀨に著いて例の家に泊めて貰つた。

二十七日。昨夜は十二時頃に雨が少し降つた樣子であつたが、朝見ると好い按排に晴れてゐた。七時に出發して一ノ瀨まで昨日の道を戻り、其處から右に折れて、二三の人家を通り過ぎ、谷川に出て三四度夫を渡りながら遡つて行く、蕎麥畑、麥畑などが有る。八時谷間の少し開けた處へ出た。じめ〳〵した草原で、チゴザサ、アブラスヽキ、ヤマ井、ミヅガヤツリなどが一面に叢生してゐる。此處で路が二つに岐れる、右は何處までも川に沿ふて行くらしい、これは篤竹取りの道だと兼て敎へられてゐたので、左に登り初めると「右すゝ山道、左かんかうじぎようしよ（官行事業所ならん）」と書いた札が立てゝあつた。若木の生ひ茂つた尾根を半時間も登つたらう、小高い草山の頂上に立つて來し方を顧みた、南正面に頗る立派な金字形をした大菩薩嶺が雲の間から半身を現はしてゐる外は、山らしい山は雲に掩はれてゐる。中にも奧仙丈方面に屯してゐる積雲の大塊は、銀白の頭をもく〳〵と碧空に擡げて、絕えず擾亂を捲き起してゐる風情、恰も百門の大砲を備へた一個軍團の兵が慘として驕らざる勢を示してゐる。あれが若し押し寄せて來たら大變だといふ心配が起る。

此處から木立は全く盡きて短い笹の生えた鍋を伏せたやうな山が幾つか駢んで、道は其間に縱橫に通じてゐる。右には昨日登つた唐松尾の連脈が草原の斜面を見せて、雲の中から穩かな線を引き下ろしてゐる、左には同じ草原の細い山稜が直ぐ黑木を粧ふて、縱に見る所爲か奧深く霧の裡にぼうつと

溶け込んでゐる。其間の鞍部へ志すらしい道を選んで辿つて行く、九時國境の標木が立てゝある處へ達して、左に八丈けよりも高い篤竹の中を潜り下ること十分で、最低の鞍部に出た。このたるみは秩父では雁峠と呼び、雁坂新道から岐れた途が葡萄澤を登つて來て此處に通じてゐる。左の廣河原澤（小佐野君に據る、地圖の廣川谷）へも下る道があるから、地圖に記してある尾根の道を傳はずとも、谷を下つて直接廣瀬へ出られるのであらう。一ノ瀬では燕（ツバクロ）だるみ又は笠取峠と呼んでゐる。峠を十四五間廣瀬方面に下ると教へられた如く草間を水が流れてゐる。雁坂峠までは最早水がないので、早晝飯を遣つた。

九時半正面の草原を登り始め、十五分で頂上に著く、甲州側は岩壁が屹立してゐるので、重に秩父側の栂の林の中を道が通つてゐる。梭葉草を初めて見たのは此峯であつた。一ノ瀬の所謂燕山である。同じ位の高さの凸起を五つ六つ上下すると、山稜の向きが少に西に振れて、唐松のまばらに生へた、爪先上りの茅原が續く、何處かの原へでも出たやうで、山の上を歩いてゐるといふ感じが起らない。然し一歩秩父側に下ると栂の密林である。時に十時半。甲斐國志に袴腰山の名が見えてゐるのは此山に相違ない。絶頂は西北の端に在つて測量の櫓も未だ殘つてゐた、眞北に向つて少し下ると右手に深い古禮澤が覗かれる。すぐ長い古禮山の登りが始まる、恐ろしく栂の茂つた山で、好い切明けはあるがまるで薄暗いトンネルの中を辿るやうだ、十一時頂上に著く、國有林の境界の標木が小高い塚の上に建てゝある、眺望は言ふまでもなく皆無だ。こんな薄氣味のわるい處に長居は無用とサッサと下つた、此下りがまた長鹿に長い、三十分も歩いて漸く木立を拔け、笹原を二三丁登ると、一と月前に通つてまだ記憶に新らしい雁坂峠の頂上に腰を落ち付けることが出來た。

奥仙丈山塊に陣取つてゐた雷雲の密集部隊は、左右に鵬翼を張つて徐々と押し寄せて來る。甲武信岳のあたりは既に濃藍色の幾重の雲に包まれ、破風山も亦ささに隱れんとして勁い風でも起つてゐる

らしく、其あたりの雲が頻りに騒いでゐる。幸に北の方面は穏かであつた。十二時峠を辭して新道を栃本に向つて下り始める、少し行くと一小鞍部に達して尾根の南側に移つた、脚の下は深い水晶谷である、岩壁の横を通る時には針金で釣つた棧を渡ることも少なくなかつた。尾根の上は岩の起伏が甚しいので、道がつけられないのであらう。石楠や横に擴がつた栂が多い。一時半尾根の向きが北に變つて、下りが急にゆるくなる。二時頃「右雁坂甲州道、左雁峠一ノ瀬部落マデ三里半」と書いた標木のある處で一休みした、丁度道普請の人夫が二人居たので、山や澤の名を聞いて見たが餘り知つてゐなかつた。此處から峠の上まで二里半であるといふ。二時半豆燒澤に著いて、お茶を煮ながら晝餉の殘りを平げる。道がまた登りになつて尾根を踰えると小さな澤を渡つた。夫から瀧川谷に沿ふて十丁も下ると舊道と合する。栃本に著いたのは四時五十分、可なり急いでも五時間近く費してゐる。此道は水晶尾根を遠く東に迂廻してゐるので、舊道とは弓と弦ほどの相違がある。一里餘り遠いといふから五里以上五里半位は慥にあらうと思ふ。夕立雨はとう〳〵降らなかつた。

廿八日、今日は將監峠を踰えて、再び三ノ瀨に下り、丹波山に出で、翌日大菩薩峠を登つて、鹽山から汽車に乘る積りであつたが、雨が降り出したので、順路大宮を經て、午後九時五十分歸京した。

三　霜柱と柿

大正元年十一月十六日より十八日まで。

飯田町——鹽山——三ノ瀨——唐松尾——牛王院山——將監峠——龍バミ山——大洞山——雲取山——大血川——强石。

鹽山から青梅街道を柳澤峠に向つて行く途中、石切場附近のとある人家の前の石垣に腰を掛けて、針で刺すやうに冷い朝風に吹き曝されながら、ほの〴〵と明け行く雪の山を眺めてゐた三人連れの草鞋履きの男があつた。身長の高い一人は洋服を著て脊囊を脊負つた上から二重廻しを引掛けてゐる。

一人は綿入れを著て同じく背嚢を背負つて懐手をしてゐる、やけに鼻の高い人だ。もう一人は背嚢代りにカバンを下げた三人中の小男で、黒のマントに包まれて鬚だらけな顔を出してゐる様子は、どう見ても悟りのひらけない達磨の出來損ひである、手には拂子の代りに蝙蝠傘を持つてゐる。

「ヤアー壯んだな、オイ惡澤々々、聖、上河内、アリヤ笊さ、ワッハッ〳〵〳〵」

洋服の人が兩手を擴げて躍り出す。

薄靄の罩めた甲府平原には、まだ夜の色が低くさ迷ふてゐるが、雪に降り埋められた西山一帶の高い峯は、北は駒ヶ岳から南は聖、上河内、笊ヶ岳に至るまで、早くも曙の色に染まつて、叩けば響くやうな空氣の中に薔薇色の肌が寶玉の光を放つてゐる。三人は夫を見て騒いでゐたのだ、其騒ぎが餘り大きいので、とうに起きて火を焚いてゐたらしい家の中からどてらを着た男が出て來て、

「何です？　其處は寒いから、家へ寄つておあたりなさい」

と頭の上から親切な言葉を懸ける。

「ヤー、有難う、ナニ山を見てゐるんです」

三人は其處を立つて間もなく柳澤峠を登り始めた。二人は足が疾い、鬚男は後から苦しさうに跟いて行くが、兎角遲れ勝だ、峠を下ると下から馬に乘つた男が登つて來た。

「オイ、醉拂ひらしいせ、わるいな、地圖を取り放しにして」

洋服の人が綿入れの人に話しかける。何でも二人は此春旅行して小河内の温泉に泊つた時、山の話しをしてゐると、隣座敷から醉拂ひが出て來て、丹波山附近の地圖を借して呉れたのを、其儘未だに返すことを忘れてゐたのだ、尤も地圖は既に二人の手を離れて、今は鬚男の許にある。

「構やしないさ、向ふぢやとうに忘れてゐるよ」

鬚男がいふ。果して赤い顔の醉拂先生は、摺れ違つても知らずに通り過ぎてしまつた。三人は落合か

ら高橋、それから犬切峠を踰えて十時半に一ノ瀬に着いた。

小春日和の長閑な日影は、見るから平和さうな此山ふところの村に相應しい光を投げて、霜溶けの路からも枯草の上からも淡い陽炎が立つてゐる。犬切峠の頂上から瞰下ろして、穏かな懐かしい村だと思つたのが、近づいて更に懐しさを加へた。

杉や檜のこんもり茂つた鎮守の森の前を通つて、路はだら〳〵と畑の間を登つて行く、右にも左にも遠く近く落葉松の木立ちがちらほら目に入る、晝近い日光は散り殘つた鮮かな黄や萠黄色の葉を照して、そのあたりの美しい空氣は明るく輝いてゐる。一體に明るい景色だ。鷄の鳴聲までがこの明るい景色を代表したものゝやうに華やかで明るい。

「オイまだか、遠いな、なぜそんな奥の方の家をよつて泊つたんだらう」

これといふ程の朝食を取らなかつた洋服の人は、頻りに空腹を感じて、晝飯を炊かせる筈の家が遠い遠いと言ひながら、かこち顔に鬚男を攻め立てる。

「もう直ぐだよ、あすこに見える二階作りの家がさうだ」

家の人達は此夏泊つたことのある鬚男の顔を見知つてゐた。三人は草鞋ばきの儘土間には入つて、座敷の上り框に出して呉れた布團を敷いて腰掛けながら、米を出して炊いて貰ふ、大きな爐の自在鍵に吊された鍋が沸々音を立てるのを、横目にちよい〳〵睨んでは、主人とぽつ〳〵山の話を取り交はすのは洋服の人だ。みどりといふ女の子がゐる、これも都會よりは山奥にふさはしい名前かも知れぬ。

三人は晝食を濟すと唐松尾に登つた。頂上は流石に風が寒い。日脚は西に傾いて、もう落ちるに間もあるまい。空は薄紫の烟のやうにぼうつと霞んで、遠い雪の山は其奥に溶け込んでしまつた。

頂上から東に向つて栂の林の中を一筋の切明が通つてゐる、夫を辿つて四つ許り小さな峯を越すと、最後に一段高く岩峯が聳えてゐる、それが牛王院山である。三人は此山の上で一休みした。一體

に黑木の茂つた唐松尾の連脈中で、頂上の露出した稍や高山的な地貌を有してゐる山は此山の外にはない。

「明るい中に行けるだらうか、暗くなると困るぜ」

「行けるさ、もうすぐだらう、それに下りだもの」

將監峠の小屋に泊る筈になつてゐる三人は、西の空を眺めて、不安らしく首を捻つた。

岩峯を下つて二つ程峯を踰えると、左に大きな尾根が出て、和名倉山（地圖には白石山）に連つてゐる。此邊から笹が茂り始めて、下るに隨つて丈が伸び、終には人よりも高くなる、そして其中には大きな倒木が横はつてゐるので、調子に乘つて滑り下りると向ふ脛が逆に曲る程痛い目に遭ふ。

栂の梢にたゆたつてゐた淡い夕日の影は、木の間を透して高く望まれる眞綿のやうな雲に移つて、其處に名殘の光が樺色に燃えてゐる。もや〳〵した空の色も次第に青く澄んで、水で洗つたやうに透明になると、暖かい空氣の中に溶けてゐた寒さが急に凝つて、目に見えぬ霜の針が厚い衣服の上からチク〳〵肌を刺す。

笹の中を下り切ると好い平に出る、將監峠の道は三ノ瀨から此處へ登つて、更に和名倉山の方へ通じてゐる。毎年道普請をするといふ程あつて、少しも荒れてゐない。道に蹤いて南に行き、三ノ瀨へ下る處から東に折れて、下り氣味に三丁も行くと、平な稍や廣い笹原の鞍部が龍バミ谷に向つて、濶然と開けてゐる。下の方に落葉松の林なども見える。其處から左に急な道を三十間も下れば、晝も暗い程に茂つた栂の林の奥に、井戸澤の清い水晶のやうな水が、綺麗な花崗岩の間から滾々と音を立てて湧いてゐる。其側に屋根や背後を熊笹で圍つた大きな小屋が谷に向けて建てゝある。何といふ好い野營地であらう。三人は荷を卸して四邊を見廻しながら荐りに喜んでゐた。

綿入れの人は飯盒を提げて米を研ぎに行く、鬚男は小さな手斧を振り廻しながら、原へ驅け上つて

燃料を集める。洋服の人は鬚男と一緒に出懸けたが、其處らを迂路付き廻つた末、原中に突立つてスケッチに餘念がない。夕暮の濃いつめたい空氣を徹して、遠くから其姿を眺めると、とても暖かい血の循つてゐる人間とは想へない、まるで銅像か何ぞのやうに堅くこち〳〵してゐる、寧ろ塞さ其物が結晶して權りに人間らしい姿をして、不圖此原に迷ひ出したのではなからうか、其胴體から放散する凛冽の氣は、觸るゝ所の何物をも凍らせずには置かないやうな氣がする。太い丸太ン棒のやうな物で背中をガンと打ちのめしたなら、破れ鐘のやうな音をして前の龍バミ谷へけし飛んで行くに相違あるまい。

谷間からも木蔭からもそろ〳〵と匐ひ出した闇は、この打ち開けた原を取り卷いて、最初は地の上を匐ふてゐるに過ぎなかつたが、次第に上の方にのし上つて、何時の間にかつと抱き合ふと、大きな翼の下に原を押覆せてしまつた。滿天の星は美しい光を投げて、靜かな心地よい夜が來た。時々霜の飛ぶのがチラと眼を射る。

焚火を前にして三人は温かい晩飯を終つた、火が明るくなつたり暗くなつたりする度に、ぼうつと映し出された森の木の間で、闇が大きな吐息をついてゐる。其奥の方で井戸澤の清い流れが、或時は銀の糸のやうに細く幽かに、或時は瑠璃盤上を走る玉のやうに滑かに快よく、節面白い自然の音樂を奏でゝゐる。サラッ、サラサラと風なきに散る木の葉の音が、滿山の寂寞を破つて、思はず耳を欹てながら暗を透して其方を覗き込ませる。實に靜かな夜だ、沈默そのものだ。恐らく夏の高山に野宿した經驗のある人でも、斯る靜けさを體得しえなかつたであらう。

十六日。午前四時二十分鹽山出發、十一時三ノ瀨。午後十二時二十分出發、二時三十分唐松尾頂上。三時出發、四時牛王院山頂上、四時五十分將監峠野營地著。

明る朝まだ暗い中に三人とも起きた、綿入れの人は例の如く飯盒を提げて米を研ぎに行く、洋服の

人が蠟燭を點して周りを紙で圍ひながら後に跟いてお伴する、鬚男は小屋に留つて消えかゝつた火を焚き付ける。可なり集められた燃料も昨夜の寒さに大方焚き盡されて、辛くも炊事にことを缺かぬ程しか殘つてゐなかつた。

爽かな然し冷い朝の空氣は、體を透き通して一切の不純物を淨化して行くやうに思はれる、頭の中がはつきりして清々と好い心持ちだ。奥深い栂の密林にも曙の色が華やかに泌み込んで、高く仰ぐ落葉松の梢を旭の光があか〳〵と照す頃、懷しい小屋に別を告げて三人は昨日の原へ出た。

原は霜で眞白である、廣い熊笹の葉と葉とが重なり合つたり抱き合つたりしたまゝ凍み付いてゐる。蹈み分けて行くと霜の結晶がサラ〳〵と散りこぼれて、足の趾先が銀の針で刺されるやうに痛い。

霜柱の立つた細い赤土道を辿つて、山腹を斜に登つて行くと一つの峯頭に達する。其處から南アルプスの雪の山が枯草色の幾重の山の奥に、紺青の空を横さまに波打つた壯大な姿をちらと覗かせる。三人は更に東南の絶巓を指して山稜を急ぎ登つた。龍バミ山の最高點二千十二米突の三角測量標石の上に、櫓の板の散らばつてゐるのを一つ拾つて載せて、ドッカと腰を下ろしさま手早くスケッチを始めたのは洋服の人である、綿入れの人と鬚男とはかたみ代りに雙眼鏡を覗いて、目に入る山々の姿を眺めては樂しんでゐた。

西には近く尨大な奥仙丈山塊が蒼黑く聳えて、南の方へ長い尾根を派出してゐる。其尾根の上に眞先に雪の姿を見せてゐるのは、南アルプス最北の雄峯駒ケ岳である。駒ケ岳の南には朝與岳、其上には小島君の所謂西奥仙丈岳が臥蠶の如く横はつてゐる。鳳凰山、地藏岳。地藏岳の上には白峯山脈の帝王北岳、續いて間ノ岳、農鳥山と、或は尖つた或は穩かな雪の金字塔が高く天半に押し立てられてゐる。廣河内、白河内。二山を連ねた平な山稜は、荒川岳の尖頂に壓されて重さうにたるんでゐる。蝙蝠岳が低く白峯山脈と重なり合つて、糸のやうに細くなつた雪の線は、急に惡澤の大岳を崛起し、

更に赤石山、聖岳となつて、三千米突以上の天空に大地の波頭を白く蹴上げ、餘れる力に上河内岳をグイと引き起して、再び白峯山脈の後に沒してゐる。上河内岳の下には生木割、少し離れて白峯山脈南半の盟主笊ヶ岳、千挺木、七面山。南には遠く不二の高根、近く大菩薩の連山。

奥仙丈と木賊山との間から、八ヶ岳の赤岳と横岳とが覗いてゐる。西北から東北にかけては奥上州の山々が、遙かの高原を踰えて平野に下り行く白馬の群の如くに、遠く北方の雪を見せてゐる。

一わたり見渡すともう餘所の眺望に長く眼を呉れてゐるそらはないのであらう、二人は申し合せたやうに復た西南の方白峯赤石一帶の山々に見入つて、雪の山が放射する磨き澄した光輝を一分間でも一秒間でもより多く瞳の奥に燒き付けやうと思つてゐるらしい。

龍バミ山から山稜は不格好なS字形を畫いて、行手のドン詰りに尨大な大洞山（飛龍山）が高く聳えてゐる。日は斜にこの巨體を照らして、黑い針葉樹の茂つた北の面には、深い紫の影が漂ふてゐる、まだ可なりの距離があるらしい。

「隨分あるな、晝までに行けるかしらん」

「行けるだらう、遠いやうでも歩るいて見ると案外近いものだ」

「遠くつて近きは山の中か」

「馬鹿」

一喝して洋服の人がウハッハーと笑ひ出す。

邪魔な木立を避けて成る可く切明を離れぬやうに山稜を辿るのであるが、低い枝が横に乘り出して動ともすると谷に追ひ落されさうだ。木立が薄らぐと、暖かい光がさつと流れて、笹の叢立ちが深くなる。倒木が多い。鬚男は昨日から左の膝の關節を痛めて、曲げる度に油の切れた機關のやうにギイギイ音がする。それを庇ふ樣に跛ひきながら歩くので、笹に埋れた倒木に行き當ると乘り越すに手間

が取れる、二人はドン〳〵先へ行つて、氣が付くと立ち留つては待つてゐる。ホラノカヒや椹谷の源頭に當る秩父側は、針葉濶葉の混淆樹林が谷を埋め盡して、何處を水が流れてゐるのか音も聞えない。恐ろしく丈の高い笹原を下り切ると椹谷と大常木谷との鞍部へ出る、谷から谷を路らしいものがつないでゐたが、果して人の通つた跡か夫とも獸の路であつたか、其處までは確められなかつた。

同じやうに長い笹を押し分けて、間もなく栂の繁つた山腹を登り始める。暖かい日の光は綠の深い樹蔭に吸ひ込まれて、途中で消え失せてしまふ。樹の根方には僅かながらも雪などが殘つてゐた、ふつくりした青苔も堅く凍み付いて夏のやうな足觸りに乏しい、其處に安心して根を下ろした梭葉草までが、春待ち顏の角芽立ちを厚い葉柄で固く捲き込めてゐる。

眼先の森林が破れて草原に出た、頂上。二人は三角標石の側に腰を掛けながら、

「此處よりも向ふの方が少し高いよ、絕頂を窮めないといふ法はない」

二十間許り西に離れた木立を顯でしやくつて、跛の鬚男を追立てる。

怪しかる人達だ、二人は一度登つたことのあるのを幸に、先へ立つて案內しやうともせず、この高い山の上まで來て弱い者虐めをするとは、山登りの規則に違反した行爲である。それでも素直な鬚男は別に不平らしい顏もせず、言はれた通り其處まで行つて戻つて來たのは感心である。

洋服の人がポッケットから飴を出して皆に配る、それをしやぶりながら眼下の多摩川の谷、大菩薩の連嶺、南アルプスの群山、不二、三頭、雲取、大洞谷、上越界の山々、夫から夫へと目を走らせて、飴の絕間に話をしては、又新らしく頬張りながら目を走らせる、この氣持は無論好いに極まつてゐやう。

草原は長く續かなかつた、雜木の繁つた岩山が鈍い筍形の峯を三つ程擡げた上を切明けが匍ひ上つては匍ひ下りてゐる、三ッ山（地圖の三ッ岩）といふのださうだ。栂澤山の細い岩だらけな山稜は、

石楠花が寒さうに葉を縮め、馬酔木がうら淋しい花を綴つてゐる、丹波山あたりから來たらしい二人連れの男が荐りに石楠花を掘つてゐたが、三人を山廻りのお役人樣とでも思つたのか、いやに丁寧な挨拶をした。最高點に見通しが切り開かれてゐたが、三角點は其處にはなく、北寄りの少し離れた低い峯に建てられてあつた。晝飯にする。今朝から一滴の水も飲まないので、口の中がバサ付いて困つた。今度は綿入れの人が袂から正宗の四合壜を取り出して皆に飲ませる。まるで手品師のやうな人達だ。渴した上に酒を呑んでは後が心配なので、鬚男は二三杯で止めにしたが、二人は好い機嫌になつて滿を引いては「馬鹿だな」を連發する。

三條だるみの笹原を暑い〳〵と言ひながら、下つたり登つたりして、終に雲取山の西の斜面にガッカリした體を横たへたのは、洋服の人と鬚男である。暑いのはあながち横日にカン〳〵照り付けられた爲ばかりではなかつたらしい。鬚男は足が痛いので自由に動けぬ、洋服の人は水分の缺乏から快速を誇る膝栗毛も、實の持ち腐れといふ形だ。綿入れの人は餘り度々二人が休むので、面倒臭いといつた風にサッサと登つて、いつか南の頂上の向ふに隱れてしまつた。

頂上に著くと三人文珠の智慧を絞つて相談を始めた、水は欲しいが誰も七石山まで行つて汲んで來やうといふ程の篤志家ではない、止むなくんば七石に泊るのが上策であるが、洋服の人は兎に角二人は明日中に歸京しなければならない。それで豫定通り三峯に下ることになつた。

頂上から直北にすぐ栂の深林を下ると、道は山稜の北側を搦んで、急な空溪の上端を幾つか横切りつゝ、魚の小骨のやうな尾根を越えて、餘り激しい登降もなく。北へ〳〵と三人を引張つて行く。赤土が多くなると一寸もある霜柱がゐてた道の上にすく〳〵と立ち列むで、蹈む草鞋の下でサク〳〵骨に泌みるやうな音をたてる。喉の渴き切つた二人は、この霜柱を見るとそつと取り上げて、土を拂ひ落して貪り食つたと、さも大手柄のやうに後で鬚男に話した。何かの拍子で先へ行つた鬚男は、さう

とは少しも知らずにゐたのである。

谷の空が薔薇色に燃え始めた、葉の落ちた濶葉樹の梢を傳つて明るい光が薄暗い林の中まで擴がる、谷間の秋を此一本に殘し留めたらしい楓の若木が其光を眞紅に照り返してゐる。桂であらう、黄色い落葉が灰色の岩の上に鮮かな斑紋を染め出す。

終に總てが闇に包まれる時が來た、急傾斜な谷を餘程下りなければ水を得られる的もなかつた三人は、寂しい夜道を辿つて一つの小山の登りに懸つた、飢渴に疲れた體には夫を越すのが容易でない、鬚男がビスケットを出して洋服の人に渡した、いくら嚙んでも飲み込めないといふので、今度は梅干を渡してやる、それで漸く喉を通つたといふ仕末である。

片破月が時々木の間を洩れて、覺束ない光を投げるが少しも頼りにはならない。不知案内の暗の山路を足探りに探つて登つたことも下つたことも三人は未だ經驗してゐなかつた、足で分らない時は手で探つて蹈み固めた路らしい處を寛めて足を運ぶのが牛の歩みよりも遲い。餘程下つたらうと思ふ頃、遠くに一點の火光が現はれた時には、稍や元氣付いた。

「オイ三峯だらうか、夫にしちや方角が變だな」

「三峯ぢやないらしいな、大血川の方だらうよ」

翌日になつて之は大日向の太陽寺の燈火であることが分つた。

間もなく二人は右の谷間に火影を認めたと言つて、鬚男に聲を懸けた。然し鬚男の眼には映らなかつた。

「何處に、僕は何にも見なかつたが」

「確に見えたよ、ねえ君」

「ン、見えた、然しおかしいな、何だつたらう」

何だつたらう、何だつたらうで、此話は其儘消えてしまつた。

少許すると行手の方向に一つ續て又一つ現れた、夫が焚火の光であることが分るだけに近い。愈々人の住む山に近付いたなと思ふと妙に心強くなる。

突然三人は暗闇からぼうつと薄明りの映した山稜に拋り出された、木立がなくなつたのである。淡い月明りに前面を透すと、青白い夜の氣の漂ふてゐる中に、墨繪のやうな山の影が幽かに浮き出してゐる、兩側に木がないので路は反て探し憎くなつた。右に左に幾度か紛れ込みながら一二丁も下つたらう、すると新らしい火の光がすぐ脚の下に見えだした、三人は聲を揃へて「オーイ」と怒鳴る、戸が開いて一人の男が半身を火に照されながら「オーイ」と返事する、「水があるか」と馬鹿氣た質問を發する、水は無いと聞いてガツカリしたが、兎も角も其處へ行くことに決めて、眞すぐ下つても危なくないといふ確答を得た後、一直線に斜面を下つて、とう〳〵小屋の中に轉がり込んだ。

小屋には主夫婦の外に一人の男が火を圍んで話をしてゐたが、用談が濟むと歸つて行つた。少し許りの水は忽ち飲み盡して仕舞つたので、主は二斗樽を背負つて汲みに出懸けた。七尺丁の距離があるといふ、歸りを待つ間の長さ。

温かい雜炊を空腹に充たして、爐縁に寢そべりながら樣々の話を聞く、此春から大血川の谷へ大勢の炭燒が入り込んで、澤山の小屋が出來たのださうだ、これも其一である。此奥の谷にも二三の小屋があるといふ。夫では先き立ち消えになつた火の正體のぬしは、其中の一つであつたかも知れぬ。

寢る時主夫婦は寒からうといふので、「氣味がわるいかも知れないが」と言ひながら、自分達の布團まで掛けて呉れた。

十七日。午前七時十分井戸澤の野營地出發、七時四十八分龍パミ山頂上。八時三十分出發、十時三十分大洞山頂上。十時五十分出發、午後十二時十分裙澤山三角點、晝食。一時出發、三時雲取山頂上。三時十分出發、四時二十分白岩山腹、八時小屋著。

昨夜はぐつすり寝込んで夜の明けたのも知らなかつた。小屋を出て見ると此處は思の外廣い平な土地で、畑なども作られてある。瑞々しい青葉に霜の置かれた菜畑を蹈み踩つた草鞋の跡は、三人が殘したものに相違あるまい。

夫には及ばないと否む主夫婦に心許りのお禮を強いて取らせて、朝遲く小屋を出懸けた、路には霜柱が白く、枯草の根方には有平糖を笹結びにしたやうな形をした面白い氷の塊がある。

「好い霜柱があるな、こりや何だい、まるで有平糖見たいぢやないか」

「これが昨日なら大に助かつたんだが」

「今日だつていゝさ、一つ食はないか、始有つて終無きは男子に非ずだ」

「馬鹿」

元氣が付くと仕末にいけなくなる。

稍や南に向つて下り氣味に七八丁も行くと水のある溪に出た、昨夜小屋の主は此處まで水を汲みに來たのかと想ふと、其親切が忘れられない。

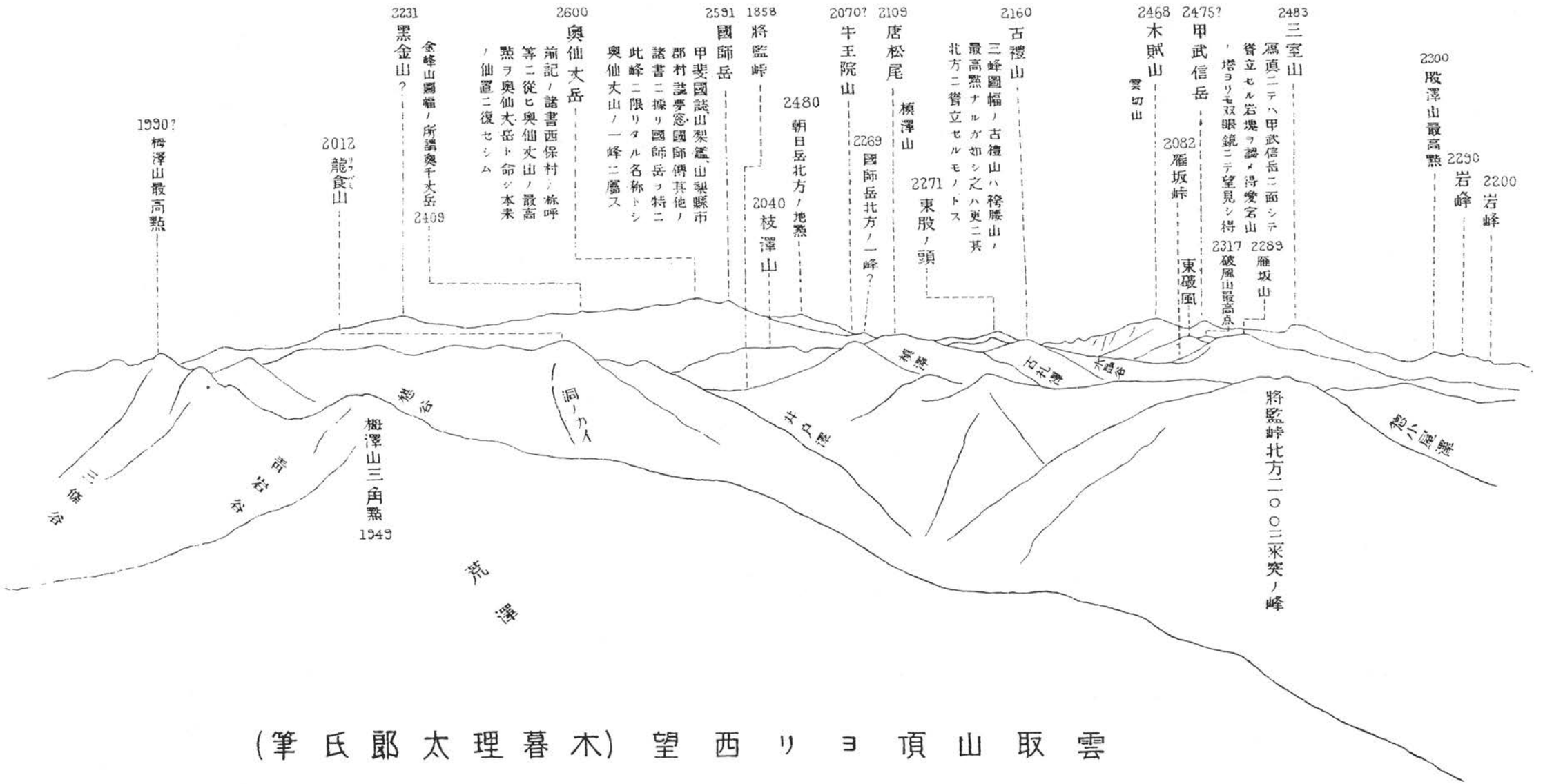
溪に沿ふて下つて行く、左側に幾つか小屋が並んで板屋根から薄青い烟が立ち、見上ぐる谷の奥の山腹からは、炭燒竈の烟が薄紫に立ち昇つてゐる。濕り氣のある重い山の朝らしい空氣が、靜かに顔を撫でて、歌の一つも唸り出したいやうな情調になる。

本流（大血川の西谷）に出て、顔を洗ひながら暫く休む、側の岩にさま〳〵な樂書きがしてある、俳句などもあつた。

「夕涼みあぶなき岩にのぼりけりか、こりや好いや」

ウハッハーと洋服の人が眞先に笑ひ出す、跡の二人も聲を合せて笑つた。

炭燒らしい二人の男が後から來て追ひ著く、お早うの挨拶が濟むと、鬚男が蝙蝠傘をマントに包ん



雲取山頂ヨリ西望（木暮理太郎氏筆）

で兩端を眞田紐で括りながら肩から下げてゐるのを見て、鐵砲とでも思つたのか、

「何が獲れました」

と聞かれたのは可笑しかつた。左手の小高い山腹に大きな建物が見える、太陽寺だ。程なく大日向に着いて二人の男に分れた。何か食べられるものはないかと、多くもない道端の家を軒別に覗き込む、有るぞ〳〵、古生層、黑雲母花崗岩、絹雲母片岩、角巒岩。皆仲間同志で勝手に付けた駄菓子の名前である。

橋を渡つて大血川の右岸に移る、炭運びの人達が女も男も入り交つて、群をなしてぞろ〳〵と降つて行く。此邊の谷間はまだ紅葉が盛りであつたが、三人の目を惹き付けたものは其紅葉ではなかつた。此處には「五月の若葉のやうな深い目をもつた栃本乙女」はもとより居ない、「藍靛の大空を横さに尖波を打ち合つて鋭い白冷の光を放射する雪の山」、夫も此處からは見られない、然し三人の目を惹き付けたものが一つある。柿！　あの見るからに素朴な、飾り氣といつては微塵もない、粗朶のやうに剛ばつた枝を綴つて點々と赤い柿、それだ。

朴訥なる山村の秋を飾るに最もふさはしい柿、其柿が秩父には殊に多い。柿と秩父、此好題目の下に此文の作者は今や一篇の長詩を試みつゝある、夫が若し世に發表される時が來たならば、讀者は必ずや秩父に憧憬れざるを得ないやうになるであらうと堅く自ら信じてゐる。

大血川の村を通り抜けると果して其柿を賣つてゐた、枝からもぎ取つた許りの霜に飽いた柿の味は、また一段である。道端に腰を落ち著けて、十五六は忽ち平げて了つたがまだ物足りない。鬚男が引き返して更に十五六買つて來て、これも瞬く隙に平げてやつと滿足した。

強石から膝栗毛をガタ馬車に乘り替へて、砥の如き大道を金崎に着いた、汽車を待つ間の時間が長いので、寶登山まで歩くことにする。長瀞を見物して歸つてもまだ時間が餘つてゐる。停車場前の寶

登山亭といふ宿屋に休んで汁粉を命じた。これがまた野趣横溢たるものがあつて、三人を喜ばせた。如何したはづみか長瀞で見た茶屋の女に話が飛んで、折から出て來た亭主に「アリヤ怪しいんでしよう」と綿入れの人が無頓着だけに、つい鼻の先に其怪しいのが居るにも關はず、無遠慮な質問を向ける。亭主は笑ひながら、

「怪しいんです」

と答へる。綿入れの人

「そいつは危險だな」

「別に危險な事はないでしよう」

三人は腹を抱へて笑つた。

三峯より白岩及雲取越え

辻本滿丸

今度の『山岳』に秩父のことを纏めて出すに就て、私にも何か書けと云ふ話で、厚かましくも此古い登山を記すことにする、私は秩父に深い興味を持ちながら、實際登山をしたのは、只だ此旅行一回に過ぎない、其後健康を損じてしまつて、當分登山を止めねばならぬ樣な次第となつたので、秩父に關する知識は實に貧弱なものである、それに五年餘りも前のことを思ひ出して見やうとしても、大抵は夢の樣な心持で、假令白岩や雲取の頂上から眺めた、奥秩父の峯々や、遠い雪山の景色が、今でもまざ〳〵と眼に浮ぶやうに思はれるにしても、全體としては、更に纏りがつかない、僅に其時の手

帳から覺束なくも記憶を喚び起して書いて見ることにした、不完全な處や、間違ひの多からうことは御詫をして置く、若し歩行に費した時間等が、後遊の方々に多少の參考ともなれば幸甚である、尤も私は足も甚だ弱いから健脚の人ならば之よりも遙か少時間にて行かれるものとせられて宜しい。それから猶ほ强て此紀行を書くことになつたのは、私の知つて居る秩父大通の人々が、孰れも夜にかゝつてから、白岩の近邊を通つて居つて、其絶頂を極めて居られないのが、一つの理由である。然し私は如何にも三角點のある峯の頂に登つたに相違は無いが、其後刊行された五萬分一『三峯』圖幅に據ると、三角點の南の方に少し高い處があつて、それが寧ろ白岩の主峯らしく思はれる、而かも私は此峯に登つたかどうか今考へて見ても、はつきり判らない、多分は登らなかつた樣に思ふ（正しい地圖の無かつたは勿論だが、遠望上の形を知らなかつたのと、木立の繁いのが此樣な不明に陷つた原因である）、若し登山と云ふことが、絶巔を踏むことを是非必要とするならば、私の白岩登山は頗る怪しいものと云つて宜しい。

此旅行は私と同じ所に勤めて居る篠崎英之助君と共に行つた、明治四十三年十二月二十九日出發、其日は秩父大宮泊り、翌三十日は生川村から武甲山に登り影森に下つて贄川まで、三十一日は贄川を出て三峯に登り、其處から奥宮（妙法ヶ岳）に往復した、此日は朝から曇天で、三峯の登りにかゝつた頃から雪が降り出し、二十一丁目の休茶屋に着いた時には、隨分烈しい降りとなつたので、三峯登山すらも危まれた位であつたが、神社に登り切つた時分には、幸ひ霽模樣となり、終には非常な快晴となつた、參籠所に休んでから奥宮の峯に登る途中、丁度神社の森を出離れた處から、私の眼は深い大洞川の谷を繞つて聳え立つ連山の姿に依つて驚かされた、それは名を聞きながらもまだ近く眺めたことが無かつた、白岩、雲取、大洞（飛龍）、和名倉（白石）の諸山である、日本アルプスと云はるゝ地方の山に見る樣な高山性の形は無いが、黑木の冬木立を鎧つた此等の山々は夫々大膽なスカイライン

を描いて、多少陰鬱な氣分の内に何か一癖あり氣な恐しさを以て人を威脅する樣に思はれた、奥宮の峯からも私は飽かず此山々を眺めた、そして神社に歸つた頃には、私の心は已に此山達に引きつけられてしまつて、何んでも其頂上に立たねばならぬやうな氣になつてしまつた。元來私達の計劃は天候さへ許すならば、雲取か又は雁坂を越える積りであつたのだが、今朝の降雪で私は全然駄目と諦めてしまつた、然るに天氣の恢復と共にそれが復活して、とても元の道に戻ることは出來ない、そして雁坂と云ふ名に久しい執着を持ちながらも、どちらかと云へば、絶頂主義に傾いて居た私は雲取越えの方を採り度く思ひ、且つ今の地點から云つても、其方が遙か便利で且つ容易であるやうに考へられた、篠崎君は今日奥宮の峯の滑り易い雪の經驗から、多少危まれた樣子であつたが、奥宮に較べると山も大きく、岩の出も多分は少なからうと見込をつけ、同君の同意を得た、話が決つたので饗應係りに頼んで、三峯の村から案内を雇つてもらふことにした、今日は大晦日で、此處で元旦を迎へやうと云ふ參詣人で、大分ごたついて居た、其忙しい中から頼みに行つてもらつたが、何分冬ではあり亦た雪でも降つたら、歸りが心細いと云ふやうな事から、二人雇ふことになり、二三回足をはこんでもらつて、漸く交渉が決つたのは、夜も餘程遲くなつてからであつた。

明れば明治四十四年の一月元旦、昨日夕刻から吹き荒んだ風は今日の午前二時頃になつて漸く收まつた、それなどが氣になつて良く眠られなかつた、寢不足を堪えて五時頃から仕度にかゝり、社務所の内庭に行つて見ると、もう大分大勢の人があか〳〵と燃えてゐる焚火の側に集つてゐた、彼方の壁には給仕の子供等のであるらしい、色々古風な文句を書いた、試筆の大きな紙が懸られてある、私等の頼んでもらつた案内の人夫も此集りの内に來て居つた、一人は木村彌右衛門と云ふ五十位の老人、一人は山中彌市と云ふ二十位の若者である、愈三峯を出掛けたのが午前七時であつた、天氣は日本晴と云ふ樣な快晴、碧い空は飽迄冴えてゐる、風が無くなつたので餘り寒くはないが、寒暖計は攝氏零下

五度を示して居た、昨日と同じ途を取つて森を離れると白岩、雲取の連山は鮮かに空を限つてゐるが大洞川の谷はまだ暗い、七時二十五分奥宮との分れ道に達し、右に折れ山脊の右側に沿つて少しづゝ登つて行く、此邊の樹木は檜等の落葉林で、其下には人夫等がスゝと呼んでゐる笹が密生してゐる、然し路は相當につけられてあるから、一向困難はない、七時四十五分炭燒小屋があつたが人は居らなかつた、此處から大洞谷の奥、大洞山の右に一つの可成り高い峯が現はれて來たのを見た、人夫はクヅレ山と云つて將監峠近邊の山だと敎へた、恐らく二〇一二米の龍バミ山であつたのでは、無からうかと思ふ。

一寸草山の側を通ると、又た炭燒小屋があつて、此處では現に炭を燒いてゐた、此處から案内は大洞川の左岸（？）に林道が見えると云つて、指したやうに記憶するが、五萬分一圖には、それらしいものがない、又た前面に大洞川に突出した岩壁と今歩いてゐる尾根との間の澤を、サメゴヤ澤と云つてゐた。

それからサメゴヤ澤の源に近づいて、尾根の上に出て登つて行く、落葉が深く雪も大分積つてゐる、山脊を左の方に越すやうになつて林の間から旭日の光が眩しく漏れて來た、大血川の谷を隔てゝ、武甲山方面が良く見える、やがて一つの凸起した峯の下の石佛のある處で、路が二つに岐れた、左の方は太陽寺から大日向へ下る路である、右の方を取つて雪の積つた笹を押し分け峯の頭に出ると三等三角點があつて眺望が俄然開けた、此處は一五二三・一米と記されてある地點であつたに相違ない（八時二十分）、北の方の正面には奇怪な形をした兩神の岩山が近く見え、その左には眞白い淺間の連山が聳え、兩神の右には角落（？）、榛名、赤城、日光、遠く高原まで見え、榛名、赤城の後には遙かに奥上州から越後界の連山――私は殆んどそれ等の山の何者であるかを確認（アイデンチファイ）することが出來なかつた――が鋭い雪の光を見せる、奥宮の峯は遙か低い下の方に丸い頭を出してゐる、東の方には近い熊倉の連

山（遠く筑波も見えた樣に思ふ）、西の方には和名倉山が其尨大な姿を遠慮もなく擴げ、其側から十文字峠（三峯邊で云ふ信州山）附近の山が見える、更に南の方を見ると白岩の絶頂（三角點の切り開けある峯）は間近く聳え、其右には前白岩と云はるゝ峯と覺しいのが重つて見える、大血川の谷からは炭燒の烟が長閑さうに立昇つてゐる、此處で寫眞を撮つたりなどしてから、八時四十分出發、山脊の左をからんで下り又た少し登ると岩の露れた塲所がある、篠崎君は專門柄だけに此邊にクロモジの木が大分あると云はれた、ヤウラクツツジ、アセビなどもある又たバラがあつて手を刺すに弱つた、著しい下りとなつて一鞍部に達した（九時五分）、五萬分一圖に三峯山脈と記したその三の字のある處らしい、それから又た上りとなつて今度は山脊の右に沿つて行く、雪が二三寸も積つてゐて傾斜も多い、暫く行くと山脊の上に出て左側に移る、落葉樹が減つて、追々針葉樹となり處々に白樺もある、それから山脊、山側とあちこち入れ違ひに歩いた、初めは詳しく記錄するつもりで手帳にも控へたが同じ樣なことが、度々繰り返されたので遂には混亂して分らなくなり記載を止めた、殊に數年後の今から思ひ出して見やうとしても、到底出來るものでない、兎に角大體に於て左迄六ヶ敷もない森中を歩いて行く、九時三十五分石を積み重ねた處に標木があつて、一面に『査一〇號』、一面に山の字のやうな記號があつて、その下に『大洞東谷、大洞西谷、大瀧奥、國有林』と記してあつた、九時四十七分又た標木があつて、一面に2一面に3と記してあつた、それから其側のツガの大木の頂上に、三角標の樣なものが造られてあつた、私は此處を前白岩の頂上であらうと思つた、若しそれとすれば地圖の峯の字のある上の處のピークで、海拔約一七四〇米、密林で眺望は更に無い。

それから又た下りとなつて、山脊の右手をからんで行く、岩石が露出してゐて、傾斜も急で、それに山の陰であるから、雪が一面にある、中々寒い、大木の倒れたのを丸木橋のやうに渡つて行つた處などもあつた、左の山脊は岩山でその下を通る處が一番嶮しい、此樣な處をからんで、岩の處を通り

過ぎ山の傾斜の鈍くなつた處から、左の方に折れて山脊の上に登つた、山脊の上は平になつてゐて、伐木が縱横に倒れてゐる、そこから少し北の方にだら〳〵登ると三等三角點の切り明けに出た、此處が白岩の頂上、三角點のある峯で、丁度前にからんだ岩壁の上になつてゐる、櫓は無つたが樹木は大分切り拂はれてあつて、其倒木が狼藉と横たはり、雪も眞白に積つてゐた。

時計を見ると十時三十分で休憩時を除き三峯から三時十分を要した、西には和名倉山を越えて、三寶、甲武信、雲切の三山及び國師岳が見え（三寶、雲切の名は勿論當時知らなかつた、三つの峯を總括して甲武信岳と云ふのだらう位に漠然考へてゐた）、又た南の方には間近く見える黑い雲取の上に眞白な富士が高く聳える、然し其他は森林が繁つてゐて眺望は宜しくない、何分寒いから寫眞を撮すと、早々下つて平な雪のない處へ迄戻つて、其處で焚火をして食事をすることにした、私は握飯が大嫌ひで殊に中に梅干を入れ飯の赤く染つた奴などは最も好まぬから、何時も輕い辨當行李に飯をつめて持て歩く、今日もそれを持つて來たが、人夫が薄い風呂敷につゝんだまゝ、外にくつつけて來たので、元來まづい飯が丸で凍つてしまつて、嚙むとヂャリ〳〵音がしてとても食へない、それで人から少し飯を分けてもらつたが、どうも喰ひ度くないので、菓子と氷砂糖とですました、それから雪はあるが融すものが無く水が飲めないので之にも弱つた。

私が此旅行をした頃には陸地測量部の五萬分一圖は、勿論まだ出來ず、唯一の信據すべき地圖と云つては、農商務省地質局印行（明治二十一年）の二十萬分一圖甲府圖幅許りであつた、それには白岩の名は無く山脈の關係も頗る怪しい、例へば白岩から仙元峠に連なる郡界山脈などは白岩らしい峯から分れずに、遙かに東北に進んだ處から分れてゐる、其樣な地圖を賴りにしてゐて且つ白岩の山形を遠方から注意して見た事が無かつた私は、白岩と云ふ山に二つの峯があると云ふことは、夢にも知らなかつた（武甲山から寫した寫眞を見るとこの二つの峯が明瞭に現はれてゐるが其時には山名さへも

分らなかつた)、それ故、三角點のある處を一圖に白岩の絶頂と思ひ込んでしまひ、案内もさうと思つてゐたらしく、その南に四十米許も高い主峰と云ふべきものがあることを知らなかつた、(四十米は少々多過ぎはせぬかと思ふ)、私等の飯を食つた處は兩峯の鞍部であつたに相違なく、成程今思ふと雲取に向つての右手の方に繁つた森林の隆起があつたに違ひないが、何分森林つゞきで見通しがきかなく、左程高いものとは知らず、その方へは行かうとしなかつた、鞍部から雲取へ行くとき、いくらか其方へ行つたが頂上へは行かなかつたやうに思ふ、若し前にも記したやうに最高點を踏むことが登山に絶對必要のものならば、私は當然白岩と云ふ山に登らないものとして謹んで引き退がることにする、それから東京から見える白岩はこの三角點の無い峯らしい。

序だから記して置くが、和名倉のことを、私のそのときの手帳に白石とも記してある、白石と云ふ名は三峯でも通るらしい。

十一時五分出發、暫く山脊の右に沿つて、左方へと進み、それから右方にめぐつて下り行く、可成急な下りがあつた、山脊の右から遂に山脊の上に出ると、平な處があつた、それから殆んど山脊通に歩いて餘程西の方へ進み、それから今度は雲取を正面に取つて登りとなる、此間に二つ許り一寸した凸起があつたが、大したものではない、全體として樂である、密林で眺望は惡いが木の間を透した青空に秩父の山を越して遠い大山脈が見える、南アルプスの山に違ひないと思つたが木が邪魔になつて良く見えず、それに頂上へ出たら見えるだらうと思つて良くも見なかつた、風が吹き出して大分寒さが增して來た、雲取の北面の笹の中には雪が五寸許りもあつた、密林の中を出ぬけ、十二時三十分、俄然開豁な雲取の絶頂、一等三角點(二〇一八米)のある處に出た、三峯から休憩時を除いて約四時間半である。

頂上は八疊程の草の平地で、北及西側は少し下から森林であるが、頂上から東及南にかけて尾根の

上は美しい草山で、山の樹木を毛としたなら、丁度此方面は削り取られたやうな工合である、北と西の森林の梢は、いくらか眺望を妨げる處もあるが、自分の方で少し動き廻れば大して妨にならない、今迄主に森林の中の暗い處に慣れてゐた私は不意に此馬鹿に開豁な高い處に引き上げられて頭がグラグラした。

雲取は秩父の山の中で決して高い峯とは云はれない、奥秩父の國境山脈には遙に高い山がいくらもあるが、少くも東京から見える所謂秩父山の中で、最も高く現はれるのは此山である、若し東京に住む人々で此山脈を眺める篤志家があつたならば、其人に力強い秩父山の感じを與へるのは、其左に低く見える黑い大洞山よりも、或は遠く一角を現はすに過ぎない國師岳よりも、雲取であるに違ひない、殊に冬になつて頂上から南にかけての草地に積つた雪の光は、實にあざやかに見られる、山頂が奥の方の山から著しく東の方にかけ離れ、北、東、南の三面には眼を遮る何等の高いものを持たない爲めに、其眺望は絶大であるものと云つて宜しい、此附近で廣い眺望の山として良く人に知られてゐる大岳山なども雲取に向つては到底較べものにならない。

北の方の眺望は先刻一五二三一米の峯から見たのと大體違ひは無いが位置が高いだけに餘程廣くなつた、淺間の左には三尾根邊まで見え、越後境の連山は一層良く見える。三峯神社の森も奥宮も見える、白岩も近く見えたが、頂上が切り明けの處か、どうかと云ふ樣なことは、素より考へもせず、私の心は、もう遠方へ飛んでゐた、東の方には仙元峠へ連なる山脈が特有な形をした幾つかの凸起を躍らせ、黑木の茂つた日原川の谷は足下から深く刻まれ、東北から東南の方にかけては、關東の平原が茫々として連なつてゐる、屠蘇に醉つた赤い顏の人達が、今そつちの方でウヨ〳〵動いてゐることであらうが、そんなことは自分に何んの關係もないと思つた、南の方には雲取續きの高い峯（一七三七米の鷹巢山であつたらしい）から始まつて大岳、御前、三頭、此後の二つの間には三國山脈から高尾邊が低く見

え、其後に遠く丹澤山脈が高く出る、江の嶋らしいものも見える、それから右の方には名の分らぬ餘り高くない山々があつて、次は富士、次は大菩薩の山脈が間近く聳える、西の方は流石に山國を控へただけあつて、一面に山又山、奥秩父から甲州、信州境の主な山は、金峯山を除いた外は殆んど皆な見える、私は此方面の知識がなく且つ同人に依つても未だあまり探檢されなかつた時代であつたから山名の判つたのは、鼻をつき合す許りに近い大洞(飛龍)と、遠く雄大な弧線を描いた國師ヶ岳、峯頭三分した甲武信ヶ岳(然しそれは實は雲切、甲武信、三寶の三つであつた)、それから和名倉だけで、其他は雁坂峠の位置さへも分らなかつた、詳しい山名はその時、私の撮つた寫眞を土臺として木暮君の描かれた挿圖を參照されたい、國師と大洞との間には鋸、甲斐駒、鳳凰、地藏、白峯が見え大洞の左には惡澤あたりから以南が見える、先刻林中から時々見えたのは此南アルプスであつた、北アルプスが見えるか、どうかは聊か疑問だが信州峠あたりの邊に見えぬとも限るまい。

非常な快晴の日、而かも下らぬながらも一月元旦、久戀の山頂に立つた私は確に得意の感があつたが然し簡單に好い事だけでも無かつた、人夫は勿論、剛健な篠崎君は更に勞れた色も無いが、實の處私は頗る勞れた、體力の薄弱なのも原因だが、元々此旅行の始めから體の工合の惡かつたのを例の山にさへ行けば何んでも病氣は治ほると云ふ主義から、無理に我慢で押し通して來たのを、昨日三峯登山の途中、雪に休んだ茶店で飲んだ甘酒で腹を痛めた處へ、今日は飯を凍らして晝飯抜で歩いたのだから全く弱つた、然し私は外の人の樣に悠々と休んで居られなかつた、一通り眺望をすますと直ぐ撮影にかゝらねばならなかつた、器械を組み立てゝ位置を定めるのが中々面倒だ、それから乾板が不足したので取枠の板を換へねばならなかつた、平地では何んでもない樣な此等の仕事も勞れてから、氣をつかふのだから堪らない、ピントグラスをのぞくとき映つた私の顔は自分ながら卒倒しやしないかと危まれる程蒼かつた、厄介な手數のかゝる寫眞器など云ふものは持つて來ない方がどの位氣樂で宜

かつた事かとつくゞ思つた。

頂上の少し下に野營の跡があつた、氣温は攝氏二度を示した。

私の書くべき事は以上で大體終つたのであるが、序にもう少し先きまで書く、雲取の南半の樂であることは先に此山の南の麓にある甲州鴨澤から上下された南日君の直話で伺つた處で、私が此縱斷を決行したのも、一つは同君の賜物である、一時二十五分頂上出發、美しい草山を尾根通りに下つて行くのである、歩行は容易く雪もない、右には大洞山から一大山脊が南の方に引かれてゐるのが見える、前面には三頭山が尨大な形をなして蟠つてゐる、草山の尾根を傳つて大分下ると、今度は又た少しだら〳〵上りとなつてゐる、之を登り切つて、三時三十五分、七石山（ナヽヅイシ）（一七五七米）に達した、此處は雲取から南の方へ出た支脈の中の一峯で、山の形には別段特長がないが、此邊には珍らしい大きな岩が、六つか、七つ、立並んでゐる、これが七石と云ふ、山名の起つた原因らしく、岩の下には、七石權現の小さい祠がある、その側には御麗さへあつた、神職は丹波山に居ると云ふことを後に聞いた。

山脈は猶ほ東に走つて幾つかの峯を造つてゐる、これから又た尾根を上下するのでは、全く閉口すると思つてゐたが、幸ひ七石から路は急に下りとなつた、左手にあつて南に低下する山脈は小袖川の東を限る山で、その先端を鴨澤とすればまだ中々近くない、路は相當のもので且つ性急に下つて行くからメートルの方では、ドシ〳〵捗取る、然し景色と眺望とは平凡となり狹くなる、三時三十分始めて人家を見、四時三十分鴨澤に下つた、麥山を過てから日が暮れ、提燈を賴りに小河内の湯に着いた時には、全く勞れ切つてゐた。（南麓からの道は殆迷ふ處はない、案内者は小袖村で求め得る。梅澤）

最後に一言附け加へて置きたいのは、私の行つた此登山は天氣さへ良ければ、冬の初めでも困難なものではないが、若し以前に澤山の降雪があつたり、又は天氣が惡かつたなら私の歩いた頃の時候でも非常に危險であると思ふ事である、此山脈に較べると遙か低い仙元峠に於てさへ嘗て矢張り同じ時

候に二人の學生が雪に斃れたことは、今も記憶されてゐる方々が少なからずあるであらう。それから、此山脈は雲取に出るまでは眺望の良い處が少なく、殊に夏は一層惡からうと思はれるが、雲取の頂上に立てば、充分其償が出來る、兎に角三峯山と云ふ名が、雲取、白岩、妙法の三山から起つたものとすれば、三峯登山と云ふことの名實を得やうとせらるゝ人達には、奥宮の峯（妙法岳）と共に是非此山脈の縱斷を推薦する。

甲武信岳と奥千丈岳（國師岳）

森　喬

一　甲武信岳

祥瑞の靈氣が乾坤に充ち滿ちた晩秋の或る日であつた。昨日八ヶ岳登攀を雲の爲に思ひ切つた自分等は、到底松原湖や野邊山原では滿足が出來やう筈がない。そこで梓山から甲武信を遣付け、次の日金峯を踰えて御嶽へ出る豫定に、更に奥千丈岳を加へて八ヶ岳の代とし、今日から名だたる西秩父の大頭株をば順々に片付けやうと云ふのである。十一月十三日午前六時頃眞先に起きた一人が、「おい、いゝ天氣だぞ、起きろ起きろ」と叫んだ聲に他の二人の夢は破られる。睡い所だが好天氣といふ登山第一の要件が滿足させられた嬉しさに我慢し、布團から身體を引き拔いて、豫め火を入れられた炬燵へ早速鞍替へする。リュックサックへ今日だけの必要品を押し込み乍ら、昨夜の冷蕎麥の不平等を述べ立ててゐる所へ朝飯が運ばれる。かうして腹も出來、身仕度も整つて白木屋を出た時は、既に八時

を一寸過ぎてゐた。

梓川の橋を渡り、家並を外れると坂がある、登り切つて暫く行くと、次第に道の兩側が廣くなつて來る。此處は戰場ヶ原で、白樺と唐松に綴られた美麗な茅原の壯觀は、誠に梓山の秋を知らぬ人に語らん術もない位である。

戰場ヶ原を貫く道は、更に八町ヶ原に入る。げに「彩より出でゝ彩に入る」の身は、羽化登仙の思も啻ならずで、梓山から一時間も經たぬうちに、自分等は右山道、左三峯道と書いた石地藏の前に立つてゐた、前方には十文字峠附近の國境山脈を眺め、右方遠く三寶山の豪壯を仰ぐ。山道を行くこと二三丁、側師の小屋の前から道はずんと細くなる。千曲川の源なる澤の左岸に沿ひ、處々刻目を入れた丸木の棧を渡り乍ら、暗い木立の中を二十分許進むと、大山祇命と書いた白旗を立てた小さな祠がある。この附近から直接三寶山へ登る道と別れて、相變らず左岸を傳つて行き、一旦澤を渡つて後復左岸に移り、尙も行く中に澤は次第に東南の方へ曲り、兩岸は迫つて樹々は盛に茂り合ひ、倒木の數は益々增して深山といふ感じがいやが上に加はつて來る。再び澤を左に涉り、復右に涉り左方から注ぐ枝澤を見て、更に遡れば十一時頃廢屋に達する、こゝから俄然道は惡くなり細くなつて、折々消えも失せさうになる。それに歩行を邪魔する倒木、岩石、樹根等も數多くなるが、廢屋から四十分かそこらで水止（ミヅシ）（宛字）の小屋へ來て了ふ、焚火をして暖り乍ら握飯を食ふ、水筒に本州第一の長流信濃川の水の一部を充して、殆ど水もない澤に蹤いて東へ向つて斜面を攀ぢる。倒れた樹の幹と丈の低い下生とを踏み越えたり押し分けたりし乍ら登つては一息つき、一息ついては又登る中、ふと仰向くと、何時の間にか湧き出した雲が、唐松や白檜の梢の間からちら〳〵覗いてる、此の分では頂上の眺めは怪しいものだと思ひつゝも、自ら勵まして懸命に上へ上へと匐ひ行く中、寒さが增して來たと感づくと、前面の梢が悉く樹氷を着けて、大奇觀を呈してゐる。やがて下生も大きくなり、上の方が明るくなつて、尾

根の上へ達した。こゝは甲武信岳と三寶山との畧中央であつて、貧弱ながらも國境の切明が通つてゐる。夫を南へ辿つて行くと、勾配は次第に增して來るが、樹氷は益美事に成る、さうして石楠につかまり乍ら、遂に甲武信岳の絶頂へ着いたのは十二時五十分であつた。頂上は頗る狹く、御料局の標石が立てゝある。木立が無いから北と西とはよく見える譯であるが、惜しい哉雲の爲に大部分の眺望は奪はれて了つた。幸ひ、甲武信附近は雲が少ない爲、圓い温順しい姿の三寶山が手に取るやうによく見える。奥千丈も頭に雲を被つては居るものゝ、殆大部分を尨大に見せて居る。奥千丈と甲武信との間の東梓（東股の頭）や富士見などは、眞黑に木を生やして蹋まつてゐる。眼下は東澤の深谷である。「おい熊の穴があつたと云ふのはどの邊だらう」と一人が問ふと、も一人が双眼鏡で東澤の釜のあたりを眺め乍ら、「ヤッ、大きな熊が居るぞ」などとまぜつかへす。

目を轉じて北方を望むと、淺間が噴烟を西風に靡かせて居る左手には、上信越の山々が嶂立し、その又左に續いて針木附近以北の飛驒山脈の雪峯が見える。北アルプスの南部と八ヶ岳の頭部は雲の爲に蓋はれ、南アルプスも亦その一部分を現はすのみであつた。

「秩父の奥山」に書いてある如く、此の甲武信へ栃本から登る立派な林道がある。此の林道を一寸半丁も下つて右手に登ると、甲武信の東南角へ出る。こゝにも御料局の標石があつて、此處からは甲武信の絶頂からは後の針葉樹で遮られて見えなかつた部分がよく見える。先づ前面に木賊山の全容を見、その左に破風を始め秩父の諸山が眺められる。東京も見える筈なのだ。再び絶頂へ戻つて火を焚き、寒風に顫へながら晝飯の殘りを食ふ。豫定は三寶へ廻る積であつたが、時間がないので此の儘下山と決め、二時十五分頂上を辭した。最初は元の切明に隨ひて下り、いゝ加減の處から見當をつけて、下生と苦戰し乍ら澤へ落ち込む。やつとの事で道を見付け、水止の小屋へ着いて一安心。（二時五十分）これからは只管急いで下つたのであるが、獵師の小屋の前を通る時分には、短い秋の日脚も傾いてゐ

たので、妙な風體をして山奥からぬつと現はれた自分等三人は、猛烈に犬に吠えつかれたのであつた。八丁ヶ原、戰場ヶ原へ差し掛つた頃は、四邊は全く暮れ、晴れた空には銀月が水のやうな光を流し、白く浮出した樺の肌と、黑く沈んだ唐松の繁みとの間を行く旅人の足元には、落葉がカサ〳〵と音を立て、遙かに背後には溪聲の淙々たるのが聞えてゐた。

梓山着、六時三十分。

二　奥千丈岳(國師岳)

明くれば十一月十四日である。甲武信登山で忽ち秩父通に成り澄した自分等は、今日こそは秩父連山の最高點たる奥千丈岳を極めてやらうと云ふのである。

天氣は昨日にも增した快晴である。朝飯を待つ間に、山岳を引きずり出して國師並に奥千丈の記事に目を通し、更に地圖に向つて凝議した。道も大體分つて居るし、慥に登れるには相違ないが、確な記錄とてもないので何となく心細い氣もする。午前七時に出懸る。宿の傍で昨日の道と別れ、梓川に沿ふて南へ南へと辿つて行く。

空は飽く迄澄んで居る。一歩々々に蹈む路の邊の白い霜の上には草鞋の痕が鮮かだ。汚ない家の群がすぐ絶えると、左に水車小屋へ渡る橋があり、右に松の生えてゐる岩山がある。山人の膳を賑はす野菜畑の際を通り過ぎると、道は忽ち林の中へ入つて行く。一度迫つて來た右手の山が暫く遠退くと其處に又さゝやかな耕地が現れる。續いて茅原が次第に丈を增して、夏の草いきれの時が思ひやられる。三十分許り來た頃、左に甲武信岳方面への道を分つ附近からは、樹林の絶間に巉岩たる岩峯五郎山が仰がれる。その中木立が段々密になつて、奥山といふ感じは深くなる代りに眺望は殆どなくなる。七時五十分橋を渡つて梓川の右岸に移る。一坂を登つて喬木の繁茂した斜面を少時行くと、左か

ら入る澤に架した小さい橋があつて、渡ると間もなく側師の小屋がある。（八時五分）地圖に海拔一六八四米突の測點を打つた所であるらしい。

小屋の爺に國師への道筋を聞き確め、石楠が無茶苦茶に生へてゐる坂を攀ぢ、栂の林の下道を例に依つて橋を渡り倒木を越え等して進んで行く中、梓川が瀧を成してゐる前へ出た。こゝから右へ澤を渡つて尙も進むと、南東から大きな澤が落ち合つてゐる、即東股である。從つて本澤の水量は急に少なくなり、之に沿ふ小徑も困難が少しづゝ加はつて來る。小屋の跡らしい前を通ると、一寸した砂地がある。それに山人の徒書がしてあつたのは妙に懷かしかつた。黑木は愈々多くなる。道は段々心細くなる。澤を先づ左に渡つて後復右に渡り、斯樣に九回程も川を渡り終ると、輪伐人夫の根據地といつた樣に小屋が幾つか寄り合つた所へ出る。人夫等は大禮奉祝の爲めに里へ下つたのか一人も居ない。が、いつもは大分賑なことゝ思はれる。（九時半）、道はこれから尙も本澤に沿ふて行くのであるが、自分等は尾根へ取り附かうといふので、地圖に水の入れてない枝澤に從つて樵徑を登つて了つた。やがて道は絕え、澤は失せて了つたが、一行は平氣なもの。素晴いしい元氣で東南の方向を取つて勇往邁進し、小屋から約半時間で、甲信を限る山脈の尾根の上、即ち東梓（東股の頭）の西方約二千米突の小隆起に辿り着いたのである。實は其時は一寸の間は自分等の位置が分らなくて困つた。國境であるから勿論切明はある。然しその切明は誠に御粗末で、それに下生えが邪魔するので、ほんとに歩き辛い。見通しも利かぬ程の木の中であるから不安心ではあつたが、意を決して南方へ針路を取つて進む。一旦下つて後、尾根傳ひに登り初める。可也攀ぢ登る間に時々木の少い瘤のやうな所へ出ると東秩父の山が鮮に樹の間から見える。天氣は理想的で眺望が利くと分つたので、今度は早く頂上へ行きたいといふ慾が出て、氣があせること一通りでない。十時四十五分といふに漸く一つの岩峯の上へ出た。甲武信三山を初め、東秩父の山々を見ながら、第一回の晝食を取ることにした。二十分の休憩と詰込ニ

んだ兵糧の御蔭で大分勇氣が出た。そこで尙も繁り合ふ針葉樹の間を潛り乍ら南西に向ふ。偶然、消え殘つた雪を見出す。今まで南西に向つた山稜が急に西の方へ變ると頂上も間近く見えて來る。一等三角點の處へ着いたのが十一時四十分で、附近は測量の際、木を伐つたらしく禾本科の植物が多い。再結束して踏分けた跡のある道を一旦西へ下り、三繋平へ出てから南へ低い灌木を分けて行つて、遂に秩父山脈の最高點たる奥千丈岳の絶頂へ着いたのである。(十二時五分)。

此處へ來ると風物が急に高山性を帶びて來た樣に感ぜられる。即ち偃松が盛に瀰つて、その間に岩石が二個特に突出して居て、その一個の上が最高點に當るのである。傍に大嶽山大權現と書いた石碑が立つて居る。此日はさきに書いた樣に絶好の天氣であつたので、南に御坂山脈を隔てゝ富士山を仰ぎ、南西には、豪宕なる南アルプスの諸山即ち鋸岳、駒ヶ岳、仙丈岳より朝與、鳳凰、地藏並にその上に白峯北岳、間ノ岳、農鳥山、更に荒川岳、蝙蝠岳及惡澤、魚無河內、赤石、聖、上河內、笹、千挺木、生木割の諸大岳を眺め、西には朝日、金峯、小川の諸山を越えて八ヶ岳連峯を横樣に見、乘鞍岳、御岳及び木曾駒はその左に、大天井岳以北の飛驒山脈の大部分はその右に現はれ、槍ヶ岳は夏澤峠の北にその鋭い山巔を覗かせて居るが穗高は殘念にも八ヶ岳に隱れて見えない。

北方を見やれば妙高、火打附近、淺間、白根附近さては遠く雲の上に燧岳、奥白根の頂が眺められる。東方は甲武信三山がその旨く恰好の取れた面白いうねりを見せ、續いて破風、古禮、袴腰の諸山、さては唐松尾、大洞、雲取連嶺、大菩薩、三頭、御前、大岳迄も一眸の中に入る。此の絶大觀を前にして晝飯を再び濟し、スケッチと展望を心行く程貪る。それでも心が殘り勝ちの山頂を辭し去つたのは實に一時四十分で、愈々下山の途に就いたのであつた。三角點附近まで戻り、北東に向つて眞晴な林中を出鱈目に下る。傾斜は急だし邪魔物は多いし、非常な難儀の後梓川の源を見付け出したのはいが、澤が甚しく惡い爲に困難は更に劇しくなる。その中うまく道にぶつかり合せ、蘇生の思ひをし

て元來た道の輪伐の小屋の所へ出たのが三時二十分である。

こゝからは登りと同じ道故、氣も輕々と道も捗取り、途中石楠の杖を土產に各自一本宛伐り、日の暮れぬ中に爺さんの居た小屋の前迄來た。爺さんに「あたつて御出で」と招かれたが應じないで、どん〳〵足を早め、再び白木屋へ舞戻つたのは五時四十分、あたりは最早大分暗くなつてゐた。

自分の見る所では奥千丈山脈の最高點と國師岳の三角點のある峯とは二つの山とするには距離が近い樣である。故に兩方を奥千丈岳と呼ぶか、兩方を國師岳と呼ぶのが穩當と思ふ。自分は奥千丈岳を取つたが國師岳と呼んでも差支ないと思ふ。

扨て秩父と云ふと大した所でないと思ふ人もあるかも知れぬが、然し秩父としても決して油斷は出來ない所である。殊に雲霧の日などは非常な困難を嘗めることが稀でない。現に大菩薩附近の谷で毛布を食はふとした人も居るし、自分等も奥千丈岳を極めた翌日金峯へ向ひ、大いに迷つて非道い目に遭つたのであつた。序であるから少し當時の事を書いて見やう。

三　金峯山越え

十五日、今日も上天氣、昨日といひ、一昨日といひ、無事に西秩父の尤物を踏破し得た自分等の意氣は天を衝かん許りで、今日は最後に金峯へ登り黑平へ出やうと出掛けたのであつた。梓山に盡きぬ名殘を惜しんで近道を取つて川端下へ出る。明るい川端下川の谷を遡り、道の右なる御宮の前を通り、東俣西俣の合流點へ達し、更にその西俣を取つて八幡の小祠がある處へ達した。これまでは順路であつたが、こゝから左へ入つてはならぬ、入つてはならぬと餘り心を用ひすぎた爲に、却て右方から來る可なり大きな枝澤を進み、水晶取の立てた道しるべに欺かれ、多大の困難をして餘程行つた時分、どうも變だと氣が付いたが、もう遲い、金峯の頂上は遙か東方に現れ、自分等は殆ど之と反對の方向へ進

んで居るのであつた。而も之から引き返すのは大變である。一先づ尾根へ出やうと一決して、非道い石楠の林を越してやつとの事で切明まで登り切ると、すぐ目の前へ小川山が出た。瑞牆山が南西に見える。

地圖の上で見ても金峯までは大分遠い、而も縱走が出來るか出來ないかも分らない。增富へ出やうかとも思つたが、金峯へ登れる所まで登らうといふことにして、國境を南へ南へと傳つて行く。泣顏に蜂とはこの事だらう、切明が分らなくなつて國境から東へ出た大きな尾根へ迷ひ込み、周章てゝ苦しみ乍ら國境へ取つてかへし、一旦峠の樣な處へ降り、今度は愈々金峯への登りに差掛る。こゝに岩峯が三つ四つ峙つて居て、それを越すのに非常に手間取る。やつとの事で增富からの道へ出たので、勇氣百倍、更に猛進を續け、僅に苦桃をしやぶつてひるむ勇氣を鼓舞し、峯から峯へと攀ぢ渡るが頂上は中々遠い。散々に奮鬪してとう〳〵金峯山頂一等三角點の上へ立つた時は既に午後三時四十分、梓山から九時間を費したのである。而も非常に急いでそれだけの時間を要したのである。眺望は實によかつた。然し昨日と大差がない。五丈石へ攀ぢ登つただけで十五分程じてすぐ下りに向ふ。轉げる樣にして御室へ着いた時は最早五時であつて、あたりは既にほの暗くなり始めた。とても黑平まで行けないと諦めて、薪を集め水を汲んで一夜を明す準備はしたが、食ふ物とては更にないのだ。十一月であるから夜は滲みる許りに寒い。腹が空いてゐる故尙更寒い、それで二三時間しかほんとに寢ることは出來なかつた。實に辛い一夜であつた。實に長い一夜であつた。

翌日水晶峠あたりは無我無中で越えた。

左の一篇は河田羆氏著「武藏通志」（寫本十六冊）の總說中より、著者の許諾を得て、山嶽篇全部を抄出轉載せるもの也。著者は曾て內務省地理局に在りて、大日本府縣誌の編纂に從事せし人、武藏通志の成る恐らく其時にして、明治二十四、五年頃なりしならむか、試に之を新編武藏國風土記稿と比するに、其の山嶽を記述するの饒多なる、元より日を同ふして談る可からず、吾人の今日知り得たる名山喬嶽の如き、殆んど其全部を網羅し盡せり、依て請ふて之を本誌に載せ、同好の士の一覽に供す、唯著者の自序を得て之を掲ぐる能はざりしを遺憾とす。（記者識）

武藏通志（山岳篇）

河田羆

國司嶽

秩父郡大瀧村の西にあり高八千五百五十三尺（地理局實測）山脈東は雁坂嶺（高六千八百六十九尺（實測）南は甲斐國東山梨郡釜川村に通ずる支道に係る）枝澤山（高五千尺南は甲斐釜川村に至る）槙澤山（高七千尺南は甲斐釜川村神金村に至る）千葉山（一大仙波に作る高八千尺南は甲斐神金村に至る）牛王院山（高七千尺南は甲斐神金村に至る）大洞山（高六千三百十五尺（實測）以上同村に屬す）に連りて三峯山に接し甲斐國界をなし西は破風山（高九千尺南は甲斐釜川村鷄冠山に接す）木賊岳（高九千尺南は同上）又北に轉じて眞澤山（高一萬尺西は信濃南佐久郡梓山村に至る）股澤山（高七千尺西は同上古金鑛あり天正中武田氏之を鑿し德川氏の時復之を採掘す山腹東面に洞口八十許を存す）岩戸屋山（高四千五百尺股澤山の東脈にして支脈南荒川北中津川間の諸山となる以上同村に屬す）十文字嶺（高七千五十五尺（實測）西は信濃梓山村に界す）松尾山（高四千三百尺西は同上）三國山（高五千五百尺西は同上北は上野南甘樂郡楢原村に界す三州に跨るを以て此名あり字猿市より上る十八丁以上同村中津川に屬す）に至り信濃上野國界をなし南は甲斐釜川村（東山梨郡）諸山嶽に連なる諸山共に檜栂赤松の屬茂密

にして良材多し。

兩神山（一名八日見山）

秩父郡兩神村（薄村小森村）にあり北は三田川村（河原澤村）西は大瀧村（中津川村）に跨り高七千尺巨巖峨々として中天に聳へ危峯險峭南北に駢立し大斧劈を爲し遙に武甲と對峙す壑を隔て其北に聳る者を男座山女座山と云高殆ど相等し又其北槌穴。八景岩。天武將。佐々伏。多喜久保と稱する峻峯峻嶒として又其北壑を隔て聳る者を天治嶽と稱す最北別に一峯をなし河原澤に屬する者を龍頭山となす（高五千五百尺）山巔伊弉諾尊伊弉册尊二神を祀る故に兩神の稱あり（薄村字大入より上る凡三里餘浦島より上る凡四里）麓より山巔に至る喬木岑蔚として老藤怪蔓之に挂り漸く上れは峻徑曲折して尤攀躋し難し其間篠平。子持穴。杭岩。凉岩。矢筈岩。日向丸。日影丸。高丸。風穴。海老弦岩。海老穴。富士見坂。髭摩岩。鏡岩。寺平。東眺望。西眺望等岩洞の勝頗る多し山脈東南に延く者を高見倉山（高四千八百尺同村字煤川より上る凡二里全山岩石多く頂上は古杉老松稠茂して其間奇石錯立し眺觀頗る佳なり）鞍懸山（高見倉山の支峯にして東に連る）茂萩山（大瀧村に屬す）猪狩山（高六百四十尺同村に屬し大瀧贄川に跨る山脈東に走り一は小森伊豆澤界の樫木嶺大平戸山より長若村の岩船山に至る岩船山は高凡五百尺形狀北に傾斜して船舶の如し頂上觀音を置左五町を隔て石窟に大日像を安す又硫黄山あり下小鹿野に屬す高一千二百尺一は贄川伊豆澤界の地藏嶺。小野原長留界の石尊山より少東北に轉じ長留田村郷界の中峯山。田村郷の前山。飯山より二岐に分れ西は伊古田。品澤界の丸山。日向山。東は品澤。蒔田界の雨乞山。意支峰等となり荒川と赤平川の間に至るなし中津川小森川の間に連亘し東に展る者は夜衾山。燒山。十萬方山に連り四阿屋山（高七百二十尺山腹に藥師堂あり頂上に兩神社あり薄字柏澤より上る二十町小森字櫻本に至り）小森川。薄川の間に峙へ東北に亘る者は天地嶽（薄村三山村界にあり）高突山（高四百三十尺西南は同村東北は三田川村より上る一里以上諸山共に同村に屬す）となし薄川。三山川の間に亘る西は赤岩山（高五千尺純石山にして雜樹あり北は上野南甘樂郡）總四郎山（高四千尺北は上野南甘樂郡仲原村野栗澤村に界す）高水山（高四千尺北は上野檜原村に界す以上諸山亦中津川に屬す）となして三國山に連る赤岩山の北に連るを志賀坂嶺（三田川村倉尾村に乙父村に界す）跨り上野南甘樂郡

神原村に通ず　となし上野を界し東に轉じ三山川。吉田川の間に迤邐する者を二子山（フタゴ）高三千六十尺倉尾村藤倉に屬し西は上野南甘樂郡魚尾村に至る石山にして中腹洞窟あり深八間廣五間日本武尊を祀る字上郷より上る三十町岩茸岩松石榊を生ず東南字馬上に小嶽あり高三百三十尺菅茅雜木あり今漸く墾して桑畦となす又多く楮實を產すの如く地を拔く數十尺中央鍾穴水晶穴等あり石質鮫白故に名く字三ヶ原より墜腰に逢する十三町頂に白石神社あり多く頂西に石窟あ牛首嶺（ウシクビ）三田川村三山より飯田に通ず大石山（オホシ）高二百尺同村飯田の西にあり四北嶽山に連り東に鹿倉山南に雜り榛名社を祀る生山あり山頂獅石あり獅子巖と稱す北方遙に利根川を望むべし天神嶺（テンジンノミネ）同村飯田に屬し上吉田に通ず　となし小鹿野町の北に亘りて淺間山（セムゲム）高八百尺下吉田村の西南にあり南は下小鹿野に跨る淺間社あり字新田原北より上る二町餘妻鹿山（メガ）。蘆田山（アシダ）共に下小鹿野下吉田界となす

城峯山（ジヨウガミネ）　一名安房山（アブサ）

秩父郡矢納村の西南にあり西南は上吉田村（石間村）東南は日野澤村（上日野澤村）に跨る高二千五百尺登路五條あり本村字向平より二里大仁田及稻村より共に一里十二町石間村字牛納より二十五町上日野澤村より二十町山巔より上野諸山を望む景趣尤佳なり山脈北に連るを神（カミ）山又峯山と云高一千七百尺本村字手津久より上る三十町山頂に城峯神社奥院あり是より下る八町にして本社あり春時賽客殊に多し と云西は三山（ミツ）高一千八百尺上吉田村太田部に屬す より上吉田村倉尾村の北諸山に連り以て上野を界す三山より南に延く者を雨乞山（アマゴヒ）。高岩山（タカイハ）。金峯山（キムブヤム）上吉田村間の界石となし稍西に聳るを高根山（タカネ）上吉田に屬す となす南は金嶽山（カネタケヤム）高一千五百尺下吉田村同熊の西にあり石山嵯峨として頂に松樹あり又マツカネと稱する岩草あり仲春の候小白花を開き爛熳として白雪の樹石を蔽ふ如し奇觀なり。中央に洞穴あり見透岩と云東南は經塚山（キヤウヅカ）高一千五百尺國神村野卷の西北にあ に連り青木平山（アヲキタヒラ）上日野澤の南にあり より破風山（ハフ）又八峯山と云高一千五百尺國神村日野澤村下日野澤の西北にあり山頂尖角をなし其狀隱稜の如し故に此名あり高一百七十尺國神村大淵の西にあり に至り荒川に臨む東は風早山（カザハヤ）高二百尺日野澤村下日野澤の西北にあり村西より上る十二町坂（テタケメ）男嶽女嶽（男嶽）路險曲にして菅茅を生ず頂上より上野諸山及利根川を望むべし高一千二百尺女嶽高一千五百尺金澤村の中央にあり二峯をなし挺立す より寶登山に至り西北は兒玉郡鳳倉山に連る。

鳳倉山

兒玉郡若泉村（下阿久原の西南上阿久原の飛地）にあり南は秩父郡金澤村に跨る高二千尺以下諸山概ね樹木に乏し山脈南風早山より來り西北砥糞嶽（高一千五百八十尺上阿久原の南にあり）石間戸山（高一千三百二十四尺同上）に連り東北は丸山（高一千七百七十尺下阿久原の西南にあり）鼠嶽（高一千五十尺下阿久原の東南にあり二山共に秩父郡に接す）横隈山（高一千四百八十尺下阿久原の南にして東は本泉村太駄に屬す太駄にて之を神山と稱す）杉本嶺（高一千八百二十尺下阿久原の東にして南は太駄に屬す上野綠野郡藤岡町に通ずる支道なり）東山（高一千七百十八尺下阿久原の東にして本泉村に跨る以下諸山樹木鬱茂す）叶山（高八百三十尺下阿久原の東北にして本泉村に界す）茶莫平山（高二百八十尺本泉村河内の西南にあり）十二天山（高二百尺河内の西に亘る）稍西に轉じて菖蒲山（高五百六十六尺本泉村稻澤の西南にして西は下阿久原に跨る）大重嶺（高一千二百四十尺同上）矢倉嶺（高一千百三十七尺同上）となり北に向ふ者は御嶽山（高二百十八尺若泉村渡瀨の東にあり東北は青柳村新宿二宮に跨る字下町の西より上る一町三十間二宮金鑽神社境内より上る九町餘山頂御嶽神社あり北望すれば淺間榛名赤城日光諸峯を眺み東は遙に筑波山を望むべし神流川烏川の二水屢回し又石間鄰躅花あり環珞鄰躅と名く花瓣大にして他種に殊なり花時は近村の人リツカヤ宮の西にあり山上に金遊觀する者多し山北に鏡石あり長丈餘横二間許色淡藉にして人之に向へば影を寫す鏡面に對する如し）龍谷山（高一百五十尺青柳村二鑽神社あり故に又御室嶽（ミムロカ嶽）と稱す字元森と神戸の間より上る曲折三町餘）山神山（高一百六十尺青柳村新宿の南にあり）不動山（高同上新宿の西南にあり）等となり神流川に盡く御嶽山の東に連る者は雨乞山（高二百三十八尺稻澤の東北にあり）大日影山（又太平山と云高九百五十尺金屋村宮内の南にあり）馬不入山（高一百八十尺金屋村飯倉の西南にあり）赤山（高一百二十尺同村の西にあり）申久保山（高六百五十尺本泉村元田の西にあり）藥師堂山（高六百五十尺同上）元田山（高一百五十尺元田の北にあり）富士山（高六百尺金屋村高柳の西にあり）鷹取山（高八百八十尺同村の西南にあり）篠山（高二百五十尺金屋村鹽谷の西南にあり）に至る身馴川を隔て叶山。茶莫平山。十二天山に對峙する者を不動山高一千三百五十尺太駄の東北にあり東は秩父郡野上下郷に跨る）男體山（高二百六十尺河内の東にあり）中丸山（高四百五十尺同村の東南にして東は那珂郡小平村に跨る）となす。

前山

兒玉郡北泉村（北堀村の西南）にあり高三百六十尺兒玉郡の中央に横亘して山脈西南に延き琴平山（高一百尺同村栗崎の西にあ

り四方田にて西山と云　中山（ナカ）高六十尺東兒玉村下兒玉の北にあり南面は懸崖にして諏訪神社あり　鷺山（サギ）高四十四尺共和村下淺見の南にあり水田間に孤立し鷺島多く集るを以て此名あり　東山（ヒガシ）高一百七十尺共和村蛭川の東にあり狀小舟を横ふる如し山上古へ四光寺あり兒玉黨の香火院と云　の諸山あり概して之を前山と稱す餘脈南に回りて淺見山（アサミ）高一百六十尺共和村入淺見の西南にあり　向山（ムカヒ）百尺同村の南　となり又身馴川を隔て外山（ソト）高五十尺東兒玉村南十條の西北にあり前山と川を隔て孤立するを以て外山と稱す　あり。

寶登山（ホト）

秩父郡野上村藤谷淵村の西にあり南は國神村金崎村　西は金澤村に跨る高一千八十尺支山を芋山。白山と云ふ甚高からずと雖荒川に臨み秀拔し登路二條あり藤谷淵字谷より上る二十町餘金崎村字大鋼より上る二十五町險なり　全山老樹森蔚にして頂上に登れば西南に兩神。三峯。武甲の諸峯屏列し荒川其間を縈回して來り東北は簑山（ミノ）。陣見平（ヂムミタヒラ）。釜伏（カマブセ）諸山荒川を隔て近く相對峙し遙に上野諸峯及筑波山を望むべし山脈東南は權田山（ゴンダ）藤谷淵金崎の界　十二天山高二百五十尺金崎の東北にして小丘と雖巨巖重累して樹木蒼密なり　に至る北は荒川身馴川中間の一山脈にして雨乞山（アマゴヒ）高七百尺野上村本野上の西にあり西は金澤村南は藤谷淵北は中野上に跨る坊山。天狗山。日向山。入山。殿平山。箕輪嶺の支峯あり中央以上樹木を生ぜず此邊の山大概皆同じ唯采草に供するのみ　小坂嶺（サカ）中野上に屬し金澤村に通ず　三角山（サムカク）又兩乞山と云高八百尺野上村中野上の西にあり北は兒玉郡太駄に跨る　より漸く東北に續り兒玉那珂二郡を界して間瀬山（マセ）又馬春山に作る高一千二百尺樋口村野上下郷の西にあり西は兒玉郡河内北は那珂郡小平に跨り字宮澤より上る二十町五十六間小平に通ず故に間瀬嶺と稱し曲折二十八盤最險なり頂上少平の地あり村翁茶店を設け行客の勞を休す連脈又北に大坂嶺あり一に横嶺と云亦小平に通ずべし　京山（キヤウ）高一千五百尺樋口村矢那瀬の西北にあり東北は那珂郡圓良田北は同郡白石郷小平に跨る字石原より上は曲折十九盤にして平坦の地に達す凡十八町陣見平山の連峯なり　等となり那珂榛澤二郡諸山に連る。

陣見平山（ヂムミタヒラ）　一名大月山（オホツキ）

那珂郡秋平村秋山村小平村の南にあり大澤村白石村に亘り東南は秩父郡樋口村矢那瀬村に跨る高一千四十尺天正

十八年庚寅六月豊臣氏の兵八幡山城及鉢形城を攻る時淺野長吉彈正少弼等此山上に陣し城中の虚實を窺ふ因て陣見平と稱すと云登路二條あり白石字唐竹より上る三町四十間秋山字平畑より上る三十町餘　山頂四顧快豁にして十有餘州を望むべし支脈西を小平山（コダイラ）高百五十尺小平の中央にあり嶮山にして東麓より上る八町五十間兒玉郡元田より上る十町三十間絶頂に堂あり方七間高五丈三層にして回旋上層に至る之を蒴録（サヾイ）堂と云ふ内に青銅觀音像百體を安ず長三尺より五尺に至る江戸及諸州より寄附する所にして天明中村内成身院七十一世僧元映之を建つ　大澤山（オホサハ）。蛭澤山（ヒル）。吹通山（フキトホシ）と云東を十二天山高一千二百尺秋山の南にあり登路三條字古賀澤より上る凡二十五町白石より上る三十町松久村廣木より上る二十五町山上老樹繁茂し十二天社あり眺觀陣見平山に亞ぐ支脈西に連るを御嶽山と云（テムグ）と稱す山脈秩父郡間瀨山。京山より來り西は兒玉郡男體山。中丸山。不動山に連り東は天狗嶽高四百尺廣木の西南にあり城山（シロ）高四百七十尺大澤村圓良田の西南にあり に至り東南に轉ずる者は榛澤郡界をなし東に向ふ者は新地山（シムチ）高四百尺圓良田の東西入山（ニシイリ）高九百尺大澤村猪俣の西南にあり五百面山（ゴヒヤクメム）同上姥（ウバトコロ）懷山高一千尺同村の南にして榛澤郡用土村の北にあり坊入山（ボウノイリ）高七百五十尺同上となり北に遶りて復た榛澤郡界をなし兒玉郡界に至り諏訪山（スハ）高一百二十尺兒玉郡東兒玉村阿那志の東南にあり南は榛澤郡本郷村に跨る富士山高一百五十尺兒玉郡東兒玉村關の東南にあり南は榛澤郡本郷村に跨る白欠山（シラカケ）高一百五十尺關山の東にして榛澤郡榛澤村山崎に跨る頂上平坦にして西は斷崖屏の如し と云餘脈東して榛澤郡に入高鳥山（タカトリ）高一百八十尺中央を大明神山西北を丸山と云榛澤郡本郷村今泉の西南にあり山神山（ヤマノカミ）高三百五十尺榛澤郡山崎の南にあり支脈西南にあるを相摸山と云今泉に亘り別に西にあるを清水山と云兒玉郡關に連る石原山（イシハラ）高一百五十尺榛澤郡本郷村針谷の西北にあり に盡く。

花園山（ハナゾノ）

榛澤郡寄居町末野村の東にあり高三百四十尺山麓より頂に至るまで五百羅漢及千體石佛あり故に羅漢山の名あり藤田康邦新左衛門の城墟なり故に又城山と稱す末野字宿より上る五町四十間松樹の間櫻花を錯種し景光自ら佳なり山脈西は八王子山（ハチワウジ）高三百七十尺末野の東北にあり支脈西北にあるを虎岡（トラガチカ）及破扇（ハケレ）山と云ふより西北に轉じて那珂秩父郡界諸山に連り東は高根山（タカネ）高三百九十二尺寄居町藤田の西北にあり山上に高根神社あり　鳥打山（トリウチ）高二百三十一尺寄居町の西北にあり痩松離立し大樹に乏し半腹に孥平神社麓に二柱神社あり天正中豊臣氏の將山田伊

賀守毛利河内守等に接し北は那珂郡界をなし清澄山（セイチヤウ）高五十尺櫻澤村の西にあり山頂虛空藏堂ある鐘撞堂山（カネツキダウ）高五百尺櫻澤村の西にあり北は花園村武藏野西は末野に連る支派東にあるを岩棚と云里傳云中世戰國の際鐘を諸山に置き彼此相應じて以て急を告るの用に備ふ此山亦其一なり山巔愛宕神社あり眺望極て濶なり老松あり扇松と稱す古へ蒼蔚たりしが今僅に一株を存す金嶽山（キムガク）高三百五十尺櫻澤村の北にあり山頂觀音堂を置く三界山（サムカイ）高五十尺用土村の西南にあり に亘り那珂郡の坊入山に連る。

以上荒川源頭より東北に延き荒川の西に在る者なり。

三峯山（ミツミネサム）

秩父郡大瀧村三峯村にあり高三千尺妙法嶽と云雲採山（クモトリ）。白岩山（シロイハ）と三山鼎峙するを以て三峯と稱す登路白川村白久村より足指漸く仰ぐ凡十八町にして大瀧村大瀧に至り荒川に臨む橋あり永續橋と云長二十間明治十六年癸未四月新に之を架す之を渡り白川村白川より來る路に會し荒川に沿ひ崖路を登降する殆ど一里餘にして復荒川の涯に下り大輪橋を過ぐ一の華表あり是より社域となす峻坂曲徑を登り三峯村に入凡五十二町にして山頂に達す石標を立て以て町數を刻す長檜古杉の間巨石錯立し登躋頗る艱なり上に縣社三峯神社あり攢峯廻壑の中に在るを以て氣候高寒恒に雲霧多く陰晴變じ易し民家は南に下る八町許の地にあり隱元豆蘿蔔等を產す樹は杉檜槐椹石楠花赤松等多く鳥獸は佛法僧鳥山鳥雉子鳩兎鹿の族ありと云山脈は南に雲採山高六千六百五十六尺（實測）大瀧村に屬し三峯社の東南凡七里餘を隔て南は甲斐北都留郡丹波山村に至る白岩山高四千尺同村に在り三峯神社の東凡一里餘を隔て東南は西多摩郡日原村に至る天目山（テンモク）高七千尺同村に在り南は甲斐丹波山村に至る等あり西多摩郡及甲斐北都留郡に連り東南に畫嶽（ヒルガ）一に大研山と云ふ高三千尺同村に屬し中腹に大日向山太陽寺あり大血川山（オホチカハ）高三千尺同村あり又東して熊倉山（クマクラ）一に城山と云高二千八百尺白久の南にあり東は中川村日野に至る及川浦諸山日野に屬す大黑山（ダイコク）。若御子山（ワカミコ）。矢嶽山（ヤタケ）。天目山中川村上田野に屬す に連る浦山村の南邊淺間嶺に至り南は西多摩郡に接し東は武甲山の背脈に連る。

武甲山（ブカウ）　一名秩父嶽

秩父郡横瀬村にあり西北は大宮郷西は影森村（上影森村下影森村）南は浦山村に跨る高四千五百尺（埼玉縣統計書に據る）登路四條あり横瀬村に由る者を正路となす字南生川（ミナミウブカハ）より上り又字七番耕地より上る共に五十二町遠と雖稍易なり浦山村に由る者を背となす又西上影森に由るを橋立口と云北は即大宮口なり皆稍近と雖險峻にして尤艱なり故に登山の人多く正路に從ふ山狀は純石山にして巖岫層累高く霄漢に聳ゆ大宮郷の邊より之を望めば皺襞分明なれども壁立の狀長る可し登路峻坂曲折して登頓數次纔に山巔に達すべし麓より雜樹叢薈すれども漸く高に躋れば碩草大木少なく雲霧常に多く陰晴時に變ず山巔は平坦にして御嶽神社あり其左稍上りて大通社あり舊奥院と稱す右に熊野社あり又稍下りて少平の地あり的場と云社後數歩にして白石兀立し日本武尊碑と稱する者あり巖洞の奇は岩倉。石門。障子岩。蟬口（セミノクチ）。雨乞岩。屏風岩。天狗岩。三神岩。幕岩。鞍掛岩。冑岩。大倉（オホサクラ）。小倉（コサクラ）等あり目眩し足酸し周視するに遑あらず頂上より望めば東に古所謂武藏野の地一眸に入蒼茫曠邈にして其端に武總の海あり東南に雨降山西南に富士山西北に淺間山を眺るべし北は赤城山下に利根川一帶帛を拖く如く遙に日光筑波を望み近くは山麓村々烟樹の際に點綴し荒川大宮郷を繞りて北流す眺觀快絶と謂べし本州第一靈秀の峯にして四方より之を眺む卓然衆山の上に廻拔するを見る又一山にして別に峯を成すは西にあるを飯盛（イヒモリ）山東南にあるを大持山（オホヂヤ）。小持山（コ）と云（横瀬村に屬す）西北にあるを橋立山と云（上影森に屬す）山脈南に延く者は烏久保嶺（浦山村の東）となり西多摩郡の諸山に接し東に展ぶる者妻坂嶺（ツマサカ）（横瀬村に屬し上名栗村に通ず）山伏嶺（ヤマブシ）（名栗村上名栗の北にあり）となり東南に轉じて伊豆嶺（イヅガ）

高一千尺吾野村南川の西南にあり　天女指嶺上名栗の東にあり　より子山高六百尺吾野村南村の西北にあり東は同村坂石東北は坂元北は南川西は上名栗に跨る村東より屈曲して上る一里十六町山頂に子權現堂あり東に阿字山西北に愛宕山あり杉檜鬱茂して中に天狗杉一本杉裂裟掛松飯盛杉等あり又來迎石天狗石座禪石等の巨岩あり山脈南は豆口嶺八幡坂仁田山嶺に連り上名栗を界して高麗郡に至る　に連り漸く東北に轉ずる者は小御嶽。二子山共に横瀨村蕨久保村を界す　と云又東して正丸嶺蕨久保村より吾野村南川に通ず　と云又北に走りて陣場平山高八百尺大椚村大野の西にあり西南蕨久保村に至り二支に分れ東南は横見山高八百九十尺大野の南にして吾野村北川に跨る北川にて二子（フタゴ）山と稱す　丸山又アナ嶺と云大椚椚平の西大野北川二村の界　飯に跨る童山なり盛山同村の南となり一盛山高一千二百二十尺同上東は北川の界入間郡梅園村龍谷に跨る　鷲巣山高一千尺同上入間郡梅園村麥倉に跨る　に至り入間郡を界し西北は大野嶺大野に屬し蕨久保村を界す　高篠山高一千四百尺項を丸山と云ふ高篠村山田の西南にして西は横瀨村南は蕨久保村に跨る登路蕨久保村字田坂より上る二十六町川越の支道に係る　に至り北大霧山に對す。

大霧山　一名高鳥山

秩父郡槻川村　自石村皆谷村の西三澤村の東南　にあり南は高篠村定峯村　に跨る高二千一百六十尺登路二條あり　三澤字中組より上る三十五町餘皆谷より上る一里十二町　山頂雲霧恒に絶えず故に大霧の名あり山脈東南劍峯山一に飯盛山と云高三千六百尺白石の南にして大椚村大野に跨り草山にして樹木に乏し東に堂平山あり高八百八十尺亦大野に界し東は比企郡大河村腰越に跨る　となり比企郡笠山に連り北に迤りて藥師嶽皆谷の東　となり比企郡大河村腰越に跨る　中山高八百九十尺同上東は大河原村御堂に跨る山頂に巨岩聳立す高六丈餘形觀音に似たり故に又觀音山と云　となる西北は鳥府山一に四萬部に作る高三百尺高篠村栃谷の北にあり三澤に界す　黑岩山原谷村黑谷に屬し東は三澤に跨る層岩累疊して臥象の如し不動堂あり麓に聖社あり又和銅山あり和銅中より簑山高一千五百尺槻川村皆野の東南にあり東は三澤南は黑谷に跨る狀臥牛に似たり其南方黑谷に屬する地別に一峯をなす金山又和銅山と稱し里傳云和銅中採銅の所なりと曲徑を攀る數町巨岩突兀として銅を採掘せし處と傳ふ　色赤氣を帶び銅色を含む往古採掘の迹と稱する地は磐石を中斷して東西に對峙す今和銀澤と呼ぶ其西を硫黃山と稱す又東南に數處の窟穴あり　に至り横瀨川霧川の間に延き荒川に盡く北は粥新田嶺槻川村阪本の西三澤の東にあり阪本字南より上る二十二町比企郡より大宮郷に通ずる路次に係る　二本木嶺粥新田嶺の北にして西は三澤に屬す阪本字内手より上る一里小鹿野町に至る支道なり　登谷山高八百尺槻川村大内澤の西にあり支脈東南に趨く者青木山。阿夫利山と云大河原村奥澤の北にあり太田山と云同村安戸の北にあり共に男衾郡を界し比企郡山脈に接す　に至り兩岐に分れ一は猶北に向ひ釜伏山高一千八百二十尺白鳥村風布の南下田野の東南にあり南は三澤に跨る東北諸郡より之を望む狀覆釜の如し其東北を七本木山と云俗釜伏嶺と稱す三澤より榛澤郡寄居町に通ずる支道なり頂上に釜伏神社あり日本武尊を祀る其北に下る一町許に一盃水あり岩隙より湧出し旱霖に値ふ

と雖増減せず下流駒形川と葉原山（ハラ）高七百五十尺白鳥村井戸の東北にあり風布岩田に跨る支峯田入山（タノイリ）。土鍋山（ツチナベ）又指山（サス）と
なり金屋に至り荒川に入　金嶽山（カネカ）。前嶽等の稱あり金嶽の上に春日神社あり四時詣賽の者多し
云高八百尺白鳥村岩田の東南にあり金尾風布井戸に跨る支脈北に連るを丸山。高柿山と云男衾郡の西界に至る　城山（シロ）又天神山と稱す高七百五十尺岩田
要害山と云荒川に至り東に連るを小林山。の西南にあり藤田氏の城塁なり　等となり亦
荒川に盡く一は東に轉じて男衾郡南界諸山となる。

以上諸山秩父郡に屬し荒川の東に在る者なり。

高（タカ）山

男衾郡折原村三品の中央より西に聳立す高三百二十五尺山脈西秩父郡登谷山大内澤より來り西北は釜伏
山に連り北は車山（クルマ）高二百尺三品の北にあり山頂凹處あり二峯をなし東車山。西車山と云上に琴平社あり　東南は秩父郡界をなし大犬穴山（カホイヌアナ）高三百五十尺折原村西入の南にあり天王
山高二百二十尺西入の東にあり　愛宕山高四百八十六尺餘形村の南にあり　岩洞山（イハホラ）高二百三十五尺同上西麓に洞窟あり深二十八間鑛泉あり之を温浴すれば病癖を愈す天保十一年庚子發見すと云　雨乞山竹澤村勝呂の南にあり　金
笙（シヤウ）山勝呂の東北にあり頂上老松あり日本松と稱す數百年外の物たり　烏森（カラスモリ）山高一千九百八十尺竹澤村木部の西北にあり西南秩父郡安戸に跨る安戸にて入山と稱す北の一峯を虚空藏峯と云　より神倉山（カムノクラ）高一千九百尺木部の南にあ
り南は秩父郡安戸東は比企郡大河村飯田に跨る飯田にて三倉山と云ふ　に至り男衾秩父比企三郡の界をなし東北に轉じて鷲丸山（ワシマル）高二百九十尺男衾村富田の南にあり一峯突兀
として聳へ中腹に小御嶽社あり社左に烏帽子岩右に龜岩あり字西小林より上る八町四十間路に釋迦割石あり頂に淺間神社を安ず途上富嶽を望むを以てなり　後鳥尻山（ウシロトリシリ）高七百八十尺竹澤村勅貢の東北にあり　より角山（ツノ）高三百尺男衾村牟禮の
東南にして比企郡八和田村高谷に跨る其狀尖銳なるを以て角　四山（ヨツ）高三百六十尺男衾村今市の南にして比企郡八和田村高見に屬す四峯
山と稱す頂に松樹數十株あり且滿山躑躅多く花時爛漫たり　並立するを以て四山の稱あり高見字深田谷より上る五町餘頂に愛宕
社あり北は荒川を望み景勝の地なりに至り南して比企郡に入り富士山高三百五十尺比企郡八和田村高谷の西南にあり以下諸山比企郡に屬す　日向山（ヒナタ）高四百尺小川町の北にあり　東野平山（ヒガシノダヒラ）
高二百五十尺八和田村中爪の南にあり東は菅谷村志賀南は小川町下里に跨る中爪字内洞より上る二町頂に石碑を建て御嶽社遙拜所となす明治十五年壬辛新に之を設け近村登拜する者多し一老松あり大傘を張る如し東野平松と云　遠平山（トノヒラ）高四百六十尺志賀の西
にあり　大谷山（オホタニ）高三百七十尺志賀の西にあり頂周回長松多し　清岩山高三百六十尺志賀の中央にあり　上野山（ウヘノ）高三百七十尺同上　早風山（ハヤカゼ）高三百尺菅谷村平澤の西にあり　物見山（モノミ）百尺
菅谷村遠山の北にあり西は寺山　愛宕山に連る　太平山（オホヒラ）高八百五十尺菅谷村鎌形の西北にあり　雷電山（ライデム）高五百尺菅谷村千手堂の西にあり頂に雷電社あり又近時隧道を穿ち遠山に通ず　となり槻川に至
及下里觀音山。

りて盡く又四山の東市川を隔て淺間山（イチノ）高二百尺比企郡七郷村越知の西にあり男衾郡男衾村鷲巢に連る　あり其餘脈東南に延き二宮山（ニノミヤ）高四百尺宮前村伊古の西北にあり頂に伊古乃速御玉（オホタチ）姫神社古祠あり老松數株を存す　大立山高三百尺宮前村中尾の西　布知江山（フチエ）高三百三十八尺宮前村水房の中央にあり嶺上を布知江峯と云阿和須神社古祠あり又小山麓あり古へ流鏑馬を行ひし地なりと云　御嶽山高一百二尺宮前村羽尾の西にあり　と云又二宮山の東北に高根山（タカネ）高一千二百二十尺福田村の北にあり舊松林なりしが近時剪伐して頂上に一叢を殘す四顧爽濶にして北は行田熊谷等の市街を平曠長流の際に望むべし支脈南に石山　あり其西に觀音山　高百五十尺男衾郡小原村小江川の東南にあり中腹以下列巖稲の如く稚松點綴して中に老松二株あり頂上石柱峭立す長五尺周七尺許南面に觀音像を彫す登路五盤して凡二町三十間東に湯谷山あり　あり餘脈平丘をなし又東南に至り横見郡に接す。

笠山（カサ）

比企郡大河村腰越村の西にあり西は秩父郡槻川村白石村北は同郡大河原村御堂村に跨る高一千四百尺山巔樹木繁茂し之を遠望する蓑笠に似たり故に笠山と稱す又乳首（チクビ）山と云亦形似を以て名く　腰越字赤谷より上る一里六町　此山秩父諸峯の端に位し全然孤秀して東は筑波山より南に回り平野蒼茫の際遙に東京を越へ更に房總の海山を望み西は秩父の峯巒起伏し其間に淺間榛名赤城日光諸山翠螺を列するを見る觀眺最も豁如たり山脈は西武甲山の餘脈高篠山。劍峯等より來り此に至り特起し更に東して慈光山（ジクワウザム）又都幾山違一山と稱す高一千二十尺平村西平の北にあり北は大河村上古寺に跨る頂上少平の地を興地峯と云其南稍降り觀音堂あり又西に靈山院東南に慈光寺及釋迦堂あり登路三條一は字宿より上る凡九町一は字日尺より上る十一町一は上古寺より上る十八町奈良坂と稱し尤險峻なり全山老杉古檜蓊鬱たりしが近時之を剪伐し大に幽趣を損す山巔の望笠山に等し頂を又鐘嶽と稱す治承中源頼朝鐘樓を置と云今猶礎石を存す　金比羅山（コムヒラ）平村雲河原の東北にあり　雷電山（ライデム）高五百七十六尺玉川村日影の西にあり　高尾根山（タカネ）一高福寺山と云高三百五尺明覺村本郷の西に　福壽山（フクジユ）大河村青山の南にあり山頂圓形にして御嶽神社あり松檜の間躑躅花多し　淺間山（ニ）同村の東　二本松山（ホムマツ）高八百尺小川町に屬し槻川を隔て東南にあり　物見山（モノミ）高九百六十尺玉川村五明の北にあり　に至り又東鹽山（シホ）高五百尺鎌形の西に至り槻川都幾川の間に連亘し慈光山より都幾川を隔て南に對するを多武峯（タフノ）高八百四十尺西平の西南にあり山上將軍塚と稱する碑石あり里傳大織冠の事を傳會し其墓なりと云　と云又南に大築山（オホツク）一城山と云高七百五十尺同上秩父郡椚平に跨る山上往々矢鏃折截の類を拾得す里傳上田氏の壘址なりと云　飯盛山（イヒモリ）高七百二

十尺西平の東南にあり　あり東に轉じ弓立山一雨乞山と云高一千六百尺明覺村大附の北にあり里傳云文治中源頼朝征奥の時慈光寺僧廢耀此山に登り蟇目の法を修し戰捷を祈る故に弓立の名ありと云眺矚の勝あり　小御嶽山高五百八十尺明覺村田中の西にあり琴平山高五百四十尺明覺村桃木の南にあり山項に琴平社あり上瀧戸にて旌澤山と云　都幾山高二百五十尺明覺村番匠の北にありとなり又起伏して高城山高四百尺菅谷村將軍澤の南にあり字下大ヶ谷より上る六町二十間支脈笛吹嶺(フエフキ)あり里傳云古へ藤原利仁曾て此に陣し喇笛を吹故に此名ありと按に正平七年閏二月二十八日新田義宗笛吹嶺に陣す蓋此地なり辨ぼ北多摩郡舊蹟金井原古戰場の條に詳なり　吾妻山二百尺菅谷村根岸の南にあり東に神戸山。鞍掛山等あり西は將軍澤山林に連る　となり岩殿山高坂村岩殿の西にありに至りて盡く。

越上山

入間郡梅園村黒山村の南にあり高麗郡東吾野村長澤村に跨る高三千六百尺山中一泉あり藤淵と稱す即越邊川の源なり故に越上の名ありと云山巔に登れば東南平濶にして遙矚に佳なり山脈西北は面振嶺高三千六百尺黒山の南にあり秩父支道に係る　太平山高二千百六十尺黒山の西南にあり山上役小角彌勒不動石像あり慶應元年西戸村山本坊設立する所なり　熊野嶽高四千三百二十尺黒山の西北にあり　に連なり高麗郡を界して秩父郡高山椚平の諸山に接し東北に轉じて高篠嶺高一千二百尺梅園村龍谷の西にあり權造嶺高百八十尺高篠嶺の支脈にして梅園村大滿の北　雨乞山高七百二十尺梅園村上谷の北　となり比企郡を界して高房山一弘法山に作る高二百四十八尺越生町成瀧の北にあり餘脈東に延きて比企郡界をなし北は鼻曲山高二千五百二十尺桂木山高七百尺瀧野入村の西北にあり中腹觀音堂あり其下を桂木寺となす中間に通泉あり桂木井と名く東南山麓黒山の東南にあり少平坡をなし民舍十五六戸桃林橘樹の間に點在し山項は松樹二三株あり登眺すれば房總常野及秩父の諸山歷々數ふべし又近く河越市街伊佐沼等を履舄の下に觀るべし　神倉山高二百尺大滿の東　高取山一要害山と云高一百五十尺越生町の西にあり純石山にして越邊川に臨み佳矚あり　琴平山高二百尺梅園村津久根の南にあり　に至り越邊川を隔て高房山に對峙し東南は一本杉嶺高一千百五十尺瀧野入村阿諏訪の西にあり西南は高麗郡東吾野村長澤虎秀に跨る山項風力猛烈唯矮松あるのみ東面舊一老杉あり圍二抱餘因て名を得る所なり今枯死して代るに一杉を以てす平巔の上孤秀して遠望之を知べし支脈東北に主計嶺。鷹嶺あり。　より稍北龍谷山高三百六十尺阿諏訪の東にあり毛呂本郷より之を望む狀富嶽に似たり山項雷電社を安じ南麓に空濛址を存す里傳阿彌和已之助なる者の營地なりと云　烏嶽一烏嶺と云高二千六百六十尺毛呂村小田谷の西にあり項里詣饗する者多し又眺觀に富み四望曠濶なり東腹に烏嶽社あり其南に一泉湧出し村民飲料に供す　に富士社あり嘉永中僧禍翁之を建置す毎歳七月十五日近　臥龍山毛呂村前久保の西にあり字宮下より上る一町五間山項に出雲伊波比社あり又川角村西戸の北に丸山あり高一百尺其東に神樣山あり高七十尺山上に山神祠

りとなり東南は五六嶺瀧野入村大谷木の西にあり支脈北は愛宕山經嶺に連り南は時鳥松山。飯森山。巽山等より八幡山に連り高麗郡物見山に至る雷電山瀧野入村宿谷の東北にあり南より上る三町許中腹鉅石あり夫婦岩。硯岩と云硯岩は一大石にして凡三十坪許中央窪池をなす二三坪許形狀を以て名く池中常に水を貯へ旱と雖涸れず雨を祈る者其水を汲て之を撒すれば必應ずと云旁に雷電社あり等横亘して高麗郡日和田山に連る。

東山（ヒガシ）　一名杉嶺

高麗郡東吾野村（長澤村）の東北にあり全山老杉鬱立す因て杉嶺と稱す西麓宇東風影より上る七町にして巔に達す秩父郡坂石町より入間郡越生町に通ずる支道あり往時險峻なりしが村民西方を開鑿して道路を移し入間郡面振嶺（黑山村）に接す山脈西は富士嶽。大比羅山。大峯（皆同村にして秩父郡に接す）より秩父郎高山村諸山に連り東は入間郡を界して茶嶽山（チヤノタケ）東吾野村虎秀の北にあり北は入間郡瀧野入村權現堂に界し一本杉嶺に接す中央樵徑一條あり毛呂本郷に出る捷徑なるを以て里人多く之に由る南腹岩隙より清泉湧出し最茶に適す故に此名あり日和田山（ヒワタ）高一千尺高麗村高麗本郷の東北にあり（タカサス）日和田山より眺望開濶なり名勝の條參觀すべし高佐須山高一千尺高麗村清流の西北にあり日和田山。物見山（モノミ）高一千尺高麗本郷の西北にあり高麗川に至り高麗川に至りて盡く。

東山の脈高麗川の北岸に在る者なり。

大高山（オホタカヤマ）

高麗郡原市場村（中藤上郷）の北にあり高五百十尺北は秩父郡坂石町に接し東に一峯をなす者を下大高と稱す山脈西南は秩父郡界をなし龍谷山（リウヤイサム）高五百七十六尺原市場の西にあり字芝澤より上る六折して頂に達す凡八町少く平坦にして濠址あり周圍四十五間砦壇なりと云愛宕社を安ず支脈西は天神嶺東は中坂に連る峯山（カマクラ）原市場村赤澤の北にあり に至り名栗川に臨み東に延く者は鎌倉嶺東吾野村井上の西南にあり西は秩父郡吾野村南村に接す字坂より上る六町頗る險峻なり中古秩父郡より鎌倉府に至る本道なるを以て大嶽山（オホタケ）同上西は大高山に接し北は鎌倉嶺に連る故此稱あり に亦大高と稱す舊別に二十六夜山の名あり高澤須山（タカサス）又天覺寺山と稱す高五百九十尺東吾野村平戸の西にあり字田島より上る峻坂數盤凡十五町にして東嶺に至り又西に上

る十町にして頂に達す原市塲村中藤下郷字萩尾（ハギノチ）より上る曲折十五盤凡十七町山頂古へ天覺寺あり後廢壞し今礎石及版碑を存す又道心者山と云明治九年改て高澤須と稱す里傳云畠山重忠の母庵を結び此に住すと清流山（セイリウザン）一愛宕山と云の中央にあり頂に愛宕社を置字原より之を望む狀寫岳に似たり故又白子富士の稱あり　となし高麗川入間川の間に横列し多峯主山（タフノス）高三百四十尺飯能町の西北にあり天覽山（テンラン）高二百十五尺同上以上二山名勝の條參觀すべし　に至り支脇丘阜をなし高麗川村上鹿山村　の邊に及ぶ。

大仁田山（オホニタ）

高麗郡原市塲村赤澤村　の西にあり高六百七十六尺支脈西を久方（ヒサカタ）峯東を根太（ネブト）山と云山脈秩父郡名栗村下栗村より來り西多摩郡を界し東に走り四十八曲嶺（シジフハチキヨク）高三百八十尺原市塲村唐竹の南にあり字清水より九折して登る凡十町頂に達す西多摩郡上成木に通ずる支道にして細徑風盤來往甚難し明治八年二月村民相謀り賞を捐て道路を開鑿し稍通行の便を得たり　大峯高一千五百五十尺南高麗村上直竹上分の南にあり　愛宕山高一千五百尺上直竹上分の北にあり　上窪山（ノクボ）高八百五十尺上直竹上分の南にして西多摩郡上成木に跨る　奥井（オクヰ）戸神山（ドカミ）高八百尺南高麗村上直竹下分の西にあり　富士山高七百八十尺上直竹下分の中央にあり字下間野より上る曲折十六盤凡五町山上に淺間社奥宮あり稍南に下り姥岳と云ふ小祠あり磐長姫命を祀る又山背を稍下る少許冬青樹の古木あり圍一丈七尺五寸枝葉繁茂し神木と稱す山間湧泉あり瀑をなす芙蓉瀑と云　山王嶺高一百八十尺上直竹下分の北にあり字滑澤（ナメサハ）より上る十町原市塲に下る五町十三間西多摩郡より秩父郡名栗に通ずる道路たり　雨乞塚山高四百三十二尺原市塲村下赤工の南にあり頂上老杉あり旱歲に此に來り雩祭す因て此名あり　大高野山（オホタカヤ）高七百五十尺南高麗村下直竹の西北にあり支脈小高野山あり　直竹山（ナホタケ）高三百八十尺下直竹の東南にあり山腹に大國主神を祀る山勢秀雅にして樹木自ら幽邃なり延享中上直竹下分の人某直竹八景を撰し秋月を以て石山に擬すと云　尾長嶺（ナガ）高二百二十尺南高麗村苅生の西にあり　柏木山（カシハ）又高ドツク山と云高四百二十尺苅生の北にあり河越邊より望む者槻れ標的となす　赤根嶺（アカネ）高二百尺苅生の東にあり字上桑寺より上る五町飯能町に通ず甚險ならず牛馬を通すべし西麓に一老松あり周一丈五尺近時枯朽す　穴郷山（アナガウ）南高麗村上畑の北にあり　愛宕山高二百五十尺上畑の中央にあり　秋葉山高二百五十尺同上愛宕山の南に連る　龍崖山（リウガイ）高三百三十五尺飯能町大河原の西にあり字屋代平より上る四町餘入間川を隔て多峯主山と對峙す眺望の勝あり　愛宕山高三百二十七尺南高麗村下畑の北にあり南脈に大明神山あり小丘にして下畑社を安ず中根の老樹あり周一丈餘樹下小祠あり寄新田　高尾根山（タカヲネ）高三百四十尺加治村矢颪の西南にあり東南は前貫を界し青梅道に盡き東北は大河原を界し入間川に至る　琴平山高三百二十尺高尾根の支脈にして矢颪の中央にあり山頂琴平社あり甚高からずと雖四望豁如として群巒を挹すべし山麓に小茶亭あり又稍下りて毘沙門堂あり梅松櫻桃の屬を栽え花時遊覽の興淺からず　に至り成木川を隔て秋葉山高二百五十尺南高麗村岩淵の西南にあり　七國嶺（ナグニ）高二百十尺岩淵の南に

あり西多摩郡今井村に跨る字三澤（ミツサハ）より上る十九町飯能町より青梅に至る支道なり　秋葉山　高三百六十三尺加治村阿須の西にあり山中に古土堆あり高二丈周回二十三間里俚云用明天皇の時勅して之を築き入間高麗多摩三郡界標となすと山麓秩父郡より八王寺に至る里道あり　要害山　又阿須嶽と云高三百尺阿須の東にあり北麓に赤城社址あり今石垣古木を存す觀歷の頃高麗經營を此に置き足利氏に屬して功あり麓に丹屋敷要害澤又陣墓等の名存す　となる入間郡を界し同郡金子山入間郡金子村南金子村の北境に横延する一脈を總稱す中に中神に三本松山。木蓮寺に筍輪山等あり皆其分稱に係る　に連り入間川霞川合流の上に至りて盡く。

以上諸山入間川の左右に連亘し霞川に至り盡る者なり。

大雲取山（オホクモトリ）

西多摩郡氷川村（日原村）の西北にあり秩父郡大瀧村を界す高七千三百九十五尺（神奈川縣測量に據る下同）山中深高にして栂根山毛欅（トガトブ）槻（ナラ）の屬喬樹森立し樹皆蒼古老蘚之を覆ひ人跡殆ど絶して獵夫も到る稀なりと云山脈磅礴として四旁に展敷し西北は秩父郡諸山に連り南は小雲取山　高七千二百八十一尺北は秩父郡西は甲斐北都留郡に界す　唐松谷峯　高六千七百六十一尺山南七巨巖群立し下に七石社あり甲斐丹波山村之を七石山と稱す　より大蹴蹋（オホツヂ）峯　高六千五百六十四尺　に至り赤指（アカザス）山　高四千五百二十尺留浦村の西南にあり　雨乞場山　高三千九百七十一尺同村の南にあり　となり甲斐北都留郡を界して多摩川に至りて盡く多摩川を隔て更に一峯をなす者を大寺（オホデラ）山　高四千五百五十二尺同村の西南にあり西甲斐北都留郡大菩薩嶺の餘脈にして多摩川の東南小菅川に至て盡くと云大蹴蹋峯より東に延く者は高丸山　高山頂平濶凡八千五百坪里俚云古へ鉄あり天正の頃廢銷す故に大寺山と稱すと　千七百三十二尺日陰名栗峯（カケナグリ）　高六千六百八十八尺同上　稲村岩峯（イナムライハ）　高六千四百八十六尺同上東南山麓に巨巖屹立す高二百餘尺之を稲村岩と云ふ　鷹巣山（タカノス）　高六千二十九尺日原村の南にあり　となり本村と留浦村を界し鷹巣山より又東する者は城山　高五千五百三十五尺日原村の南にあり　穐澤（タルサハ）峯　高五千四百五十八尺日原村の東南にして支脈南する者境村樣木尾となる　狩鞍（カリクラ）山　高五千三百四十九尺同上　三木戸（サムノキヂ）山　高四千八百七十八尺境村の東北にあり　となり南する者は榧木尾（カヤノキヂ）　高五千七百九十六尺境村の西北にあり　捩（モジリ）山　高四千四百三十尺境村の西にあり又倉戸山。倉掛山と云　となり又本村と留浦村を界して多摩川に至て盡く。

大雲取山より北に向ひ又東に轉ずる者を芋木（イモノキ）ドッケ　高六千九百六十尺日原村の西少北にあり△方言尖峯をドッケと稱す蓋たうげの譌なるべし　長澤峯　高六千七

百五十四尺日原村の西北にあり　水松谷峯（アラヽキダニ）高六千五百三十六尺同上　白石山（ハクセキサン）高六千三百二十二尺同上山上に白石神社奥宮あり　瀧谷峯高五千九百二十四尺同上　酉谷峯（トリダニ）高五千九百八十六尺日原村の北隅にあり　日向谷峯（ヒナタダニ）高六千二百六十五尺同上　割谷峯（ワリタニ）高五千九百七十四尺日原村の北少東にあり支脈北に延く者秩父郡に至り大黒山若御子山となる　犬剝籠峯高五千九百二十十尺日原村の東北にあり三峯をなし中央最高く峯上巨巖突起す其南少東にある者本村に屬し北少東にある者秩父郡浦山村に屬す又三ドツクと稱す　瀧入峯（タキノイリ）高四千五百二十六尺日原村の東にあり　淺間嶺高五千二百六十一尺日原村の東少北にして天目峯に連り一徑あり本村字一原より北向し天目峯の少東より右折嶺上を踏て秩父郡浦山村に達す長さ凡二里十二町大宮郷に至る捷徑となす日原村は地深奥にして氷川村に至る外他村に通ずる者此一路あるのみ　となり蕎麥粒山に至り本郡と秩父郡を界す。

蕎麥粒山（ソバツブ）

同村氷川村の北隅にあり東北は秩父郡浦山村を界す高五千九百尺神奈川縣統計書　又三角山秩父郡火打山と云と稱す峯頭に高巖あり燧石質なりと云山脈大雲取山の脈東に連り此に至り復た矗然挺立し又東に走り日向澤峯となり南に岐する者を鳥屋戸山（トヤド）高四千八百四十八尺氷川村の北少西にあり　と云北は秩父郡武甲山の脈に接す。

日向澤峯（ヒナタサハツラ）

方言溪水の源頭に在る峯を謂てウラと稱す縣東方言物の尖端即樹梢等をウラと謂如し

西多摩郡古里村大丹波村の西北隅にして西は氷川村に界す氷川村之を鹽地谷山と云　高五千二百三尺山脈南する者は雷電岩山高四千五百九十尺大丹波村の西少北にあり山中雜樹深蔚にして怪巖突出し夏時雷雨多く此山に發す故に雷電岩の稱あり東腹奇巖あり一洞をなす之を獅々巖と云清泉口裏より吻出し東流日向澤に會す是を大丹波川の源泉となす　となり稍東南に轉じて山毛欅山（ブナ）に連り東する者は山梨山高三千九百七十尺大丹波村の西北にあり支脈東に黑椀山（クロヒ）あり又東稍下り屏嶺あり嶺上三面石を累れ一面を開く者二處あり横凡二間許深凡三間許高五尺其何の爲にするを知らず又南方深壑の半腹に高巖あり高凡六百尺幅（ナガサ）凡百六十間之を裸巖（ハダカ）と云全巖小楓樹及躑躅巻柏の屬鉢生し景致奇絶なり長尾丸高三千六百十六尺同上　槇尾山（マキノヲ）高三千六百二十尺大丹波村の北にあり　棒折山（ボウナレ）高三千六百九十五尺大丹波村の東北にあり此に至り漸く巒嶂の間より出四望曠濶關左の平川廣野を望むべし　となり黑山に至り又本郡と秩父郡を界す。

山毛欅山　一に曲谷峯。舟井戸山と稱す

同村大丹波村の西少北にあり西は氷川村を界す高五千三百尺統計書山脈此に至り分て二岐をなす其南に延く者は高指山高五千二百四十一尺同村棚澤の西少北にあり又燒多亡峯（ヤケタボ）と云となり又分て南は筑摩山高四千四百四十三尺同村白丸の北少西にあり　となり本村と氷川村を界し東南は荒高山高四千四百八十五尺棚澤村の西北にあり荏久保山高三千六百二十九尺棚澤村の東少南にあり　となす其東南に趨く者は眞名井澤峯高四千六百二十六尺大丹波村の西にあり　に至り又二分して東南は三道山高四千二百三十九尺同村小丹波の北少西にあり赤杭山高三千五百三十六尺同上峯戸山高三千六十尺同村川井の西北隅にあり頭窓山高二千八百五十二尺同上琴平山高五百尺川井村の西少南にあり山岬に八雲社あり松杉多し御伊勢山同上琴平山に比し稍高し　となり多摩川に至て盡き東北は本村の中部を亘り馬乘石山高四千四百八十八尺大丹波村の西にあり新藏指丸高三千五百四十二尺大丹波村の西少北にあり總岳山高三千二百六十九尺大丹波村の中部にあり　となる

黑山

西多摩郡成木村上成木村上分の西少北にあり西は古里村北は秩父郡名栗村に界す高三千百七十三尺山脈此に至り岐して二となる東する者は小澤嶺上成木村上分の西にあり字瀧上より登る四町四十三間にして頂に至り名栗村に逢す牛馬を通すべし里傳云昔成木川を以て郡界となす後村人協議し此嶺上を以て郡界と定むと云より本郡と秩父郡高麗郡を界し漸く低下し一帶の丘陵をなし新福寺愛宕山高二千尺同村上成木下分の西北にあり板井澤山上成木下分の北にあり字久道より登る七町にして頂に至り高麗郡直竹村に通ず熊野山高四百二十尺上成木下分の東にあり板井澤山の支脈にして石階百三十餘級を登り熊野祠に至る谷山高三百七十尺下成木上分の西少北にあり又二本竹峯と云東に合戰坂あり字小中尾より登る四町十五間にして頂に至り直竹村に通ず里傳云北條氏直嘗て此に戰ふ故に此名あり　となり成木川に至り盡く南する者は常盤前山高三千百七十三尺上成木村上分の西少北にあり又逆川丸（サカサカハ）と云南少東に名坂嶺あり字名坂より登る六町三十六間頂に至る大丹波村の捷路なり岩茸石山高二千八百九十尺上成木村上分の西南にあり又鷹巣山と云山頂より西に下り一岨あり障子岩山と云大丹波村に屬す此邊岩崖壁立して多く岩茸を產す馬佛山高二千五百八十二尺三田村澤井上分の西北にあり總岳山高二千六百六十九尺同上神塚山高二千二百五十尺古墨村川井の東少北にあり　となり多

摩川に至て盡く又岩茸石山より東に向ふ者は高水山（タカミヅ）高三千五百九十五尺上成木上分の南少西にあり山中波切不動堂あり字入平木川南岸より登る十七町堂畔に達す堂は裝飾莊嚴にして詣賽者常に絶えずと云東に松木嶺あり字大指より登る五町許にて頂に至り又下る二町三十間にして北小曾木村に通ず牛馬を通ずべし　永栗峯（エイクリノ）高三千百九十九尺北小曾木村の西少北にあり　となり稍東南に轉じ雷電山　高二千七百七十四尺北小曾木村の西南にあり　辛垣山（カラカイ）高二千五百尺三田村二俣尾の東少北にあり　桝形山（マスカタ）高二千五百七十五尺二俣尾村の東南にあり　となり三方山に至る。

三方山（サンバウ）　一に石神入山と云

西多摩郡小曾木村（墨澤村）の西にあり北は成木村西南は三田村を界す高二千六百九十六尺小脈北に至り又二支をなす其東北に延く者は鷹巣山（タカノス）高二千五百八十六尺墨澤村の西少北にあり　高巖山（タカイヤホ）高二千四百十四尺下成木上分の南にあり方言イヤホを謂してイヤホと云　指倉愛宕山高二千二百九十六尺同上滿山樹木鬱蔚として山頂に古松一株あり下に愛宕の小石祠を置　千賀村嶺（チガムラ）高三百七十尺下成木下分の西北にあり字中里より登る六町五十二間にして頂に至り南小曾木村に通ず高麗郡飯能町より青梅町及び箱根崎等に至る徑路となり稍東して峯山（ミネ）高二百尺小曾木村富岡の西少北にあり東は圓圃に臨み麓に秩父街道あり　となる又東北に趨き愛宕山高三百尺下成木下分の東南にあり　となり成木川に至て盡く其南する者は物見山（モノミ）高二千六百三十一尺二俣尾村の東南にあり　となり又分れて南は日光山高四百尺青梅町日向和田の西少北にあり里人是を兵率所（ヒヨツヒキ）と稱す巉岩秀削し奇卉異草等其間に生ず南腹に洞窟二處あり一は洞口南に向ひ高四尺横六尺洞中三間許にして西に通じ洞門あり多摩川を隔て下村落を望む仙境の如し一は右傍にあり洞口方四尺洞中暗黑深さ測るべからず又岩麓に二洞あり山中多く南天燭を生ず幹矮實大に葉亦鮮紅にして他種に異り　となり東に回る者矢倉臺（ヤクラダイ）高二千六百三尺日向和田村の北少東にあり又雲雀臺（ヒバリ）と云字梧樹より上る十町餘山頂平坦凡二十五坪西北は本郡及び秩父の峻嶺を瞻望し東南は多摩川の長流武藏野の曠原を下視し眼界頗る爽豁にして此地の佳勝たり　天王山高四百尺日向和田村の中部より北少東にあり山趾東南多摩川に臨み山中巖石峙立し頂に古松老檜等あり　坊主山（ボウズ）高二千二百九十五尺青梅町の西少北にあり又小曾木山と云支脈西南小岡を秋葉山と云東少南に琴平山。姥見山あり　となり漸く東北に轉じて栃谷坂尾根（トチヤザカテネ）高二百三十尺霞村根布村の西少南にあり　高峯山（タカネ）高百七十尺根布村の中部より少北にあり山頂に高峯神社小祠あり是を虎柏神社奥宮と云　天寧寺尾根高二百尺南小曾木村の西南隅にあり　佐武山（サム）高百尺霞村木野下の北少西にあり東脈を赤坂嶺と云山麓より上る三町四十八間南小曾木村に通ず新町より秩父郡に至る道路たり　丸山高百七十尺霞村藤橋の北にあり嶺上青梅町より飯能町に至る道路あり　となり餘脈入間郡金子山に連なる。

狭山

西多摩郡箱根崎村と入間郡元狭山村（駒形富士山村）の間に起り東に連亘して西多摩郡石畑村北多摩郡岸村三木法村と入間郡勝樂寺村上山口村等を界し入間郡久米村將軍塚に至る一帶の山脈を總稱す高七十尺より二百尺に至る其峯をなす者六本松嶺（高百二十尺石畑村の東少北にあり）高根山（高二百尺元狭山村高根の南にあり上に高根神社を安ず松樹多し）宮寺山（同村宮寺にあり山嶺にして濶三十間長二百間許村社出雲祝神社の境内に屬し社後狭山茶場碑あり幕府儒臣式部少輔林鵞峯文を撰す）と云縣道八王子道あり箱根崎村より駒形富士山村に通ず。

以上諸山大雲取山の脈多摩川の北に連亘する者なり。

三頭山

西多摩郡檜原村の西少北偏隅にして西南は甲斐北都留郡西原村を界す高六千二百八十三尺（神奈川縣實測）山嶺三峯をなす故に三頭の稱あり多摩川西南衆嶽中に於て最高峻となす山中は官林にして山毛欅其他雜樹深鬱蕃茂す東南字數馬より上る一里三十町許險惡尤甚し山脈西は甲斐大菩薩嶺に連り支脈西北に岐する者檜尾峯（高五千三百四十尺小河内村川野の西南隅にあり）糖指峯（高四千六百尺同上）となる本脈は二道に分れ東北に趨く者を戸澤峯（高五千四百五十一尺小河内村河内飛地の南少東にあり）と云戸澤峯の支脈風張嶺（檜原村字藤原より上る凡二里十四町甲斐丹波山村及留浦小河内等に至る牛馬を通すべし）より東少南に岐する一支を平茅尾根（高三千百八十尺檜原村の中部より少東南に偏し南秋川北秋川の間を東に延亘する一帶の横嶺にして二水會流の處に至て盡く嶺上道路一條あり淺間尾根通と云小河内諸村より風張嶺を經て尾根の嵩頭に至る三里五町三十八間五日市町に至る捷徑となす）と稱す又戸澤峯より東北に延く者を京道山（高四千八十尺小河内村原の南少西にあり又月夜見山。菌岩山と云）天神山（高三千六百九十六尺原村の南少東にあり）水窪山（高四千七百九十六尺原村の南隅にあり字栃窊（トチヨセ）より上る一里二十餘町是を小河内嶺と云五日市町檜原村より原村溫泉に通ずる捷徑なり）御前山（高五千九百尺原村の南少東にあり）となり鞘口山に至り

本村と小河内村を界し東南に趨く者は笹嶺高四千七百三十五尺檜原村の西南にあり西南は甲斐北都留郡西原村を界す　丸山高四千六百四十一尺檜原村の南少西にあり一溪を隔て西原村大牟禮山と相對す嶺脈茲處を大日嶺又笛吹嶺と云本村より西原に至る徑路なり　笹平尾根高四千百九十尺檜原村の南にあり　熊倉山高三千九百五十八尺檜原村の南にあり西北低處を栗坂嶺と云字南郷より上る二十一町十八間にして頂に至り甲斐北都留郡綱原村に達す同郡上野原驛に通ずる徑路なり牛馬を通ずべし　となり本郡と甲斐北都留郡を界して三國山に至る。

鞘口山　一大平峯又深タワノ峯と云

西多摩郡氷川村氷川村の東南にあり小河内村檜原村に跨る高四千三百尺三支脈北に延く者江戸小屋山高三千七百七十尺九龍山高三千六百六尺同上となり多摩川に至り本脈は東北天地山に連る嶺東低處を大嶺と云字小留氷川村の南にあり浦より上る三十三町頂に達す檜原村五日市町に至る撓徑なり。

天地山

同村海澤村の西南隅にあり南は檜原村に跨る高四千八十五尺山頂を割岩と云支脈北に延き二支をなす一は高岩山高三千八百六十尺海澤村の西南にあり南北共に深谿に臨み峻峯拔起して皆巖巒なり雜樹之を擁し景趣奇絶なり　となり一は鋸山高二千八百八十四尺海澤村の西にあり全山石骨を露し峯尖參差として松檜の屬其間に離立し山巔は片巖峭立して左右皆懸崖に臨み亦奇景の境なり　愛宕山高三百尺氷川村の南にあり甲州街道より多摩川を隔て聳立し全峯峻巖重疊し東南は深谿南は多摩川に臨み山巔に愛宕祠を安ず松樅等叢茂し石間に石楠石長生(シノブ)を生じ又目馨と稱する寄生木あり夜叉柄杓の類にして其實を採り眼中の微塵を播へば能之を吸取す故に目馨の名ありと云　となる本脈は東して中岩山高千五百尺檜原村の北にあり　に至り大嶽に連る。

大嶽

西多摩郡檜原村の北少東にあり北は氷川村海澤村に跨る高五千六百尺統計書全山巉巖崑崙として杉檜の屬森然喬茂し樹石皆奇古老蘚長蔓之を掩ひ深邃狀すべからず山巔に大嶽神社奥宮あり東南に下る四町

餘本社あり字三都郷より上る一里六町社前に達す石徑羊腸巔に近き處最危險となす兩總地方にて武藏の鍋冠山（ナベカブリ）と稱し海路の目標となす山脈三頭山の脈此に至り復た崛然奮起し岐て二支をなす一は北少東鍋割山高四千九百二尺海澤村の東南にあり稍東して甲籠山高四千三百三十尺三田村御嶽山の西少南にあり東南は深壑に臨み怪巖突兀樹木老蒼にして中に白躑躅多し山頂に天津社あり是を奥の奥宮と云又東南男眞那社（オグナ）あり是を御嶽摭社の奥宮となす御嶽山本社銅華表前より左折十一町五十三間奥宮前に至るとなり御嶽山に至り一は南少西高黑山高三千二百尺檜原村の東少西にあり葛籠石山高三千二百七十九尺小宮村蒼澤の南少西にあり大茅倉峯と云麻豆刈山高三千二百九尺小宮村乙津の西北隅にあり又泉澤山と云光明山高二千八百五十八尺乙津村の北少西にあり

御嶽山

西多摩郡三田村御嶽神社の後峯を云高四千百五十尺山頂に大日眞神社あり山中老杉古檜森々として萬章天を撓す支脈北少西に富士峯高三千九百六十七尺御嶽本社の北少東にあり棒杭山高四千百三十尺古里村小丹波の南隅にあり又大塚山。白岩山と云字寸庭平（スムニハ）の多摩川寸庭橋より南に上る二十五町五十三間頂に達す頗る險急なれども小丹波より御嶽山に至る捷徑なり多摩川の南字廣澤の山腹に琴平社あり其後奇石多し一を山伏岩と云高百尺餘一を天狗岩と云高三百尺許又瀑岩あり壁立二百五十尺其下を廣澤と稱す瀑布あり奇景愛すべし三田窪山高三千八百四十二尺三田村梅澤の西少南にあり又御嶽山と云其御嶽に屬する地又奇石多し鍔岩。障子岩。塔組岩等の名あり初臺山高三千五百四十尺古里村丹三郎の南少西にあり字熊谷平より上る十七町餘頂に至る是を御嶽山の捷徑となすとなす本脈は東に展び又分て二となる其東少北に趨く者を日出山高四千八十三尺大久野村の西少北にあり又黑雲山。蛍乏山等の稱あり高峯高三十七尺御嶽山の東少南にあり萩平尾根高三千三百八十尺吉野村柚木の西南隅にあり蘚荷窪峯高三千二百二十八尺柚木村の西南にあり覗岩峯高三千百九十六尺柚木村の南少西にあり安夫澤の上流に二巨巖あり溪を夾て對峙す高各七十尺巖頭平坦六坪許座して溪山の勝を弄すべし愛宕山高三千五尺柚木村の南にあり愛宕社あり禰宜峯にして松檜多し芳野山高三百尺吉野村下村の西にあり字宮腰より上る十五町背梅市街を一瞬の下に望むべし琴平山高二千二百十尺下村の西にあり山上巉岩壁立三百尺上に琴平社あり愛宕山高二千三百尺大久野の中部より少東北にあり梅谷嶺高百九十尺吉野村日影和田の西南にあり字澤中より上る十三町四十六間大久野村に通ず支脈天狗岩あり高二百八十尺古木惟岩重累し頗る奇觀なり要害山高二千三百四十尺日影和田村の東南にあり三田氏辛垣城（カラカイ）に在る時斥候を此に置風久保山高二千三百九十尺吉野村畑中の中部にあり天王山高千八十尺畑中村の中部より少東南

にあり又雷電山と云ふ山上八雲神社あり二塚嶺（フタツヅカ）高二千二百尺調布村鵜木野の南少西にあり西南大久野村を界す字見籠土橋（ミカゴ）より上る十四町四十二間頂に至る青梅町より五日市町に通ずる道路たり路傍に鰻土堆あり高六尺周回八尺許故に二塚と稱す山麓字蒟蒻（コムニヤク）に蒟蒻石あり蒟蒻嶺高三間周回二十間許赤黒色を帶ぶ故に又蒟蒻嶺の名あり經塚（キヨウヅカ）山高二千二百尺調布村上長淵の南にあり又大澤山と云山脈此に至り又二支をなし東は滿地嶺（マムヂ）調布村友田の南にあり又方砂山（カタスナ）と云一に萬字嶺に作る字方砂より上る七町七間許嶺上に至り一町五間にして菅生村に通ず青梅町より八王子町に至る道路たり其東南斷崖壁立西北より東南に至る十三町許高三百尺之を阿須波計（アスハケ）と稱す直下多摩川に臨み險嶮極て佳なり阿須は隙岸の義なり宮本（ミヤモト）山高三百九十尺平井村の北にあり山頂を舊翁峯と稱す古松あり谷戸（ヤト）山高三百七十尺平井村の西北隅にあり唐松（カラマツ）山高三百八十尺平井村の西南にあり と云

麻生（アサブ）山高三千五百四十三尺大久野村の西にあり論傳（ロムデム）山高三千二百四十四尺大久野村の西少南にあり となり又分て二支をなす一は仍東南に向ひ細尾（ホソヲ）峯高三千六尺大久野村の西少南に勝峯（カツポ）山高二千六百六十尺大久野村の中部より少南にあり里傳云平將門砦を此山に築くと將門坂。將門澤等の名あり又眞藤尾根と云存す山北洞窟あり風穴と云洞口高五尺餘幅三尺許深四五間にして下陷し深さ測るべからず其東に峭巖屏立し東北より西に繞る凡三十間高六尺是を障子岩と云 となし一は少南に趨き赤保（アカボヤ）也山高三千三百四十九尺明治村深澤の西北にあり笊（ザル）山高三千二百十尺深澤村の西北にあり道傍（ダウバウ）山高三千九十九尺深澤村の西少磐座（イワクラ）山高三千五十四尺深澤村の西にあり入野（イリノ）峯高二千六百八十尺五日市町の西北隅にあり又金毘羅山と云雪澤（ユキザワ）山高二千三百尺五日市町小中野の北少西にあり吹上（フキアグ）山高二千八百八十尺菱澤村の東南にあり となり秋川に至て盡く。

以上諸山三頭山の脈東南に延び大嶽御嶽山等となり大雲取山東走の山脈と多摩川を夾て南北相對峙し三田領青梅邊諸村と秋留郷諸村の脊梁を劃する者なり。

三國（ミクニ）山

西多摩郡檜原村の南にあり西は甲斐北都留郡桐原村東南は相摸津久井郡佐野川村に跨る高三千八百五尺山脈西熊倉山より來り東に趨き軍茶利（グムダリ）山高三千八百四十九尺檜原村の南にあり又生藤山と云茅丸（カヤマル）山高三千九百九十九尺檜原村の南少東にあり連行（レムギヤウ）峯高三千九百四十二尺檜原村の南少東にあり灰燒平（ハイヤキダイラ）峯高三千三百七十七尺檜原村の南少東にあり又雞冠尾根（トサカ）と云 となる醍醐嶺に至り相摸を界す。

醍醐嶺

又イッポチ山。市道山。千澤峯と云

西多摩郡檜原村の東南にあり南多摩郡恩方村（上恩方村）を界す高三千六十八尺戸倉村字傳名澤より上る三十町餘頂に至り本村及上恩方界の嶺上を過ぐ戸倉より甲斐上野原驛に至る捷徑となす支脈北する者を臼杵山（ウスキサム）高三千五百四十二尺乙津村の西少南にあり　城山　高二千三十三尺戸倉村の中部より東北にあり　石津窪山（イシヅクボ）高三千百七十五尺戸倉村の西南にあり　となし本脈東して鳥屋切塲峯（トヤキリバ）高二千八百四十六尺戸倉村の東南にあり又大澤峯と云　となり漸く東北に轉じて猪畑尾根（シヽバタケ）高二千九百六十二尺戸倉村の南少東にあり　篠八窪尾根（シノハチクボ）高二千八百六十尺戸倉村の中部にあり　豆佐嵐山（ヅサラシ）高二千七百五十五尺戸倉村の東南にあり又棚澤入峯字津木窪峯と云　古愛宕山　高二千三百七十五尺戸倉村の東に南多摩郡川口村今熊山に對す　龍角山　高千六百七十五尺三里村小和田の西少南にあり　となり又東して寺入峯　高千六百五十尺小和田村の南少西にあり　高指山（タカザス）高千六百八十四尺三里村留原の南少西にあり　小峯嶺（コミネ）留原村の南にあり字芹澤より上る七町八間五日市町より八王子町に至る道路にして牛馬を通ずべし　大平山（オホダヒラ）高千七百四十六尺三里村高尾の東にあり壘址あり里傳云天正の頃北條氏の臣育木内記此に居るとし　丸尾山　高三百尺增戸村綱代の西南にあり　向山（ムカフ）高四百尺西秋留村引田の南にあり　日照山　高三百十尺西秋留村淵上の南にあり　二城山（ニジヤウ）高三百尺西秋留村上代繼の南少西にあり　となり本郡と南多摩郡を界し又豆佐嵐山より東して南多摩郡に入る者を今熊山（イマクマ）高二千三百六十三尺川口村上川口の西にあり　中山　高六百尺川口村川入の北にあり　淺間山　高五百尺上川口村の南にあり　となし高指山より分れ南多摩郡に入者を榛名山　高四百尺上川口村の東北にあり　大坂山　高四百五十尺川口村下川口の北にあり　大平山　高四百尺加住村戸吹の中部にあり　赤坂山　川口村犬目の北にあり頂に至る三町二十七間有梅往還となす　丸山　加住村北大澤の南にあり　糸原山（イトハラ）高三百尺加住村谷野の西南にあり　鴉山（ヒヨドリ）加住村左入の西南にあり小宮村西中野より上る六町十間日光街道となす　となし餘脈丘阜をなして日野村玉見岡に連る。

以上諸山三頭山の脈東に走り三國山醍醐嶺等となり甲相及南多摩郡を界して秋川の南に連亘する者なり。

高岩山　案下嶺

南多摩郡恩方村上恩方村の西にあり西は相摸津久井郡佐野川村に跨る高三千百三尺山脈低凹處を案下嶺又和田嶺と云字上案下より上る二十五町十四間嶺上に至り佐野川村に通ず甲州間道に係る山脈西北三頭山の餘脈連行山より來り二派に分れ北する者は灰燒平。醍醐嶺諸山となり西多摩郡を界し其支脈高丸嶺高千尺上恩方村の北にあり新城山高千百二十九尺上恩方村の東にあり山神峯高千九百五十四尺上恩方村の北にあり大日陰峯高千四百二十九尺恩方村小津の北にあり長尾曾根高二千八百五十二尺同上鹿子山高千九百七十九尺川口村山入の西南にあり臼井峯高九百尺山入村の南にあり等あり又東に一峯をなすを本宮嶺高二千八百十八尺と云本脈は東南陣場峯となす。

陣場峰　明王嶺

南多摩郡恩方村上恩方村の西南にあり西は相摸言野驛津久井郡南は同小原町與瀨驛に跨る高二千八百二十七尺山頂を明王嶺と云字上案下より上る二十一町四十九間頂に至り小原町に通ず山脈東南に趨く者萩之丸高二千四百八十三尺上恩方村の西南にあり堂所山同所となり小佛嶺に連り東する者は柳繩山高八百尺上恩方村の東南にあり二丸頭高二千二百九十二尺上恩方村の南にあり又柿木窪峯と云大ザレ峯高千九百三十二尺上恩方村の南にあり櫓峯高千八百二十四尺元八王子村の西にあり城山高千五百尺同上又瀧澤山と云となり恩方村上恩方村淺川村上長房村を界し漸く低下して二支に分れ東北は松子峯高四百尺元八王子村の東北にあり梶原峯同上由井山元八王子村川村の西北にあり又臺之峰と云となり東は駒木野山高四百尺上長房村の東北にあり御靈山高千四百二尺元八王子村の西南にあり月夜峯高百八十尺元八王子村の東南にあり字八幡宿より上る四町五十間又月見岡と稱す山頂より八王子城址小佛嶺高尾山等を望む北條氏照嘗て別業を此に置き月を賞す故に此名あり丘上大小數壕あり旗壕と稱す天正の役上杉氏前田氏の兵八王子城を圍む時兵を屯し旗を樹つと云十十里山高四百尺横山村下長房の西南にあり龍嶺高二百五十尺下長房村の西にあり船田山高三百尺下長房村の東北にあり となり小佛川に至て盡く。

小佛嶺

南多摩郡淺川村(上長房村)の西にあり相摸千木良村(津久井郡)を界す高五千三百尺(統計書)東麓より上る二十二町四十間嶺上に至る(千木良村字板橋より上る二十二町餘)舊甲州官道に係る近歲高尾山東に新路を開くを以て行旅稀にして荒蕪に屬す山頂を以て州界となし西望すれば富士山を掌上に攬る如し故に往昔富士關又富士嶺等の稱あり又僧行基錫を此に駐め大日佛小像を置き小佛山寶珠寺と號す小佛の名此に始まると云其最高處を景信山(一名高丸)と云山頂平地あり方十四五間元龜中北條氏照望遠臺を此に設け横地景信(將監)をして之を戍らしむ因て景信山と稱すと山脈東南を南嶺(高二千三百六十二尺上長房村の西にあり)と云其東北に見晴山(高千九百九十七尺淺川村上椚田に屬す)あり又東北高尾山(高二千三百尺上椚田村の西にあり山頂巨刹あり藥王院と云字坊谷(バウガヤド)より上る二十六町三十一間徑路曲折して松杉之を夾む。寺院の條參看すべし)南嶺の東南に連り大平山(高二千六百尺上椚田村の西にあり又案内嶺と云近歲甲州街道の新路を開鑿し頂に至る二十四町二十七間幅八間馬車を通すべし)ハイタギ頭(高八百八十三尺同上)金毘羅山(高千八百九十尺同上)高岩山(高千七百二十二尺同上)中澤山(高千六百九十七尺上椚田村の南にあり東脈津久井郡雄鶏籠山雌鶏籠山に連る)あり相摸津久井郡を界し東北に轉じて西谷峯(高千四百三十七尺上椚田村の南にあり)に至り二支に分れ東北は高丸山(高六百尺横山村下椚田の西にあり)古瀧山(横山村散田の西南にあり)となり東は大皷山(高六百尺横山村館村の西南にあり)陣峯(高三百尺横山村寺田の東にあり)となり七國嶺に連る

七國嶺

南多摩郡横山村(大船村)の東南にあり東は由井村(字津賀村)南は堺村(相原村)に跨る高三百尺東北に上る四町六間嶺上に達し由井村(小比企村)に通ず八王子町より相摸津久井郡に至る支道なり山脈北に連るを谷戸山(高二百尺小比企村)

の西南にあり亦津久井往還に係る と云又東脈御殿山高七百尺由木村鑓水の西北にあり又杉山嶺と云北に鑓水嶺あり又大塚臺と云共に八王子町より神奈川縣往還に係る北より上る八町二十六間嶺上に至る永祿十二年己巳十月武田晴信瀧山城の圍を解き此嶺を踰えて相摸に入と云 となり二支に分れ東北は稲荷山高四百五十尺七生村打越の中部にあり 経塚山の南 打越村 瀧澤山高六百尺七生村西長沼の西 となり岡阜蜿々として遙に延び愛宕山高百五十尺七生村高幡の西南にあり 八幡山高百五十尺七生村百草の西南にあり又松蓮寺山と云 に至て盡き鑓水嶺の東脈長慶山高三百五十尺由木村中山の西にあり 稲荷山と岩入川を隔て南北相峙ゆ 丸山高四百五十尺由木村上柚木の西にあり となり経塚山の東南に妙法山高三百五十尺上柚木の北 あり瀧澤山の東南に猿山高六百尺下柚木村の北にあり又嶺丸嶺又中丸嶺と云 あり而て七國嶺の東脈は蠶種峯高三百五十尺鑓水村の南にあり 相生山高二百五十尺鑓水村の東南にあり となり又二支に分れ東北は愛宕山高四百尺上柚木村の中央にあり 中丸山高五百尺下柚木村の南にあり 由木峯高四百五十尺由木村南大澤の北にあり 富士見臺高五百尺由木村松木の東南 に至て盡き東する者は瀧澤山高四百尺南大澤村の中央 山王平高六百尺忠生村上小山田の北 に至り再び三分して東北の一小支は富士塚松由木村堀内の東 三本松由木村大塚の東南となり霞關山高八十尺多摩村闕戸の中央 に至り大栗川に臨て盡き一支は大澤嶺高五百尺忠生村下小山田の中央 より東北は天臺山高五百尺鵜川村小野路の中央 鷹巣山多摩村乞船田の東南 船臺寺多摩村連光寺に屬す に至り東に回り丘阜起伏して小澤峯高二百尺稻城村矢野口の南 となり橘樹郡に入り東は白山高三百尺忠生村圖師の北 天神山高二百五十尺鵜川村大藏の西北 大入山高百五十尺鵜川村廣袴の西 住吉山高三百尺鵜川村熊谷の中央 となり都筑郡に入る山王平より東の一支は常盤山高五百五十尺上小山田村の南にあり 八幡臺高四百五十尺下小山田村の西南にあり 馬欠山高三百五十尺圖師村の西南にあり 横峯山高四百尺忠生村山崎の南にあり 丸山高二百五十尺町田村本町田の東北 暖澤山高四百尺鵜川村野津田の中央 道灌峯高三百尺大藏村の西南 雪山高三百尺鵜川村金井の南 となり都筑郡岡上村を過て復本郡に入り城山高五百尺鵜川村三輪の西 高土山高四百尺三輪村の南 に至り遂に都筑郡に入る此一帶岡脈を總稱して多摩横山と云。

以上諸山高岩山。小佛嶺等の脈東南に延亘して相摸を界し東に轉じて南多摩郡の南邊を經秋川の南に連る者なり。

都筑岡

都筑郡は南多摩郡諸山の餘脈延及して岡阜をなす高者六七百尺に過ぎず概して都筑岡と稱す其中に就き稍名ある者を擧ぐれば鷹巢山（高七百二十尺柿生村黑川の西にあり最高處を丸山と云）男犬塚山（高六百尺黑川村の東南にあり）平尾坂山（高四百尺柿生村栗木の東にあり）花木山（高六百尺柿生村古澤の東北隅）大久保山（高五百尺古澤村の西北隅）燈籠塲山（高六百二十尺柿生村五力田の南）入定塚山（高六百尺五力田村の北）不二塚山（高四百尺柿生村片平の西南）後谷山（高六百七十尺柿生村萬福寺の東北）鍋轉山（高六百二十尺柿生村上麻生の東北隅）六谷山（高六百尺上麻生村の中央）龜井山（高七百尺上麻生村の東南）となし南多摩橘樹二郡の間に介して東南に亘り又險山（高百七十尺山內村石川の西南にあり滿山躑躅樹あり花時爛熳頗る觀るべし）七面山（高二百五十尺都田村川和の東南にあり）伊勢山（高二百尺新治村本郷の中央にあり山頂神明社あり古松一株圍凡一丈六尺東西十四間南北十二間枝葉四面に蔭す）都見塚山（高二百五十尺二俣川村の西南にあり西南相模鎌倉郡名瀨村に屬す古へ山頂より鎌倉を望むを以て都見の名ありと）等あり。

秋葉山

橘樹郡生田村（細山村）の東にあり高四百五十尺山脈西北南多摩郡小澤峯より來り東北八幡山（高四百五十尺稻田村菅の西にあり）丸山（高四百尺菅村の南にあり）打越山（高四百五十尺生田村の西北にあり）に連なり多摩川の南に至て盡く。

橘樹郡諸山亦丘阜にして高四五百尺に過ぎず山岳と稱するに足らず今稍其丘脈連亘する者を揭叙す。

七國嶺

橘樹郡生田村（細山村）の中央にあり高五百尺山脈西北南多摩郡都筑郡より來り西南坂東山（高三百尺細山村の南にあり）夕木山（高三百尺生田村金程の南にあり）伊勢山（高六百尺生田村高石の北にあり）に連なり東南二本松山（高五百尺高石村の中央にあり南都筑郡鍋轉嶺に連る）飯室山（高四百尺生田村生田の東にあり或觀音山と云頂に古松あり觀音松又曲松（マガリ）と稱す支脈西に升形山稻目峯あり）高山（高二百八十尺向丘村平の北にあり）權現山（高五百尺向丘村長尾の中央にあり）日向山（高二百五十尺向丘村上作延の北にあり）に至る。

橘樹山

橘樹郡生田村（生田村）の西南にあり高五百尺二本松山の南に連り又南して鷲峯（高五百尺向丘村菅生の西北にあり）愛宕山（高四百五十尺菅生村の南にあり）となり二分して東北は香雲山（高三百尺平村の西にあり）となり東は鞍掛山（高二百五十尺宮前村土橋の西にあり枯松あり根株圍九尺許鞍掛松と云里傳云源頼朝之を過ぎ鞍を此樹に掛くと元祿四年辛未村圖エムザ松と記す）となり又二分して東北に至る者を伊勢山（高三百尺土橋村の中央）神戸山（高三百尺長尾村の南にあり）丸山（高二百五十尺宮前村馬絹の北にあり）となりて盡き東南に走る者杉山（高二百五十尺宮前村有馬の中央）高山（高三百五十尺馬絹村の西）白幡山（高三百尺馬絹村の中央）影取山（高二百尺有馬村の南）南山（高二百尺宮前村野川の西南）東山（高二百五十尺野川村の東北）丸山（高三百尺橘村久末の中央）四方峯（高百十一尺橘村盤谷の中央）となり都筑郡を界す四方峯の東南に孤立する者を加瀬山（高六十五尺住吉村北加瀬の南にあり又夢見崎と云里傳云太田資長營て城を此に築かむと欲す凶夢あり乃ち此を止て江戸城を築く故に此名ありと云。

宮山

橘樹郡生見尾村（生麥村）の西にあり高百四十四尺都筑郡の丘阜迤邐東南に延く率ね高七八十尺に過ぎず此に至り稍高隆をなし南して伊勢山（高百三十八尺生麥村の中央）瀧坂山（高百五十尺生麥村の西南）正嚴山（高百七十尺子安村の北にあり東南鏡より上る二町山上より眺覽すれば眼界豁然海山の勝多し）愛宕山（高百七十尺子安村の中央）大口山（高百二十尺子安村の西）浦島丘（高九十尺神奈川町の東にあり舊觀寺山又白幡峯と稱す）中丸山（高百二十尺神奈川町の西）栗田谷山（高百二十尺神奈川町の北にあり支脈飯綱山權現山あり）に至り海濱諸村の上に列す。

淺間山

久良岐郡屏風浦村（森村）の東北にあり高四百二十尺海岸に挺立し上に淺間神社あり山脈東北は磯子村根

岸村等に連り本牧岬に至り南は森中原村を劃して杉田村に至り牛背山（ウシノセ）高百四十六尺屏風浦村杉田の西にあり南を牛頭と稱し北を尾崎と云山狀臥牛に似るを以て此名あり山腹八幡神社あり山上より望めば東は海を隔て房總の群巒に對し山麓は梅樹數千株之を繞り花時に至り一帶の之に上れば估帆漁艇芬香糢糊の中に往來するを觀る牛頭山の上巨松あり神松と云大數圍之を望む蒼々蓋を張る如し丘阜海濱に屏列し日下大岡川諸村の界をなす牛背山の東南八幡山高八十尺金澤村富岡にあり野島山高百尺金澤村野島の東あり共に海中に突出す郡の西南に在る者を長野山高七百二十尺日下村峯の南にあり俗圓海山と云山上より富士箱根大山筑波日光淺間等諸山を望むべし故に十國見山又八州見の名あり と云山脈南北に亘り相摸鎌倉郡を界す。

久良岐郡亦丘陵起伏して四周を環る然れども登載するに足る者なし今其稍指名すべき者を掲ぐ。

本篇は河田氏の原本を、予が筆寫して原稿を作りしものにして、校正に於ても入念を加へし心組なれど、尙原文と相違の點あらば全く予の責任なり、但原文は假名全部を片假名を以て書きありしも、雜誌の體裁を一にする爲大部分を平假名に代へたり、尙數字の壹、貳、參、拾等に、代ふるに一、二、三、十等を以てし、又六號にて書く事となせし字の振假名は名詞下の（　）內に書く事となしたる等の變更あり、念の爲茲に附言す。

梅澤親光

雜錄

奥秩父の登山に關する注意

△登山には必ず案内者を伴ふ可きものである、これは動かすことの出來ない事實だ。然らば案内者を伴はない登山は必ず危險であるかといふに、一概にさうだと言ひ切るのも如何かと思ふ場合もある。若し其人が登山の際最も遭遇し易い霧や雨や暴風雨に襲はれた時、必ず艱らなければならない方法を心得て居り、地勢の大體を熟知し、且つ防寒防水糧食等の用意に於て缺くる所がなかつたならば、反て能く有る間に合せの案内者などよりは安心であると云ふて差支なからう。富士や御嶽に登つた位で既に登山の經驗を得たものと自信し、其等よりも山が低いからといふので、十や十五の握飯位を携へたまゝ、碌でもない地圖などを頼りにして、二千米突以上もある連嶺を縱走しやうと企つる人の如きは、全く向ふ不見の甚しいもので、論ず可き限りでない。

△少しも樣子を知らない山とか、又は初めて山に登る人とかならば、他より勸められる迄もなく誰しも案内者を伴ふて行くのが普通である。例へば南北日本アルプスの高峯へでも登らうとするには、案内者なしで出懸る人は先づあるまい。然しながら修行が積むに連れて、何時も案内者の後に跟いて歩いてゐる許りでも面白くない、偶には一人か二三人連れで二三泊の登山旅行をして見たいと思ふ者が、多くの人の中には有るに相違ない、現に自分などもさういふ側の一人である。之に對して左樣いふ考を起すのが既に所謂生兵法は大怪我の基であると或は非難される人があるかも知れないが、多少の危險性を帶ぶることは「飛躍」に伴ふ自然の結果であるから、先から先まで取越苦

◎雜　錄　奥秩父の登山に關する注意

勞をしてゐた日には、結局萬全を期する爲には山に登らないに限るといふやうな事になるであらう。兎に角案内者なしで手頃の山に登つて見たいと希望する人のあるのは事實だ、そこで自分はどうも我田に水を引くやうで恐縮するが、それには秩父の山々が最も適當してゐると思ふので、一つさう云ふ登山旅行をして見たいと思はれる方に秩父の山に登られむことを奬むると同時に、自分が實地に踏査した種々の事項を參考までに書き連ねる次第である。

△茲に所謂秩父山の範圍は東は雲取山から西は金峯山に至る甲信武甲の國境山脈の山々に限られてゐることを預め斷つて置きたい、そして登路其他の概況に就ては本誌九年二號に載せた「秩父の奥山」を是非とも參照されむことを希望するのである。其當時踏査しなかつた爲に誤つてゐる個所は本文に於て訂正を加へた。

△或る地點例へば一ノ瀨、栃本、梓山などを根據として日歸りに一山を上下する場合には不用であるが、二三泊の山稜縱走を試むる際には、次の事項を注意して頂きたい。

一、防寒具として毛布冬シャツ等。(之は時季に依りて相違あること勿論である、五月六月頃は思つたより暖かいが、九月十月頃は思ひの外に寒い樣である)。

一、著用の油紙と蓆蓙。(雨衣があれば尙ほ結構である。)

一、天幕。(山中所々に小屋があるから、必要でない場合もあるが、有る方が安心である。若し一人の時には九尺に四尺位の油紙一枚、二三人ならば二枚で代用することも出來る)。

一、米(豫定日數の用量よりも少し餘分に携へるがよい)兵士用の飯盒水筒及び少許の食鹽は、必ず各自に携帶すること。

一、マッチ、蠟燭、山鉈。(マッチは雜用のものの外、二三個を毛織物の袋に入れ、油紙にて包み、毛布の中に入れて置くと可い、蠟燭は燈火用よりも寧ろ火を焚き付くる際に便利である。山鉈の代りに少さき手斧にても差支ない、マッチ、蠟燭は各自必ず携帶のこと、鉈は二

三人ならば一挺で充分だ)。

一、味噌は必要なるも、其他の副食物は各自好みのものを嵩張らぬ程度に持參すればよい。

以上各自携帶す可きもの丶外、體力に應じて互に助け合ふことを忘れてはならぬ。

其他砂糖、菓子、ウイスキイ、即功紙、藥の類と數へ立てれば際限がないから、斯樣な物は自分で必要と思つたら持つて行くことにすればよからう。各自の荷物が三貫目を超過するやうであつたならば、旅行日程を短縮しなければならない。

一、雨や霧の爲に木が霑れてゐて、容易に火が起せない場合には、枯木を截ち割つて中央の部分を鰹節を削るやうに薄く削つて下積とし、其上に次第に荒削りの物を重ね、蠟燭に火を點じて其下に差し込めば、必ず燃え上るものである。火が盛になつたならば生木の枝を細いのから太いのと順々に積み重ね、最後に火持ちのよさうな大きな木を周圍より淺く重ね合せ、其上に葉の繁つた生木の枝を澤山蓋せて置けば、どんな大雨でも滅多に消えるものではない。生木は針葉樹よりも濶葉樹の方がよく燃える樣である。楢、山毛欅、岳樺などは殊に好い。

一、夜營若しくは水を覓むる爲に谷へ下る際には、必ず立木に鉈で印しを付けて行くこと、若し石の斜面であつたならば手頃の石を引き起して立て置くか、左もなければ石を積み重ねて置く可きである。斯うしておけば不意に霧が卷いても、迷はずに元の道へ出ることが出來る。

一、二三人連れの時、已むを得ず離れて或る仕事をしなければならぬ樣な際には、一人は必ず現在の地點に止まつてゐて、時々聲を懸けるか或は新聞賣りの鈴のやうな物を振り鳴らすことが必要である、そして一度で目的が果せなかつたならば、代り合つて努めるやうにするのが安全である。鈴を持つて行くことは秩父のやうに木立の深い山では大に有効である。殆んどないことではあるが、不意に熊などに遇ふ危險は充分に豫防することが出來る

し、其音が馬鹿に陽氣であるから陰欝な森の中にゐても氣が引立つて來るやうだ。

△先づこれ位な準備と心得があれば、秩父の山なら萬一の際にも心配することは斷じてないと信じてゐる。以下山で遭遇し易い霧や暴風雨に襲はれた時、又は不意の事變が起つた時の避難所と下山道とを記して參考に供して置く。

△甲信武甲の國境山脈には、東は雲取山から西は金峯山小川山に至るまで、國境の切明けが通つてゐることは、此山脈を縱走する塲合に非常に賴りとなつてゐる、切明けの中央に約三十間位の距離を置いて、査何號と書いて頭に釘を打つた三尺位の高さの杭が建てゝある、此杭を見失はない限りは安心なものだ。勿論或る部分では下生が茂つたり倒木が横はつたりして、殆んど切明けがあるかないか判然しない樣な所もあるが、注意して附近を搜索すれば、何處かに其續きを見出せるものである。標本の杭も今は完全に保存されてゐるものは少ないやうであるが、假令五丁八丁の間に夫が一本あつても、自分等は正しく國境を辿つてゐるといふ信念を抱かせるには充分である。

△測量部の三角點標石（花崗岩にて造られ、何等三角點なる文字は大署南側に刻されてゐる）のない峯で、農商務省又は御料局の標石若しくは標木の建てられてゐる峯もある、そして其處から別方面に通ずる切明けの通つてゐることも稀にはあるが、誤つて夫を辿ることがあつても、終には山道とか林道とかへ出られるやうになつてゐるから、別に危險ではないが、縱走の目的からいへば大に損をする譯である。

△雲取山と大洞山（飛龍山）との間で、何か起つたならば元と來た道を雲取若しくは大洞方面に引き返すのが安全である、夫も出來ない塲合には北の秩父側即ち大洞川の谷へ下りずに、南の甲州側即ち親川（後山川）の谷へ下るがよい、大洞谷は危險である。雲取から栂澤山の三角點（千九百四十九米突）までは主に草原又は笹原で、栂澤山から大洞までは木が繁つてゐる代りに切明けが判然してゐる、此附近は近くに水がないから夏などは水の用意が肝要である。大洞山の絶頂は三角點附

近は東南が開けて少し許り草原などもあるが、西北の方面は針葉樹の大森林である。三角點から二三十間木の間を西に行くと、尾根傳ひに丹波山村に下る道があることを忘れてはならぬ。

△大洞山から將監峠に至る間は、左右とも谷に下るのは危險だ、何處までも山稜を離れないで、大洞方面から上つた人は元の道を丹波山村へ、さもない人は將監峠の井戸澤の小屋へ泊るか又は三ノ瀨へ下る方がよい。然し大洞山の裏側の森林の中は、自由に歩けるので動もすると人の蹈んだ足跡を見失ひ易い、其上山稜も低い木が繁つてゐて、切明けの跡が明瞭でない所が多い、天候不穩と見たならば、鉈目を付けて歩いて置けば、萬一の場合進退の自由を失ふ氣遣はなくなる。龍バミ山（二千十一米突八）の頂上は西南の方面が開けて東北は薄暗い木立だ、此山から將監峠へは好い路がある。大洞方面から來た人でも僅に殘つてゐる切明けの跡を此山まで辿れるといふ見込みが少しの間山稜を辿つて見ての樣子で確められたならば、將監峠へ出るに增したことはない、其處には井戸澤の小屋がある、三ノ瀨へ下るにしても一里半しかない、夫に較べると大洞山から丹波山へ下るのは、三倍に近い勞力を要する譯である。

△牛王院山と笠取山との間は、三ノ瀨方面の澤へ下つても差支ないが、山稜は大木が多いので切明けが稍や判然してゐるから、夫を笠取峠（雁峠）なり將監峠なり近い方へ出て三ノ瀨へ下るがよからう。但し此連脈の殆んど中央に位してゐる唐松尾（二千百九米突）には直接に三ノ瀨から登る道があるから大に樂である。牛王院山は稍や尖つた岩峯で、附近に斯樣な相貌を呈してゐる山はない、其處から稍や東南（寧ろ南へ寄り過ぎても北へ寄り過ぎてはいけない）に向つて笹や木立の間をまつしぐらに下れば、三ノ瀨から三峯へ越える路へ必ずぶつかる、右すれば三ノ瀨、左すれば三峯へ行かれる。右して道なりに左すれば井戸澤に出る、三ノ瀨へ下るには左に折れずに右へ行くことが肝要だ。

唐松尾の頂上は稍や南北に長い、牛王院の方面から來ると知らずに北へ行く恐れがあるから、三

角點へ出たならばぐつと左へ曲る氣持ちで辿るがよい、笠取山の方面からならば反對に右へ行くことは言ふ迄もない、三ノ瀨からの登路は三角點の東即ち牛王院へ寄つた方の山稜の切明けへ出て十五六間乃至二十間位登つて三角點に達するのであるから、其積りで路を探して頂きたい。此山の頂上は木を切り拂つた跡に古生層の小岩片が狼藉して、刺の生へた木苺の多いのが特色である。

唐松尾の西の枝澤山は木が繁つてゐるが、其西の笠取山は草山である。南側の麓には路が笹原を縫ふて幾つか走つてゐる、どれを辿つても一ノ瀨又は高橋へ出られる。南側より一段低い西の笹原に雁峠の道がある、水も直ぐ南西の廣瀨側の窪に湧き出してゐる、道を北に取れば雁坂峠へ出られるが、大雨の折には葡萄澤が增水して渡れなくなるかも知れぬ、夫を無事に通過しても更に雁坂峠新道の豆燒澤を渡るのが危險だ、一ノ瀨方面が最も距離も近く（一里半）且つ安全である。

△雁峠（笠取峠）から雁坂峠に至る間は、袴腰山を除くの外は針葉樹の密林で切明けが判然してゐる、袴腰山は丈の高い茅原にボツ〳〵針葉樹が生えてゐるだけで、切明けの跡などは判然しないが、武州側の深林と茅原との境目を辿つてゐれば間違ふ心配はない、二千米突の獨立標高點（燕山の最高點）を北に下り切つた地點から二千百十二米突の三角點の北あたりまでを袴腰と呼んでゐる、地圖には袴腰の最高點に古禮山の名が記されてゐるが、之は誤りで其北の二千百六十米突の圖を有する山が古禮山である。薄氣味の惡い程木の茂つた山で、頂上に國境の大標木が立つてゐる。

△雁坂峠から以西は山の標高が急に加はつて來る。眞に奥秩父らしい山に登りたいと思へば、雁坂以東の山では少し物足らない感じがする。それだけ又困難も增して來る譯である。

△雁坂峠と甲武信岳との間は、秩父の入川谷の方面も又甲州の子酉川の方面も、谷は孰れも傾斜が急で瀧が多いから、夫に下り込むことは餘程の注意を要する、其上尾根は深い針葉濶葉の密林で、殊に熊笹も繁つてゐる、就中秩父側は入川谷の流れに近い林道に出る間際で懸崖をなしてゐる場所

も少なくない。此間は何處までも切明けを傳つて雁坂峠か甲武信岳かに出るのが、最も安全な途である。唯東破風と雁坂峠との間から發源する甲州側の中の澤だけは、さしたる困難も危險もなささうであるが、實査した譯ではないから、責任を以て保證することは躊躇する次第である。幸に此間は切り明けがよく通つてゐるのが心强い。唯破風山だけは注意を要する。雁坂峠の三角點を西に下つて東破風を半以上登るまでは、旨でも迷はないやうな立派な切明けがあるが、夫から上は岩が多なくつて石楠などが密生してゐるので、切明けの跡はよく分らないが、例の杭を手繰つて登れば迷ふこともあるまい。現に南日君と二人で此間を初めて縱走した際にも、二三間先は見えない程のひどい霧の日であつたが、甚しく間誤つくやうなことはなかつた。東西破風の棟渡りは同じく嶄巖と石楠とでなか〳〵歩き惡い、其間は十丁もあらうと思はれたが、實は其半分位であらう、三角點は西の破風にあつて、少し東寄りに岩に圍まれた窪がある。水さへ近間にあれば野營も出來ぬ事はないが、容易にそれを得られないのは是非もない。三角點から木賊山（梓山から甲武信岳へ案內して呉れた油井安十郎は之を雲切山と敎へた、甲州では之を鷄冠谷のせりと稱するさうである）に向つて下る斜面が霧か雨の日には最も迷ひ易い、南日君と自分も此下りでは可成苦しめられた。三方が同じ樣な斜面で、二百米突も下つてからでなければ尾根らしい形を成してゐない山では全く當惑してしまふ。自分の乏しい經驗だけでも二三度斯樣な目に遭遇してゐる。一度は南日君と二人切りで槍、立山間の縱走を試みた時、黑部五郎岳を上ノ岳方面に下る際、同じ處を二時間餘り降りたり登つたりした。去年は毛勝連峯の猫又山で同樣の目に遇つた。然し何時も國境の標木を手繰り出してどうやら難關を切り拔けたのである。此破風山の塲合でも大塊に碎けた花崗岩の上をひねこびた針葉の矮樹が一面に掩ふてはゐるが、落ち付いて探せば木の枝が折れてゐたり、岩の面が摩れてゐたり、時としては倒れた國境の標木もされてはゐるがそれと鑑定が出來るので、此處が切明けに相違ある

まいと判斷し得るだけの材料を供給して呉れる。秩父側殊に木賊谷に面した側は、毎年雪の最も多く積る所丈に、矮樹が草を敷いたやうに平になつてゐる爲に、兎角其方に足が向き易い。(若し反對に頂上を指して登る場合には、高い所高い所と目懸けて登りさへすれば必ず目的の所へ出る)下り切つて鞍部から木賊谷の方へ二十分も下ると水が湧き出して、少許の窪地もあり燃料は豐富であるから、工合の好い野營が出來る。甲州方面のヌク澤は小木が立ち籠めてゐる上に笹は深いし傾斜は急であるから、水のある所まで下るのは容易な業でない。此鞍部から木賊山の東峯(二千四百二十米突の圈を有する隆起)までは三時間近くを要する登りで、下生えが叢生してゐるものゝ、切明けの跡は判然してゐる。東峯から南に派出した尾根を下る道がある、之を何處までも辿つて行けば、子酉川の東澤に下るものであるが、河を徒渉しなければ廣瀨へは出られないから、大雨の折などは極めて危險である。木賊山の絶頂三角點(二千四百六十八米突)附近は、測量當時大分木を切り拂つたので眺望がきく。絶頂から左へ下り過ぎないやうに注意して、切明けを辿れば、甲武信岳までは迷ふ憂はない。

甲武信岳の頂上は稍や東南に延びた狹い山稜の隆起で、南の方には木立もあり石楠なども茂つてゐるが、高い北の端は岩塊が露出し、殊に西南釜澤の上流に面した側から國境の山稜にかけて、崩壞が甚しい。頂上三國の境には三尺程の高さに四角に石を積み重ねて上に花崗岩の標石が立てゝある、之が此頂上を認識する何よりの目標である。晴れた日ならば北正面に屹立した尨大なる三寶山の南側に曝露した花崗岩の大岩塊が目に入るであらう。(記載が少し前後するが、木賊山の方面から甲武信岳に登る途中にも岩骨の剝き出してゐる所がある、其處まで登れば頂上は間近だ、頂上の中央にも近頃新らしく埋めた花崗岩の標石がある)。

最高點の石壇の下から秩父側に向つて作られた林道は、三寶山股澤山の東腹を通つて十文字峠の道と合する。此頃股澤の金坑でボツ〳〵仕事をや

つてゐるさうであるから、十文字峠の頂上から其金鑛へ行く道が此林道を横斷してゐるかも知れぬ、若し十字に交叉してゐる場合には分り易いが、左もない時は右に路を分つ場合には左を取り、左から路が合する時は右を取れば、十文字峠の路に出られる。

頂上の石壇の處から眞北に向つて、落ち込むやうに下つて行く切明けの跡がある、之は十文字峠から三國峠に至る連脈を縱走する切明けで、三四丁も下ると大分怪しいものになつて、終には立枯れの木や倒木や密生した木立の間に失せてしまふ、霧でも懸れば勿論のこと、晴れてゐても展望がきかないから、甲武信三寶間は何方から何方へ登るにしても、細密の注意を要する。三寶山の北は非常な深林ではあるが、下生えがないので歩きよい、切明けも稍や判然して來る。

甲武信の頂上から北へ下りて切明けの失せたあたりから左斜に窪を下れば十五六丁（下り二十五分上り四十分）で、側師の小屋に達する、水も側にあるから野營には申分ない、甲武信附近では唯一の避難所である。小屋から梓山まで三里の間路が通じてゐる。

△甲武信岳から西の方富士見の南の峯（二千三百七十九米突）に至る間は、奥秩父の山脈縱走中最も困難なる場所で、一度通つた人でも霧でも懸れば餘程注意しないと間誤つかされる、それも信州側へ迷ひ込むのは更に危險もないが、甲州側の子酉川の上流へ迷ひ込んだら大變な事になる、此澤は別項に掲げた「笛吹川の上流」に記した通り、東澤の本流釜澤で最も危險な澤である。

甲武信岳から左はガレ右は若木の茂つた山稜を少し下ると倒木の多い所へ下り付いて、其處から一小峯を越えると又倒木の多い鞍部へ出る、夫からはミヅシと稱する峯の登りになるのだ、富士見方面から登つて頂上に出ると其儘眞直ぐに行き度くなるが、此路らしい路は釜澤の右股左股の間の尾根をどん〳〵下つて行くやうだ、何でも頂上へ出たなら左へ倒木の多い斜面を少し下れば、切明けの痕が發見される、東から登る際には前記の尾根へ迷ひ込む憂はないやうである。ミヅシから西

へ下つて鞍部へ出る迄は切明けがあるが、夫から二千三百七十九米突の峯へ登りに懸ると恐ろしく倒木の多い場所が二ヶ所ばかりあつて、頂上間近くなると二三間先は見えぬ位に若木が密生してゐるし、倒木が多いので困難なる上に迷ひ易い。殊に國師方面から來て頂上を右に下る際は綿密なる注意を要する、概言すると倒木の多いのは尾根が風當りの強い爲であるから、面倒でも其中を分るやうにして、切明けの痕を手繰り出すに限る、勞を厭つて迂回しやうとするから終にあらぬ方向へ紛れ込むやうになるのである。

△此峯から國師岳に至る間は、斷續的ながら兎も角も切明けの跡が判然してゐるから、夫さへ離れぬやうにすれば先づ安心である。

△甲武信國師間で下山の已むなきに至つた際には信州側に下るがよい。此方面ならば何處をどう下りても低い方へ下りさへすれば、終には梓川か千曲川の畔の道に出て梓山村に至ることが出來る。笛吹川の方面へは斷じて下つてはならぬ。

△國師岳の三角點から東へ三四丁下ると、一寸と小高い峯から左に切明けが通じてゐる、之が甲武信方面に至る國境の切り明けである。其處から更に五六丁下ると巨岩の屹立した所に出る、此處が大嶽山の奥ノ院で四五人は泊れる岩窟もあるさうだ。更に其路を下つて行けば京ノ澤の小屋に出て、蘆毛山脈を踰えて川浦へ出られるのである。

△國師岳から金峯山に至る間は、路が判然してゐる、此路を迷ふやうではとても案内なしで山登りをする資格は無い、それでも已むを得ず途中から下る場合には、矢張り信州側の谷を下るのが安全であらう。

△所謂國師岳の頂上一等三角點のある所は、岩などは少しもなく草ばかりであるから、之が高い山の頂かと疑ひたくなるが、事實はどこまでも事實だ。朝日岳の頂上は東と西に岩が露出してゐる、中央に小さな三角櫓があつたがもう切り倒されたかも知れぬ。

△金峯山から川端下村に下る地圖の路はどうも誤記であるらしい、實際の路は地圖上の道よりも谷一つ隔てた西南の尾根を途中まで下つてから、右

へ窪に付いて澤へ下り、川端下川の右股に沿ふて村に出るのである。

△奥秩父の山脈に就いて自分の知り得た注意すべき要點は畧ぼ如上の通りである、然し五月か十月頃天氣の固定した際ならば、之も畢竟老婆の繰言と同じであらう。終に山に登る際には自分等の現在の地點を地圖の上に確めつゝ登ることが肝要であることを注意して置きたい。(木暮)

(此文を書いてゐる時に、帝大學生の一行が破風山附近で遭難慘死したとの報に接した、眞に痛恨に堪へない次第である。尙ほ詳細の報知を得た後、其經路に就て研究して見たいと思ふ)

笛吹川の上流(東澤と西澤)

笛吹川は秩父街道最奥の部落である廣瀨附近から上流になると子酉川と呼ばれてゐる。廣瀨から稍や爪先上りの赤土道を、七八丁も行くと、原中に一本の大きな檜か何かの濶葉樹が生えてゐる側で路が二つに岐れる、右は雁坂峠へ出るもので、今は峠の澤の製板業が盛になつた爲に、板を運搬するトロッコの鐵路が通じてゐる。左に沿ふて下り氣味に辿つて行くと雁坂峠から發する峠の澤の下流(下股)を渡つて、河成段丘であるらしいバラ平なる原を通り拔けて、山の裾を横に搦みながら少し上り始めると濶葉樹林が繁り出して來る。深い深い子酉川の上流東澤西澤の大森林は、茲に漸く其端緒を開いて、晝も薄暗い青葉の奥から、怪奇と雄大とを極めた子酉川の水が聲を揚げて落ち來るのを左手の脚の下に瞰むやうになる。此處から眺めた鷄冠山は、半腹以下は樹林に埋められ、胸から上は岩骨を曝露して見るから凄い光景を呈してゐる。間もなく水のあるナレイ澤を瀑の上で横切ると路が二つに岐れる。左を取つて下ると子酉川の河原に出る。粗末な小屋が川に面して建てられてゐるが、路は茲に盡きてゐる、之は岩魚釣の小屋であるらしい。小屋から其儘四五丁許り河身を遡つても、水さへ深くない時ならば樂に西澤の合流點に達することが出來る。

此處で奥千丈山塊から東北に派出された所謂蘆毛山脈の突端と、木賊山の東峯から南に派出され

た尾根の突端とが、まるで袋の口を括つたやうに南北から迫り合つて、危く子酉川の上流を堰き止めてゐる。そして國師岳から東北に延びた甲信國境の山稜からも狹い急な尾根が正東に派出されて、子酉川の上流を南北の二大支流に分つのである。此尾根は石塔尾根と稱するもので、南は即ち西澤北は即ち東澤である。此處を二股と稱する。

前に記した路を左に下らずして右に山の鼻を登ると、暫くして急に一つの谷の底へ下り立つやうになる、絶壁であるから横木を大五寸釘や針金で止めた荒木の梯子が架けてある。此澤は破風山の西から發源するヌク澤である、水量は極めて少ないが谷の幅は三間位はあらう。二十間ばかり下で殆んど瀑布をなして子酉川に落ち込んでゐるから、水でも增せば徒渉は極めて危險である。谷に下りた處から二三間上手に向つて斜に河原を横切ると向ふ岸に登る路があるのだが、附近一帶にザラ〳〵した崩崖をなしてゐる爲に、注意して探さないと上り口が分り憎い。岸に上つて又山の鼻について笹や木立の中を分けて行くと、路は河身に下つてしまふ。此處は最早東澤の領で、西澤の合流點より二丁位上に當つてゐるらしい。

對岸の急斜面の下に少許の平地があつて、林莽の茂生したのが目に入る、其處を目懸けて川を右岸に渡ると、丁度其茂みの中央と思ふあたりに蹈まれた路の跡がある、之が石塔尾根に登つて行く路であつて、登り口は夫とも分らないやうに倒木が横はつたり、木苺が茂つたりしてゐるが、少し上ると濶葉樹の大森林の中に判然と路の形がつけられてゐる。何處までも辿つて行けば國師岳に登れるが、國境山脈と連絡するあたりは岩の瘦尾根で、餘り樂ではないさうである。

石塔尾根に登る路と別れて、鷄冠山の東を流れる鷄冠谷の合流點までは、路といふものはなく、三四回徒渉しながら河身を遡るのであるが、平水ならば更に危險の恐はない。合流點から二丁も遡ると絶壁に限られた深潭が現れるのを手始めに、幾多の瀑や淵や急湍が連續して、河床に沿ふて遡ることは全く不可能となつてしまふ。

東澤の溪谷の秘密を闡く路は鷄冠谷の右岸に始

まる。蹈みならした水際の岩の上を二三間上ると判然した路が左に折れて、山の鼻の上に出る、其儘四五丁も登つて休み場と言つた風の處へ來ると路が二つに岐れる。右の方を谷に沿ふて登つて行けば木賊山の東峯に達する。自分は曾て本誌九年二號の誌上に「秩父の奥山」を書いた時、木賊山の條で御料局の切明けが鷄冠谷とヌク澤とを分つ尾根の上を子酉川まで通つてゐるやうに書いたが、其後注意して探しても終に登り口を發見することが出來なかつた。然し確に道はあるさうである。又途中で遭つた岩魚釣の言に據ると、鷄冠谷の右岸の道を登つて行けば前記の如く木賊山に登れるさうであるから、尾根の道は或は途中から鷄冠谷に沿ふて下るやうになるのかも知れぬ。

も一つの左の方の路は鷄冠山の裾を廻つて、約百二三十米突の脚下に東澤の險流を下瞰しつゝ、孰れかといへば稍や下り氣味に行くのであるが、ちよいとした難所には針金などが渡してあるから少しも危險ではない。唯だ一個所鬚摩（ヒゲスリ）と稱する難所があつたのであるが、今は其處の上が崩れ落ちて、幅三四間高さ十數丈の直立の岩壁を露出して通行不可能となつた爲に、一度谷に下りて河を向ふ岸に渡り、再び此方の岸に戻つて路のある所まで登らなければならなくなつた。五萬分一金峯山圖幅に東澤の文字が記入してある其東の字の北に岩壁の符號のあるのが夫である。此處から二十分で道は開けた河原に出て全く其跡を絶つてしまふ。自分等は初めて東澤を遡行した時、鷄冠谷の合流點から二丁許進んで河身の通行が不可能になつた際、鷄冠山の側は非常な絶壁であらうと想像して、南側を横に搦んで大に困難して辛くも前記の開けた河原へ下つたのであつたが、其時は六時間あまりを要した、それが道を辿れば二時間で來られる、地圖の米突線が東の字の一分許西で一點の餘白を存してゐるのは、この稍や開けた河原を表記したものと想像されぬでもない。自分は假りに此處を廣河原と命名して置く。

東澤の最も險惡なる部分は、鷄冠谷から此河原に至る迄の約二十丁の間で盡きてゐる。夫から上流は兩岸の絶壁低きは四五丈高きは十數丈、殊に

鷄冠山の側には百丈もあらうと思はれる高さに屹立してゐる所もある。從つて兩岸から落ち込む谷は、皆吊懸け谷となつて、五丈十丈の瀑は至る所に見られる、斯うなれば横尾根から東澤へ下ることも、東澤から横尾根へ上ることも絶對に不可能であつて、此處まで來た以上は何處までも澤を遡つて甲信の國境山脈に登るか、元の路を引返すより外には、人界に出られる途はない。然し峽谷の美しさは此困難を償ふて餘りありといふてよい。

廣河原から蛇行曲折、幾回か右に左に徒渉して河床を遡ること三十分で、左手に細長い段丘狀の平が現れる、其處に粗末ながらも充分に雨を凌ぐことが出來る頑丈な小屋がある、この小屋は特にこの附近に限つて多く生育してゐた檜を伐り出す際に建てられたもので、鷄冠山下の路も畢竟其檜材を搬出する爲に造られたのであるさうな。小屋の周りには長さ六尺位の檜の厚板が、岩壁に建て懸けてあつたり、其處らに拋り出されたりしてゐるから、一見して小屋の所在を知ることが出來る。朝の五時半に鹽山停車場を出發すれば、十時半廣瀬、午後一時半鷄冠谷、三時半廣河原、四時には樂に此小屋に達せられる。小屋から一丁ばかり上手の前面に皺襞の錯綜した十餘丈の懸崖が左岸に屹立してゐる。之も小屋の位置を知る好目標であらう。

小屋から前と同じ樣にして河床を辿ること約一時間半の後に河が二分する、どちらが本流であるか判斷に苦しむが、恐らく右の方が本流ではあるまいか、これは釜澤と呼ばれてゐる。自分等は此澤を遡つて甲武信岳に登らうと企てたのであるが、合流點から一丁と行かない中に四五丈の瀧があつて、三方を岩壁に圍まれ、下は深い淵を成してゐるので、側へも寄り付くことが出來なかつた。小高い處へ登つて上流を見渡すと直ぐ其上にも同じ位の瀧があるらしく、泡立つ水が白く木の間に光つてゐるのが覗かれた。餘程險惡な谷であるらしい、之を探檢しやうとするには、當時準備が少し手薄だつたので、足を蹈み入れる氣になれなかつた。

左の谷を遡つて少し行くと又流れが二分する、

右は信州澤と呼ばれてゐる、此澤に沿ふて信州へ越えられるから岩魚釣や獵師などが其名で呼ぶやうになつたのであらう。左は無名の澤だと聞いた。自分等は便宜の爲に澤の源である尾根の名を冠して、之を石塔澤と呼ぶことにした。此澤に就ては何等の知る所がない。

信州澤は一連の大花崗岩から成つてゐる傾斜の急な河床を谷水が淺く深く穿鑿して、瀧となり瀨となり淵となつて樂しげに落ちて來る姿が如何にも美しい。人は魚の如く其水の中を登つて行くのであるが、清冷な水は岩面に些の汚泥をも留めてゐないので、何處を蹈んでも更に滑る憂がない。約一時間半も登ると右から一つの澤が來る。此附近には落葉松が多い。更に三十分も登ると今度は左から澤が落ち合つてゐる。五月中旬であると此邊からそろ〳〵雪が見られる。又三十分も登ると古生層らしい岩崖が一丈二三尺の瀑を懸けてゐる、此澤を通過してから左の尾根に取り付いて、石楠を押し分けながら三十分も登れば國境山脈の切明に出られる。大畧三時間の登りと見れば大差はない。

國境山脈から梓山へ出るには、梓川の谷を指して本立の中を好い加減に下つて行けば、二十分かそこらで梓川の岸に出る、其處には側師の通行する立派な路がある。自分等は國境山脈を三時半に出發して六時に梓山へ著いた。其時は可成急いだのであるが、三時間あれば不足はあるまい。

釜澤と信州澤との間の尾根にも路がある、登り口は少し分り憎いが、若し發見出來なかつたならば、釜澤の瀧の手前から危くない崖を攀ぢ登つて、左へ振れて行けば必ず路へ出られる。二時間で頂上の一角、更に二十五分の後には最高點二千二米突の絶頂、夫より下つて又登り、小隆起を三つ四つ上下して、左手に國境山脈が近く見える頃から左に山腹を搦んで谷らしい窪に出で、眞直ぐに一丁も登ると國境山脈の鞍部、丁度東股の頭（二千二百七十一米突の三角點ある峯）を東北に向つて下り切つた處に達する。更に其道を信州側に下つて行けば、梓川に沿ふた路と合して梓山に行かれる。小佐野君の所謂落葉松窪といふのは、此處であら

うと思はれる。

西澤に關しては故荻野音松君の「甲州國司嶽記行」（本誌二年二號所載）と題する文中に次のやうな記事がある。

「此の京ノ澤の下流里餘にして七ッ釜と稱する所あり、ヲトリ川淵となり瀧となるもの七個、附近温泉の湧出するものあり、不動岩と云ふものあり、頗る奇觀なりと云ふ。（中略）。而して又芹澤より所謂「アシゲ」山脈の東部を超え、難道數里にして、七ッ釜に至る事を得べく、七ッ釜不動岩は、畢竟芹澤不動の奥ノ院とも云ふべきものなりと云ふ。但し七ッ釜より此の京ノ澤小屋迄は、殆ど道なきものゝ如く、ヲトリ川に沿ふて來り得るや、否や、大嶽山神社の神職は來り得と云ひしも、余の導者は到底難しと云へり」。

自分等が石塔尾根を登る途中で過つた岩魚釣りも、西澤は東澤よりも惡い澤で到底遡行は出來ないと話した。岩魚釣りの如きも石塔尾根を登つて、所要の場所へ下りて魚を釣り、再び尾根を登つて前進するといふ風にしてゐるらしい。果して何の位まで惡い澤であるか、近い内に探つて見たいと思つてゐる。

自分が東澤西澤に就て知り得た知識は僅にこれだけで、誠に貧弱であるのは甚だ殘念である。若し會員諸君又は讀者諸君の中で、子酉川の上流に關する何等かの知識を有せらるゝ方は、是非本誌上に發表して頂きたい。

此東澤傳ひに梓山へ出る旅行は、鹽山を出發點としても全二日を要するに過ぎない道程であるが、少くとも四五時間は河床を辿らなければならない爲に、出水の恐ある時期には、能く天候を見定めてから決行しないと、文字通りに進退谷るの危險に遭遇しないとも限らぬ。五月から六月初旬若しくは十月中旬ならば、假令雨天が續いても急激に河の水を增すやうな事は先づ稀であるから、最も適當した時期であらう。五月の石楠花や新綠、十月の黃紅葉などが、この豪壯なる峽谷に更に美しい色彩を添える時に當つて、此處を旅行せられたならば、必ずや諸君の期待に負かないであらうと信じてゐる。（木暮）

秩父の印象

自分等の所謂秩父は、荒川、千曲川、笛吹川、玉川の水源をなせる、或る意味から云へば科學的でないかもしれないが、吾人の直覺的に感じた印象の上から云ふと、どうしても離して考へることの出來ない聯絡をもつてゐて、其根底を貫いて殆んど專制的に之を同一の類型に入れなければならない必然性をもつた山岳の類集である。吾人は或る地方を同一のカテゴリーの内に入れる場合は、いつも斯の如き專制的必然が先に立つて、之を後に分析して說明するまでゞある。自分は慥かに以上を綜合して秩父山脈と號するも差支なからうと思ふ。

自分は今迄見ただけの材料から云ふと、自分を惹き付けたのは秩父の深林と溪谷の美とである。秩父の深林は十文字峠や雁坂峠や將監峠でも窺ふことが出來るが、最も深いのは笛吹川の鷄冠山から釜澤へかけた東澤の御料林と、西澤に屬する西澤御料林と、眞ノ澤の深林だらうと思ふ。しかし部分的には雁坂峠から栃本へ行く途中にも、大洞谷にも、金峯山の信州方面にも偉大な栂の深林がある。試みに十文字峠を白妙岩まで上つて、紛糾せる幾多の荒川水源の雄大なる規模を見、約五千尺を境としてそれより上は黑い針葉樹、それより下は今にも燃え出しさうな綠の濶葉樹を見、之が大洞連山から甲武信岳まで連續して居るのを知つて、秩父の深林の如何に範圍が廣く、如何に莊重典雅の風趣を極めてゐるのを見たらよからう。恐らくは吾人の所謂秩父の深林を天目山あたりからかぞへて、白岩、雲取を經、雁坂、破風、甲武信、國師、金峯までとし更に甲武信岳から三寶、十文字まで、又ワナグラ山、雁坂峠、鷄冠山、奥仙丈から西澤御料林までの範圍を考へたら、恐らくは長さ約二十二三里以上幅約四里位はあるだらう。そして此等は栂を重に計算に入れたもので、濶葉樹を入れると四里の幅は更に二里を增して六里以上の幅員を形ちづくることになる。そして見ると自分等の考へて居る秩父の大深林は、長さ約二十二三里幅六里に垂んとしてゐる。

此大深林の滴りが集まつて一方は千曲川を形作り、一方は笛吹川と玉川とを形作り、武藏方面は荒川となつて流れて居る。千曲川を形作る重な流れは、甲武信から出る主流と三寶、十文字峠から生ずる流れとが集まつて梓山の戰場ヶ原を經て梓山で國師岳から來る梓川と合し、更に秋山の下で、國師岳、朝日岳及び金峯方面から生ずる川端下川と合する。千曲川の本流は金峯から生ずるか、甲武信岳から生ずるか、それとも國師岳から生ずるかは一寸決しにくい問題だらうと思ふ。そして此等三つの溪谷は三つとも頗ぶる似寄りの特長をもつてゐる。第一に三つの溪谷とも村に近く約一里許りの平原をもつてゐることゝ、も一つは殆んど等しい林相の美をもつてゐることである。(自分は便宜上梓山と云ふ名稱の內に、此等の三つの平原と、此等三つの溪谷を包含せしめて居る) 栂の深林と溪谷の美とは、梓山の美をなせるものであるが、梓山の美の特に强く吾人を印象するものは、落葉松と白樺との美と、其附近一帶の色彩の美とである。つまり梓山は落葉松と白樺との村である

が、亦色彩の村である。試みに疑ふものは十月の半ば頃、荒川の紅葉を賞しながら十文字峠を降つて足一たび梓山にはいつた後の色彩に目を開き、或は金峯を越えて千曲河畔に出た時如何に異樣の色彩が今更新らしく一層有意義に吾人の眼に映ずるかを見ればよい。荒川の紅葉金峯の染色は、優に天下一流と云ふことが出來やう、しかし梓山の紅葉は人生最後の悲劇の象徵である、切迫詰つた最後の感情を吐露したものである。

去かし梓山は當年の梓山ではない。川端下の濶葉樹は大部は切り取られ、梓山の戰場ヶ原の落葉松は、全部切り盡されて仕舞つた。しかし殘れる林、村のあちらこちらに散在せる木立、國師から來る梓川のほとりの白樺落葉松、十文字峠から三國山に連なる嶺の木々が、十月の紅ゐの色に染まる時分の千曲川の溪流が、どの位意義ある色彩に世の人に知らるゝことなく、其最後の感情を表現しつゝあるかを見ることは興味あることである。冬の梓山の荒凉たる有樣は、深刻なる自然の表示に充ちてゐるが、五月の梓山はどうして見過ごす

ことは出來やう。自分を惱殺したのは十月の梓山と五月の梓山とであつた。梓山の新綠こそ眞に生命あるものを表現する形像の極致とも云ふべきであらう。こゝで見らるゝすべての感じは、音樂の量も緊張せるそれである。さながら吾人の生命の最も深い情緒を捉へるには、非常な經驗を要する如く、最も深い千曲川の奧に誰にも認めらるゝことなく、只自然に對する激しい經驗を有する人にのみ味はるゝやう綠りに紅なゐに染まるやう命ぜられたのは、此村の色彩であらう。

荒川の方面は秩父の內最も複雜な部分をなして居る。荒川の本流入川谷を始め、外に瀧川谷、大洞川、大血川、中津川を考へて見ると、此秩父山塊の如何に雄大に、其範圍の廣いかゞ了解される。此荒川の雄大な姿を窺ふことの出來るのは十文字峠であつて、栃本から約二里にある白妙岩の上に立てば、荒川の殆んど全容が一眸の下に集まつて、黑く見ゆる栂の深林、靑く見ゆる濶葉樹の森林が、荒川の水源に沿ふて帶のやうに殆んど十里の間をうねつて居るのがわかる。そして此峠を信州方面へ進むに從つて、峠それ自身が栂の深林に蔽はれ、峠の間から時々右の方面に深い深い中津川の溪谷を窺ふことが出來る。荒川の溪谷の雄大、中津川の溪谷の深みは左右にあらはれて、峠自身の幽邃と七里の間人跡を見ることの出來ぬ深味とは、ほかには求めることが出來ない特長である。時々淺間山、八ヶ嶽、北アルプスは木の間から隱見して、平らに通つて居る自分の足場の高いのに驚く。恐らくは峠道のこんなに綺麗な、掃き淸めたやうな、そして山つゝじの大きい木が所々に咲きひろがり、石楠の紅ゐが其美はしさを誇れる、丸で庭先を行くやうな峠道はどこにかあるだらうか。試みに十月の下旬を想像して、あの深い中津川の溪谷、あの深いそして雄大な荒川の溪谷の約五千尺を限りとして其下全部を占めて居る濶葉樹が、すつかり燃ゆるやうに紅葉して荒川の流れが全部血に染まる頃を考へたらば、どうして秩父の紅葉が最も誇るべきものゝ一つであることを叫ばずに居られやう。荒川の紅葉は量を以て優り、梓山の紅葉は質を以て優ると云つたらよからうと思ふ。

春五月の終りから六月へかけて、秩父へ行つた人は、時鳥の多いのに驚く。梓山では日中時鳥の音が絶えず聞えて來る。春十文字峠を越える人は、必らず栂の深林の彼方に雉子の鳴く聲や、咽ぶやうな鳩の聲や、梟の聲をきくに相違ない。そして梓山の戰場ヶ原へはいると直ぐ郭公の聲が頻りに鳴いて居るのに氣が付くだらう。そして此聲をきく時には每も悲しいやうな嬉しいやうな全く自分といふものゝ神秘を感ずるやうな氣がする。此聲をきいた時は、今迄の空想の內に更に深い或物を浮べ、そして現實を追ふ心には更に深く或物に徹することを要求する。靜肅なる秩父の空に漂へる音樂は、斯の如き悲哀の音樂である。

笛吹川方面から見た秩父は最も物凄いものである。そして最も壯麗な溪谷の美を形作つて居る。笛吹川は二つに分れて東澤西澤となり其水量が伯仲し、何れも峭壁や釜が多くて登ることが不可能であるが、東澤には細い道が鷄冠山の側にあるので登ることが出來る。しかし道から見た東澤は、河原をのぼり岸を絡んだ時感ずるよりも遙かに凄味を減ずる。斯の如き凄味を有する溪谷が、亦最も偉大なる深林を有することは特に面白いところである。特に偉大なる森林は東澤の上流釜澤のそれであらうと思はれる。西澤を遡つて國師嶽を攀ぢ、それから荒川を降ることが出來たら痛快であらうけれども、西澤を遡ぼることは昔から全然不可能とせられて居る。奧仙丈山塊を中心として澤山の溪流が派出せられて居るのを見ると、それに屬する深林の豐富なることが窺ひ知られる。

荒川、笛吹川、千曲川、を去つて玉川の溪谷にうつると、どの點から言つても感じが二流に落つるのは是非もない。試みに大洞山に立つて、荒川に向ふ大洞溪谷の物凄い暗みを見て、玉川に向ふ親川溪谷を見ると全く別個の感じがある。又龍バミ山、牛王院山、唐松尾等の頂上から見ても、荒川に向つた方面の鬱蒼とした深林に引き換へ、玉川方面に向ふ側は如何にも潤ほひがなく、溪谷が露出して、三ノ瀨あたりで見た玉川の茅の間を走る樣子は如何にも貧弱であると云はなければならない。玉川の溪谷の美は、落合と丹波山との間であ

つて、それから柳澤峠に來つて全く空疎な感じを與へる。大血川に至つては更に貧弱であつて、炭燒が盛んに行はれて居るだけ、それだけ今後貧弱な度を增すことだらう。

純秩父郡に屬する最高峯は三峯山の後ろに荒川と大洞川との間に立ちはだかつて居る俗稱ワナグラ山地圖にある所謂白石山で、海拔二千三十六米突に達する。今迄武甲山が最も高いやうに考へられて居たのが、こゝへ移つて來たのであるから、今迄雲取や大洞が秩父の中心のやうに考へられてゐたのが、甲武信、三寶、木賊、國師と云ふ方面へ移動して來るのも無理のないことである。若し自分等の考へるやうに金峯、朝日、國師、奥千丈と云ふものを廣い意味で秩父と云ふ感じの中へ入れないとしても、三寶、甲武信、木賊の三山は八千尺以上の高峯であり、其他二千米突以上の高峯を擧ぐれば優に其數二十に達せんとして居る。其同樣の高度を有する山岳を多く有する點に於て、秩父山塊は慥かに南北アルプスに次ぐものであると斷言しても差支なからうと想ふ。そして偉大なる深林を有する點に於て、人跡無き廣大なる範圍を有する點に於て、複雜なる支脈を多く有する點に於て、それは慥かに大山脈たる資格がある。しかし秩父の眞に誇るに足るべき特點は、今迄繰り返して云つたやうに、山容其物にあるのでなくて、深林と溪谷の美にあるのであることを忘れてはならない。

秩父には約二千米突の三つの誇るべき峠をもつて居る、一は十文字峠、一は雁坂峠他は將監峠である。此等の三つは最も秩父的であると云ふ點で一致して居る。其内最も渾然として深山らしい面影をもつてゐるのは十文字峠であつて、雁坂峠は武州側は太古の面影をもつて居るが、甲州側はひどく荒れて居る。將監峠も甲州方面は荒れて居る點は同じであるが、井戸澤附近の高原狀は他の峠には見られない特長であらう。

秩父の大體の印象は以上で終る。此他細かく述べることになれば云ふべきことが澤山ある。秋川の水源をなせる山々や、大菩薩連嶺や、雲取山から續いて仙元峠に至るまでの山々や中津川の奥等

のことは一向述べなかつた。それは自分には述べるだけの材料に乏しいからである。

世の中にはアルプスの崢嶸たる姿や、かの斑々たる殘雪が無ければ登山をする甲斐が無いやうに思ふ人がある。斯の如き人には、秩父山脈は慥かに登るだけの價値がないかも知れない。自分も亦アルプスの雄姿、其美はしい殘雪を憧憬れる程度に於て如何なる人にも劣らない。しかし自分は昔ながらの深林、昔ながらの溪谷を好愛する迄に於ても等しく誰にも劣らないことを信ずる。アルプス式（少なくも北アルプス）の美は、包容的傳說的美を缺いて居ると共に、そこに人生の温か味を暗示するものに乏しい。そして秩父山中に一夜を明かす心地は、異つた意味に於て、アルプス山中に寢た時の感じに讓らない特長をもつて居る。

深林の美は、其の深い情緒の包括と其威儀、調整とに存する。若し斯の如き者に美を感ずることの出來ない人は、慥かに、アルプス式の山容に對しても感性の基礎を缺く人でなければならない。慥かに斯の如き人は、一種の冒險的遊戯其事にしか感興を見出すことの出來ない人であるに相違ない。若し高瀨川の溪谷に新綠と紅葉と其流れそれ自身の美を感じ、黑部川と東澤との合流點の立つて其深林の美に打たれ、早月川の溪谷の片麻岩の美に打たれ、梓川の溪流の美はしさを河童橋に立つて俯して見た人は、等しく笛吹川の清らかな流れ、豪壯な其巖、深い深い針葉樹と濶葉樹との綠りと紅なるとの染色を好愛するに相違ない。千曲川の纖雅、荒川の紛糾は等しく彼等の眼を奪ふに相違なからう。

先づ秩父山脈に入る人は、玉川を溯ぼつて鴨澤より雲取にのぼり、それより秩父の中心に向つて展望の眼を投じて三峯に出づるを以て初めとし、栃本から十文字峠を越えて荒川に俯し、それより梓山に出で更に川端下より金峯に攀ぢ黑平に出づるは其次に屬する、笛吹川から釜澤、金峯から甲武信岳まで或は更に雁坂峠まで等は、最も注意を要する秩父登山の第三期に屬すると云つてよからう。しかし釜澤、西澤、石塔澤の三つは未だ人跡未踏の地である。誰がよく其神秘を開くべき最初

の人でありうるだらうか。(南日)

秩父旅行の思ひ出

今から九年前木暮君と二人で十一月高尾山へ小佛峠から迂回して登つたことがある。其時甲州と武藏の國境を限る嶺の茅が、黃色くうね〳〵して連なつて居るのが氣になつて、あれを行けるだけ行つて見ればどうだらう、若葉のある時分にあれを傳ひ、あれの上に寢たらどうだらうと云ふ考が浮んだ。そして之が空想となつて止まらなかつた。翌年五月の半ば頃毛布一枚にメリヤスのシャツ一枚に米一升と小さい鍋とをもつて、飯田町發一番の汽車で出掛けた。淺川驛で降りて小佛峠路を登つて先づ景信山にのぼり、山傳ひに陣馬ケ峯に至り、和田峠で晝飯を喰ひ、それから三國山に登り、三國山の向ふの武藏へ向つた方面の大きな木の下で初めて野宿をした。之が自分に取つての初めての野宿であつたのである。今から見れば之は隨分亂暴な野宿で、御飯をたく爲めに二三丁も林を分けて水のある處へ下るのであつて、且つ燃料が豐富でなく、慣れない爲か殆んど寢るわけには行かなかつた。其時初めて時鳥の鳴くのを聞いた。そして曉の四時には澤山の名も知れない鳥が總鳴するものであることを知つた。

次の日少し進むと山頂に近い處に水が流れて居る處を發見して、昨日此處で泊ればよかつたにと少なからず惜しかつた。しかし此日は空模樣が怪しく、丁度正午時に三頭山にのぼりかけた時ひどく降り出して來たので早く之を越さうと云ふわけで、道も無いところを無暗に登つて行つた。一嶺を登り切つた時に雲が開いて、自分等の目の前には幾千仞とも知れぬ深い谷が見えたと思ふ間もなく雲が蔽ふて仕舞つた。どこが頂上なのか玉川の岸へはどうして達せられるか一向分らないので、三頭山を斷念して左の方甲州の鄕原村に下つた時は、すつかり飢ゑ且つ渴して、足が前へ出ない位であつた。村の人は自分等をどう思つたのか、誰も飯の仕度をして呉れるものがなく、村の小さな宿屋も養蠶で忙しいと云つて晝食をこしらへて呉

れない許りか、圍爐裡も貸して呉れない。やつとのことで親切なお婆さんの好意によつて、飢ゑた腹へ飯を入れることが出來た。此の時は雨がジャージャー降つて、いつはれるとも分らず、只どうにかして川野まで行きたいと云ふ願さへ果さるればよいと思つた、今でも忘れぬが此邊はどこにも溪聲がして、水の綺麗なところだつたやうに思ふ。こゝから小河内の川野まで五里と云ふことを聞いて少しうんざりしたが、玉川の上流に沿ふて下ると云ふことが聊さか元氣を鼓舞するところがあつたやうに想ふ。二つばかり小さな峠を越えて、道は小菅川に沿ふて下つた。自分の頭に殘つてゐる其景色は何と美はしいものだらう。河の眞中に突立つて居る岩には、處々に美はしいつゝじが咲いて、河の兩岸の綠りの潤ほひの多いことは、多摩川の本流にも優つて居たやうに思ふ。そして岸にはあまり人家が無かつたやうに思ふ。

川野へ着いて唯一の宿屋と云はれて居る軍兵衛さん方に泊めて貰つて、其夜雨の中から時々溪聲をもるゝ水車の軋る音と時鳥とをきいた時の溪谷の幽かしい感情は、今も忘るゝことが出來ない。

翌朝木暮君が起すので目を覺すと空はすつかり霽れてゐる。宿屋の主人に雲取山の道を問へば、片道四里で往復容易であると云ふことなので、携帶品をすつかり預けて七時前に雲取目がけて行つた。鴨澤村から小袖川に沿ふて七ッ石にのぼり、それから雲取山へ行かうとすると、澤山同じ位の山が多いので、どれが雲取山か分らなくて、地圖や磁石を出してやつと雲取山を確かめてそれに登つた。其時から鷹巢山や大洞山を覺えるやうになつた。そして大洞山の丹波山に向つた溪谷の大きいことを忘るゝことが出來なくなつた。今迄耳にして居た日原川も、玉川の一部も荒川の一部も、悉く自分の周圍から出るのだと云ふことを知つて無上に喜んだ。しかし自分の最も嬉しかつたのは、雁坂から甲武信方面へかけての光景であつた。今迄秩父と云へば精々日原方面から雲取山までをしか考へなかつた自分は、五月の下旬尙ほ殘雪斑々として遙か向ふに自分よりはずつと高く聳えて居る山々を見て、秩父の範圍は非常に擴張されたの

を見て嬉しくて堪らなかつた。しかし雲取から展望した自分は、未だ秩父の深林、秩父の溪谷と云ふものを知らなかつたと云つてよい。又大洞山と雁坂峠との間は非常に低く、恐らくは一千米突を越ゆることは疑問であるとまで思つた。

其年（明治四十二年）十月甲武信岳へ登らうと云ふので木暮君と二人で何でも十四日の夜の九時に波久禮について、それから荒川の岸に沿ふて歩いた。夜の二時と云ふに大宮の町を通つた。夜の大宮は何と云ふロマンチックな光景に映じたことだらう。荒川橋で夜があけて、三峯神社に到着したのは午前十時頃だつた。そこで晝の御飯を喰べて、大洞川を渡つて栃本へついたのは三時頃だつたやうに思ふ。其晩の寒かつたこと！前夜は殆んど寢られなかつたにもかゝはらず、殆んど一睡もむさぼることは出來なかつた。

翌日十文字峠を登るにつれ、紅葉の美はしさよりも、自分を打つたのは、荒川の溪谷の雄大なこと、深林の立派なこと、雲取山で考へて居たよりは遙かに秩父と云ふ感じの深いと云ふことであつた。そして最も驚いたのは梓山の戰場ヶ原の紅葉の美と落葉松と白樺との配合のそれであつた。甲武信岳に登らうと云ふ欲望の達せられた喜びよりも、甲武信岳を中心とする深林の美と梓山の色彩の意味の深いのに對する喜びは遙かに大であつた。

其次の日に川端下をを通つて、金峯から來る千曲川の支流を溯つて、金峯山によぢ、それから黑平に出で、其翌日東京へ歸つた。等しく驚いたのは、川端下の紅葉と金峯の信州方面の梅の美はしい深林とであつた。

斯の如くして信州南佐久の千曲川水源の色彩と林相の美は、忘るゝことの出來ない印刻を自分の心の上に施こして仕舞つた。（本誌六年一號參照）

次に四十四年六月木暮君と二人で、三頭山から大嶽山までの間を是非通つて見やうと云ふ議が起つた。八王子で降りたのは何でも午後で、それから五日市まで歩いた。夕べの空に高原の一角を限つてゐた其時の三頭山の雄威な姿を今も忘るゝわけには行かない。五日市に着いたのは夜の九時頃

で暗の間に白く光る秋川の流れは、暗の故に一層美はしく見えた。五日市でうどんを喰つて出掛て、時坂峠の頂上で夜を明すことにした。何にしろ寢具の用意がなく、着茵蓆の無いために背中が痛く、夜中時鳥の聲をきゝながら明かした。數馬の村で糧食の用意をして、三頭の麓へと道をきいて行つたが、登口が分らない。近所の炭燒男に案內をして貰つて登ると、豫想して居たよりは道が辛い。前夜の不眠の爲めか隨分辛い登りをした。頂上には毀れた神社があつた古びた鰐口（此鰐口は徑三寸餘、明和二酉年源次郎の銘があつて、古色蒼然垂涎三尺であつたが、惜しい哉少しひゞがあつたので、其儘にして來た。木暮）が奉納してあつた。樹木の間から大洞山（飛龍山）や雲取山が立派に峙立つて居るのが見えた。山は豐富な深林に取卷かれ、案內者の說によれば南秋川に向つてゐる方面には數十丈の瀧があると云ふ。それから山傳ひに小河內へ越す峠へ出て、案內者と別れ御前山の方へ行かうとすると、雨が盛んに降り出して、避難所を求めたがどこにも見付からない。加ふるに雜木が多くて到底縱走と云ふことのつまらないことを知つて、到頭斷念して小河內へ降つて仕舞つた。

四十五年の春三月の終り中村君と二人で秩父の大洞山を究めやうと云ふ考で出掛けた。先づ日向和田で降りて小河內の鑛泉で泊つた。其晩偶然のことで大洞山が飛龍山と甲州方面で稱せられて居ることや、龍バミ山、唐松尾等の二千米突以上の高峯が丹波山の附近にあることを初めてきいて、自分等の計畫が段々大きくなるに至つた。其次の晩は丹波山の野村方に泊つて色々の山の話をきくと大菩薩へは丹波山から直接行く道があること、飛龍山へは往復一日で樂なること、其麓の親川谷には鑛泉があつてそこには山女が無數に捕れること等の話をきいた。次の日雲の中を通つて飛龍山に登つた、雲の間からきいた此地特有のメンドロロンの鳴く音雲の間に巨人のやうに見ゆる栂の太い幹、石楠橫手と稱する處の美はしさ等は、いつも忘るることの出來ないものである。

翌朝降雪が少しあつたにもかゝはらず、霽れさ

うになつて來たので、一人の案内者を傭ふて大菩薩に出掛けた。舊道の立木にかゝる雪を賞しながら、峠の頂上についたのは十一時頃であつたらう。そこで晝飯を喰つてから柳澤峠へ行く道をきいて案内者を返して仕舞つた。それが今から思へば何と輕卒なことであつたらう。妙見山を越え大菩薩の頂上に達すると、南アルプスから秩父の連山に至るまで悉く皚々たる雪を帶びて立つてゐる。しばらくは自分等は此壯觀に見とれて立つて居た。中村君は堪らなくなつてスケッチをやりはじめる。其時の頂上は積雪四尺位、吹く風の冷たさは全く切るやうであつた。中村君がスケッチを終つてから嶺に沿ふて行くと、續いて居るべき嶺が急に低くなつて居る。此の時二人は元來た道を戻つて柳澤峠へ續く嶺を探らずに、一も二もなく谷へ降りることにして仕舞つた。之が抑々の間違ひであつたが、何うして斯うなつたか今から考へて見ると全く分らぬほどに、申し合はせたやうに谷へ降りかけたのである。しかし雪が深かつた。一足踏む毎に腰まで埋もれた。自分等は急峻なタルを下りつゝあつたのである。こんなに苦しい思ひをしたことは餘りなかつた。しかし再び登ることは絶對に不可能なので、みす〳〵死の谷に降りつゝあつた。谷へ降りきつて少し上ると二三の破れた炭燒小屋がある。その下の方から出て居る溪流は大黑茂谷と云ふのであつて、二人は之を下ることに決した。雪は依然として深い。一足踏む毎に股まではいるので、之を拔くにも疲れる。もう日が暮れつゝある。風が切るやうである。自分は幾度も冷たい氷のやうな寒い流れが、脊髓の兩側を通つて行くやうな氣がした。自分は嘗て凍死を惹起す條件を聞いた。そしてそれは糧食の無いと云ふことと、火が無いと云ふことであつた。自分等は全く其條件に適つて居た、そして密かに自分は心を惱した。進むにつれて溪流は幾多の小さな瀑布を作つて居て、之を迂回するのに一通りならず骨が折れる。月が空に冴えてゐる。丁度九時頃だつたらう。前方には可成り大きな瀑がある。自分は之を下らうとすると、中村君は頻りに危ないから此の邊で避難所を求めて野營しやうと云ふ。丁度こし

らへたやうに瀑の手前四五間位の右岸に大きな洞穴があつて、二三人は充分にはいられさうである。二人はそこへもぐり込んで毛布にくるまる。しかし腰から下は凍つて棒のやうになつて居る。足袋を脱いで新しいのをはいたが、腰から膝へかけてしびれるやうに冷たい。寢ると危ないからなるべく目を覺して居やうと云つたが、疲れの爲めうとうとする。

明くれば四月一日、上天氣である。洞穴の天上には一面に氷柱が立つてゐるのを二三本喰つて出掛ける。自分は先に瀑の片側に倒れてゐる枯木に馬乘りになつて後じざりに下りる。しかし道とてはなく、流れを渡るか雪を踏むかの外はない。腹がすいて居る。自分は舌が思ふ樣に廻らないのを時々氣がついた。雪が未だ深い、流れが可成り深い。十時頃だつたと思ふ。自分はどうにも腹がへつて堪らない、仕方がない毛布でも喰べやうかと云へば、中村君は練齒磨をナイフの先につけて呉れる、自分はそれを甘いと思つてすつかり喰べる。暫らくすると中村君は道だ！と叫ぶ。もう其時は自分はすつかり參つて居て中村君の顏も見えない。自分は目の前にある大きな枯木を跨ぐ元氣さい無くして居た。自分は之を跨ぐや否や倒れて仕舞つた。

自分は何でも朧ろに人聲を聞いて何だか飲ませられて居たのを覺えて居る。それから自分は人の背に乘つて、前後には澤山の人がつき添ふて居るのを見た。そして胸が頻りといたむのを感じた。其あとはよく覺えがない。しばらくすると自分は炬燵へはいつて非常にいゝ氣持になる。女の人が粥をすゝめる、しかしどうも喉を通らない。澤山の人が頻りと藤つるで籠をこしらへて居る。自分には其故が分らない。中村君にどうするのだと問へば君を乘せるのだと云ふ。自分は未だ歩けなくなつて居ることを知らなかつた。獨りで歩けないことも無さゝうなものと立上がらうとすれど、何うしても立つことが出來ない。人々に吊られて籠の中へはいる。籠の中へはいると又々ねむる。丹波山へついて野村方へはいると、村では凍死者があつたと云ふので大變の騷ぎであつた。自分は此の

山村が自分にして呉れた親切、中村君の努力、野村屋の懇情、獵師芦澤伴作の親切はどうしても忘るゝ譯には行かない。それは四月の一日であつた。

丹波山に二三日滯在のあとで、玉川に沿ふて落合でとまつた。此の寒村の一夜の滯在をどうして忘るゝことが出來やう。宿の周圍が白雪が皚々として積つて月が冴えて居る。夜寢られぬまゝ便所へ行くと、便所は欄干を傳はつて山の側面にあつて、風は切るやうに寒く、自分は頻りと大黑茂谷の溪谷の一夜を想ひ起す。風は戸障子を吹いて眞夜中障子は倒れて顏にあたる、よく寢てゐた中村君は目を覺して今大黑茂谷の夢を見て居たと云ふ。嗚呼大黑茂谷！之は一生忘るゝことの出來ない印象を自分等の頭に刻して居る。翌朝柳澤峠を越えて鹽山で汽車にのつて東京に歸つた。

其年の夏の七月二十日過ぎに、自分は木暮君と二人で雁坂峠から甲武信岳まで、或は出來れば國師までの縱走を試みた。飯田町九時發の夜汽車にのつて鹽山で降りると細雨が霏々として降つて居た。雁坂から甲武信までの間がどの位あるかそれがはつきりしないのと、此の春大黑茂谷でしくじつた經驗とで、澤山の用意をして來たので荷が重かつた。廣瀨で晝飯を喰つて其晩は雁坂峠下約二三丁の一杯水と云ふ處で泊つた。其晩はどう云ふ加減か風がなく、野宿を經驗して以來初めての睡眠を貪ぼることが出來た。次の日の朝若しや水の無くて困るやうなことがあればと、兼て用意して來た罐に水を入れて甲武信さして出掛けた。此縱走には破風山に假松のあることを發見し、且つ、破風山と甲武信岳との間に木賊山（雲切山）と云ふのがあつて、標高八千尺を越ゆることを知つた。甲武信へついたのは午後四時頃で、それから千曲川の源流を下つて、矢のやうに飛びながらなつかしい戰場ヶ原を經て、梓山へ着いたのは七時過ぎであつた。其の次の日木暮君は中津川へ向ひ、自分は八ヶ嶽の本澤温泉さして行つた。

同じ年の八月下旬木暮君は只獨りで柳澤峠を越え、三ノ瀨から唐松尾にのぼり、雁峠から栃本へ行き、それから東京に歸つた。

同年十一月中旬木暮君、中村君と三人で唐松尾

から雲取山を越えて三峯へ行かうと云ふ議が起つた。夜の汽車で出て、矢張り柳澤峠を越えて三ノ瀬へ行つた。峠へかゝらぬ前の南アルプスのあけがたの景色は何と云つて形容したらよからう。中村君が大聲をあげて怒鳴つたのも必然な勢だつた。三ノ瀬で晝飯を喰つて唐松尾にのぼり、それから縱走して龍バミ山との間に作られた大きな平地へ出て、其眞中の井戸澤と云ふ大洞川の水源の傍の小舍に泊つた。其平地ののんびりした廣々した高原狀と井戸澤の水の冷たい淸らかさと、其囲みのちんまりして梅に薇はれて居るさまは、今も暇があれば行つて見たいと、つゝじの咲く頃や紅葉する時分には每も想ひ起す場所の一つである。

冷たい一夜を井戸澤に過して、次の日龍バミ山を登り飛龍山を越へ、雲取山に達したのは午後三時過であつたらう。其時龍バミや飛龍山から見た大洞谷は、全く名の示す通り深い暗いグローテスクな溪谷を形成して居ると思つた。雲取山を三峯方面へ降りかゝる時分にもう日は暮れて、白岩を殆んど暗の內に通過して可成り行つた時分に、自分等は朝から水を一滴も飲まないので、中村君は腹がすいたがビスケットがのどへ通らないと云ふ。暗の中だから何とも仕樣がない。水があればどこかに泊らうと思へど、どこにも有りさうにもない。丁度其時に大血川の谷に火が見える。初めの間は殆んど眼の迷ひかと思つたが、仕舞には三人とも之を認めて、谷に炭燒小舍があることが分た。しばらく下ると小舍は自分の下る道の右の方一丁計りの所にあらはれて來る。オーイと呼べば答へる聲がする、三人は神の助けと下りる。

小舍には夫婦と一人の下の方の炭燒小舍からの來客があつて、圍爐裡をめぐつて焚火しながら話し中である。自分等三人が行つて泊めて吳れるやう賴むと心よく承知して吳れる。渴いてゐるから水を乞へば、やつと二杯位しか無い。御飯をこしらへる水がない。汲んで參りましやうと主人が桶を肩負つて、七八丁も向ふへ汲みに行く。こゝは丁度白岩から約一里三峯へは未だ二里近くで、大血川の範圍に屬してゐるのである。おかみさんの話によれば、二三日前にも三峯山參詣人がこゝで日

が暮れて泊り込んだとのことである。主人が三十分計りにして歸つて來た。御飯を喰べ味噌汁を吸つて大分元氣を恢復する。主人は惜氣なく炭をおこして呉れる。色々面白い話をきゝながら横になる。つい四五日前雲取の谷で獵師が熊を打ち損つたと云ふ話もあつた。

其一夜の炭燒小舍の有難さは今も忘るゝわけには行かない。翌朝三峯を斷念して、大血川に沿ふて强石へ出ることにする。炭燒小舍を出てから十丁許りにして水がある、主人は夕べこゝまで汲みに來たらしい。之れから少し行くと炭燒小舍が並んでゐる。もうそこいらは水が流水をなして居る。こゝいら一帶の山は、すつかり炭燒がはいつて山があらはになつて居る。かれこれ二里位で大日向村に達し、太陽寺が山の上に見える。こゝから大血川を遡つて玉川岸に行つて見たいと云ふ考は、今も宿題となつて殘つて居る。それから强石へ行く途中で大きな柿が目につく、安くて甘い。木暮君は之を喰はなければ男ぢやないと云ふ、强石から先は秩父まで馬車にのる。秩父から寶登山まで歩いて汽車に未だ早いので長瀞を見る。

自分等のやつたと一日か二日違ひに梅澤君が天目山を登破し、鴨澤から雲取を越えて三峯へ來た。

明くれば大正二年の三月、木暮君と中村君とが栃本へ來て、雪の秩父を鑑賞すると共に、荒川の水源に就て獵師山中卯吉から委しい知識を得て歸つて來た。同年五月下旬三人は金峯から甲武信岳までを縱走し、一たび梓山に降つて、それから十文字峠より三寶を經て再び甲武信岳に登り、更に雁坂峠まで越えて栃本へ行つた。其當時の紀事は本誌に載つてゐる「金峯から雁坂まで」がそれである。

翌大正三年の五月に毎もの三人に加へて友人土居君が加はつて、金峯から梓山、それから十文字峠を越えて栃本へ拔けた。が之はもう既に幾度となく通つたものを繰り返したものであつて、此旅行には吉江君も加はる豫定であつたのが、色々の故障で參加しなかつた。此の時中村君が梓山に殘つて寫生をすることになり、自分は三人で十文字峠を越えて東京へ歸つた。安十郎は山で白木屋の

主人は心臟病で死んだのは此の時であつた。中村君は約一ヶ月の滯在の後此等の悲しい報告をもたらして東京へ歸つた。

大正四年五月三人で笛吹川を遡ぼつて梓山へ行つた、此時笛吹川の溪谷の美は今まで見た溪谷中の最も自分を印象したものゝ內へはいることが出來る位に、自分を印象した。そして梓山には戰場ヶ原以外に署之と比敵する原のあることを知つた。

大正五年五月の旅は中村君が大阪へ行つて居なかつた爲め木暮君と二人で決行された。それは笛吹川を再び溯つて釜澤に折れ、甲武信岳にのぼり、それから荒川の眞ノ澤を下つて栃本へ出ることであつた。此の時に去年道のないと思つた笛吹川畔には道のあることを知り、釜澤は全然遡ぼれないことを知り、釜澤と信州澤との間の嶺をのぼつて甲信の國境へ出て、甲武信岳へ行く途中霧の爲め幾度となく林間に迷ひ、遂に甲武信岳に達せずして千曲川の小舍へ降り、そこに一夜をあかして次の朝甲武信岳に登り、それから眞ノ澤を下り、幾度も辛酸をなめて栃本へ無事についた。

秩父行は大體以上の如くであつた。しかし之で全部終つたわけではない。釜澤の不可能、石塔澤(石塔尾根の北に發源す)の險、鷄冠山の危、西澤の不可能は殘つてゐるばかりでなく、雁峠から唐松尾の間も未だ記錄がない。未だ低い方では澤山の未知の塲所がある。しかし自分等の今後憧憬の塲所は、釜澤と笛吹川の西澤方面とである。そして此等二つは秩父と云ふ自分等の見た廣い範圍での最も深い溪谷に屬するものたることは無論である。(南日)

武奈岳の裏山道に就て

山岳第十年紀念號に、近江國武奈岳の事が出て居たがあれには裏山道の事があまり出てゐなかつた、で私は幸ひ水上氏一行と、同じ年の八月に裏山道から極めたから此の方面に就て、一寸申上げるも無用の事ではないと考へます。

武奈岳の裏山道とは即ち、葛川斜面からの登路を指すのである、此の方面から登るものは非常に

尠く、土地の人でさへ其の頂上を知つて居るのは少數である。唯夏になると京都から美術學生が寫生に來て其の中の少數が頂上迄行く位なもので從つて、登路などは琵琶湖斜面に比して具はつて居ない。登山口は葛川岸の貫井（ヌクイと訓む）で、そこから極く急な雜木林を四五丁登つて炭燒小屋に出て尙ほ同じ急な林を登つて、三四丁行くと雜草の原に出る。身を沒する雜草がずつと頂上近く迄ついて居て丁度御岳の八海山附近の樣である。山は一の段二の段三の段とあつて、始めは三の段を目あてに東南に向つてその雜草を搔き分けて進み三段から、東北に向つて進む、頂上より少し手前に、岩塊があるから頂上はすぐ解る、私等は二時間半で登つたから三時間と見れば大した差はあるまい降りは二時間かゝる、雜草の急斜面を下るのが可なり困難で、草の莖をつかみ〳〵大部分は辷り降りるのである、道は尾根ばかりを行くのだから景色は好い、葛川から丹波高原西南の方には愛宕も見える、比良も勿論見える、

無案內では、到底登れない、（道はなく雜草を分けて行くのであるから）案內者は坊村か貫井で炭燒きを傭ふ事が出來るが賃金の頗る高い事を覺悟せねばならぬ、單に武奈岳を窮めるだけならば北比良村から登るのが道も樂だし、汽船の便もあるし、他に遊覽地も多々あるから裏山道を行く必要はないが京都附近でなる可く深く山の氣分を味はひ山民の生活に近接しようとするには裏山道がよい、殊に葛川は景色がいゝ、京都から、敦賀街道を北進して大原、途中を經て、花折峠を越えて、坊村（こゝには旅宿がある）迄健脚の人なれば一日で行けるから裏山道から登つて、琵琶湖の方へ下つたら面白からう、山へ行く時の氣分と、汽船から眺める湖上の景色とは少しつり合はない樣に私は思ふ。

因みに云ふ、武奈岳は葛川斜面坊村貫井地方では、比良の暮雪と呼ばれて居る事、即ち彼等の暮雪と畧稱して居るのは武奈岳である。（黑百合生）

◎雜　錄　武奈岳ノ裏山道に就て

劔岳に就いて

昨夏七月二十八日、私が劔に長次郎澤より登つた時、富山師範の職員生徒等一行十八名が、カンジキをもつけずに平藏谷（？）を登られた事は、殊に急峻なりといはれてゐる雪溪登攀のしかも多人數で登り得た新記錄であると共に、かの有名なる案内助七も、一面には、木暮氏等の推奬せらるる程信頼すべき者ではないと思ふので、特に野地敎諭より、氏等一行の頂上に到つた事についての余の疑問に對する返翰を、氏の許を得て主要なる部分を掲載する。

これに對し當然私の疑問の點をも述ぶべき必要があらうが今悉しくは述べる暇がない。以下氏の書翰である。

啓上愈々御清祥奉賀候扨先般劔山登攀し候節は偶然邂逅御厚情を蒙り奉感謝候時に劔山の絶巓を窮はめしか否やとの御疑問御尤千萬に御座候當日小生等は西ゴリョウと申す雪溪中に野營し（註、氏等の一行は夏服を着し飯盒水筒を持つのみにて天幕桐油の如き物の用意は全然なし）午前四時半に荷物全部を野營地に殘し此西ゴリョー谷の次の谷より（註、平藏谷か？）雪面に一歩々々强力の鉈にて足がゝりを刻みつゝ登攀し前後六時間半即ち十一時頃に其谷の絶頂に登り申候（註、私達一行五名は午前九時から十二時迄頂上の三角點にゐた。十一時頃遙遠くに不明瞭乍ら萬歳といふ聲を聞いた。其當時私達は、前日劔澤に下つた氏の一行の形趾が見えないので已に小黑部へ向はれたものと思つてゐたから、此の聲は別山あたりから響いたものと考へた。其日は天氣がよくて南には槍穗高北に白馬西に白山の連峯迄が鮮に見えてゐた）然る處右絶頂は別山より一線に劔の刃の如く鋭くきりたちたる處にて、其東側を仰げば約一丈三四尺もあらんかと思はるゝ高處危岩磊々たるもの有之候に付（註、平藏谷の頂か）助七及九郎兵衛（註、芦坪寺の中語。其夜別山の私達の天幕に來たので傭つた）に此岩の絶頂こそ劔山頂點ならめ、之れに登攀せずんば目的を達せりといふべからずと申候處右九郎兵衛は此地に鑛山探しのため來る冒險

家を案内して數回登攀せしも（註、九郎兵衛私達の天幕に來りてよりの話にては彼は全然助七に責任を荷して自分の事は少しも云はず）劔山は之れ以上登るべからず、之れが即ち劔山の頂點にて此岩には到底登る事能はずとの事に、一行稍怪しと思はれ候も彼等の主張を諒とし側の岩石に

富山師範
同行十八名
大正四年七月廿八日

と刻み――石工の用ふる大金槌にて約一時間を費やし――（註、其日午後氏等一行に長次郎澤の出合にて逢ひたる時は氏等一行は名刺一葉すら置かざりしとの話であつたが書翰にはかくある）紀念の撮影をなし下山の途につき申候尤も一行は此の目的を遂行せし事を非常に歡喜し手の舞足の踏む處を知らずといふ有樣なりしも小生は心陰かに怪しいと存じ候故陰かに小生の名刺三枚の裏面に萬年筆にて同文にて

大正四年七月廿八日富山師範職員三名生徒十五名登攀す但し强力佐々木助七佐伯九郎兵衛

◎雜　錄　劔岳に就いて

兩人の謂ふ處によれば劔山の絶巔と主張すれども或は恐る此側の岩上に非るかを記して後の標とす

と記し、雨、風より安全なりと思はるゝ岩石の隙間に挾みて下山仕候若し後に此處に行く人あらば見らるゝならんと存じ候（註、これ余の氏より後刻聞きし所と相異せるも、その時は匆卒の間なれば、或は誤て語られたかもしれぬ本年にてもこゝに行かるゝ人の注意せられんことを望む）下畧

更に簡單に當時の事情を附記すれば、私が長次郎澤の出合に來て、別山の方に劔澤を登らうとした時、多勢降つて來るに逢つて一時は驚いたが、更に驚いたのはそれが富山師範の一行であつた。私は已に小黑部に去つてゐたと思つてゐたから、そして一行が頂上に到つたといふので、それに對しては疑を殘して別れた。

私達が別山に殘しておいた一人の人夫は多勢別山から眞直見える澤を登るのを見たといつた。別山から眞直に見えるのは平藏谷である。

其夕、該九郎兵衛と今一人の人夫が一行に別れ

て來た。私達の案内大町の中村常太郎と暫く推問答のあつた末、彼等は頂上に到らなかつたことを承諾した。そして助七は、劔の絶頂に三角點などあるものかと主張したと、彼が云つた事は是非附記する必要がある。もし九郎兵衛が責任逃れに助七を誹謗したのでなくば助七は果して此の邊一帶の權威として認むべきであらうか。先日（五月十日）木暮氏の一高に於ける劔の話に據るに、助七程信賴すべき人夫はないやうであるが、些茲に疑問を呈する。

されど何等野營の用意なく、カンジキなく、鳶口なく、一行十數名が平藏谷を上つたのは新らしい記錄であらうが、幸天候が順良であつたからよいものゝ、もし一朝雨があつたら、その前途や知るべきである。

徒に新奇を衒ひ流行を追つて、山岳團體旅行を企つるはよしとするも、もし充分の用意を缺いて、一朝天災のあつた場合、果して統率者は何の顏有つて江湖に見えんとする。況して多くの學生生徒を率ゆる教職員の、父兄に何の辭を設け得ん。往年四高學生二名、奈良岳に死し、又近年駒岳の慘事ありしを。殷鑑遠きにあらず。

その壯事を壯とすると共に、無謀な企に對して世の注意をうながしたい。（伊藤德之助）

ハヒマツの生長の割合

日本の高山でおなじみのハヒマツ(Pinus pumila)は、時と場合とによつて、登山者の敵ともなり、又は味方ともなるもので、兎に角吾々とは切つても切れぬ緣のある植物である。此の松は內地の高山頂のみならず北海道各地の高山や丘陵より千島では海岸に近い所にまで生じて居るが、其の分布は樺太、西比利亞、朝鮮、滿州等にも及ぶものである。內地の高山頂にては通常匍匐して、眞にハヒマツの名にそむかないが、北海道とか西比利亞とか又は朝鮮の或地方では、時に半直立ともいふべき有樣で、其の高さ一丈內外にさへ及ぶ所がある位である。然し兎に角ハヒマツは內地に自生又は栽培してあるアカマツやクロマツよりは生長の

度の遲い事は其の產地の情況によつても推察するに難くはないが、之れを實地に檢した人は少い樣である。勿論生產地の氣候、地質、高度等によつて多少の差はある筈であるから、一の例によつて十を推すことは六ケしいが、去る大正二年八月信州の前岳（仙丈岳）のハヒマツ帶の下部で可なり太い幹を採集したのを此頃機を得て檢査して見た處が、木質部の直徑三十八ミリのものに年齡四十二を算し得た、其の中第二十六年目の年輪迄は心材となつて居る。年輪の各層は可なり不同がなく秋材は春材の五分の一乃至八分の一位に相當して居る。年輪は甚明瞭で、一年に一回以上形成されたかと疑はるゝ事はない、故に毎年一輪づゝ形成されたとすると、年輪の平均の厚さは四五二三八ミリで、幹の直徑は毎年一ミリメートル內外の增加を見ることとなる譯である。最も右は乾燥せる材料によつて計算したのであるから、生時に於ては年輪平均の厚さは半ミリメートル位であるかもしれない、然し兎に角ハヒマツの生長は實に遲々たるものであることは爭はれぬ事實である。（日・中・）

燒岳山麓の原生林保護

「原生林の保護」聞くからに胸がすくようです、嘗て、小島兄が上高地附近の風景の、日々に荒んで行く有樣を歎かれ、「上高地風景保護論」と云ふ一篇を世に公けにせられたことがあつた、私は夫を拜見して痛快を覺えた。當時私は、三度あの地に遊び、邃靜で冷凉な、なつかしみのある大自然の懷にもたれ、煩瑣な人生の苦悶をさけて、與に相所りあふのを樂しみに、疲勞した足を引ずり乍ら、汗みどろになつて、德本峠を超えて行く途中あの峽谷の生命である原生林――處女林が亂伐せられ、其遺骸が、ほうぐに橫はつてゐたのに驚かされ、かくまでに、自然を破壞虐待せねば、人生は一日も、安全に保たれないであらうかと、覺えず泣かされました。溫泉について、まづ旅宿の主人に亂伐のことを訊くと、「まだ足らんで、もつと伐採する……」とのことに、私は、ぢだんだん、あいた口が、ふさがりませんでした。世が開けるにともない、益々かゝる傾向になるようです、側面か

ら見ると、文明と云ふことは、より多く自然を破壞征服する事のように思はれます。現今の列强の喧嘩は、もつと非道な事を敢行してゐます、私は之を皮肉的文明否文迷の御蔭であると思ひます。

爾後、私は、あの原生林の、荒敗み行く樣が目の前にちらついてゐて、ゆめ忘るゝひまがありませんでした。處が本年二月、農商務省の御布令であると「燒岳山麓の原生林保護」と題する、別文に記してあるような文字を、信・毎が送つてくれた。私は、夢ではないだらうかと、再三瞼をみはりました。「燒岳山麓の原生林保護」!!これでこそ、あのなつかしい原生林(ツルツルド)は勿論、折々悶ゆる私等を慰めてくれた、槍も穗高もあの霞澤山も……、梓川も田代池も……、あの峽谷をホームとする。あらゆる禽獸も蟲魚も……、そうしてあの嘉門次翁も何もかも、活潑に、生動することゝなりませう。私の最初の杞憂も、こゝに全く拭ひ去られました。そうして私は、生涯忘るゝことのできぬものが一つ增しました、「燒岳山麓の原生林保護」!!!。あゝ、かくして彼等は、ここしへに生きるであらう。世の中は妙なものです、倒す神あれば、起す神もあります。これもひとへに小島兄初め、先輩諸氏の御蔭であると、謹んで此處に御禮を申上げ而して次にその全文を紹介します。(鵜殿)

●燒岳山麓の原生林保護

農商務省山林局では今度始めて國有林中學術又は森林施業上の考證或は名所舊蹟等の關係に依り保護の必要あるものは一定の地域を限つて保護林と爲す事とし其第一回として秋田縣の十和田湖同縣七座山、京都の東山、嵐山、高知縣の白髮山、熊本縣の金峰山、日向の霧嶋山と共に本縣南安曇郡安曇村を保護林に編入し上高地保護林と名附くる事となつた。

▲上高地保護林　の區域は面積一萬八百町歩と云ふ彩大な山林である、此處は有名なる日本アルプスの主要部で北から穗高嶽、燒岳、乘鞍岳と殆ど日本アルプスの王座とも云ふべき高嶽を有し其保護林は千四百米突より三千二百米突までの海拔を有して居る、其中央になつて居る上高地溫泉は嶋々より約八里此邊一帶約一萬二千町歩は國有林で附近の山間には田代池明神などの幽邃境がある。

▲火山と保護林　此上高地を何故保護林にしたかと考へて見ると燒岳の如な活火山の麓は一度伐採すれば再び生育しない事がある即ち地質が瘠惡で土の結合力無く又地中に硫黃其他の礦物を含み樹木の生育に不適當であるからである。保護林になる前からも同

地は土砂扞止の必要上他の耆通施業地と異り施業制限地になつて居た之が若し崩壞でもして土砂を押流す事になると鑛物成分、火山礫、火山灰、硫黄などの農作物又は川の魚類の棲に害を與へる事になる、昨年の初夏大降雨に際して白骨溫泉約三里の上流から上高地の上流まで梓川沿岸一里餘の大崩壞があつて土砂を押流した爲に受けた下流沿岸農民の慘害の歴史は未だ一般の記憶に新なる所であらう

▲高地は一大美林　又原生林を保存して行くと云ふ見地から見れば本縣内の國有林は少くないが多くは未定木地か無立木地で原野狀態を爲して居る、然らざるものも斧鉞の入つた林相不濟の個所が多い、然るに上高地一帶は林相相整ひ沿岸の如きは美林を爲して居る所さへあつて又斧鉞の入らぬ原生林の狀態の所が廣い、樹種も豐富でブナ、ナラからシラベ、トウヒ、ヒメコ、ツガ、ハヒマツなどがある、之等は歴史上から見て保護する價値があるのである。

▲今後の編入個所　火山地方の山林を保護する必要條件を擧ぐれば

高山植物保護、土砂扞止の必要、原生林の保存、國土保安の目的、樹木保護の目的、大森林の保存

等であつて此點より見れば本縣にては上高地のみならず戸隱、南佐久郡川上村甲武國境の山林、下伊那郡及び北安曇郡の水源地國有林などは保護林の必要があるもので或は今後順次編入さるゝ事になるかも知れぬ。（大正五年二月二十六日、信濃毎日新聞）

◎雜　錄　穗高の三山説に就きて

穗高の三山説に就きて

「本誌」第十年二號一一三頁下段で、高頭氏は「穗高の三山も亦三山とするを妥當とすべしと」て、奥穗高岳、穗高岳、北穗高岳の三峯に獨立（原文には、獨立と云ふ文字なきも、獨立的に取扱はれたものと、解釋し得られたからの話しである、若しそうでないとすれば、三山がよし五山十山に分つべきものであるとせられたところが、別に異議はないのである）せしむべきよう取扱はれた、夫れに詳しい説明がついてゐないため、益々私には、了解しかねたので、茲に本誌の餘白をかりて、同氏の高敎を仰ぐことにしたい。同頁の山岳對照表中にある北穗高岳（一〇、〇〇八）なる山名は、五萬分の一地形圖の謬りである事は、嘗て本誌八年二號で、簡單に鄙説を陳べて置きましたから、聊か重複する個所も勢ひ生じますが、其邊は御免を蒙むつて、改めて附陳致します。此岳は、槍ヶ岳の南方の一角（此觀察が謬つてゐるかもしれぬが私にはそう思へる）なる「オホノマ」（又は南岳と

假稱す）と云ひ、三等三角測點があつて、立派に標高が記してあるも、獨立させる程な、壯大の突起ではないようです、親しく踏査すれば、勿論よく判明しますが、東方の常念山脈上に立ちて西望しましても、なる程と首肯されます。槍の大喰岳をへて、中ノ岳を南に下れば、殆、平坦な山脊となつて「オホノマ」に至るも、格別の隆起を見せずに急斜して、横尾谷と、垂澤とを南に絡み、奥穗高續きの最北峯「テンリウ峯」と相對してゐる。或人が、なだらかな南岳と云はれたが、よく其山容を云ひ表はしてゐる。此間を連ぬる細低な山稜は、兩峯よりは、二百米突以上も低く、一見截然りと限界がついてゐます。槍ヶ岳の主峯から「オホノマ」へは、小一里もあるが、同じ血筋の、しかも至つて平凡な一角迄も、直系尊族の槍ヶ岳と絶縁して、緣遠い奥穗高岳の方に緣びつけるのは、いかにも慘酷いような氣がして、思ひきつて贊成をする氣にはなれません。そして若しも此峯に、主峰權を與へねばならぬとすれば、奥穗高主峯の北の涸澤岳（五萬分の一地形圖の云ふ奥穗高岳三、一〇三米突のこと）、「テンリム峯」、南方の白出澤の頭、槍の大喰岳、中ノ岳等三千百米突内外もある可也大きな峯にも、勢も主峯權を頒ちて、對立せしめなければならぬ破目となり、それがため、却つて取扱ひが繁雜となり禍を後日に貽すようになつて困りますから、前記北穗高岳は、所屬及び名稱をかへて、槍ヶ岳の眷族とし、穗高は、涸澤と岳川の二峽谷によりて、東西の二群に分割せられてゐるから、信飛國界をなす、西方奥岳の一連と、信州上高地峽谷を威壓してゐる、明神岳の一群とに二大別し、前者を奥穗高岳又は西穗高岳と稱へ、後者を明神岳又は東穗高岳と稱ふる、二主峯とする方がよいように思はれます。ついで起る問題ですが、對照表中にある奥穗高岳（一〇、二四〇）を、西群の主盟即ち最高點である如く取扱はれてゐらるゝようですが、此の標高を有する測點は、最高點よりも遙かに下方の、涸澤岳にあるのですから、之れを以て、直ちに同山を代表し得べき高距と見做すは、聊か酷かと存じます。私の略測では、其主峯は、一萬四百餘尺にして、槍ヶ岳と拮

極して遜色なきものと思はれます。本誌第八年二號「穗高群峯呼稱につきて」の項を參照せられたい。元來本山の地形は、本邦稀有の絕險地で、五萬分の一燒岳圖幅などは、同高線が重なり合ふた個所が多く、線香煙火の火花を壓しつけたようで、不明瞭になつてゐるから、該圖や簡單の紀行のみに、たよつて判斷をすると、往々間違を生みやすい、故に成るべくは、實際に當つて考察して欲しいのであります。同氏は、又其一一四頁の上段で、日本八十五州に亘る、二千四百米突以上の高峯の員數を、百米突毎に分けて揭げられてゐるが、之も全部が獨立せしむべきものゝみではないように推測せられます、追て便を以て是等諸高山の標高を、本誌上で紹介して戴きたい。妄言多謝。

因に、諸高山の主峯であつて、まだ、高距の疑がはしい、穗高は勿論、荒川岳、常念岳や、不明な立山、赤ノ岳（八ヶ岳の）、黑岳、四阿山、……等の諸山又は各群峯の主從の關係等を、適當の方法を以て確かめられ、本誌上にて御發表相成樣、前以て後遊の諸士に御願いたし、之れのまとめ方は、會の方で扱つて下さる樣に、併せて希望を申上げておきます。（鵜殿正雄）

雲に對する疑問

○私が幼少の時から高い山に登りたいと云ふ希望を抱いた動機の一つは、夏の炎天に現はるる輪廓のくつきりとした入道雲や五百羅漢の彫刻の樣にいろ〳〵樣々に群立した雲を掴んで見たいと云ふのであつた。今日の樣に空中の飛行が盛でなかつたし雲と遊ぶのは高山に登るより外に仕樣なかつたから。

○雲と言つても滿天一樣に廣がつたのや、雨天の時に生ずる霧の樣なものは、雲を手に取らうとしても輪廓もなければ、雲と雲でない處との界が判らない。唯一樣に白くもや〳〵してるだけである。然るに夏の雲峯に至つては如何にも雲らしく、雲は雲として取扱ふ事が出來る。かやうな雲峯でなくとも、上にも下にも全く雲がなく奇麗にはれて居る時に、唯山の中腹にのみにぎつしりとした綿

雲が帶の樣に靜止して居る塲合なども、雲を雲として手に採る事が出來る。

○雲の評價は別として私は雲に對して非常な疑問を有して居る。水蒸氣である內は眼にも見えないし空氣よりも輕いものであるが、一旦凝結して眼に見える雲になると水蒸氣でなく水滴の集合であれば、如何に小水滴にしても、比重より考ふれば空氣より重いに相違ない。然るに下降せずに上空に浮んでゐる。上昇氣流も生じない、で空氣が靜止の狀態にある時でも雲が下らない。

○之れに就て私は極めて微妙なる作用が空中に行はれてゐるではないかと思ふ。即ち空氣中に含む水蒸氣の量に等差がないとすれば、空氣が水蒸氣に飽和せられ露點に達し凝結して雲となるか否かは溫度に依りて定まるものである。溫度以外に水滴の核心となるべき塵埃にも依ることなれど溫度は其重もなるものである。空氣の溫度は或る特別の塲合の外は海面高によりて定まるから、水蒸氣が上昇して或る海面高に達し、溫度の冷却と共に凝結雲化する。雲と雖も水滴である以上は空氣より重く、上空に居らずに落下しようとする。然るに雲化せる處より下に行けば溫度高く飽和點に達しないから水滴として居る事が出來ず、再び蒸發して水蒸氣となり空氣より輕くなつて上昇する、それが一定の海面高に達すれば又再び水滴となる。かう云ふ作用が絶間なく迅速に行はれて、空氣より重い水滴でありながら、上空に浮遊する樣に見えるのではあるまいか。雲の下部が殆んど水平であるのを見ても、海面高と溫度、溫度に伴ふ水蒸氣の飽和點等の物理的原則が嚴格に公平に行はれて居る樣に思はれる。理屈では水蒸氣が或る海面高に達して水滴となり、それが落下して又水蒸氣となり又上昇して水滴となると言ふも其作用たるや極めて微妙にして之をはつきりと目擊することも出來なければ唯想像して見るに止まるのである。

呼鈴の原理の如く指を以て突起を押せば電線が連結して電流が通ずる、電流が通ずれば鐵棒に磁氣を生じ電線の連結部の一方を吸ひ着け電線の連絡を絶ち電流が止まる。電流が止まれば磁氣も無くなり吸ひ着られた連絡部の金屬も離れて元に復し

再び電線の連絡が出來電流が通ずる、斯樣に電流と磁氣との斷續が一瞬間に繰返されて呼鈴に打擊を與ふるから呼鈴はりん〳〵と鳴るのである。斯樣な作用が一瞬間に繰り返されるので斷と續とには間髪を入れず眞に微妙なる作用と云ふの外はない、それと同樣に水蒸氣が上昇して水滴となり、下降して又水蒸氣となる此二作用は殆んど一瞬間に微妙に行はれ人間の眼には雲が空中に浮ぶが如く見えるのであらうと思はれる。上昇と凝結と下降と蒸發上昇との諸作用が殆んど一瞬間に繰返される働きは、恰も呼鈴に於ける電線と磁氣との關係の樣なものであらう。

○雲即ち水滴が空氣より重いにも拘らず、空中に浮遊し得る原因には前述の如き作用を無視する事は出來ないと思ふ。前述以外に壓力の關係等もあらうが、之等に對して明確なる說明を得たいものである。

○夏雲奇峯多しと云ふ如く夏季に於ては、湯釜の蓋を取りたる時の樣に、モク〳〵と上へ上へと昇騰するが如き、積雲、積亂雲が生ずる。夏に限らず何れの季節でも、厚層にして暗黑な雲の上部には奇峯や入道雲が群立して居る。之れは雲の內部が太陽熱及水蒸氣が凝結する際に吐き出す潛熱の爲に溫度が高まり內部の空氣が膨脹して輕くなるので上昇氣流を生じ、盛に上方に向つて突進し、クッキリと彫刻でもした樣な雲形になるのであらう。稀薄にして小さな雲であると、太陽熱の吸收や潛熱のために雲の內部の溫度が高まつても、忽ち外圍の空氣と平衡融通せられて、一局部にのみ特別に上昇氣流を生ずる事が少ない。空中に雲を見ないにしても、空中の大部分が濕つて居つて低氣壓の場合は一局部のみ特に目立つて上昇することがないが、夏の炎天などに地表の物體が太陽の熱を吸收する場合に熱を受くる物體が熱の良導體であるか不良導體であるかに依りて、溫ためられる時間に差異がある。耕地や草生地や森林などよりも岩石地、砂地の方が急に高溫になる。それと同時に附近の空氣に熱を與へて盛に溫ためる。其際に岩石地や砂地が形狀が細長いとか或小面積で四方が平坦地であれば、外圍の空氣と流入平衡せられ

て一局部にのみ高温を保つことが六ケ敷い。然るに周圍が高地を以て圍まるる盆地の樣な處とか、山岳地方の如き地形が山脈のために局限せられて居る處の空氣であると、岩石や砂礫の熱に温ためられても外圍の空氣と混入することはない、盆地又は山岳で圍まれた一局部の空氣のみがズン〳〵温たまつて非常に膨脹して輕くなる。同時に上昇氣流を生じ局部低氣壓を生ずる。此際に於て上昇する空氣が或る高度に達し、温度の冷却と共に凝結して雲となり、前述の理由に依りて雲の内部にも亦上昇力を生じ、下方よりの上昇力と合體して上へ上へと向上するから、湯釜の蓋を取つた時の樣な向上運動を起して、奇峯を生ずるのであらう。向上運動も起さず靜止してゐる雲であれば外圍の空氣の濕度の關係に依り雲の表面は漸次に擴大することもあり縮少することもあるから、雲の表面はボンヤリ薄い處があつたりして、雲と雲でない處との限界が不明瞭で輪廓が判然として居ない。然るに向上運動する雲になると、時々刻々新區域に對して突入し、而かも突入する處は上空の低温な處であれば雲を消散する樣な事はなく、雲は雲として判つきりと上昇區域に存在するから其輪廓が明瞭なのではあるまいか。

○雲の浮遊と積雲の成因とは前述の樣に解釋が出來樣と思ふが一つ判らないのは雲が低空に生じない事である。水蒸氣が凝結して雲となるには空氣が水蒸氣の爲に飽和せられ露點に達したる時で其飽和量は温度の低い程少量で濟むから上空の低温な處程雲の發生には好都合であらう然し水蒸發の非常に多い場合は比較的高温な下空に出來ても好い譯である。勿論下空と雖も霧、高霧などの如き層狀が薄い幕の樣で、雲としての形狀を保持し難いものとか濃霧の如きものは生じないでもない。然し夏雲奇峯多しと云ふ樣なクッキリと團結した濃厚な雲團は發生しない。普通積雲の下底は千五百米位即ち三四千尺の高空にありと云ふから、海面高零に於ける空氣と積雲の下底附近の空氣とには温度の差異があらう。然し其温差は夏と冬とに於ける温差程大なるものではあるまい。故に夏季海面高三四千尺の天空に積雲が出來る位なら、冬季

の寒冷なる時の積雲はずうと下空に生じてもよさそうなものと思はれる。積雲は夏のみならず冬の空にも現はれる事があるが其海面高は夏の積雲より低い事はないのを見ると、雲の生成には空氣の濕度即ち關係的濕氣量以外に換言すれば低温なる空氣と云ふ事の外に尙上空でなければ發生しない理由があるではなからうか。夏と冬とに於て或日の空氣中に含む水蒸氣の絶對量が同一であるとすれば冬の雲は夏の雲より餘程下空に生じてもよい樣である、然るに實際に於て高山にかかつて來る雲を見ると同種類の雲でも冬の方が下空どころか却つて上空にあると思はれる事の多いのは如何なる原因に依るのであらう。空氣温度の關係以外に壓力の關係等に依り普通の雲は上空でなければ生成しないと云ふ理由を有するであらうか。壓力の關係と云ふて上昇せる空氣が上空に達し壓力の減少に依り其容程を膨脹するが爲に温度の低下を招ぐ事に歸するとすれば結局は温度の關係であつて此温度の關係以外には雲雨は上空でなければ生成しないと云ふ理由はない樣でもあるが、實際に於ては冬季に夏季の雲高に於ける温度位の空氣が下空にあつても、下空からは雲も雨も發生しない、矢張夏季の樣に上空に於て生成する凝結の核心となるべき塵埃から云ふてもこれが上空にのみ多い譯でもない。上空に於ては温度及密度を異にする空氣が互に混入し合ふ事が下空より多いために雲を生じ易いかも知れないが、それも矢張温度の關係である。雲の上空に生ずる理由として温度の關係以外に他の理由はない樣に思はれるが一方に於て前述の如き疑問もないでもない。幸い本會員中には理科の人々も多い樣であれば山岳の裝飾とし背景として最も密接の關係を有する雲の成因に就て徹底した解釋を下されむ事を望むものである。

（山本德三郎）

◎雜　錄　山腹傾斜地の濕氣に就いて

山腹傾斜地の濕氣に就て

○ツルモドキ氏と私との問答に依りてお互の誤解も氷解し、問題の根底に觸れた研究をなし得る樣になつた事を悅ぶものである。

◎雜　錄　山腹傾斜地の濕氣に就いて

○前號に於て傾斜地より蒸發する水蒸氣は傾斜地の水平面積に等しき平地より蒸發するものより濃厚であると言ふたのは、甲の傾斜地と乙の平地とに於ける他の凡ての條件が同一なる場合を言ふのである。然るにツルモドキ氏は他の條件中の地表の水分に就ては同一の場合は稀有であるのみならず、山岳傾斜地は岩石に富み却つて平地よりも水分の少ない時が多いから、平地よりも濃密な水蒸氣を生ずる事が稀れであると論ぜられた。且水分に就ては平地のみに於ても傾斜地のみに於ても一樣であることが甚だ少ないと云ふ事に念を入れられた樣である。然し本問に取りては平地同士若は傾斜地同士に於て水分が一樣であるないと云ふ事よりも平地と傾斜地とを比較して水分が一樣であるか何れが多いか少ないかと云ふのが大切な問題である。

○自分の實見する處によれば平地の水分は不透水性の土層のない限り漸次地下に滲透して乾きが早い、然るに大なる山岳の中腹以下にありて、長期間上方から水分の供給を受け、容易に乾燥するものでない。殊に山麓に近づくに從ひ上方よりの供給が多くなることがある。丘陵か小山なら兎も角、大山岳の七八合目以下は上方よりの水分供給によりて、山麓を遠く離れた平坦な原野などより水分を含むことが多い、これが爲に河川の水源も山岳にある泉水も澤山ある。

○傾斜の急な處は堅硬な岩石のみで水分を含み得ない樣に思へるが、樹木の發生し得ざる樣な高山の頂上などは別としてそれ以下の山腹に於ては、樹根の爲に母岩より分離せられたる風化土砂を扞止し、相當の土壤も保持して居るから傾斜が急なるが故に堅硬な岩石が露出するものとも限らぬ。山腹には又崖錐土砂(Schuett Kegel)を生じ易く即ち殘留土(Schuett)の如き傾斜せる基岩の上に土砂を殘留することあり、或は傾斜面の凸起部に懸積する懸崖土(Gehengen Schuett)の如きあり、其他坡積土(Schuetthaeder)の如きもある、樹根のある處は其扞砂扞止作用によりて、急斜地の土壤も割合に深くなるまで山腹に止つてる事が多い。譬へ岩石ばかり多い傾斜地にしても上部より水分の

供給を受くることさへ多ければ濃密な水蒸氣が出來る譯である。

○山腹傾斜地の表面に落葉枯枝が堆積して、ブワ〳〵と古る疊の如く踏み心地の好い樣になつてゐる處女林の地被などは、水分を保持し易すく餘程の旱天續きでないと全く乾燥しない樣である。水も重力の法則に依りて上より下に流れるものであれど、地被物の分子と水の分子との附着力、水の表面張力、地被物の間隙に起る毛細管現象等に依り、地被自身が保持し得る飽和量は之れを山腹に留め其れ以上に水分の供給を受けたる場合に限り下方に流下するものであれば、傾斜地と雖も、森林地被物のために案外多くの水分を保持するものと思はれるし實際もそうである。

○山岳にありても平地にありても雲霧の生じ易すいのは雨天の際か又は雨が止んだばかりで未だ地表に水分の豐富な場合に多い。夜間の冷却のために地表に朝露を結び、それが昇る旭と共に蒸發する場合も雲霧を生じ易すい。こういふ時の水分の關係は傾斜地も平地も地表面上に於ては大した變りはないと思ふ。

○晴天續きの時に如何なる地方が旱魃にかゝり易すいかと云ふに土性其他の關係は別として、地勢上に就て言へば、山頂附近と平原が乾き易すく山岳の中腹以下と山麓の附近は乾燥する事が比較的少ない。中腹以上から長期間水分の供給を受け水分が多いからである。山麓を遠く離れた平野などは山地の水分が早速に滲透傳達する事がなく沼澤地であらざる限り、平地は中腹又は山麓に比較して地表附近の水分豐富なる場合多いとも言ひ得ない。山であれば淺く地表を掘つても泉水が成立するが平地ではそうは行かぬ。

○故に山岳傾斜地と山麓を遠く離れた平地との地表附近の水分に就て考ふれば、傾斜地と雖も決して平地よりも水分に乏しいとも言ひ得ないのである。どちらかと言へば寧ろ中腹以下の傾斜地の方が水分が豐富でないかとも思はれる。私の實見もそうである。

○斷巖絶壁をなせる堅硬な岩石と雖も中腹以下の場合は、雨天の際又は雨が止んで未だ多くの日數

◎雜　錄　山腹傾斜地の濕氣に就いて

のたゝない時分は上方よりの水分によりて濕氣を帶びて居る。雲霧の生ずるのは雨あがりの時分に多いから、かゝる場合の傾斜地と平地との水分の比較は決して傾斜地なるが故に水分少なしとも言ひ得ない。地表附近の水分の關係が同一なる場合もあらうし、傾斜地の方が豐富なる場合もあらうと思ふ。

○以上述る處に依り私が前々號及前號に於て、他の凡ての條件が同一であればと云ふ前提のもとに傾斜地より蒸發する水蒸氣は、其傾斜地の水平面積と同一なる平地より蒸氣するものよりも濃密なりと言つたからとても、少くなくも地表附近の水分の條件に就ては架空にして實際上有り得べからざる事を前提に置いたとは思はれない。私もテイブルトウケングを避けて事實を基礎として論述したのである。ツルモドキ氏も矢張り空論に依らず實象を主とせらるゝに拘らず、雲霧を生ずるが如き場合に於て、傾斜地と平地とに於ける水分の條件に就ては私と同氏とは其見解を異にしてゐる。これは各々の實見せる立地の關係及氣候の狀態が違つて居たからであらうと思はれるが、今の處私は山岳地方の平地よりも多くの雲霧の生じ易すい理由の一つとして、斜面の蒸發と云ふ事を無視することは出來ない、其他の理由としては前號に述べた通りであるから更に繰り返さない。

○斜面より蒸發する水蒸氣は濃密なりと云ふ結論をなすに當ては斜面の水分如何に就て深く攻究せざるべからずと云ふツルモドキ氏の警告に對して私は冗長ながら本文を草した次第である。讀者諸君の中には屢々山岳地方に旅行せらるゝ方もあらうと思はれるから、山岳と雲霧と云ふ樣な關係に就て緻密なる觀察をなされ、智識欲にかられて山岳を仰ぎ見る山の兒等に、適當な解釋を與へて欲しい。

○比較的溫暖な下空の風が山坂に添ふて上方に吹き上げられると、溫度の低下によりて雲霧を生ずるのはツルモドキ氏の言はるゝ通り、山骨などに冷やされるためではなく、夏の炎天の際などは却つて山骨の爲に暖められる事があるかも知れぬ。山骨のために冷やされるとは、私も言ふた事もな

し、ツルモドキ氏も私に對して言はれたのではなからうが、序に言へば上空に於て溫度の低下を來すのは、一般に空氣は上層に至るに從ひ稀薄にして太陽の熱を吸收保持する事が出來ないために溫度は低くなるのと下空の空氣が上空に達すると壓力の減少に依り其容積を膨脹擴大し、同時に溫度の低下を來すがためであると思ふ（山本德三郎）

再び前の篇に答へて

問題がその根本を離れて枝葉に立入つた場合には、これを論ずるのは愚であるとは思ふ。然し事物闡明の上からは本題を離れて居ると云ふ事だけでも答へておかねばなるまい。

自分が繰返して云つたのは第十年第一號に山本氏が書かれた篇の第二百六十頁の「……他の條件が同一なりとすれば……」と云ふ事に同意が出來ないと云ふ事なので、其同意しがたき一例として岩石の面と水分多き面とを同一に扱ふべからざる事を云ひ再び繰返して、傾斜面に於て一樣なる水分の配置の少なかるべき事を云つた次第である。

これに對して山本氏は、自分が前號百五十一頁（第十年六百七十三頁）に「……傾斜地は同條件の下にある平地に比べて水分を保持しがたい……」と云た事をしきりにとがめられた樣であるが、この同條件と書たのはちと詞が足りなかつた樣ではあるが、水分の供給が同樣でなかつたり、土地の樣子が違つて居たりしてはいけない事は勿論である、それ故山本氏の云はれる如く平地よりも傾斜地の方が水分の引續いての供給を受け得たり、傾斜地が特に腐植土とか云ふ樣な有樣になつて居たりする場合には何とも分らぬ事勿論である、而して平地と傾斜地とがその如く有樣が異るのが定ならば山本氏が書かれて自分が反對した「……他の條件が同一なりとすれば……」と云ふ件は不成立な譯であつて、山本氏がこれを認めてくれると云ふならば自分には何も云ふ事はないわけである。

それ故自分が「……同條件の下に……」と書いた事に對して、同條件なる事はあり得べからずと非難する人があれば、自分はそれに對して相當の

辯解はなし得るものではあるが、問題の枝葉であるの故、甘じてそれを受ける事とする、而して傾斜地と平地とは地面の有樣に差異があり易いと云ふ事が認められた事を喜んでおく事としやう。

雨の降る最中には雲霧が生ずるか否かは自分は知らない、然し雨あがりで地面が全く水にうるほつて居る時は地面からの蒸發と云ふよりは水面からの蒸發と考へた方が事實に近いだらうと思ふ。

岩石の上に土や砂がかぶつて居るのでもその地表は土又は砂であつて岩石ではない、木のある處と、木のない處とは同一條件の場合には扱へまい。

答はなるべく簡單な方がうるさくなくてよからうと思ふ故、これで打切る、委曲を盡す等と云ふ事は枝葉の事について多くの必要を認めないからである。

たゞ序に一寸云ひおきたい、自分に術語的のものに對する誤解があるかも知れないが、稀薄なる空氣は熱を吸收保持しがたい爲に溫度が低下すると云ふ事は、ちと腑におちかねる、稀薄な空氣ほどあたゝまり易く、冷え易からうから、熱を吸收したら溫度はよく上昇するだらうと思ふ。尙又冷え易い故熱を保持しがたい事は如何にもだが、他にそれを冷やすものがなくて冷える事はないが故普通の場合に上層に至る程氣溫の低いのは、決して空氣が稀薄である爲ではないと自分は思ふ、普通の本に書てある太陽の輻射熱によつて地表が暖められ、それに接した空氣があたゝまり漸々對流でその熱が上方に及ぼすの故、地表に遠いほど即上層に至る程氣溫は低いのだと云ふ説明は、それで充分なのではあるまいが、自分には可なりよく呑込めるのである。(ツルモドキ生)

L' Amateur の科學

○山本德三郎氏とツルモドキ生との議論が、大分火の手が盛の樣に拜見せられますが、私も紀念號に出てをる山本氏の御卓説を拜見した時に、疑問が續出しましたので、先輩に對して失禮な仕業ではありますが、早速投稿しやうと思つてをり乍ら今迄控へて居ましたが、心に思ふ事云はぬは腹ふ

くるゝ業と心得て、少し書く氣になりました。

本論に入る前に二三、私は誤と信ずるので、直接山には關係ない事なれど、眞理を欣求する心のまゝに記します、殊更に平なる水面に波だゝせるのではありませんけれど。

「千八百八十九年巴里に開かれたる萬國氣象學會に於て英人ホーワード氏の分類を採用して、雲を分ちて十級とせる中云々」といふのは如何なる典籍によられたか知りませんが、誤であります。

「千八百九十一年 München にて開かれたる、萬國氣象學會に於て Hildebrandsson 及 Abercromby の提案を採用したのでせう。ハワードのは氏の名著"Essay on the Modifications of Clouds"の中にある樣に、七階級に分つたのを、ヒルデブランドソンや、アーバークロムビーがこれに基いて十級にした」のでせう。

枝葉について是非を爭ふのは愚の至りですが、これにつけても、一寸書くのも中々、あだや疎になし得られぬ。況して精密科學の所論は、いやが上に注意を要すると信じます。

私は理科大學物理學教室にある二三の氣象の書物や、自分の藏書にも倚りましたが、もしも私に誤があるならば、今の所論は自らを縛る絆ともなるでせう。

○天地霽壤の差といふ言葉の霽は卷雲であるといふのもどうでせうか。

○「水蒸氣、塵埃其他の媒介物がなければ、宇宙の光のない部分は青く見えるさうだ。高山の頂からの空の青は濃い」といふのも解し兼ねました。

色彩といふのは、心理學の事は存じませんが、色の差異は光の波動說によれば、光波の波長の差異ですからね、光の吸收と、インテンシティーの變化なども考へて下さい。なる程ラスキンは空の青いのを Surface colour の樣な事で說明してゐます。

Perhaps some day, as the motion of the heavenly bodies by help of an apple, their light by help of nettle may be explaiend to mankind. などと、アイロニイのやうな言を弄してゐますが、君のも修辭と考へておく方が至當なのでせうか。

○「積雲即ち雲峯である」もどうでせう。俳諧に

詠まれたり、露伴の坂東太郎雲や、子規などの云ふ雲峯も、積亂雲でせう。

○さて愈、斷崖絕壁に於ける蒸發の御說は、ひどく評すれば荒唐無稽と迄申す事を免して下さい。中々蒸發は難しい問題で、かゝる簡單な說明ですむなら、何を苦んで物理學者が難しい式をこね廻しませう。一寸どんな工合かは、昨年一月の氣象集誌に藤原博士の論文がありますから御覽になつたらよいでせう。何か大きな落し物があるやうです。

○或る人は立山は火山なりと一概に總括して、木暮氏の例を論難してゐるのもあつた。又花剛岩の山の頂は廣大だと概說されてゐるが、花剛岩即花崗岩と推してみれば、こんな所說を公然と天下に公表されるとは、驚くべき大地形學者である。

要するに考證を缺き、推理を誤り、誇張に失したりしてをるのは、却て自らの論據を損ねはしまいか。單なる文藝の作品はしらず、苟も精密科學に嘴を入れんとするに於ては、

殊に是は科學者自身にとつても籤とせねばならない。わけて日本の地理、地質學者にとつては。

ヘットナー石が發見せらるゝや、氷河の概念すらない、況して見たこともない某文學士等は、忽にして島々の谷を氷河の遺跡と斷定し、輕卒にも誇大の文言を發表し、或は京都大學御藏版てふすばらしい書葉書迄發免した。昨秋、大關教授の辯駁に逢ふや、すぐ樣ヘットナー石の傍に樹立した立札を撤去し、書葉書も姿を消した。あゝ改むるに憚る事勿れ　呵々。

何たる不眞面目なる態度であらう。そは單に學者の態度ではあるが、今の多くの地學上の所論は物理的に實に肯はれぬ物が多い。近年 Geophysical の研究が歐米では盛に起りつゝあるに、日本のは依然として舊套を守つてゐる。何の曙光をも認め得ない。

○昨今の山岳熱の流行も一種の忌むべき風潮ではなからうか、殊に今夏は、雜誌雄辯では日本アルプス踏破演說旅行を催すと云ふ、何たる輕佻浮薄なる態度であらう。それは置くも、我々會員の中には、更に忌むべき俑を作つたことがないではなか

らうか。全然是は今の論旨に外れた事であるから、具體的の意見は述べないが、只一つ矢鱈にアルプスの亂用もつゝしまれたい。大和アルプスの如き、大阪アルプスの如き。前者の如きは昨夏私が吉野に泊つた時は、「アルボース」にまで轉訛してゐた次第である。

○扨本文に舞ひ戻る。あらぬ穿鑿に紙と時とを費したが、私は一面に於てアマチュアを大いに讃美するものである。ラスキンもエーヴアリーも實に偉大なるアマチュアではないか。けれども一歩誤れば眞に危險な話である。日本の大アマチュアなる某大家は其著に於て始は「山岳」に於て槍岳の岩石をとんでもないものに書かれてあつた。その零細なる記述はどれだけ世間に誤を傳へたらう。或る人は自分の記行に引用した。或る人は他の雜誌に發表した報文の中に、これに據つた處があつた。その人が權威ある人だけ恐ろしい。

科學いじりの滑稽なのは、碧梧桐の近著日本の山水を見ると隨處に散見する。要するに鵜の眞似をする烏こそ危いものである。私も此の邊できりあげておいた方が罪も鮮い。暇を見て悉しくは論ずるが。

重々、先輩に對して失禮の言のあつた事を御詫びする。（森の人）

新著紹介

霧の王國へ

會員別所梅之助氏の著本年五月警醒社の發行である。

その「まへがき」に書てある如くこれは新著ではあるが新作ではないので種々の雜報、新聞等に載つたものをまとめられたもので挿入の圖版二十は日本山岳會藏版と銘が打たれてある、中には山岳や高山深谷で既に紹介されたものも少しはあるが清新目に新らしいのが多く單なるお景物以上充分に値があるものと思はれる。

篇は三十一に分れ地理上ほゞ東北から西南へと云ふ順に著作年代に拘らずに排列されたもので、

案内記的の意味はないが眞面目な記錄と云てよい紀行文である。

山を「聖なる處」と觀じて甚謹深い筆でコツ〳〵記述して行かれる著者の態度は熱烈の味はないが親みのある、快いものだと思ふ、たゞ著者が植物方面に深い素養を以て居られる爲とのみではあるまい、見た感じを正直に傳へやうとされる爲であらうが、植物名の列記が頗る多いのは、寧ろその著しいのだけを擧げられたかつた樣に自分は思ふ然しこれは片假名嫌ひの自分だけの感じでがなあらう。

篇中處々及び各篇のおはりに挿まれた歌は、その方面に趣味の全くない自分にも、眞があると見える點だけで嬉しい。

要するに此一卷は著者の、旅行しつゝある際の僞らざる見聞錄であつて、その時以前やその後のでない、全くその時だけの記錄であると思ふ、ただこの「僞らざる」と云ふ事は、著者自身にとつての事であつて、折々には著者その人がごまかされて居る事も無いでもない樣であるから、これを案内記並のものと思ふ事は頗る間違つた事であらうと思ふ、たゞ都を離れて、と云て深い山にも入らぬ、家並の薄い人里に靜かにうすい霧に包まれて、晴れたらば山へ行きたいなと思ふ樣な氣分の本であると思ふ。

東は一切經山より西は京都宇治迄、那須や鹽原も、雪の武石峠や白山も種々の方面について、之れを讀む人は必ず何物かを得るであらうと思ふ。

表裝は中の感じよりケバ〳〵しくて自分の氣に入らない、惡いと云ふのではないが。（鞭生）

日本アルプス登山案内

矢澤米三郎、河野齡藏兩氏合著

大正五年七月四日岩波書店發行

其序に於て「予輩は務めて躬踐目睹の事實により、漫に他人の糟粕を嘗むるを避け……」と記されたるは以てその用意を見るべく、著者兩氏共に山岳地の人にして、旅行癖を以て同人間に名ある人、且育英に從事せらるゝ事多年、物を敎へ事

を說くは其得意とせらるゝ處、以て此書の價値を推察するに足るべし。

卷首に日本尺及び米尺を添えられたるは、昔の道中記が尺を添えたるに倣ひ、これを以て直ちに、種々なるものゝ大さの目安をとるに資する爲なるべく、即この一卷は旅行の際携帶すべきものとして作られしなるべく、其形の小なる所も亦こゝにあるべしと思考せらる、たゞその帶行に便ならしめんとなしたるが爲か、又は無駄を去り、簡潔を期せんとしたるが爲か、記文甚短く、以て旅行案を作るに資するには甚可なれども、案内記としては量少なきに失するを覺ゆるは聊遺憾なき能はず。

尙その「日本アルプス主要岳分布略圖及びカール分布圖」に於て信州國境を記されたるは、全くその大體の位置を示すが爲の案にして、然るべき處置には相違なきも、その案内が信州に偏して他の方面に薄きは「他人の糟粕を嘗むるを避け」られしが爲なるべけれど案内書としては頗る缺くる處ある如く思爲せらるゝに非ず、例せば東駒ヶ岳の如きその本道たる甲州方面の登路を說く事僅に三行にして、信州方面の上下に約三頁を費されたるは、一は人の熟知せるの道にして多說を要せざるものと見做されしにも據るべきも、彼に厚く此に薄きひがみを決して逃れ難かるべく、且植物の最豐富なる甲州方面の地獄谷を記述されざりしは頗る妙ならざる感あり、尙又立山の劒岳は最近登山者決して少なきに非ざるを「…良き案内者と適當の季節を選ぶにあらざれば登る事能はず」とのみにて打切られたる如き、槍ヶ岳の飛騨方面の路に就て一言だもせられざりし如き、更に赤石岳より南の諸峯、及び笠ヶ岳方面—內地に於ける、恐らく最大最深の密林の所在地にして、最俗人に汚されざる處女地にして、山岳の神髓と稱するも大なる過言に非ざる地方—に殆一言も及ばれざりしは、全く兩氏が誤を傳へざる事を主とし、あくまでも自己の見聞を主とせられし爲にして、兩氏の主張茲に存する事に相違なかるべきも、案内書としての價値を損するものとは云はざるを得ざるなり。

尙二三の地名、登山路等につき兩氏の記述に贊意を表し難き處あるも、そは要するに各人の主張

なるを以て一々にこれを云はず、たゞ第二十三圖版の鷲ノ池はその背景に首肯し難き處あり、或は他の地のものに非ざるなきやを疑ふものなり。

以上予はむしろ本卷の短所に就て述べたり、その短所は本卷の極めて少部分にして、その大體に於ては、その記述の方面の廣きに拘らず、よくその調査の齊ひたる誠に敬服すべく、特に注意すべき動物を記し、植物目錄を添へたる如き、細に過ぎて稍煩なる嫌ある程なれど、實際の登山者を利する事決して少なからざるべし、多くの所謂案內記の如く、いたづらに形容の詞を列ね、一案內人の名をも記さず、登山の根據地の模樣をも記さゞる如き有害の著多き內に此書あるは、月並の例なれど全く砂漠中に綠地を見たるが如き感あるなり。

卷中各篇に就ては、此書の說く處必ずしも最近の調査に非ざるものあるべきを以て、每年の登山者に就て多少の異同を感ずる事あるべし、その責任は決して著者兩氏の負ふ處に非ざる論なかるべしと雖、尙多くの報告を集め改版の際にはそれを加へて最近のものたらしむる事は、案內書の主旨よりして、兩氏の必せらるべき事なるを思ふものにして、その序に「……補正怠らず、以て完璧を他日に成さん……」とものされし事眞に我意を得たるものなり、其主旨に依り予も驥尾に附して以上の妄言を陳ね以て此書の紹介の辭に代ふる事とす、死罪、死罪。（梅澤親光）

信濃鐵道案內

信濃鐵道株式會社發行

今夏信濃鐵道の全通するや、同社は信濃鐵道案內記を編して同鐵道沿道の風物を紹介し附するに「日本アルプス案內」を以てす。

菊半截表紙石版刷にして瀟灑たる好冊子なり、開卷北松本驛に筆を起して各驛の名所舊蹟物產を記述する事世の常の案內記の如し、去れど挿畫にカットにスケッチに何れも氣持よく印刷されたり殊に日本アルプス案內記は三十二頁を費して登路植物案內、食料其他の登山の雜件など詳しく記述したり、見返へしに舊松本の繪圖、仁科本城跡の

舊繪圖を印刷せり、全卷を通じて氣のきゝたる良參考書なり。（價三十五錢）（岳雄）

黑部峽谷

富山縣下新川郡敎育會發行

四六版六十五頁紙表紙の小冊子なれど黑部峽谷に就て知悉せる總てを記述せり、著者の誰れ人なるかを詳かにせざれども記する所左記の如し。一、はしがき。二、日本北アルプス。三、地質。四、水系。五、黑部國有林。六、峽谷の温泉。七、峽谷の探勝。八、峽谷の秋色。九、諸高山の登路及植物。

卷頭愛本橋のコロタイプ刷以下三葉十圖の寫眞網版を挿入せり、尙ほ著者の原圖せる「黑部峽谷略圖」「黑部峽谷交通網及里程概要」二圖を添ふ。

全卷を通じて所謂案內記の域を脫せずと雖も、凡俗なる名所案內記的の臭味なく、眞面目に正確なる良案內記と云ふべく、黑部峽谷に遊ぶもの一度手にすべき良參考書なりと云ふべし。

水系を說き森林を述べ、諸高山の登路及植物を云ふあたり、著者の勞を多とせざるべからず。

富山縣下新川郡敎育會曩に黑部峽谷勝地紹介の事業を企劃して寫眞に或は繪葉書に或は廣告によりて之が經營をなし來りつゝありしが其最後の事業として本書を發行せるものにして吾人は同郡敎育會の此擧を最も多として喜ぶ所なり（非賣品）（岳雄）

登山之栞

六月十日別記の如く名古屋市愛知縣會議事堂に山岳講演會の開かるゝや鐵道院中部鐵道管理局名古屋運輸事務所にては、特に「登山之栞」なる一小冊子を編みて、來會者一般に頒布せられたり、記する所鐵道沿線を主として簡明に登山口、鐵道、費用等に就て記述せり、一般山を知らざる人の爲め好個の鐵道案內たり、吾人は特に吾が會の開かるゝ時、此一冊を上梓以て來會者に頒布せられたる當局の好意を忘る能はざる所にして、特に同運輸事務所船橋賢鑑氏の好意を多とする所なり。（岳雄）

雜報

東久邇宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる

我國民の自然に對する興味は、年一年毎に勃興しつゝある、殊に我が中央山脈所謂日本アルプスの大景は、我國山岳中の第一に居るもので、夏期に於ける探檢者は、益々其數を加へつゝあるが近く洩れ承る處によれば、日頃御勇敢の聞えある、東久邇宮殿下は近々此の日本アルプス踏破の御壯擧を決行遊ばさるべき思召で、目下御準備中との事である、畏くも皇族の御身を以て日本アルプスに足跡を印せらるゝは古く日本武尊は申さず、全く殿下が御始めてゝ、誠に畏き至りである。之に就いて昨八日同宮家家職の一人を訪ひ、其御登攀の日程等を質した。

同家職は曰く「殿下は現に軍職にあらせられ、麻布歩兵第三聯隊の御勤務中である、此間中は同聯隊の兵を御指揮になつて下志津に演習に成らせられ昨日漸く御歸隊になつた樣な次第で決して殿下方の御自由の御身では在らせられぬ、從つて今回御企ての御旅行にしても、軍隊定期の二十日間の御休暇を利用になる外はないから、何れ九月十日までの間に、制規の休暇をお取りになつてからの事と拜承する。

御準備の第一としては此間當宮家事務官有馬子爵から、長野縣廳宛に殿下の思召に基いて日本アルプス御探勝の日數や道順、又は北陸へ出づる順路、山路及携帶品旅行の案内者等其他に亘つて委しい御問合せの書面を出しました、何れ兩三日中に詳細の回答が來る筈と思ひますから殿下は萬事夫によつて御決定の事と存ぜられます」と右に就き

某宮内大官曰く「殿下は現に此の間、皇族の身で始て飛行機の御試乘になつた、あの際操縱者は殿下を御乘せ申した爲め、非常に固くなつた相だが、殿下は極めて平然と御落付きであつたと承る、又先年滿洲の御旅行で撫順炭坑の何千丈と云ふ坑底まで御探究になつたこともあれば又仙臺御赴任中には、積雪御胸の邊に達する中を御行軍あり、露營まで爲された程の御强健な御體格で、御知申して居る限りの者は何れも感佩して居らぬ者はない、若し殿下が今回の御企てを御決行相成るとすれば、實に之れ國民の精神を鼓舞あらせ玉ふ外、登山旅行の極めて有益なる事、而して其覺悟準備を十分にすると云ふ點などにも、多大の御敎訓を與へさせらるゝ事が非常に多いと思ふ」(五、八、九時事)

●背廣服の御輕裝　東久邇宮稔彦王殿下には日本アルプス山系御探勝の御素志を遂げさせられん爲御附武官柴山歩兵中佐

（重）及赤澤屬官を隨へ背廣服の御旅裝輕やかに十二日午前九時三十分新宿驛發中央線列車に召され長野縣に向はせられたり殿下には一先づ松本に御到着の上豫て御依頼ありたる縣當局者の御指導に依り御登攀を試みさせらるべき御都合の趣なるが昨今兎角天候思はしからざれば或は中途にて御模樣變へ等の事もあらせらるべく凡ては先方にて御氣隨に遊ばさるゝ思召なりとの御事なり右に就き同宮附事務官有馬純文子曰く『宮殿下には豫て水晶を始め日本アルプス方面御探勝の御希望があらせられたのですが何分今日此頃の天候が氣遣はれないではありませんけれども折角御思ひ立たせられた事故愈今朝（十二日）御出立になりました前以て御日程を作られる樣な面倒は遊ばされず萬事は松本へ御着後縣廳の方と御打合の上御決定になる御都合で天候の都合なり又は殿下の思召次第では何う遊ばされやうとも御自由に御氣の隨に遊ばされる筈でありますが併し殿下には御重職に在らせられ特に陛下が御心配遊ばされる樣な事があつては畏れ多い次第でありますから御無理に危險を冒させられぬやう吳々も申上げました』云々

松本市に御着　東久邇宮稔彦王殿下の御一行は十二日午後八時半松本市に御着松本ホテルに御投宿相成りたり殿下には愈日本アルプス御踏破の壯擧を御決行遊ばさるる事となり御豫定は十三日午前松本御出發同夜上高地溫泉に御一泊十四日より槍ヶ岳其他の峻嶮を北に向つて縱斷遊ばされ山中に三晩御露營相成り十七日正午頃南安曇郡中房溫泉に出でられ夫れより直に信濃鐵道にて北安曇郡に向はせられ同夜北條村四家に御一泊十八日白馬嶽へ御登山相成る筈若し山中に於ける天候惡しければ隨つて其御日取りに多少の御變更ある可く長野縣當局者及び松本豐科大町の各警察署にては人夫の雇入れ沿道の御警戒等に就き十分の注意を拂ひつゝあり（松本特電）（五、八、一三東、朝）

登攀御決行　東久邇宮稔彦王殿下には十二日午後八時二十一分松本驛に御着あり殿下にはパナマ帽子に鼠色の背廣服白の夏靴と云ふ御輕裝にて御附武官柴山中佐を從へ豫定の御旅館なる松本ホテルに御投宿相成りたり同夜は恰も高等師範教授齋田山內兩博士等一行の白馬山に登山して松本に來れるありて松本師範の矢澤米三郎氏と共に御旅館に伺候し日本アルプスに關する狀況を詳細に言上せり殿下には十三日松本に於て今後の御豫定を定めらるる可きが是より先先發として宮內屬赤澤利助氏は十二日午前松本に歸り又長野縣よりは安藤林務課長長野縣警察本部よりは諸住警部松本に出張し打合せの上略ぼ御旅行の豫定を取極めたり是によれば十三日松本を出發し南安曇郡鳴々迄は人力車に召され同所より德本峠を經て燒ヶ嶽山麓の上高地溫泉に向はせられ此間約四里許りは東京の大林區署の經營に係る材木運搬の輕鐵に召さる可し夫より先約二里の間は御乘馬の御豫定なり斯くて上高地に御一泊

▲十四日上高地御出發槍ヶ嶽に御登山赤岩に御一泊▲十五日槍ヶ嶽の絕頂を極めて御一泊十六日天井ヶ岳及び燕ヶ嶽御跋涉の後中房溫泉（此道程約七里）▲十七日は中房御出發有明驛より信濃輕便鐵道にて大町に向はせられ此處より直に白馬山御登攀の途に付かれ北城村字四谷に御一泊▲十八日より白馬下山の御豫定

◎雜　報　東久邇宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる　一八八

但し殿下には此御豫定を多少御變更あるやも知れずと云ふ松本市にては既に人夫の用意を爲したり（松本十二日電話）

寫眞機と双眼鏡を御携帶　右につき昨十二日午後縣布市兵衛町なる同宮邸に就て承るに家職の一人須田七郎氏は曰く

『殿下は長野縣廳より大體の御日程割を始め照會せられし回答が來たので天候が斯う不順なるに拘はらず本日（十二日）午前九時卅五分新宿驛發の汽車にて柴山御附武官と赤澤家從とを從へ勇ましく御出發になりました、旅行用具、食料品等一切の入用品は松本市に御着後それ〴〵御買ひ調へになる都合で、御出發の際の携帶品は寫眞器械及び双眼鏡だけで外には何も御持ちにならなかつた、何にしても昨今の天候がからつと回復した後でなくては松本市から先きは御出發にならぬ筈で、御旅程の日割なぞ今日の所では全然も定めになつて居ない萬一天候が同復せれば本年は斷然御止めになるかも知れません云々

東久邇宮稔彦王殿下には十二日夜松本ホテルに御投宿相成り直に日本アルプス研究家として名高き松本女子師範學校長矢澤米三郎長野高等女學校長河野齋藏の兩氏を御召相成り登山に關する詳細の注意事項を御聽取の上アルプス御登攀の行程を御決定相成り河野齋藏氏御案内を申上ぐる光榮を擔ひたり、殿下には十三日早朝御起床パナマの帽子、紺セル背廣、カーキ色の脚絆赤革の靴といふ瀟洒たる御服裝最とも甲斐々々しく寫眞機を携へ給ひ御附武官柴山中佐宮内屬赤澤治輔氏等を隨へさせられ午前七時御馬車にて御旅館御出發南安曇郡島々に向はせられたり、十三日夜は上高地温泉清水屋支店に御一泊の御豫定なり、松本に滯在中の松井愛知縣知事は上高地迄扈從申上げ長野縣安藤林務課長御一行に加はり登山する事となり强力は松本小林區署員島々に出張し强力の者十數名を募り萬事遺憾なきを期せり御日程左の如し。

▲十四日上高地御出發槍ヶ嶽に向はせられ途中赤岩小屋に御假泊

▲十五日槍ヶ嶽（三千百八十米突）頂上を究め赤岩小屋迄御引返し夫より北に方向を取りて二ノ俣小屋に御假泊

▲十六日大天井嶽（二千九百廿二米突）及燕嶽（二千七百四十三米突）に御登攀相成り中房温泉に出でさせられ同夜百瀧旅館に御一泊

▲十七日中房温泉より宮城を經て信濃鐵道を有明驛に出でさせられ汽車にて北安曇郡大町に向はせられ午後一時五十六分大町着同地より六里の道を人力車にて北城村四ッ屋へ成らせられ由喜屋に御一泊

▲十八日四谷より白馬尻を經て大雪渓を超え白馬嶽（二千九百三十三米突）頂上に御登攀夫より更に杓子嶽（白馬嶽より幾分低し）御登攀此夜頂上に御露營遊ばさる

▲十九日御下山大町より信濃鐵道にて再び松本市に御宿泊の筈なり右の中中房温泉にては殿下が若し御疲勞に渡らせらるゝ場合には御二泊相成り以下の日程は順次繰下げとなる御豫定なりと承はる（松本電話）

松本を出發せられたる東久邇宮殿下には午前九時島々に御着小林區署長村長等の御迎へを受けさせられ小學校にて御少憩の後松本小林區署用の材木運搬用トロッコ四臺を仕立てられ先頭のトロッコには殿下を初め柴山中佐二番目には松井知事及び屬官最後には日本アルプスの權威者河野校長搭乘し何れも馬に曳かせて出發せ

り斯くて殿下には島々より二里の二股なる小林區署出張所にて聲聲を認め給ひトロを曳きたる馬に召し柴山武官御事屬官の四人轡を並べて德本峠の險を越えさせられ梓川の水音に耳を澄ませ給ひ頗る御滿足の態にて六時頃上高地溫泉旅館に着かせられたり、尙殿下には島々にてトロッコに召される際カメラにて御撮影相成たり、殿下の御登山の愈なるに思ひもかけず島々、上高地等にては俄に橋を架け變へ或は道路を修繕する等設備を爲したるが德本峠の頂上より正面に燒ヶ岳の噴煙及び硫黃嶽穗高等の日本アルプスの連峰夕日に映ゆる景色得も云はれず殿下には悉く御感あらせられ望遠鏡を手にし我れを忘れて眺めさせられたり（島々特派員發）

（五、八、一四、東、朝）

◎燒嶽の噴煙を望まれつゝ　東久邇宮殿下には十三日午前九時島々村に御着小林小林區署長村長等の御出迎を受けさせられ小學校にて御小憩の後午後より松本小林區署材木運搬用トロッコ四臺の內先頭のトロには殿下を首め柴山中佐二番目には松井知事及び屬官最後には日本アルプスの權威者河野校長乘り何れも馬に曳かせて出發斯くて殿下には島々村より二里の二叉にてトロより下りさせられ小林區署出張所にて御叢聲を認め給ひトロを曳きたる馬に召し柴山武官知事屬官の四人轡を駢べて德本峠の嶮を越えさせられ梓川の水音を聞かせられつゝ頗る御滿足の體にて六時頃上高知溫泉旅館に着かせられたり尙殿下には島々村にてトロッコに召さるゝ際カメラにて御撮影ありたり尙思ひもかけぬ殿下の急の御登りを聞きて島々村等にては急き橋を架け換へ道路を修繕する等設備を爲したるが德本峠の頂上より正面に燒ヶ嶽の噴煙硫黃嶽其の他日本アルプスの連峰夕陽に映ゆる景色得も言はれず殿下の御感與一方ならざりき（島々特電）

◎槍が嶽に向はせらる　東久邇宮稔彥王殿下御一行は愈十四日上高地溫泉より槍ヶ嶽に向はせられたり御食料は特に御好みの物は東京より御持參相成りたるが普通の物はすべて上高地に於て御調達相成りたり御仕度は萬事遺憾なく整ひ御供申上たるは御前武官柴山中佐、赤澤宮內廳外に案內並に山中の博物に關する御說明役として長野高等女學校長河野氏其の他長野縣絲生技師警察署長等にして吾社の藤木記者も之に加はり、松井愛知縣知事は槍ヶ嶽登山まで御供申上ぐることゝなれり殿下は非常の御健脚にて常に一行の先頭に進ませられ山中に二夜露營相成るを以て若し天候險惡となり萬一御難儀にかゝらせらるゝやうの事ありてはと信濃觀測會社の注意により中房溫泉の百瀨旅館より大天井方面へ强力を送り聯絡を取るべく御警衛申す手配をなしたり、天候は十三四日快晴十五日の天氣豫報は北の風曇なるが目下の處にては憂ふべき徵候なし十三日小笠原方面に起りたる低氣壓の進路は大に氣遣はれたるが十三日夜八丈島に於て東北東に方向を轉じたれば心配なし目下石垣島にある低氣壓は十五日九州地方より進行し來るべく其の儘方向を轉ぜざれば十六日頃信州に來るべきも或は九州に於て方向を轉ずるやも知れず若し其の低氣壓が信州に來るとするも大した荒れはなかるべしと松本測候所長は語れり、御案內申上げたる長野高等女學校長河野氏は中房に於て御別れ申しそれよりあとは松本女子師範學校長矢澤氏愚從し白馬岳まで御案內申上ぐる筈なり（松本電話）

◎雜報　東久邇宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる

（五、八、一五、時事）

◎山上の殿下　白雲搖曳する日本アルプスの山麓上高地溫泉に踏破第一日の御夢を結ばせられたる東久邇宮殿下には十四日午前七時霧降の御背廣に白き脚絆を着け御草鞋を召されて御旅館出發、養老館前の梓川に架せる河童橋の上に柴山御附武官、青木製材署長をイさせ噴煙天に沖する燒ヶ岳の雄大なる背景を御手づから御撮影あらせらる。特派員は頻りにヒントを合はせられつゝある殿下の御姿を謹寫せんとせしに快濶なる殿下には顧みて「逆襲とは恐れ入る子」と微笑せられたるが旋て寫眞機を納めて御乘馬あり巧に鐙を踏みゞめさせつゝ梓川に沿ひ木鎖に出で此處に乘馬を棄て、菅笠を戴かせられ柴山武官とお顏を見交はせ給ひ『なんだか舶來の順禮のやうだ』と笑ひ「怎うも頭が重いから」と菅笠を脫いでパナマ帽に召替られたる上いよ〳〵梓川を御徒渉御洋袴の濡るゝも厭はせられず激流を越えて一の殿下の溪流にて風光絶佳なる磧に御腰を下して御晝餐を召さる、折しも殿下には特派員を招て寫眞を撮れと仰せ給ひ御手眞似をなさせられたるも聊か躊躇せるに重れて御沙汰ありたるすら恐懼の至りなりしに謹寫の砌『腰を下して居ては疲れたやうだから』と御附の人と供に巖上に御起立あらせられたる御擧止の快活なる一入感激に堪へざりき斯くて御一行は午後一時再び出發行く行く溪流に横はる奇岩怪石に槍ヶ岳より落ち來る水の奔激して滂沱氷の如き中を屢々徒渉し上流に遡るに隨ひ梓川の谿谷いよ〳〵狹りて穗高岳の絶壁創立する下、磊々たる巖を飛び越え倒れし喬木を踏み跨ぎて一徑の道なき熊笹の中を潜り拔けて漸く岩室に到り隨行の赤澤宮內屬は柴山武官を揶揄する歌を詠みて殿下の御興を招けるなど一行の元氣ますます加はりて赤澤山の雪溪を踰え遂に老爺平の梓川上流に達し此處を同夜の露營地と定め人夫に命じて丈なす雜草を苅取り白樺の立木を斫りて柱となし殿下の小屋のみ天幕を張り隨行の人々は程好き樹陰に茅を以て屋根を葺ひたる小屋に草枕の冷き夢を結ぶ事となれり殿下は頗る御健脚に在しまし御案內の河野校長等を驚嘆せしめし程にて一行は殿下より常に一町餘も遲れ勝にて辛くも隨從したり（島々より特派員）（五、八、一七、報知）

◎赤澤岩に露營の一夜　十四日朝六時半上高地を出發したる東久邇宮殿下の一行は過般木曾御嶽を登攀せる松井愛知縣知事も加はり合羽橋まで徒步、此處にて殿下には吊橋を前景とし人夫共の渡る所及び燒ヶ嶽の噴煙の光景を撮影あり此處にて草鞋掛に紺セル背廣、パナマ帽に召し替へあり、此の日は一年中四五日となき珍らしき晴天にて、梓川河岸の針葉樹が蓊々として天を摩せる谿谷の崎嶇羊腸たる間を辿りつゝ殿下には途中赤樺の皮の剝げたるを採らせられ御研究あり、鶯の聲又は路傍より突然驚き飛び立つ鳥に興がらせられなどして二里の道を九時半木賊の山懷に到着、此處より梓川を右に左に徒渉しつゝ進むことゝて馬の使用不可能なれば殿下には「別れるんだれ」と馬の頭を叩きて其の勞を犒はせ給ひ特に記念の爲御供の馬を御撮影あり斯くて殿下にはパナマ帽を脫ぎ棄て菅笠を冠らせられ丸で巡禮のやうだと笑はせらる、赤澤氏がアルプス巡禮でございますと申上ぐれば殿下にも殊の外興がらせ給ふ、十一時梓川上流たる一ノ股の木陰にて晝餐を喫せられたるが殿下は海苔卷の握飯ないと快げに喫せられたる後記者を召さ

せられ寫眞を撮るならば此處で寫せとの御言葉にて右中佐、左赤澤氏の中央河岸の大岩の上に立たせらる斯くて三時赤澤岩に着此處は最初の豫定露營地なるが附近に水無き爲更に八丁を登りて俗稱ツヅ平の磧に着き此處を露營地と定む、河野校長指揮の下に人夫等は附近の白樺其の他の木の枝を苅り集めなどして露營の準備に取りかゝりたるが殿下の天幕は其の眼前に槍ヶ嶽聳え背面には磧を隔てゝ赤澤山の斷崖聳え天幕の前は野原となり車百合其の他の高山植物生ひ茂れり、嬢て六時となり用意の米を出して人夫は磧の石を積み竈を造り飯を炊き味噌汁を作り獻じたるに殿下には非常に御滿足遊ばされたり（十五日夜ツヅ平露營地にて）

◎槍ヶ嶽の頂上で萬歳　ツヅ平に露營遊ばされたる殿下は些の御疲勞もなく十五日午前五時三十分露營地御出發愈槍ヶ嶽登攀の途に就かせられたり、同頂上まで約一里半、突兀たる岩石のみ連り俗に槍澤と稱し一列にて漸く登攀し得る非常の難路なり、從つて先に進みしものにして一度足を辷らさんか支ふるに物なく谷底にまで轉落の厄を免るゝ能はず殿下には此の難路を進ませらるゝこと約一里小濱畑と稱する高山に出でさせらる、見れば ツガサクラ、梅鉢草等十數種の高山植物が紅紫取りく〳〵に今を盛りと咲き亂るゝ樣得も言はれず美し、御案内役の河野校長一々御説明申し上ぐれば殿下には熱心に御賞美あらせられ親ら御採集あり、夫より更に進むこと暫し蟠龍上人の籠りしと云ふ坊主小屋へ到着時に八時附近には所謂槍ヶ嶽の萬年雪と呼ばるゝ雪田あり雪は悉く氷の如し尚も進みて偃松帶に出で九時と云ふに愈槍ヶ嶽の分水嶺へと達せらる、此處は四方の山々手に取る如く遙か南には富士の靈峰を中心として駒ヶ嶽、白根山の聳ゆるあり、左方には赤嶽之を隔てゝ漠々たる噴煙を漂らせる淺間山あり之に對して右方には燒ヶ嶽の突出せるあり是れ亦盛んに黑煙を吐きつゝあり是等の山々は何れも中腹より以下は雲深く立ち罩めて宛如雲の海の如く壯觀を極む、更に轉じて北方を臨めば蓮華、越中立山等の諸山連綿として立並べるが中にも槍ヶ嶽は日本アルプスの盟主だけありて特に群を拔けるを見る、一行は同所にて協議の上之より登山隊を二班に分ち第一班として殿下御一行に案内者たる河野校長、松井愛知縣知事之に記者を加へ頂上登攀の途に就けり、同所より頂上までは恰も槍の穗先の如き岩のみ重なり合ひて難嶮中の難嶮なり、左れば何れも荷物一切を分水嶺に打ち捨て空手となりて岩の突角に搦み足がゝりを得つゝ匐ひ上る殿下には强力を先き立たせ先登第一に進まれしが最も危險なる場所に於て强力の手を借らせられしのみにて非常に御勇敢に渡らせられ機械體操等を應用ありて進ませらるゝさま流石に軍隊教育を受けさせられし御方なりと何れも感激せざるはなし、斯くて一同頂上に着したるは九時四十分なり殿下には陸軍の三角標石の上に御腰を下させられ四方の景色を御感賞あり松井知事の音頭にて一同殿下の萬歳を三唱して茲に憲なく槍ヶ嶽の頂上を窮められしを御祝ひ申し上げたり、嬢て十時と云ふに第一班は分水嶺に引返し之に代つて第二班同じく頂上を窮む殿下には非常の元氣にて下山の途に就かせられしが途中に日暮れ提燈を振り翳しつゝ無事上高地の温泉宿に御歸着あり同地にては今回殿下の御登山を永久に記念せんが爲頂上御休憩所に記念碑を建設せん計畫あり尚殿下が今回の日本アルプス登山を思召し立たせられし動機

◎雜　報　東久邇宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる

を洩れ承はるに外國の皇族に於ては何れも山に川に探檢を試みらるゝこと多く先年英國コンノート殿下御來朝の際も天龍川の激流を御下りありしことありされば我が皇族に於ても登山等を試み尚武の氣象を養はざるべからずとの思召しに出でさせられしなりと（十六日島々電報）（五、八、一七、大、朝）

月下の御露營　丁度盆の十六夜で正面の赤澤山の肩越にさす月影に氷の樣な光を投げて槍から穗高の絶壁は雪に蔽はれた如く白く光る、篝火がパッと散る、日本アルプスの權威河野氏は登山者が一度や二度同じ山に登つたからと云つて山が分るものでない、殊に高山になると天候や雨霧によつて山の勝手が變ると前提して氏が十數回の山岳探險の遭難や苦心を語る山で一番恐ろしいのは雨で大雷雨の時等は單に雨ばかりでなく强烈な突氣を伴ふので斯う云ふ時は天幕や雨を防ぐ道具も時には役に立たない若も雨具がない時は杉、檜の皮を一尺位の幅に三枚も剝げば之を繼合せて適當な枝に懸け其の下に佇んで居れば雨を凌ぐ事が出來る又燐寸は最も大切で私は常に罐に入れて濡れない方法を講じて居る、燃料は平時は白樺の皮を剝ぐが大雨の時は之も駄目だ其他の枯木は生木に比して却て水を吸收して居る量が多いから尚役に立たない、斯う云ふ時には松の根とか檜、樅等の油の多い樹木の枝節の堅い所を選んで其を濡れない樣に股の下に圍つて關節を削る樣に綿屑を作らへる、そして其を下にして濡れない樣に枝を山と積んで焚つけると大概は成功する、又時としては金剛杖を削つて焚き付にする方法もあるなど、種々の經驗談を語る其が高山の露營地の話丈に淋々と感ぜられる殿下も枯木に腰掛られて熱心に聽取されて居たが「若し山中で食料がなくなつた時はどうします」と膝を乘出されると河野氏は「食料がなくなつた場合は高山の頂上なれば草木もないから岩の影に生へて居る岩苔を拐つて食べる又少し下なれば木の芽を嚙じるとか、草を食べてもよいが、十字科の草なれば決して毒草はないから中毒することはない、其他の高山の植物には毒草が多いから迂濶り食べてはならぬ」と答へる、殿下には「更にあの道に澤山生へて居た紫の花は皆毒草だつてね」とドリカブト草のことを指して言はれ「毒草だつて用法によつては藥になるんだから」と隨行の植物學士を顧みられて「どうです少し研究して見ては、殊に戰爭の爲に藥品が高くなつて居る際だから……」と微笑されると横氏は唯恐縮して畏まる、河野氏は更に白馬山中に於ける數日に亘つた遭難から夜通し深山の藪を潜つて闘科は解ける腰から下はヅボンも切れ裸體になつて仕舞つたが漸く谷に降りて蛙の聲を聞いた時には初めて生氣づいたと云ふ冒險談を物語つて其のお蔭で全身が腫て三四日間床に就いたと聞いては嘗所柄と言ひ時が時なり殿下を始め一同は痛切な感に打たれた。

河野氏の經驗談に次いで强力頭の男が穗高の峰で霧に襲はれた話や、嘉門次爺さんの直話だと鉛打つたウエストン氏の遭難談等に物凄い所を語る、話は益興に入つて種々の山のローマンスが强烈な神祕な色彩で語られる、殿下は人夫共に御聲を掛けられて「お前達は冬は獵師でもするのか」と問はれたのをきつかけに深山に住む動物の話に移つて人夫共は「先年恰度此の上の森林から熊を追ひ出したことがあります近年は羚羊も居ませぬ」と云ふと河野

氏が口を挾んで「此の邊に住んで居る獸類は熊か羚羊位です」と答へると殿下は「羚羊とは例の躍の好きな動物だれ」と御意に入つて笑ひ聲がどつと起る、此の邊では羚羊を見付けた時は獵師が躍つて見せると逃げないで段々躍りに見惚れて獵師の側に近寄つて來ると云はれて居るのだ、赤澤屬が槍ヶ嶽の絶壁の上に北極星を見付ける、流星が長い白熱の尾を曳いて峽谷を横つて落ちた、話はシンミリとして夜が更けて行くに連れて凄味を加ふ、先づ一行の一人が「高山の頂上に登つた時は世界を征服した感が起ると言つた人がある」と登山の雄大壯觀を語る、殿下は時に空を仰がれて「奈翁がアルプスを越えたのは何時頃だつたかれ」と言はれる、柴山中佐は「積雪を踏んで越したこともありますが幾度も越して居ますから」と答へると、日本アルプスの名稱に就ての議論から轉じて河野氏が陸地測量部の地圖の杜撰を指摘し更に「世間では白馬嶽と呼んで居るが、實はシロウマと云ふのが本當だ、山上の殘雪の形が白馬のやうに見える所から土地の者が呼んだのだ」と云ふと、赤澤氏は「併しシロウマと云ふと何んだか濁酒を連想するから矢張り白馬の方が一般によい樣です」と言ふ、殿下は「富士へは二度登るものでないと云ふが私は二度登つた」と語られて「一帶に信州では山嶺教育とやら云つて女學校や小學校を態々山の高い所に建てゝ居るさうで、先年諏訪の方に旅行した時に或る學校の校長が說明した」と語られる、と河野氏は「一般にさうと極つた理由ではありませぬが諏訪や岡谷の方の學校は皆山の高い所に建てゝ居ります」と申し上げる、殿下は「實際山頂教育と云ふ事も理由のあることで子供の時分から雄大な氣分を感化し向上の思想を養成するに適して居る一種の教育方法としても面白い方法だ」と言はれた、蟹て八時半ともなつた、殿下には愈々明日槍ヶ嶽の頂上に登られるので早く起きればならぬとあつて、一同お休みなさいの挨拶を交して茲に露營の團欒を解散して各自に宿營に就いた、恰度此の時赤澤山の方から十六夜の月が顏を出して、磧一面は雪が降り敷いたやうに光つて居た。(完)(五、八、一八—二〇大、朝)

槍ヶ嶽山上の露營　十五日午後四時槍ヶ嶽の頂上に近い標高二千七百米突の祖父ヶ平と云ふ磧の露營地に着いた東久邇宮殿下の一行三名は河野氏の所有に係る携帶天幕を張り是に隣つて油紙を屋根とした輕便天幕を作つて松井知事等隨行の露營地とした更に磧に繁つた白樺の林を利用して枝と枝とを結び合はして丁度蓼酒の蓆莚が稻叢の樣な恰好をした屋根を工夫して其他の隨行員が雨露を凌ぐ事とした、霽は何れも附近の草を刈り集めて一同寢て居ながら枝葉越しに青天井に懸つた月を仰ぐと云ふ始末それに氣溫が攝氏十一度と云ふのだから寒くて到底まんじりとも出來ない露營設備を急ぐ一方では他の人夫等が磧の石を積み重ねて籠を築いて白樺の樹皮を焚き付けの材料として夕食の準備に掛る夕食の獻立は高野豆腐の味噌汁に鰹節のダシを使つたのが一品、夫れに各携帶の牛罐や鮭罐佃煮等の罐詰を持ち寄つた、殿下の一行は天幕內に鼎座して味噌汁を啜られる松井知事以下の一團は磧の石塊の竈に汁鍋と飯鍋を眞中にして車座を作つて賑かな晩餐會が始まり登山談などが出る河野氏は「何か山の物を殿下の一行に料理して差上げたいのですが生憎何も見付からない」と殘念がる、各自手盛で盛にパク付いた其內に高山の谷間の下には早くも夕暗が

◎雜　報　東久邇宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる

◎雜報　東久邇宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる

何處からともなく迫つて來る槍ヶ嶽の峰から吹き下ろす綿のやうな雲が丁度繪に書いた仙人が雲に乘つて下りるといふやうな形で漸次澤傳ひに走つて下りる高山の夕景色が神祕的に雄大の氣が迫つて來る丁度誰れかゞ「熊が出るぞ」と云ふと武居部長が「それアスコの森林の中に熊が蹲まつて首を振つて居る」などゝ言ふておどかす「熊が出たら此銃で一打ちにブンのめして宮樣の御馳走にするがなア」と熊と組打でも仕兼ない人間か熊か判らないやうな髭面の强力が銃を振つて見せる晩餐が濟んでから殿下の御主催といふ格で談話會が始まる一同は殿下の天幕の前に附近から集めた枯草を山のやうに積んで大篝火を焚いた殿下を中心に一同は馬蹄形の陣を作つて篝火を圍む話は前日甲州の山中で慘死した大學生の問題を皮切として河野氏は十數年間に亘る探檢談や山中の遭難談に花が咲いて一同は感ぜられたやうになる殿下も「高山に登ると雄大崇高な感に打たれる曾てカイゼル君府附近の山に登つてアラビヤの一帶の平地を見下ろした時に此處領地にしたいといふ希望を漏らしといふことを何かの書物で讀んだ事があるが山へ登るといつてもさういふ雄大な感じがある」と語られる其内に全然夜になつて了つて焚火は一枝クベル毎に濛々と燃え上つて附近を取圍む人々の顏は眞赤に照される。(十六日松本にて特派員)

萬歲三唱東久邇宮殿下無事目的を達し給ふ　東久邇宮殿下が無事槍ヶ嶽御登攀を了へさせられたるは昨報の如くなるが十五日午前五時卅分露營地御出發愈槍ヶ嶽頂上踏破の途に就かせらる、御露營地より同頂上迄は約一里半兀々たる岩石のみ連らなり俗に槍澤と稱し一列にて漸く登攀し得る非常な難路なるが一朝足を辷らさんか支ふるにものなく下底に迄顚落の厄を免るゝ能はざる程の危險極まりなき斷崖なり此難路を辿らせられつゝ進ませらるゝ事約一里お花畑と稱する場所に出でさせらる、見ればツガザクラ梅鉢草抔十數種の高山植物は紅紫取り〴〵に今を盛りと咲き亂るゝ樣得も云はれず、御案内役の河野校長一々御說明申上ぐれば殿下には御熱心に御聽取あらせられつゝ御自ら御採集あらせられ最も御滿足の御模樣に拜せられたり八時所謂槍ヶ嶽の萬年雪と呼ばるゝ雪田に着す雪は今や凍結して氷の如し、尙も進んで登山隊を二班に分ち第一班として殿下御一行並に案内者たる河野校長、松井愛知縣知事、之に新聞記者七名を加へ頂上踏破の途に就かせ給ひ全く頂上に着したるは九時四十分なり、殿下には陸軍三角標石の上に御腰を下させられ四方の景色を御觀賞あり松井知事の音頭にて一同殿下の萬歲を三唱し茲に恙なく槍ヶ嶽の頂上を究めさせられしを御祝ひ申上げたり、纜て十時といふに御下山の途につかせられしが途中日暮れ提灯を振り翳しつゝ無事上高地溫泉に御引返しの上同所に御宿泊殿下には十六日午前七時上高地御出發御徒步にて德本峠を御越えの上十一時頃木村伐出しの小林區署出張所御着鐵道トロにて島々に御着上高地にて御晝食を濟ませられ午後一時御出發馬車にて三時過松本に御着あらせられたり。(松本にて特派員發)

白馬御登山御見合せ　東久邇宮稔彥王殿下には十六日午後四時松本市へ御着白馬嶽御登山の事は御通過の沿道たる北安曇郡に傳染病あるを以て急に御見合せに相成りたり事情斯くの如くなれば殿下には直に御歸京に決し十六日午後八時三十七分松本驛御

出發、信越線にて今十七日午前六時上野驛御着あらせらるべし。（松本電話）

御歸京　日本アルプス御跋渉の途に上らせられたる東久邇宮稔彦殿下には槍ヶ嶽の絶頂を極めさせられ十六日午後八時卅七分松本驛御出發、十七日午前六時上野驛に御歸京あらせられたり。（東京電話）

秩父の慘事

大學生五名の行衛　印刷局活版部長小山初太郎氏三男秀三（二十四）は去る七月を以て第一高等學校を卒業し帝大法科に入學したるが同級生なる青山北町七ノ二十二東信銀行頭取安川濱之助氏令息牛右衛門及び同工科一年生下谷區谷中初音町三ノ卅九中村錄次郎氏令息孝三深川區某小學校教員山室林次郎英法科一年生藤井彦七郎の四氏と共に暑中休暇を利用し高山冒險旅行を企て去月二十四日午後十一時飯田町驛發列車にて二十五日朝山梨縣甲斐駒山驛に下車し、同二十九日歸京の豫定を以て甲武信嶽より金峰山を突破す可く三谷村より山地に分け入りしが爾後十日餘日を經たる四日に至るも歸來せざるのみか東山梨郡三富村より通信ありし以後杳として何等の消息なきより一行の家人は漸く不安の念を懷き、四日午後山梨縣警察部に宛て、其狀態を照會したるも警察部にては何等の報告に接し居らざる事として其旨家人に通報すると共に警察部林野警察係の齋藤警部に巡査數名を從へさせ別に數名の人夫を雇ひ一行十數名の捜索隊を組織せしめ四日午後五時探檢隊一行は山入りしたり、右に就き三富村に至り取調べたるに一行は二十五日朝同村に着し午前十時頃飲食店酒本ハン方にて休憩、食事を攝り山地に向ひたる事を突き止めたるも其後の消息一切不明なり一行は三富村出發の際五人にて白米約一斗を別に少し許の經節を所持し居たりと云へば山路に踏み迷ひても五六日間は饑餓に迫るが如き事なかる可きも到底十日以上を支ふる可くもあらず山中にて食物を得る事は元より困難なれば何れの方向かの麓に分け出でざる限り、山中に於て困難を嘗めつゝある事想像に難からず、殊に去る二十九日には同地方に暴風雨あり山地方面は其の慘害一層激しかりし模樣なれば或は何等かの危險に遭遇したるやも計り難く一行の安否頗る氣遣はしけば當警察にては前記捜索隊の報告を待ち其模樣によりては第二の捜索隊を出さん計畫中なりと。（甲府四日電話）

四日に至り右に付各家族合議の上、五日午前十一時飯田町驛發列車にて安川牛右衛門氏の嚴父濱之助氏を始め關係者七八名は同地へ向け出發、捜索隊を組織して韮崎驛より增富温泉に向へり。（五八、六、時事）

大學生等の生死今尙不明　帝國大學生小山秀三、同藤井彦七郎、同安川牛右衛門、同中村孝三及び深川小學校教員山室林次郎の五氏が甲武信の國境なる國師嶽の絶頂金峰山攀登を試み去月廿四日東京を出發したる儘行方不明となりし事は昨報の如くなるが其の生死は今尙不明なるより各家人は大いに憂慮し五日早朝安川牛右衛門の嚴父濱之助氏、小山秀三の實兄博氏を初め學友阿

部氏、藤井彦七郎の親戚等五名は昨日午前十一時半飯田町發列車にて甲府に向け出發したり。

十分行屆いた登山の準備　右行方不明の一行は一行中の年長者なる藤井彦七郎が先年甲武信の國境を探檢したる事あり何れも高等學校在學當時より旅行部員として各處の山地を跋涉し居たるより今年の夏期休暇を利用し前記甲武信の國境を探檢せんと彦七郎が案内役となり去月二十四日午後十時飯田町驛に集合の上同夜十一時發列車にて出發し翌二十五日午前五時中央線鹽山驛に着したるが一行が合議決定したる豫定は同日笛吹川に沿ひて五里溯り甲武の境なる雁坂峠下に露營し二十六日同處より甲武信の山岳を傳ひ宿營し二十七日は更に又峰を傳ふて甲信國境線に沿ひ國師嶽に到りて露營し翌二十八日は金峰山に宿し廿九日增富に下り同處のラヂウム溫泉に浴し一泊の上同處より甲府に出で一日平均五里宛徒步する豫定にて食料は二十四日夜出發當時何れも翌二十五日分の握り飯を携帶したるが鹽山驛に於て五人一日の食料約二升の割にて五日分の食料一斗を買ひ副食物は罐詰十二個の外各自氷砂糖干鱈經節等を携帶し其他病傷手當の爲め藥品より懷爐西洋蠟燭等に至る迄十分の準備を整へ一同一高の正服なる霜降りの洋服を着し同校旅行部より宿營用の天幕を借入携帶せりと云ふ。

帝大生四名と共に生死不明となりし深川尋常小學校敎員山室林次郎（二十四）氏は府下北多摩郡千歲村字回澤四百二十四番地に原籍を有し昨年三月青山師範學校卒業後間もなく同校敎員となり約二箇月前より知り合ひなる深川區富岡門前町三三書籍商川越茂和方に同居して通勤し平素旅行好きなるが去る二十三日秩父へ旅行し三十日歸京の豫定の旨言ひ置きて川越方を出でたるものにて本月一日には簡閲點呼に召集され居たるも終に歸京せざりしより川越方にても種々憂慮し居たる折柄五日午前同行者の一人なる深川區木場町一三藤井彦七郎（二十七）の家人が是れ亦彦七郎の行方を案じて傍々山室の安否を問はんと川越方へ來りしより同家にても非常に驚き直に深川小學校に問合せしも何等の通信なき模樣なるより郷里へ向け右の次第を急報し居たり同氏は性極めて溫厚にて同校三年級男生を受持居り學校の評判も非常によく毎月俸給の半額は郷里に送金して家計を助け居たりと。

一行五名は孰れも元氣旺盛の青年なるが所謂探檢趣味の所有者にて殊に一行中の年長者藤井氏は豪膽不羈の人にて毎年夏期休暇を利用しては必ず甲信其他の地方に探檢を試み大に膽を練りたりと誇り居るが昨年は飄然家を出で單身短刀一口を懷中し食糧蠟燭など聊かの登山準備を爲して今回進み入りし笛吹川を溯り國師嶽、奥千丈、金峰山等を突破し御嶽山を降り更に遠く健脚と元氣に任せて富士山に登り沼津に出でゝ二十日を費して歸宅したる事あり千年斧鉞を加へざる甲信國境の深山中に夜を明かしたる時の如きは附近の洞窟中に一點の蠟燭の下に端然と靜坐し或は狼の來襲を防ぐ爲め枯枝を集め來つて焚火を爲し東天紅を呈せざるに先つて發足し荊棘の中に迷ひ込みて路を失へば豫め街道などにて人の脫ぎ棄てたる草鞋の紐を拾ひ之にて繩を作り樹木に結び付けては數丈の斷崖を下り樹上の繩には蠟燭を點じ置き地上に足溜を得ると共に繩の燒切れるやうに辛うじて一條の小徑を發見するなど其慘憺たる苦心は餘程の冒險好ならでは出來ぬ事にて袴の如きはボロ

ボロになりて歸ろを當とし居れり。（五、八、六、東朝）

行衛不明の大學生一行中中村氏發見さる

去月廿五日東京を出發甲武信の國境なる甲武信嶽の絶頂及金峰山の攀登を企て中央線韮山驛に着せし以來杳として消息を絶ちし帝國大學英法科一年生小山秀三（二十四）同藤井彦七郎（二十七）同安川半右衛門（二十三）同工科大學生中村孝三（二十二）及び深川小川校訓導山宝林次郎氏等五名の一行に就ては五日以來捜索隊同地に急行して大活動を開始したるが六日に到り一行中の一名中村孝三氏を發見するに到れり、即ち六日午後二時頃三富村字廣瀬丸善板工場の側へ一人の青年出で來れるを工場の者が發見し直に三富村の駐在所に報告したれば警官及び村民駈け付けたるに其の青年は氣息奄々として言語を發する能はず僅かに帝大生中村孝三と紙に記したるより警官は引連れ行たる看護婦に命じて應急手當を施させし處漸くにして正氣付たるが其の語る處によれば『山中にて突然霧に出遭ひ目前の人顔さへ見分け付かず其中一同呼べども答へずなり道に分れ〳〵となりしより自分は一行に合せんと山中を彷徨中空腹に絶えず異ては息も絶え〳〵となりしに遂に工場の音を聞き附けたればそれを便りに歩き此に達せるものにて他の者の行衛は知らずされど食物は孰れも余より多くを所持し居れり』と尙ほ捜索隊は之に勇氣を鼓舞されて引續き捜索中なり

山梨縣警察部より派遣されたる齋藤警部以下の捜索隊は爾來山中に於て極力捜索に努め居れるも何分にも手係なければ東山梨郡三富村長は已むを得ず同村並に近村の青年に其事情を話し青年の力を惜りて捜索せん事を決議し三富村の所轄日下部署と協議の上同署の田中警部補及び巡査三名の應援を得て多數の青年の捜索別働隊を組織し六日正午三富村天科村を發し午後一時入山し捜索しつつ登り行く程に一人の樵夫前方より下り來るに會したれば取り敢ず一行の捜索に就き問ふ處ありしに『此山の奥に丸善製板所と云へるあり其所より此手紙を預かり來りたるも一行の消息に就ては知らず』と述べ三富村玉口駐在所巡査に宛たる封書を所持し居りたれば警部補は之を開封したるに『本日當製板所に一人の青年頗る疲勞の態にて辿り付き甚しく苦悶の模樣ありしかば取敢ず手當を加へて何用なるやと問ひたるに同人は辛ふじて口を開き自分は東京下谷區初音町三丁目三十九番地謙次郎の次男中村孝三と云へるものなる由』との事につき醫師を伴ひて再び入山し前記製板所に向ひ急行したるが其の後の消息は未だ不明なり尙ほ學生一行中の安川半右衛門氏の父濱之助氏は甲府市錦町名古屋に宿泊して一行の消息を待ちつつあり同人へ宛て右消息の通信を爲し居れる諏訪村よりも前記同樣の通信あり且つ殘り四名も多分生命は別狀無かるべしとの報知に接したりとのことなり。（甲府六日電話）

捜索隊　大學生等の行衛不明事件に關し山梨縣警察部よりした る捜索隊は其の後何等の消息を齎さず一行の安否は勿論山中の模樣等一切不明なるが、別に一行の父兄を以て組織せられたる捜索隊、即ち小山秀三氏の實兄博氏安川半右衛門氏の嚴父從之助氏藤井彦七郎氏の實弟池田喜平治氏、一行の學友安部敏治氏外一名は六日午前六時塩山驛に下車し小山、池田兩氏と他の三人との二隊に分かれ、小山隊には山梨縣警察部より參加したる掛本巡査部長及び時事新報社より特派せる記者東部兵衛の兩氏加はり、東

◎雜　報　秩父の慘事

山梨郡三宿村の廣瀨を經て金峰山と甲武信ヶ嶽の中間に在る御料林の密林に分け入り他の一隊は同じく山梨縣警察部より參加せる巡査二名を加へて金峰山の裏手なる御嶽山に分け入りしが入山後未だ報告に接せず。(甲府六日電話)

埼玉縣警察部にては帝大生等五名の行衛不明となれる報に接し秩父及び小鹿野兩警察署に命じ三隊の捜索隊を編成して雁坂峠附近を捜査せしむることゝなり、各隊何れも警官指揮の下に屈强の人夫數名を雇ひ第一隊は秩父郡大瀧村字瀧本より山路を雁坂峠に向ひ、第二隊は小鹿野より兩神村を經て雁坂峠に至り。更に信州と武州の國境なる十文字峠を捜索し、第三隊は秩父の奥より大瀧村中津川に向ひ、其の附近の捜索を開始したるが未だ何等の手掛りなし長野からも今回金峰山に於て行衛不明となりたる大學生五名中の安川半右門氏は本縣小諸の出身なれば金峰山の山麓なる南佐久郡川上村青年會にては同人の爲め捜索隊を組織し一行約十名信濃方面より金峰山に分け入れり。(長野六日電話)(五、九、七、時事)

四人の生死は尙不明　遭難大學生一行五名中村孝三氏のみは發見せられたるも他の四名の行方尙ほ不明なるより田中警部補の率ゐる捜索隊は中村氏の遭難談に據りて略ぼ捜査の方向を定め坂本三富村長、林野巡査、三富村青年等二十餘名の一行の外更に老練なる獵師樵夫等を加へ併せて三十餘名の大連となり六日夜八時過より手に〳〵提灯松明等を振翳しつゝ先づ二十七日夜一行の露營せしといふ三角地點を中心として捜索すべく山中深く分け登れり未明迄には同附近に到達せる筈なれど未だ何等の情報に接せず。(三富)

親子の對面　甲武信の重疊せる山嶽中で行衛不明となつた帝國大學生一行中の中村孝三氏が山梨縣東山梨郡三富村字廣瀨の山中二里奥(日下部驛から十二里)の森林中にある三富木材株式會社俗に云ふ丸善第三製板所に辿り着たのは六日の正午前後であつた襤褸々々になつた破れ洋服を着し殆んど乞食同樣の姿で顏色を土の如くにした氏は一本の杖を頼りに地を這ふやうにして事務室へ轉がり込んだのである此奇怪の風體を見た事務員は非常に驚き數名の樵夫と共に中へ舁ぎ込んで先づ行火で身體を溫め有合せの氣付藥を飲ませたり抔して種々應急手當を加へたが、氏の眼は落ち窪み唇はわな〳〵慄へて一言半句も利く事が出來ず全く瀕死の狀態で何處の何者とも判らない、事務員は咄嗟の間に氣轉を利かして筆と紙を氏の前へ突き出すと、疾く手先で氏は辛うじて中村孝三と書いたので偖は頃日來大捜索を行つて居る大學生中の一人である事が判然し取敢ず三富の駐在所へ急報を出したが、自分の姓名を書き終つて稍安心した故か氏は其儘昏睡狀態に陷つて了つた、一方事務員から報告の手紙を持つて三富へ急行を命ぜられた樵夫はヒタ走りに走つて一里許り山を降り甘科といふ所へ來ると折好くも田中警部補、林野巡査二名阪本三富村長其他同村の青年團二十餘名より成る第二回派遣の捜索隊と遭遇したのである、此手紙を見た捜索隊の悅は一通りでない暗夜に一道の光明を認めたる思ひにて勇みに勇んで製板所へ急行し直ちに墨篤なる介抱を行ふ事となつた、而して八里を距てた松里村の醫師土屋兼治郎氏へ急使を出して呼び迎へたが、中村氏は醫師の來る前午後六時頃から漸く深い昏睡から覺めて其不思議な冒險を殘東なく語つた恰も此時で

あつた東京から愛子の身の上を氣遣つて急行した中村氏の父謙二郎氏が不安と危惧とに囚へられ乍ら、漸く三富まで着くと『孝三君が助かつた』と云ふ喜報に接し、狂喜して一散走りに嶮路を驅け付け、小屋の外から愛子の名を呼んで、息せき切つて轉び込み、折柄人心付いた孝三氏の枕頭に突立つて、互に言葉も無く顏見合せて男泣に泣いた、此芝居のやうな親子の對面には、並居る人々も思はず貰泣袖を濕して二人の幸福を祝したが、顧れば太古の森林は木下闇く閉されて同行四人の運命は未だに解らない。(三富特派員)

慘澹たる冒險談　深い一時の睡から醒めた孝三氏は手厚い介抱に感謝の意を表しつゝ『宛で恐ろしい惡夢を見たやうな氣持がする』と言ひ更にぽつり〳〵苦しい痛ましい經過を語る『五人は二十五日の早朝に鹽山驛に着き夫れから徒歩で元氣好く八里の山道を甲武信嶽の山巓へと志して行つたが途中「此方へ行けば近道だらう」と思つて未だ嘗て樵夫や獵夫の通つた事も無さそうな所へ入り五里四方もある東澤の御料林を突つ切つて只管山頂へと辿つたが今から想へば之れが抑々の大失策であつたのだ、鬱て我等は蠢々たる密林中に迷つて居る事を發見したので同夜は三富村字下殷の森林中に露營し翌二十六日朝出發辿り辿つて甲武信嶽の手前百子山の巓に着き其處で其夜の夢を露營の中に結んだ、二十七日朝甲武信嶽から登山して國師ヶ嶽へ出やうと試みたが此時猛烈なる驟雨に襲はれ到底進行を續ける事が覺束なくなつたので豫定を變更して甲武信嶽を越え埼玉縣秩父の方へ出る事とした、で、同嶽から眞澤迄下つて來ると又々篠突く驟雨に出逢ひ加之濃霧に閉されて一寸先は全く咫尺を辨へぬ狀態に陷つた、故に已む無く元の三富の方へ引返すに決心し道を甲武信嶽の東方に位する破風山へと取つた、同山の絶頂なる三角點へ漸く着いたのは二十七日の夕であつた、其所には高さ二丈方三寸の陸軍省の測量木標が立つて居る同夜は其の傍に露營して翌二十八日の黎明に未だ驟雨が歇まぬのを犯して進發する積りであつたが、不幸にも突如一行中の小山君が激烈な腹痛を起した爲め協議の上藤井と山室の二君が介抱の役に當り、私と安川君とが一里半ある秩父の谷川へ水汲みに行く事となり、結束して進んで行く途中安川君が亦激しい腹痛に襲はれるに至つた、君を介抱したいが水を汲む事はより以上我等の急務なので、安川君を見捨てゝ單獨水筒を肩になし松、栂、樅等の繁茂する大森林を辛うじて突破の上漸く谷川の源泉へ出たが悲しい哉命の綱と頼んだ唯一本携帶の鰹節を溪流に落して了つたので多大の疲勞と困憊に加ふる空腹は遂に私をして其場に昏倒せしむるの餘儀無きに至らしめた、意識を恢復したるは翌二十九日の未明であつた元氣を奮ひ起して早速水の流れより汲み以前の三角地へ引返し途中安川君を捜したが一向消息が解らないので三人の殘つて居た露營地へ來て見ると最早其所には影も形も見えぬ、あらん限りの聲を絞つて數回連呼したが答ふる者は唯山彦許りで全く其行衛が不明となつた、其時の私は全身に尠からず徴傷を負つて居るし一行とは全く離れて了つたので單身下山に心を定め人跡絶えたる山中に踏み迷ふこと實に二十九日より九日間其間喰ふべき何物も無く、全く絶食の有樣で瀕死の身體を支へ山又山に起臥して六日の正午漸く此所へ辿り着いたのである』と(第二特派員)

秩父方面に向へるか　遭難地へ急行せる小山博氏よりも

七日午前十一時半頃東京の捜索本部へ電話あり中村氏の遭難談を報じ越したるが警察側にては殘餘の一行は秩父方面に向ひしにはあらずやとの疑を抱き同方面へそれ〴〵手配せり。

安川氏の嚴父も山へ　安川半右衛門氏の青山自宅には七日朝中村氏の齎した情報が移牒されたのみで家人は其後の情報を只管待ち佗て居るが氏の嚴父源之助氏は親戚有井仙助、鹽川英吉の兩氏並に小山氏の嚴父初太郎氏及び本社第三特派員と共に七日朝甲武線一番列車で日下部に向ひ更に三富を經て山奥深くへ捜索に入つた中村氏宅の喜び萬死に一生を得た中村孝三氏の下谷初音町三の三九の自邸には其後の情報も七日午後二時に至るも到着せぬが同地へ急行した嚴父が孝三氏に無事對面したとの本社員の談を聞いて非常に悦んで居た。

肥つて泰然として居るのが助かる　遭難學生の一人たる中村孝三君が丸善製板出張所へ轉げ込んだ時は既に蟲の息であつたと云ふが若し此儘に捨てゝ置けば何時間で或は何分間で絶命したらうと推測する事は一方無援の地に在る他の四名の生死の境を推定する唯一の手がゝりだ夫れにしても孝三君が援はれてから此稿を草する正午まで廿四時間を費やしてゐる、緣起でも無いが捜索隊が前途有爲なる青年等を辛うじて草間に發見した時にその青年等の息が通ふて居るかドウかは獨り家族のみならず誰にしても氣遣はしい限りである假に五人が五人、一斗の米を等分して二升づゝ喰べたとしても絶食以後の健康が必ずしも同一の速度ではない、日本人一人の生活を補充する平均熱量は二千カロリーだが多く働く人や多く頭を使ふ人の消耗量は二千五百カロリーにも達する、絶食後にソレを何處から補充するかと云へば無論自分の骨肉を自分が喰つて生きて行くので自給の出來なくなる時が即ち死だ、そこで殘る小山、藤井、安川、山室の四人の中一番體重の多い而して一番泰然としてるものほど『死んで行き方』が遲く之に反してアチコチ歩き廻つたり無暗に考へ込んだりして細胞を働かす者ほどズン〳〵衰弱して行くと云ふわけである、一縷の頼みは四人が何處かに臥して靜止し中村一人が大に活動して早く疲れたのであれば中村が死に近づいた程にアトの四人は近づいて居らぬ點である、若し幸うで無く別報の如くアトの四人も散々ばら〳〵になつて無暗に熱量の消耗したものとすれば結果は悲觀の外は無い、萬望谷の水でも飲み木の芽でも草の根でも何でも喰つて救援隊の行くまでの露營を繋いで居てあり度いと某醫師は語つた。

五名共生存して居ると易斷　青島攻圍戰の際巧に其經過を言ひ當てたる芝愛宕下の福田常水氏は曩に帝國大學生四名小學教師一名が金峰山中に於て行方不明となりし報に接すると共に直に易占の結果山中に於て非常に困苦に遭遇し居れど五名共生命には別狀なく必ず四五六七の四日間中に何等か消息が判然せんとの易斷を得當時其旨を本社に參考の爲申送つて來が六日に至つて其事が適中して一行の一人中村氏が無事下山したので氏は更に必ず殘る四名も生存して居ると斷言して來た。

四名は屍體となりて密林中に發見せらる　六日午前五時より甲府署の田中警部補の捜索隊の一行廣瀬十五人及第三工場よりの四十五名を更に十五名宛三組に分ちて三富村より方面を

定めて捜索に着手し廣瀬組は綴澤、マレー澤、青坂澤、バラ平の方面に又他の三組は製板所第三工場より甲武信嶽頂上三角塔附近を目標として進みたるが、同日中は各部隊とも何等得る所なくして各組其到着したる所にて野宿したり、斯て七日午前五時より更に所定の方面に大活動を開始したり而して右四組は若し遭難者を發見せる場合は、發砲して他の組に報告する事として聯絡を取りつつ進みたり、時に次第に進みて六時七時となるも合圖の砲聲は更に響かず、捜索隊は嶮坂を攀ぢ深谷を下りて其發見に努めつゝある折柄、待ち受けたる一發の砲聲は笛吹川の源流子酉澤字マレー澤方面の密林中より聞えたり、夫れを聞きつけたる各捜索隊は生きて發見されしか、死して發見されしか、何れも一種異樣の念に打たれつゝ其方面に急げり之を發見して發砲したるは長谷本巡査部長及び遭難學生小山秀三氏令兄弘、三富村長の一行なりし、同所は恩賜林なる樅の密林にして先づ三個の冷たき死體を發見し次で稍や距てたる所に安川氏の死體を發見したるなり。

噫無慘四氏の冷き骸　七日記者の一行に、廣瀬村の中澤氏等七十名參加し、日下部の田中警部補無援の下に、決死的の意氣凜然として、廣瀬の山奥深く、三隊に分れて突入したり、折柄降り頻る雨篠を突く中を厭はどこそ、熊笹の通ふ途も無き寂然たる山徑の動もすれば身を殁せんとする熊笹の、茂みと石楠花の蹤無く繁り合ふ針ほどの山道を押分け、押分け、一同全くの濡鼠となりて岩根を辿り山角を攀ぢ登り、呼び合ふ聲々の僅に相應ずるのみ午前十時頃漸く、廣瀬山恩賜林の深林中に來蔓るや、忽ち雨を衝いて一聲の號砲轟然として鳴り渡り、千仞の谷間に響き萬山の

谺を動かせり、捜索隊は、すはこそ愈々四氏は發見されたるぞと、各方面より我も我もと恩賜林目懸けて、驅け集まる記者も蟲ろく胸を押靜めて、雨に濡れそぼちたる雨衣の、磐石より重きを物とも せず、急ぎ發見の現場に驅け付け見ればこはそも何たる慘狀そ、熊笹生ひ茂れる山の中腹に、安川中右衛門氏（二十三）は洋杖の先きに帽子を突き差し、面前の大木に上衣を懸けたる儘、自身は俯向けに倒れ居れり、體軀は諸所已に腐敗せるは、見るも慘憺たる有樣なるに、四邊に散亂せる携帶品の。雨に濡れそぼち泥に塗れたるも一層悲慘の思ひあらしむ、更に四五間下方に下れば藤井彦七郎氏（二十七）山室林次郎氏は、シャツ一枚の半裸體にて仰向けて打倒れ無慘なる最期を遂げ居たるが、之れ亦肉體は腐敗して早や異臭を生じ、見る人に面を掩はしめたり、更に山を下り、とある谷川のせゝらぐ傍に來れば、殘れる小山秀三氏は全くの裸體となりて俯向けに打倒れ、青春二十四歳の此齡を甲州の密林、深く埋めて憐れなる屍體と化し居たり、此の附近に一行の外套上着類は足の踏み處も無く地上に散亂していかに四氏が最後まで無情なる死と奮闘せるかとして其の最期の慘狀を思はしめざるなし。

悲慘なる遭難の徑路　六日丸善製板所に辿り着き、危き一命を全うしたる中村孝三氏は、一旦正氣付きたる後甚だしき疲勞の爲め詳細なる經過を物語る氣力もなかりしが、同日午後十二時に至り三宿村字廣瀬より駈け付けたる醫師の手當を受け僅かに元氣付きて喘ぎ〳〵今日迄の徑路を物語れり曰く『一行は去月二十五日午後三時三富村字廣瀬に着し同處にて食事の用意を爲し、白米一斗を買ひ求めて山路に分け入れり、勇氣凜々として峻坂を

◎雜報　秩父の慘事

登攀し、同夜は字下又と云ふ處に一同露營し、二十六日天明と共に甲武信嶽に進み、同山の中腹なる陸軍測量部の三角塔（海拔七千六百四十八尺の點か）に着したるは既に午後三時過日已に薄暮に迫りしかば、同夜は同所に一泊し、越へて二十七日今日こそは是非とも頂上を極めんと足に任せて進む中、一行は何時しか道を誤まり知らず識らずの中に埼玉縣の眞澤と云ふ深林に紛れ込み、何うやら道が遠ひし樣なりと心付きたる時は、時已に遲かりき、且つは折惡く豪雨さへ加はりて前方一寸の見定めも付かずなり、疲勞餓に加はりて今は一歩の進退も意に任ぜざるに至れり事此に至りて策殆んど盡きたり、遺憾ながら小渓（荒川の水源）に滑つて引返し、前夜宿泊したる三角塔の下に歸りて夜を明したり、翌くれば二十八日、地圖を案じ充分警戒しつゝ進み行き甲武信嶽の谷間に至りしが、此時一行中の小山秀三氏が數日來の疲勞の爲め腹痛を起したるより用意の藥を與へんと自分は安川氏と共に水を掬ひ來る可く一行を殘し置き谷底に向ひつゝ出發したり、然るに其の途中に於て安川氏は疲勞の爲め歩行不可能となり、果ては其場に昏倒するに至りしかば、止むなく自分一人勇氣を鼓して下り行き漸く谷底に達し得たるも、此時自分も疲勞極度に達し誤つて水中に取り落したる唯一本の鰹節を拾ひ上ぐべき氣力さへなきに至り徒に心のみ焦りしも如何ともする能はず遂に其場に打倒れ其の儘悶々の裡に一夜を明かしたり二十九日の朝、朝暾木の間を洩れて仄暗き山地を照すに至りて自分は漸く我に返り斯くては叶はじと渾身の勇を奮ひ起し一掬の水を掬ひ取りて谷を上り、瀨くにして前夜一行の殘り居たる場所に歸り着きたるが如何にしけん此時一行の姿は同所及び三角塔の附近にも見當らず尙ほも附近を搜索する中、又も道に迷ひ全く進退に窮し夫れより六日迄、八日間半死半生の有樣にて右に左に山間を彷徨ひ歩く中、丸善製板場の音響を聞き付け無我夢中に同處へ辿り着きたるものなり。」（以上五、八、五、時事）

二〇二

悶絶せる四人の屍　帝大學生四人の死體を發見せし場所は三富村字廣瀨山の恩賜林にして千年の古木鬱々として生ひ茂り丈なす熊笹稍途絶えてスギ苔深く六町四面位の平地（俗にナレー澤と云ふ）なるが記者は自ら幾多の困苦を忍びて現場に至り見れば此處彼處襤衣の千切れ洋傘の折れたるなど飛散りたる中に藤井氏は前面の立木に手拭を結び已れは仰向樣に倒れて兩手を腹の上に置き開きたる眼の周圍には蝿一杯集まりて見るに堪へず山室氏は此處より十間を隔つる所にて右手を枕として死し安川氏は更に二町餘を離れし所にて頭を下にし左足を延ばし右足を枉げて倒れたるも鬱血せる頭部には既に蛆わきて酸鼻の極を盡し又小山氏は此平地より遙なる谷底に於て斜に横たはれる枯木に引つ懸り眞裸體の儘全身に數多負傷して横たはれり多分死後谷水に依りて此處まで流されたるものらし以上四人の死亡の原因として醫師奥山寶彦氏の診定する所に據れば飢と疲勞にて嶺り切りたる所へ大雷雨ありたる爲凍死したるものにて死亡の時は多分三十一日中ならんと。（日下部特派員發）

死體火葬　死體の在りし所は極めて嶮岨の地にして空身で登るさへ容易ならぬ難所なるに況して四屍とも死後數日を巡過して腐爛し居るものなれば之を函に納めて他所に運び出すことは到

底不可能なれば已むなく在りし場所に於て荼毘に附することゝし八日午後三時慘死者の父兄親戚等廣瀨村に集合し新に登攀隊を作り同地林業所の長澤氏を案内とし人夫四十名を引連れて出發したるが其人々は何れも我子を失ひて興奮し切りたる安川濱之助氏を始め小山博氏、山室米三郎氏、藤井助松氏及び親戚、船田、村田等の帝大學生十數名にして何れも露營の仕度をさ〳〵怠りなく人夫等又荼毘に附すべき燃料薪石油を携帶して出で立ちたり左る程に山間の日は早くも暮れかゝりて見上ぐれば山の此方彼方に雲舞ひ下り笛吹川の流れ滔々の音を立て物凄く進めば進む程道は極まりて急がんとすれど足進まず或は製板運搬用のトロッコ橋を渡りて底も分らぬ流れに膽を冷し或は熊徑鳥路に分け入りて前なる人を見失ひ思はず救ひを求むるなど想像もつかぬ苦しみも死したる子等の苦惱には是も及ばじと絶えず自ら鼓舞しつゝ纔に丸善製板所に到り着きぬ、此處より一同用意の松火を點じて半里を隔つる現場指して進みたるも柚人さへ躊躇ふと云ふ密林に分け入ることゝ云ひ道もなき所なれば一行の苦痛はあだやおろそかの業にあらず斯くて午後七時日はとつぷり暮れて只さへ暗き恩賜林のナレー澤なる目的地を見出せり實に此時の光景程憐に傷ましきものはなかるべし幾夜か子等の命恙なかれかしと祈りし甲斐もあらで慘狀見るに忍びぬ死に態を前に眺めては人目の關もなど厭はぬ皆男泣きに泣き崩れて實ひ泣きせざるはなく熊をも挫ぐ山樵の人夫も唯暗然として死體に近づく親類緣者に眼を背けたり稍ありて四個の死體は四家の人々及び各十人の人夫に依りて所在地に於て取圍まれ薪石油其他の燃料を死體の上に積重ね全部の用意整ふと齊しく一時に火を點じ始めたり薪のはじける音に交りて僧侶の讀經は起りぬ烟は山を立ち罩めて異臭は鼻を撲けり一行既に一語をも出すものなく燃え行く火のみ圍に閃めきて凄又慘斯くて八日の夜は更け行きぬ尙一行は九日拂曉までかゝりて死體を燒却し骨を收めて早朝下山廣瀨村に到り夕刻鹽山驛に出で歸京する筈。（日下部村派員電話）

遺書なからん　四人が最期に至る迄の間に何等か記錄又は遺書を認めし事なきやと云ふに現場に臨みし日下部署員の談によれば四人の内に萬年筆又は手帳等を尙所持し居たる者あるも何等今回の遭難についての記事なく他にも遺書らしきもの見當らず多分は登山早々の難に前途をのみ急ぎ其中困憊の極に陷りて記錄など認むる遑なかりしならんとの事なり而して今回捜索の爲め山中に入込みたるは日下部署長其他捜索隊の一行九十四名之れに父兄一行及び附近各村の團體を合すれば約五百名に及べり（日下部電話）

涙の述懷　安川半右衛門氏の實父濱之助氏曰く『せめて終焉の地に到り其死狀を一目見、尙前日郵送されたる法科大學入學許可證を死體になりとも見せたく思つて居りますが御覽の如く四人の遺骨を納むべき骨壺四個を持參して來ました、倅が自身の爲に設計新築しました住宅も數箇月も住まないのに此始末となりました久し振りの歸省に此山脈を横斷して長野に出る事を許した爲めに遂に此不幸に遭逢しました事は返す〳〵も殘念でありますが前人未開の土地を探究して後日再び登攀する人々の參考ともなりまするに其犧牲者として寧ろ喜ぶ所であります』小山秀三氏の實父匂太郎氏語る『今回の慘事が息子の腹痛に因を爲したとすれば申

譯がありません笛吹上流の深山は一度降雨があれば水は急湍の如く山から落下するを以て危險最も甚だしく中村氏が下流に水を求めに行きて歸りが遲い爲他の四人が非常に心痛し之が捜索の爲に山頂に上らす山腹の森林中を彷徨へる爲此奇禍に遭つたものであります』山室林次郎實父米三郎氏語る『林次郎には兄弟五人で弟二人妹二人あります、林次郎は學問が非常に好きで何とかして相當の人になりたいと親には全く交渉なく自ら學資を得つゝ苦學し電氣職工より小學教員までなりましたが近く高等工業學校に入る心算で怠らす勉學致してをりました旅行は大好で毎年各地を旅行してをりました』藤井彦七郎氏の實父助松氏語る『倅は一行中の年長者なると昨年甲信山脈を突破せし經驗があるだけに他の父兄の方に對し申譯ないやうな心地がします、然し皆思慮分別ある血氣の青年揃ひなるに斯うなつたのは天命と諦めるより外致し方がありませんが全く夢のやうに思はれます』(日下部電話)

父子相擁して泣く　九死に一生を得たる廣瀬村製板所に起臥せる中村孝三氏は幸ひにも東京駿河臺佐々木杏雲堂病院の看護婦にして偶々母を尋れて製板所に來り居たる平山コウの看護に依り日一日と元氣恢復し七日は既にお粥を喰ふ位になれるも何分十日近くも絶食して僅に水を以て支へたる身とて眼窪み頰落ちて此世の人とも思はれざる位なり同氏の實父藤次郎氏は八日午前二時に至つて萬死に一生を得たる我子を見るべく製板所へ赴き暗き燈火の下に無事の我子を見て唯々嬉し涙に掬き暮たり。(日下部特派員電話)

廣瀬の丸善第三製板所に靜寂中なる中村孝三氏は追々恢復し來るに連れて更に新事實を語る、捜索隊の窮せし彼の實話は益當時の慘況を盡せり『七月廿六日一行が甲武信嶽の武州方面に連なる眞澤の深林に迷ひ込み再三の協議の末一と先づ引返すに決したるも路險峻にして到底荷物の携帶に堪へす且山中に水なくして白米を炊ぐ能はざれば之を携ふるも益なしと先づ米を山中に捨て、次で天幕、鑵詰の如きも同日眞澤を下る時に悉く放棄して身輕になり只管道を急ぎしも一向捗取らす二時間を費やして僅に二丁を進みしに過ぎざりしと尤も食料品を放棄する際各自十分に食し置くべしとて食べるだけ食ひて當分は水を飲みてなりと生存し得べしと覺悟を極めしが其後益路に迷ひ又は屢豪雨に困しめられ其上二十八日ナレー澤にて小山氏の腹痛に會し中村は水を汲まんとて約一里半の途を谿間目がけて下り來り谿に達して昏倒せしは同日の午前中なりしがフト蘇生りし時は既に一夜を經過したる二十九日の朝とも心づかす元來し途を引返し其後は晝も夜も殆ど判らぬ程の夢中にて九日間彷徨し其間林中に新しき材木の伐採しあるを見て何時か樵夫の來る事あるべしと其材木の上に横はりて待ち居たるも容易に何人も來る模樣なきより又々斷念して歩き續け幸ひにして製板工所の音を耳にして其方向へ辿る中製板所より一二丁手前の崖より過つて轉げ落ち其儘悶絶し居たるを折柄同工場の職工三人が通りかゝり犬か何か死んで居るぞと近づき見ればボロ〳〵の洋服を着せし一學生なるに捨置かれすと製板所へ擔ぎ込み手當を加へし次第なり』(日下部特派員)(五、八、九、東朝)

新なる涙　過般甲州山奥にて慘死せる帝國大學生安川半右衛門小山秀三藤井彦七郎及び深川小學校訓道山室林次郎四氏の葬儀は

小雨そぼ降る十三日午前九時より青山齋場に於て佛葬を以て執行されたり是より先午前八時には藤井氏の遺骨を納めたる馬車親戚故舊等に打護られて第一に齋場に着し次で安川氏は自働車山室氏は人力車小山氏は棺馬車にて相前後して到着向つて右より安川小山藤井山室の順序にて遺骨を祭壇に並べ其上部に各銘旗を立て側面には數多の供物を供へ兩側には有馬賴寧氏高崎正光男等より寄贈の生花を飾れるが會葬者は此頃より續々參集甲乙相會すれば談直ちに故人の有爲を語らざるなし九時を過ぐる十分にして式は始まれり第一高等學校教頭菊池壽人氏先づ祭壇に額きて弔文を述べ次で深川小學校長、第一高等學校生徒總代、同旅行部總代、東京府立師範學校同窓會、商工中學校同窓會等の代表者何れも悲痛の聲を絞りて故人の生時を語る聞く者誰か涙ならざらんわけて祭壇右方に並列せる安川濱之助小山初太郎藤井助松山室米三郎諸氏等の眼には又新なる涙を添へたり斯る中に石川素童師は數多の僧侶を隨へて入場し雲蓋翠中居士（安川氏法名）雲蓋獨秀居士（小山氏同）雲蓋靈彦居士（藤井氏同）雲蓋慧林居士（山室氏同）等の法名を唱へて讀經の中に式を終る時に十時五分蓋し此法名は雲蓋を共通とし中、秀、彦、林四氏の俗名に取れるなり尙當日の會葬者中には仙波中將山川帝大總長櫻井理學博士三上文學博士牧野法學博士其他の帝大教授一高教授等數百名なりき。（五、八、一四、東、朝）

秩父の慘事餘錄

不用意が招いだ死

甲武信の山嶽踏破を企てゝ成らず空しく屍を悲風慘雨に晒すに至つた登山學生團の不祥事は近來痛恨に堪へぬ次第であるが學生團の登山に對する用意は果して充分であつたか、山岳跋渉に經驗ある人の意見に據ると學生團が登山に際し糧食として總に生米一斗を携帶するに過ぎなかつたのは第一の失策と言はねばならぬ、生米一斗では一行五名が難路を跋渉する食糧としては僅々三日間の口を糊するのみで豫定の日時すら飢餓を凌ぐに足らぬ、且つ炊事用の鍋を携へて行くのを忘れたらしく想はれるから土を掘つて自然の土竈を利用して炊事の出來る間は好かつたが火種が盡きて濕氣勝な土竈の意に任せぬに至ると共に生米を其の儘頬張つて一時の餓を凌いだ結果忽ち腹痛に惱まされたのである生米を嚙み碎いて食べれば腹痛を生ずる實例は屢々見る處だ其れに副食物として罐詰類に鰹節を糧食中に加へて行つたのは適當の用意であつたが鰹節は丸ごとかり〳〵嚙じるのは齒質の頑丈な人なら格別然も無くばなか〳〵骨が折れる之は鰹節は一二本削り溜めて袋へ入れて携帶し空腹の都度むしや〳〵遣るに限るが一行はこれを知らなんだ、又人煙稀な深山幽谷に踏入るには必ず團員の中に一人見取圖を取つて置き歸路に迷はぬ注意が肝要であるが多分面倒臭いと思つたのでもあらう一行には此用意が缺けて居た、其れから燐寸だ火種を搭へるに必要な燐寸を箱のまま携へて居たのではいくら要愼しても濕氣を生じて摺つても〳〵も火は點かぬ燐寸の類を金屬の箱に密閉して所持するか鑛石を用意するに如かない、是等の點から推測すると怎うしても學生團一行に周到綿密な注意を缺いて聊か無謀に失する嫌はありはしなかつたらうか將來登山に志す青年學生は今回の遭難に鑑みて旅行

前に豫じめ經驗ある先輩の意見を聞糺して手落ちのないやうに用意し自分獨りの了簡で血氣にまかせて無謀なる企てをなさゞるやうに希望すると。

死の記錄　八日朝來の大手町小山初太郎氏宅は弔客引も切らず親戚緣者多數集つて、只管死體の到着を待ち佗て居る、秀三氏の實兄憲治氏は『其後まだ便りがありませんから樣子は判りませんが、九、十日の兩日中には一行も歸京する事と思ひます、舍弟等が冷い屍となつて見れば今更ら兎や角申しますのは愚痴のやうに聞えますが怎うも四人の死因が怪訝しいやうです、食料もあり、谷川も近くにあつたやうですのに、日頃冷靜な弟としては死に方も餘りに脆かつた、一行から離れた中村さんを何處までも探さうとして幾日かを森林帶に彷徨ふて遂に自分等が動けなくなつたのかも知れません併し私は舍弟が必ず死に望んで何かしら記錄を認めた事と確信して居りましたが、其の豫想通に死の魔手が刻々彼等に迫つた時、四人は相鼎坐して死の記錄を書いたと云ふ事ですから、其れを讀んで見れば死の原因も從つて氷解致しませう、一刻も早く其記錄の內容を知りたいと思つてゐます』と語りて暫し悵然とした。

一高生の哀悼　甲武信ヶ嶽の山腹に悲慘の死を遂げたる四名の中山室氏を除く藤井小山安川の三氏は、共に一高卒業の秀才にて、同時に同校旅行部の中堅なりし關係より、一高生徒の驚愕と悲嘆は一と方ならず七日正午先發の二人は甲州に赴き同日午後十一時には更に二名弔問の爲め死體發見地に急行したるが、八日朝來寄宿寮に旅行部員及び在京生徒等の多數參集して種々の協議を凝らし、死體の飯田町驛に到着する當日は、一同歩調に出迎へて弔意を表し、追て盛んなる追悼會を擧ぐるに決したりと。

此不祥事の爲に登山熱を阻止し度くない　此際直に主務省として怎う斯う云ふのは餘り輕率でなからうか、小學校や中學の生徒なら格別、遭難者は多少專門の知識を有つてゐる大學生で常に健康も確であつたと云ふから、未だ其の原因も確めぬ中に意見を發表すると云ふのは燥急だと思ふ、僕は一體登山は大に奬勵してゐるのだ、近來國民の氣風の剛健になりかけて來たのは、一つは登山奬勵の結果もあると思ふ、萬一に起る厄難を恐れて登山を控へると云ふ樣な事は甚だ面白くない、登山に對する注意は每年主務省より出してあるが此度の遭難の原因は僕の見る處では食料携帶の不足にある樣だが、それに付けても登山者は第一に充分の食料を携帶しなければなるまいと思ふ、斯う云ふ譯で此度の事件の爲めに直に夏期登山の風を阻止するやうでは好ましからぬ事だ、唯主務省の每年發表してある注意や、專門家の注意を守つたら、決してコンナ不祥事は無つた事と思ふ、尙ほ此度の生存者から詳しい話を聽いた上で、なんとか一般に注意する處あるかも知れない。(田所普通學務局長談)(以上五、八、九、報知)

今後の登山者に　甲武信嶽の大學生慘死に次いで今又海軍屬の行衛不明事件あり世人の山嶽に對する視聽は此の際著しく銳敏となつたやうである農省務省岡本山林局長は山嶽殊に密林の危險と今後の登山者心得に就て語つて曰く『東京邊りの人が山嶽などゝ云ふ事を考へても何でも無いやうに感ずるけれども實は山嶽と云ふものは却々怖ろしいものである、現に山林區署の役人で

營林主事と云ふ官林をグル〳〵巡つて歩く人達などは毎年一人や二人定つて變死して居る、山や林に就て自分の家程によく勝手を心得て居る是等の人々でさへ毎年變死して居るのであるから、山の地理、氣候等の事情に不勝手な人達が今度のやうに慘死する事のあるのは實は無理からぬ次第と思はれる、然し今度の事があつたからとて今後登山を禁止するわけで無し或ひは却つて益々盛んになるやも測られぬがそれには自分としては是非登山者は其山々最寄の小林區署に出頭して詳しくその山の事情を聽取し然る後、決行して貰ひ度いと思つて居るのである、何しろ深山の密林などは古人が「河川と密林は活物である」と喝破した程に活きて居て毎日時々刻々或る何ものかの衝動に接しては變化して行くのであるから危險極まるものである假令へば密林中に雨に降られると自分が今入つて來た足跡が一遍に流れて仕舞ひ更に前に附けてあつた途も流失して仕舞ふから何方へ動いたらよいか全く途方に暮れて仕舞ふのみならず、地は一尺もぬかる上を辷つて二進三進もつかなくなると云ふ始末に陷る、それから夜營も危險で天幕など張つて、寢て居る處へ山の變化によつて溫泉の噴出する事もあるし上から岩石が轉がり落ちる事もある、故に登山者は登山豫定表を作る場合必ず一日で山間の人里に近い處に達し更に二日目も日の暮れない間にその奥の人里に近い處へ達すると云ふやうに段取つて貰ひ度いと思ふ若し人烟の全く絶えた處へ行くなら案内人を必ず一名附けて行く位にして欲しいと思つて居る』云々。(五、八、一〇、中外)

剛健と猪勇と、田所普通學務局長曰く　學生の登山

◎雜報　秩父の慘事餘録

熱が盛んな今日に於て今回の慘事は教育者間に一研究問題を與へたものである、夫れに就て文部省田所局長曰く『此事件に就ては四名は慘死し、生殘りの中村孝三氏も未だ充分談話も出來ぬ有樣だから最初から遭難までの模樣を充分に知る事が出來ない此遭難が果して準備の不充分から來たか、又は不可抗力に出でたかも斷定し得ぬ、登山者中には相當な山通があつたから其準備に手抜りありとは受取れぬが或專門家は持參した米の分量が五人分としては多少不足であつた樣に思はれると云つてゐた、併しさう云ふ登山準備方法は專門家に讓るとして此大慘害が果して青年の腦裡に如何なる影響を與ふるかと云ふ事は我々として考へればならぬ重大なる問題である、今日の狀態では此事件の爲め登山を禁止する事は無論早計である、近年は青年殊に學生間に登山熱が非常に旺盛で、一高帝大等は其中心となつてゐる感があり、此剛健な氣風は一般に墮落したと云はれる現今の青年社會を廓清する力がある、今回の事件に依て此氣風を壓へるのは無論害あつて益がない、又登山に多少の危險の伴ふのは元よりの事で斯てこそ剛健な氣風も養はれるし危險なき山を登たとて此點には益無い譯であるがさりとて有望なる青年學生を登山の爲犬死させと云ふ事は、其家庭はもとより國家としての損害であるから今後とも危險を防ぐべき方法を講ずる必要がある、從つて今回の生存者から充分なる實話を聞き是れを一般に知しめ、今後の參考としなければならない、兎も角もかう云ふ事で一般青年間に冒險を恐れる樣の氣風を起させては困る勇敢なる日本男兒にはそんな事はない筈だが、無謀の猪勇は今後とも戒めねばならない』云々。(五、八、九、萬朝)

◎雜　報　落合海軍屬の死

膽を据ゑて動くな　『今度の大學生の悲慘事は山岳旅行に對する用意と心得が足らなかつた結果ではあるまいか、私は常に此の旅行をやつてゐるから將來此種の旅行をする人の爲めに自分の經驗をお話しよう、深山に分け入ると想像意外の變化を來すもので、山の霧に襲はれ又は風雨や吹雪に逢つた場合は眼前の大木さへ見えず岩石が落ち木が折れるなどの危險事に遭遇する、それが突然に來るのだから少しも油斷が出來ぬ、之に對する注意は先づ日のある中に夜泊る仕度をするのが肝腎で途中霧や雨に襲はれた時は膽を据ゑるに限る少時は煙草でも吸つて靜かに磁石を見圖面を擴げて研究するがいゝ、何んな霧でも一二時間後には霽れ雪も三十分後には路の判るまでになるものだ、若し此の際狼狽して小路でも辿らうものなら俄に變る山の容に方向を誤り飛んでも無い所へ出て疲れと寒氣に倒れて了ふ、故に携帶品としては完全な地圖焚火をする爲めの火燧石及燐寸、數物兼防寒用の犬の毛皮眞綿の下衣胸にかける歩度器、鉈鋸等の刄物、食料品としては干飯、干鮑、鰹節、鑵詰類等であるが此の中最も必要な圖面は參謀本部と本署の調査に成る完全なものが出來てゐるから旅行者は其目的とする山林の圖面を寫し專門家に就いて〳〵説明を聞いて行くがいゝ本署でも出來得る限り便宜を計るつもりである、今度の悲慘事も途中雨又は霧に襲はれ驚いて小路に踏み迷つた處へ暴風雨に遭遇したのではあるまいか、日から考へて見ると此の暴風雨に過日東京地方から甲信地方を襲つた日に相當してゐるからさうとも思はれる』(五、八、九、東、日日)

落合海軍屬の死

信州の國境を踏破せんとて　海軍省屬官落合道德(三三)氏は暑中休暇を利用し信州國境一周調査の爲七月十五日東京を出發し十六日諏訪郡富士見村の瀧澤より鞍掛山系に入り山梨、靜岡の國境を經て岐阜縣坂下に向ふ困難なる山岳地を踏破せんと出立したるまゝ行方不明となりし事件あり、海軍省へ向けては去月十六日附富士見郵便局より坂下に赴く旨報告ありたる儘其後廿五日を經たる今日迄何等消息なく生死判明せざる爲海軍省は同人捜索方を長野縣警察部に依頼し來れり依つて警察部は富士見警察分署へ命じ直に捜索隊を派遣せしめたり因に富士見村より岐阜縣坂下迄の國境には仙丈ヶ嶽、赤石山、池口嶽等何れも七千尺以上一萬尺の高山壘々とあり、天龍川を越えて美濃國惠那郡坂下(木曾川附近にて停車場所在地)迄の行路は頗る危險にして未だ人跡至らざる密生林なり。(八日、長野電話)

四期に別ちて信濃國境の踏破　落合屬は出發前武道修練を目的とせる信濃國境一週の山嶽旅行日程を作製し之を大角高級副官に屆出でたるが之に依れば同人は第一期に於て甲斐横嶽峠駒ヶ嶽駿河、三伏峠、河内嶽、遠江鷄冠山、白倉山、三河八嶽其他第二期に美濃白髮峠、小秀山、飛騨鞍掛峠、越中五郎嶽、三ッ嶽其他第三期に越後柏峠上野淺間山第四期に武藏十文字峠大山甲斐朝日嶽其他が主なる山岳なり出發地點は山梨縣東八代郡富士見村にして出口の場所は(一)信濃上野國境碓氷峠(二)信濃越後國境關川(三)信濃美濃國境木曾川の何れかの豫定なり。

休暇の日限が既に切れたのに　『落合君は三週間の暑中休暇を利用して單身登山したので本月七日が休暇の期限だのに何の音沙汰なく富士見村から本省と自宅に宛てハガキで通信があつた計りである、そこで靜岡、山梨、長野の三縣へ捜索方を依頼したのだが同君は四五年來高山を跋渉した經驛があり昨年も大山に登つた位だ』

歸京豫定は六日　落合屬の自宅なる麻布區笄町一三二を訪へば同氏は未だ獨身にして實父の姉に當る英子（六十）と二人暮しなり、英子は涙ならに語る『道德は原籍高知市鷹匠町一七で實父臆藏は神戸に代書業をして居ります、當人は三十五年横濱の第一中學を卒業後海軍兵學校に入り卒業間際に腦病の爲め退校機關兵を志願し四十二年海軍省筆生となり水路部に轉じ更に海軍省大臣官房附となりて筆生より海軍屬に昇り目下月俸廿圓を貰つてゐます、先月十五日午後十一時新宿發列車で出發しましたが服裝はカーキ色詰襟服に鳥打帽を冠り、白襯衣の上に黑の兵兒帶を締め用意の爲め竹の皮の笠、黑の雨合羽、二尺の軍刀、草鞋、脚絆等を携へ尙ほ食糧は出發翌日の十六日一日分として握飯十一個を持て行きましたが其他の食糧は何だか知りません、性來山歩きが好きで毎年夏休みには必ず山岳旅行をやります、歸京の豫定は六日の日曜ですが翌七日は簡閲點呼の爲め召集されて居りますのに未だ歸らぬのは寔に心掛りです、何しろ後にも先にも一人息子ですから神戸の阿父さんは大層心配して明日（九日）にでも來る筈です』

思ひも寄らぬ峰越しの冒險　『えらい冒險な事をやつたものだ、富士見の瀦澤から出發したとすれば富士川の支流釜無川の水源なる釜無山（二五五一米突）から水流の谿谷に沿うて駒ケ嶽の裏に出る、これまでに野宿をしなければならぬが此谿流を下るにしても魚が上らぬ位の瀧が二つあり七ツ釜などの險がある、それから仙丈嶽に峰越しに出るのは大冒險である一度は里に出て上伊那郡美和あたりへ出て更に登山するのが順序である、三ツ峰嶽は甲信越の三國に跨つてゐる高山で大井川の水源であるがこれを越えて峰つゞきに赤石山に登らうなどは大困難である何にせよ此山系は富士見から向つて左に富士川右に天龍川の谿谷を控へてゐるので頗る山勢急、一歩誤つたら溪谷の間に迷うて何日經つても出られない所だ、密林がつゞいて人跡絶えた處と云つてもよい』云々。

山には經驗がある　親友なる芝區濱松町一の一五海軍省屬官狩野國雄氏は語る『落合君は高知縣の生れで親は神戸に居られます、頗る剛膽の人で常に體育を重んじ劍道にも熟達して居ます精神修養を重んじ酒色は絶對に遠ざけ暇さへあれば探檢旅行をします昨年も足柄連山を踏破しました、今年は休暇に信州の國境を探檢すると言つて出發されましたが旅行には劍を離した事は無いやうですそして參謀本部編纂の地圖を懷山用意して行きました、行方不明とは案じられることですが今迄の經驗もあり剛膽でもあり地圖とても充分の用意あることゝてまさか生命には別條あるまいと思ふが帝大學生の事もあり旁氣にかゝります、氏は非常な敬神家故此際神佛の加護あらん事を祈つて居ります』（以上五、八、九、東日々）

◎雜　報　落合海軍屬の死

◎雜　報　落合海軍屬の死

落合氏の行方は今以て不明、大角副官曰く『悲しき運命に遭遇したものではないかと想像される』

信州國境の冒險的旅行を企てゝ前月十五日の夜新宿を出發した儘行方不明になつた麻布笄町百三十二海軍省大臣官房屬落合道德（卅一）氏の行方は今以て不明である八日來甲信各地の警察署は人夫を雇ひ幾組にも別れて捜索してゐるが今以て解らない、或は帝大學生同樣の悲しき運命に斃れたのではないかと氣遣はれてゐる、落合氏が海軍省に提出した旅行豫定表及び前月十七日麻布の自邸に送つた葉書等を綜合して見ると何うしても前月の廿日頃に美濃國坂下局に着いて自宅から送つて貰つた名刺を受取つてゐなければならぬ筈であるのに其事の無いのは何うしても悲しむべき事實を想像させられるといふのである落合氏の旅行の出發點なる信濃の富士見村より美濃の坂下との間は仙丈ヶ嶽赤石山其の他八千尺以上の高山重巒として附近の獵師すら滅多に足を踏入れた事の無い山續きであるから或は道に迷ひ殊に先月二十七八日の暴風雨に惱まされて遂に落命したのでないかと想像されてゐる、九日正午頃麻布の落合方を訪ねると道德氏の伯母ひで子は眼に涙を泛べて今以て何等の便りの無い事八日夜九時頃坂下局からは名刺を本人が受取つて居らぬ事、越後の關川局止の金も其の儘局止になつてゐる事など海軍省に返電があつたと言つてゐた、昨夜海軍省の大角副官を訪ふと曰く「何うも氣の毒の次第だが悲しき運命に遭遇したのではないかと思ふ捜索隊は日中だけ八方を奔走してゐるが夜は夫々の根據地に引上げる事になつてゐる、帝大學生等の遭難とは異つて落合氏の旅行區域が廣大であるだけに捜索が一層困難である、先づ四五日位は掛らうと思ふ。（五、八、十、都）

二一〇

藥草採りが獵師小屋で會つた　行方不明の落合海軍屬は山梨縣警察部の捜索に據れば去る七月十六日の朝長野縣落合村字瀨澤の飲食店吉見屋に休息し此處にて草鞋四足を燐寸を整へ國境の高山地帶跋渉の順路を尋ね其主人より案内者を勸められたるが參謀本部の地圖あれば其必要なしと稱し同家を立ち出で釜無川の左岸より河を渡り山梨縣鳳來村の内字大武川部落に出で駒ヶ嶽山系を嶺傳ひに進み同村の北西三里餘の山中字中野川の獵夫小屋に入り宿泊したり折柄鳳來村字大武川の高木斧七、名取與吉の兩名は高山植物藥草オニクの採集をして同山中を奔走し其夜右の獵夫小屋に入り來りたるが前記の落合屬が占領しあり而かもカーキ色の洋服を着し菅笠脚袢の扮裝にて一見官吏風なるより名乘り合ひ初めて其落合氏なるを知り登山の目的等を聽き斧七、與吉は登山の道順食料品護身刀の有無迄注意する所ありたり翌十七日秋を分ちたるが落合氏は其當時握飯四五個及生豌豆六合計りを携帶し居り斧七等が餘り食料品の少きを尋れたるに自分は少食なれば此以上を要せずと言ひたりと其後は不明なり。（甲府電話）（五、八、十、東朝）

生か死か落合氏の行衛　行衛不明となりたる落合海軍屬に對し山梨縣に於て今日迄の取調によれば落合氏は七月十五日長野縣富士見驛に下車し直に海軍省に端書を出し同日信州諏訪郡落合村大字手澤伏見屋飲食店にて草鞋四足と燐寸二個並に絲針等を買ひ求めたるより店主は其行先を尋れたるに駒ヶ嶽に登山する積なりと語り其後は絶頂を極めたる上ならでは定め難しとて店主が

危險且困難なればとて止むるたも聞き入れず自分は參謀本部の測量地圖を持ち居るを以て安全なりとて登山に關する種々の樣子を聽取し意氣暢々として同店を立ち出でたる由にて其處より五六丁を隔てたる山梨縣との國境釜無川の上流北戸巨摩郡大武川と稱する部落に出で夫れより五六里登山したる迄の事實は確かなるも其後の消息更に分らず左れど二三日前甲信國境なる上萬木の雜貨商に年齡卅二三歲の男來り休みて甲武信嶽に於ける今度の大學生の變事に就て噂して立ち去りたるあり同縣にては多分其男が落谷氏なるべしと專ら其方面に向つて搜索の手を擴げ居れり。(甲府九日電話)

山小屋に泊り合せし二人　九日午後三時半北巨摩郡靈ケ原警察署より山梨縣警察部への報告によれば大武川部民高木斧七、名取與吉の兩人が去月十六日高山植物採取の爲め駒ケ嶽へ登山し、其歸途大武川より三里許り隔たりたる中ノ川の山中に於て山小屋に一休みせんとしたるに一人の官吏風の男艇れ居たるより誰何したるに件の男は海軍省屬落合道德と記せる名刺を取り出し兩人に渡して駒ケ嶽に登山したる後諏訪郡坂下町に出づる積りなれば、二十日迄には再び此小屋に歸り來るべしと豫言したるより兩人は駒ケ嶽より坂下町へ出づるには北川の上流より上伊那郡美和村大字境に通ずるが最も近道にて、而かも一般人の取るべき路なる旨を敎へたり、其際落合氏は食料として握り飯三四個と生豌豆五六合を所持し居たるも其の量如何にも少きを詰りたるに氏、は『自分は常に少食の習慣なれば之れにし充分なり』と語り其夜は三人共件の山小屋に一夜を明かし、十七日朝其處より別れて兩人は歸宅し、落合氏は諏訪郡落合村に向ひたるものにして護身用として一尺三四寸の日本刀一腰を所持し居たりと、因に上伊那郡美利村は右山小屋より六七時間を以て出づるを得べく途中北川と駒ケ嶽の中間なる鋸嶽は非常に危險なる場所なれど之れとて關遠ひあるべしとも思はれず、一本道にて他に迷ひ込むべき處もなければ先づは安全と見るべく若し落合氏にして豫定を變更したりとすれば釜無川の上流奥仙丈ケ嶽を越ゆるより外に取るべき道なきを以て目下頻りに同方面の搜索に全力を注き居れり。(甲府九日電話)(五、八、一〇、時事)

古來未踏の神秘境　行方不明となつた海軍屬落合道德氏の行程を豫想して見ると去月十六日下車した中央線富士見驛は甲府から十四里程の所で信州の入口である此れから甲信の國境を登るには富士川の支流釜無川の沿岸か山の峽を傳はつて進まねばならぬが氏は之を經て駒ケ嶽へと出たらしい駒ケ嶽は海拔八千尺位で山は大變峻嶮だが每年多少の登山者が有るので道はついて居る富士見驛から駒ケ嶽までは十里程である更に氏は甲斐、駿河の國境である仙丈ケ嶽へ突入した模樣だが駒ケ嶽と仙丈ケ嶽との間は二里位である仙丈ケ嶽から奥は次第に嶮嶮で迚も路等は無い氏は恐らく此の險所を前進して甲駿の國境白峯山脈を左に見て天龍川の支流田代川の水源地帶の澤を渡つて前嶽、逆山等を眺めながら信州下伊那郡靜岡縣安倍の境なる赤石山へ出たのに相違ない赤石山は海拔約八千九十五尺で仙丈ケ嶽から十數里程で富士見驛からは大概十日間位の日程を要する即ち落合氏が富士見驛を出發したのは十五六日頃であるから茲所へ來た時は七月廿六七日頃で例の暴

◎雜　報　落合海軍屬の死

雨の當時であつたと思はれる故に若し氏が山中で倒れて居るとすれば無論此の赤石山一帶の土地であると想像される山梨縣警察部では臺ヶ原林野警察署から此一帶の地理に精通した巡査數名を選拔し駒ヶ嶽の東部一帶北巨摩郡駒城村方面に出發せしめて目下大捜索を續けて居る。（甲府特派員電話）

隨分思切つた大冒險、日本山岳會幹事木暮氏語る

落合屬の信濃國境一週計畫として大角高級副官に屆出た豫定書は行程を左の如く四期に分ちたり。

▲第一期　甲斐櫛嶽峠、駒ヶ嶽、駿河三伏峠、河内嶽、遠江鷄冠山白倉山、三河八嶽山。

▲第二期　美濃白巢峠、小秀山。飛彈鞍掛峠、越中五郎嶽、三ッ嶽

▲第三期　越後柏峠、上野淺間山。

▲第四期　武藏十文字峠、大山、甲斐朝日嶽。

▲出　口　（イ）上信國境蕨氷峠（ロ）信越國境關川（ハ）信濃國境木曾川。

右の計劃に日本山岳會幹事木暮理太郎氏は曰く『此計劃を見るに到底三週間位の短日で廻れ樣とは考へられぬ每年夏期天候良好の日のみを選んで卅日間宛歩いても五年間は掛るから第一期線のみの突破のみを企てたのだらうがそれにしても隨分思ひ切つた冒險だ先づ富士見から入つたとすると日野春から鞍掛山を過ぎ駒ヶ嶽（二九六六米突）仙丈ヶ嶽（三〇三二・七米突）に出るのだが此邊は雲を衝く許りの密林が續き奥西河内嶽赤石山大澤嶽聖嶽を經て駿遠信の國境光嶽に出る迄約三週間を要するが其間過日の暴風に遭遇したとすると其の困難は察するに餘りある勿論千古斧鉞の入らざる大森林であるから餘程熟練した人夫でも時には墜落の悲運に會ふ事は珍らしからぬ何にしろ信州國境一週計畫を立てたのは今回の落合屬が嚆矢である』云々。（五、八、一〇、東每夕）

仙丈ヶ岳に向つた形跡　信州國境に入りて行衛を失ひたる落合海軍屬の踪跡に就き山梨縣警察部にては所轄臺ヶ原分署に命じて捜査せしめ一面長野縣警察部に對し同人が同縣下へ足を踏入れたるや否やに付照會中の處十一回答あり『管下富士見警察分署に命じて捜査せしめたる結果上伊那郡方面よりの報告に依れば落合屬は十八日夕景同郡美和村字溝口に出で部落の民家に一泊し米粉並に草鞋十足、梅干澤庵若干を求め尙民家より贈られたる餡豆一升を携へ同所より靜岡縣境へ向ふ目的にて十九日朝發足せり即ち豫定計畫に隨ひ釜無山を越えて釜無川の水源を探り鋸山の嶺を西南に渡りて駒ヶ嶽の絶頂を究め北澤峠を經て美和村に出でたるものと想像せられ十九日は甲州境より上伊那郡の東端仙丈ヶ岳に向つて進みし形跡あるも何分二週間以上を經過せる事とて其後の消息明かならず』との事にて最早山梨縣下に在らざる事のみは明かとなりたるより目下專ら長野縣下に於て美和村を中心に捜査中なりと、伯母の歎き母子のやうに思ふて居たと杳として消息を絶てる落合海軍屬の留守宅に伯母お英を訪へば記者の顏を見るより早く老の涙に咽びつゝ『十六日は獵師小屋に泊つて十七日の朝に出立したと云ふ事がわかりましただけで其後の事は薩張りわかりません、昨年大山から足柄、金時の方を經廻つた時などは每日端書を呉れましたんですが……彼は二歳の折に母に別れ私は彼の父の姉ですが自分も不緣だつたものですから一と手に育て上げまし

て兩方から母子同然の情愛で一日も早く嫁を迎へてと考へて居た矢先こんな事になりました、父の隠藏は神戸で代書をしてゐますが病後で來られず、私一人が心配して毎日何も手につきません、今朝こんな手紙を頂いて一縷の頼みにして居ります』と示せるは京橋區中橋廣小路易者成現堂主人の占卦にて目下大困難中に在るも十三日乃至十五日には様子わかり十八九日には歸京の運びに至るべしとあり溺るゝ者の藁を掴む調子にて『之ばかりを頼りにして居ます』と幾度かおろ〳〵聲にて繰返すも却々に哀れなり。（五、八、一二、報知）

會報

日本山岳會第九大會之記

大正五年五月廿八日、赤坂三會堂に本會第九大會が開かれた、早朝から會場へは幹事の面々の外例年の如く白井博士を先頭に、熱心な會員諸氏が見えられて午前十時頃には陳列所も大方整理がついた有樣であつた、その有樣を一寸記すと、齋藤菊三郎氏の出品は毎年かくまでの珍品を出される御所藏の無盡なのに驚くべきで德川初代の日本全圖の寫の如き念を入れて見る時間のないのが惜しい樣なものであつた、地理學教室のアルプス山系の大額山崎博士の說明付で大きな立派なものであつた、白井博士の出品も頗る面白いもので薏齋の日本山岳圖や慶尙道の掛物など中にも大したものゝ樣に拜見した、高野氏の出品の透明畫はいづれも實境に臨む感のあるもので、辻村氏出品の高山植物と相俟て、凉味あふるゝ概があつた、附中山岳會と慶應山岳會の寫眞はやはり中學生と大學生との差は見えたが何れも仲々珍らしい景も見受られた、田中子爵の出品はいつもながら詳しい說明付で敬服すべきもの井上氏の出品もその量に於て質に於て珍らしさに於て感服すべきものであつた、市河氏の出品はその收穫力の甚大なのに驚くの他なく Fluzioy の眞蹟の如何にも船乘らしいのなど今尙目に見える樣に思はれる、中村氏の油繪と茨木氏の水彩畫は何れも淸新畫面にあふるるもの、武田氏出品の盤梯山爆裂當時の新聞は種々の報道や田中智學氏の紀行等があつて頗る珍とすべきもの、梅澤氏の輿地圖が北海道だけ松浦先生の圖の影響で他と樣子が違ふのは一寸面白い樣に思つた、松宮氏の登山紀念寫眞帳は前年大阪と東京の朝日に紀行の載つた登山旅行隊の產物で旅行順に

その旅程等を簡單に記された物思付きのものであつた、大關氏の出品に一々詳しく説明があつたのは有難かつた其他八木氏の圖稿の精密驚くべき、木本氏の寫眞帳の目新しき、川村氏の天狗麥飯の珍奇なる夫々觀覽の人々に多くの趣味を與へた樣に見受られた、午後三時頃からは殊に立込んで來て古圖などはとても落着て見て居られない樣であつた、五時半に陳列場を閉し、六時十分に講演場を開く事になつた、木暮幹事が壇に上つて開會の旨を云ひ、二三會務の報告や本會の態度等に就て説明する處があつて、やがて同氏の紹介によつて岩村圓氏が壇上の人となり、「マツターホルンの初登山に就て」なる題の下に「ウヰムパー」が同山の登路を工夫考案し、人夫を雇つて遂にその頂上を極めた事實を繪や寫眞の幻燈を使つて話された、此題目は同氏が特に趣味を持たれたものであつて、其達意の辯によつて説き來られる處聽者も「ウヰムパー」と共に、苦心し、煩悶し、歡喜し、悲痛なる心地になつた、次で大關久五郎氏は「日本に於ける氷河問題」を提出し壇に上り同問題の歷史及び同問題に對する種々なる人の態度について一言したる後幻燈を用ひ一々の實境に於て講演された、この兩講演の大要は共に本誌に筆得したものをのせる事にした故それを見て詳しい内容を知られたい、同講演を終り木暮幹事が閉會を宣したのは午後十時半であつた同日同夜の來會者は會員と會員外の人とを區別せずに數へて三百餘人であつた。(當番記者)

第九大會出品目錄

陳列所の入口から順に外側を次に内側をと云ふ樣に

齋藤菊三郎氏出品

Tyndall, The Glaciers of Alps.	一册
Scrambles Amongest the Alps.	同
The Alps.	同
Baedeker, Swiss.	同
德川初代頃に於ける日本全圖（寫圖）	二枚
諸州巡覽記（西北紀行 南遊紀行）	三册
關八州輿地全圖	一折
鳥目圖のサンフランシスコの圖	同
陸軍省所製の亞細亞圖	一枚
笠置山城之圖（寫圖）	同

山岳

松浦武四郎先生戲圖の北海道　一枚
開拓使刊行我國最初の北海道地質圖　同
水路部刊行我國最初の海圖（薩摩山川港之圖）同
明治以前の外字新聞附圖（鹿兒島灣之圖）同
萬國一覽圖　同
肥前國長崎之繪圖　一折
東京帝國大學地理學教室出品
アルプス山系の大觀
美滿津商店出品
アルペンストック（覆革提紐付）　數本
リユックサック　同
スキー（スエデン式）　一組
スキー（アルペン式）　同
スキー杖　二種
橇　一臺
水呑（一貫張）
冬期雪上運動圖
白井光太郎氏出品
千島一覽　北海道人寫　一枚
佐渡一國山水圖　文海寫　同
七湯方角略圖　廣重寫　同
月瀨尾山梅溪之桀　半山寫　同
愚山之圖　同
東海道海圖　北齋寫　一枚
日本山岳圖　紀眞寫　同
朝鮮慶尙道山川圖　一掛
佐武正一氏出品
瑞西鐵道寫眞　數葉
辻村伊助氏出品
瑞西產種子より培養せる高山植物　三鉢
高野鷹藏氏出品
澄明畫　九枚
白馬山頂より立山を望む、立山の一角、杓子岳（以上高野鷹藏氏撮影）。春の燒岳、德本峠下牛番小屋、瑞西シュピーツ（以上辻村伊助氏撮影）。雄山と淨土と鬼ケ岳（近藤茂吉氏撮影）後立山より立山山稜を望む（三枝守博氏撮影）、冬の八ケ岳（辻本滿丸氏撮影）。
「山の花」團扇　石崎光瑤氏筆　數本
榛原製の日本「アルプス」團扇　同
慶應山岳會出品
特製寫眞　數葉
附屬中學山岳會出品
寫眞　數葉
登山路說明圖　一葉
田中阿歌麿氏出品
住家研究資料
蚊帳　粟藁製岐阜縣
蚊火　麥藁及布片製福井縣五箇村字上打製
白川村平瀨產
かんぢき　福井縣五箇村字上打製
能の手　福井縣五箇村字上打にて採集す
村字上打製
ひがい（繼）　長野縣諏訪湖所產

野尻湖調査資料
大正池研究資料
主要湖沼の結氷解氷の期日及び結氷日數を示す表圖
風の　祝（ペフリ）

神保小虎氏出品
地質學上の名勝の例　秩父長瀞　寫眞、圖、及説明

井上禧之助氏出品
アラスカ洲の氷河に關する地圖及寫眞
スピツクベルゲンの氷河
アラスカ洲の氷河
スピツクベルゲンの氷河に關する地圖及寫眞
加奈太ロツキー山脈の氷河に關する地圖及寫眞

市河三喜氏出品
郵便切手に現はれたる山岳
希臘クリート嶋土人用背嚢
瓢製水筒　（瑞西ツヱルマットにて求む）
山岳に關係せる名士の眞蹟書翰
（John Tyndall; Ch. Lyell; Murchison; J. D. Hooker; J. Ruskin; J. H. Huxley; Lord Avebury; John Phillips. Ch. Darwin; Alfred R. Wallace; Admiral Fitzroy.）

高山植物標品　（パルナツサス、クリート島、イダ山、エトナ山等にて採集）。
Etna, Madeira, Pompeii 等の寫眞帖
各地繪端書

島津久家氏出品

Grenoble, Gap. 地圖
Briancon 地圖
Lac Léman 地圖
Lausanne 市平面圖
Dauphiné-Savoice 地方旅行案内
草本類標品（Grenoble, Belle Donne 山及 Briancon 附近にて採集）

鳥山悌成氏出品
夏の梓川河畔（茨木猪之吉氏筆）

中村清太郎氏出品
戰場ヶ原より見たる太郎山
日光白根山の麓
笛吹川上流東澤の釜

茨木猪之吉氏出品
各地風景

日本山岳會出品
日本、瑞西、佛蘭西の山岳會々員章
武藏風志　河田羆氏著
高山深谷
各國山岳會雜誌

梅澤親光氏出品
關東路程圖
日本輿地圖

大關久五郎氏出品
大正元年より同四年迄歐米にて採集又は使用せし氷河地形研

數葉
一折
同

二一七

究材料の内　十數點

八木道三氏出品
　日本山岳高低圖稿
木本光三郎氏出品
　吉野群峰
松宮三郎氏出品
　登山寫眞帖
川村多實二氏出品
　天狗參飯
別所梅之助氏出品
　婦人の登山　一冊
武田久吉氏出品
　日本名山圖會　文昆筆
　盤梯山爆裂當時の記錄（明治廿一年七月十五日）
Japan Tourist Bureau 出品
　Joapan Tourist Bureau の出版物と海外案内書
　ポスター（山の部）　數葉

名古屋の有志晩餐會

名古屋在住の山岳會員及び山岳愛好家の有志晩餐會は五月十六日午後六時から例の納屋橋畔得月樓に於て其の第三回を開いた、今回は六月上旬當市で開催する筈の山岳講演會に關する打合せ會ともいふべきで出席者の大半揃つた處で八木さんから協議事項を諮り大體の打合せを濟まして後ち膳が並ぶ、新綠滴る前庭の若葉に夏の來たことを思はせて盃よりもサイダー平野水などの冷たいコップの飛ぶこと頻りで扇子を使つてゐるものすらあつた、出席者は左記十五名に過ぎず前回よりも小人數であつたが毎回五六人の新らしい顔が加はつて行くは嬉しい、この夏の登山旅行の豫定をお互ひに語り合つて散會したのは午後十時過ぎであつた。（中村生）

出席者氏名

結城豐太郎	八木道三
祖父江重兵衛	中山益太郎
柴山乙彦	佐藤鍬吉
吉澤愛三	村井德三
天野富之助	長谷川敏郎
鈴置保長	船橋賢鑑
梅澤梅吉	久野眞苗
中村周二	

名古屋の山岳會

六月十日午後七時より在名日本山岳會員主催の山岳講演會を愛知縣會議事堂に於て開く、同地には初めての催しであつたにも拘はらず非常の盛況にて定刻前既に滿場立錐の餘地なき程に埋まりて其數二千五百名と註せられ遂に門を閉して入場を謝絶するに至つた、日本銀行支店長結城豐太郎氏は開會の辭として登山趣味に就いて縷々感想を述べられ、高野鷹藏氏は幻燈寫眞と共に日本アルプスの位置や歐洲アルプスの比較を行ひて懇切に紹介せられ、次に辻村伊助氏は其長軀を壇上に現はして歐洲アルプスの旅行談を自ら撮影し來た幻燈寫眞に就いて講演せられたるが其グロッス、シュレックホルンに於ける遭難當時に及びし時などは場内靜まり返り扇子使ふ手も止めて聞き惚れ居たる位來會者に多大の感動を與へ大拍手の裡に十時閉會したり。

神戸講演會の記

寶亭で當地在住會員久々振りの晩餐會を開いたのは諸君の頭に今年登山計畫が熟しかけた初夏の頃であつた、其席上で神戸でも講演會を開いたらと云ふ動議が今村先達から出た、時節柄此提案には誰れしも賛成で之れが講演會開催の抑も々々の發端である。

夫から早速高野幹事へ照會したが結局七月八日に繰合せが出來るとの返事を得たので、一夕銀行集會所に委員の相談會を催し會場の選定、聽講券の配布先き其他の打合せをした。

此絶好の機會を捕へて高野幹事の歡迎會をも開くことゝして京阪の熱心家諸君へも夫々案内狀を送したるに、當日たる七月八日カフエーオリエントに來集せられたるは左の諸君であつた。

榎谷徹藏君　竹下英一君
朝鮮記太留君　山口季治郎君
（以上大阪）
毛馬新次郎君　長野武之丞君

近藤悌助君　山岸信意君
後藤正彦君　中澤政次郎君
高城荒三君　松井邦三君
武山良次君　松本幸次君
山口賢治郎君　笠原正吉君
田中孝雄君　川上勝彦君
鹿島房次郎君　古川雉郎君
横山治郎吉君　今村幸男君
塚本永堯君　山崎敏太郎君
福田門彌君　富永恒太郎君
大迫武吉君　（以上神戸）

而して誰憚らぬ水入らずの會合、殊に天狗揃ひとて各得意の話題に對して放談縱横大いに花を咲かせた、既にして宴酣なるに及び今村先達の挨拶高野幹事の答辭、型の如く交換せられ和氣靄々裡に宴を閉ぢ一同は講演會場なる高等商業學校に道を急いだ。元來高商は市の東方に偏在し、此種の會場としては太甚不適當なる哉の感を免れないが併し遠きを厭はず來會する聽講者は熱心家に限るのだ、此意味に於て吾々の希望する聽講者の自然選擇が出來る譯なので會員岡田先生に願つて權威ある大講堂を借りた次第である、又吾々は千人の不眞面目なる聽衆より、假令百人でも熱誠なる聽衆が慾いと云ふ、所謂量よりも質と云ふ見地から壹千枚の聽講券を市内の重なる學校及知識階級に配布して野次馬を喰止めたので滿場立錐の餘地無き迄の盛會であつたに拘らず能く會場の靜肅を保つことが出來たのは大に仕合せとする處である。

却説時至るや、鹿島君は其偉大なる體軀を演壇に現し開會の辭を陳べ且つ、自分は多方面の山を知らぬから此所に出る資格は無いかとも思ふが只富士は大いに通の積りだ、世間の人は大男は山登りに不適當の樣に謂ふが私は體量二十二貫あるのに去年迄十九回登山した、山に慣るれば大兵肥滿でも高山深谷の跋渉に何等の障害とならぬ事は證言が出來ると謂つた樣な實際問題に觸た有益の話があつた。次に今村君は最も得意とする山岳趣味の鼓吹で豪快にしても而かも纖細なる情緒を帶びた風景美的山岳論を以て青年諸君胸奥の琴線に強き衝動を與へ且つ高尚なる品性が原始的なる山岳

旅行に由て養成せらるべきをも附言した。次に高野幹事は幻燈を映寫し日本アルプスの地理的關係及び歐洲アルプスと比較して特異の地質模造を有し森林の美と溪水の消冽なる、若くは山麓に於ける温泉の存在等を説き復轉してカール及びクレバスに對する詳細なる説明を試み精巧なる映畫と相俟て恰かも學術の實地指導を受けつゝあるが如く聽衆に多大の興趣を起さしめた。斯くて塚本君により閉會を宣せられたのは正に午後九時半、夫より會員一同は階上の一室に集り愉快なる閑談に時を移し袂を惜みつゝ家路に歸るべく校庭に出たが思ひきや雨がしと〳〵と降て晴天に傘を携へざる連中を尠からず困らせたが、俥はなし、夫れかと謂つて中々止みさうにもないので雨の中を思ひ思ひに歸途に就いた、高野幹事は羽織袴と云ふ裝束なので一番困られたがとう〳〵濡鼠のやうになつて電車迄徒歩かれた何とも御氣の毒の次第であつた。（大迫記）

◎會　報　第十六回有志晩餐會記事

第十六回有志晩餐會記事

登山の時節過て初めての晩餐會は九月十七日午後四時から四谷見附外の牛肉店三河屋で開いた。虎疫と云ふ惡い病氣が流行するので第十五回の樣な面白い會合の出來なかつたは當番幹事の甚だ遺憾とする所であつた。のみならず今回は本會から幹事一人も出席して下さらなかつたので何となく會になくてならぬものが不足して居る樣る感じがして行く所まで行かれない行きつまつた所があつて――或は私一人の不安であつたかもしれぬ――會するもの冠松次郎氏、岡埜德之助氏、近藤茂吉氏、石川光春氏、加山龍之助氏、何英吉氏、茨本猪之吉氏、と當番幹事濱名、寺内の九名で例により冠君の眞川よりせる藥師登山や加山君の後立山縱走、茨木君劍嶽登山の話しから茨木君の美術院脱會事件より。山岳畫家の棚卸しが始まる院展の批評が起る仲々の盛會であつた。當番幹事の發案で今回は本會幹事の出席者絶無なる廉により次會幹事は本會幹事缺席者に晩餐會全會一致を以て强

制的に當番幹事を讓渡す事に決議し梅澤親光君、木暮理太郎君、辻村伊助君、に推薦狀を奉呈することとし三氏に決定した。猶今回の論談中に是非報告したい事柄が提案せられたことである、と云ふのは元來山岳會は今迄可成な努力をして此所迄發展して來たそして又實際的方面に於ても會誌上に登山道を紹介するとか或は案内者に證明書を附與しやうとか或は登山具の製作を督勵するとか種々活動して居るが會員と會員との内面的實質を考へると甚だ漠然たるものがある。先づ會員が一寸登山に關して其方面の山岳を調べたいと思ふ時若しも會員にあまり知己がない或は其方に精しいものを知つてゐないとすると會の事務所へ手紙で照介する、さうすれば當面に業務を有する幹事等が急がしい内を報告に費されて回答せられそれが全然完全なる滿足を會員に與へると云ふことは考へられぬし又會員の内で山岳畫を多く畫いたを會員に見せたいとか或は寫眞を陳列したいとか又は會員に批評して貰ひたいとか誰かが登山の話しを聞きたいとかいふ場合に會員間にクラブ樣のものがあつて圖書や地圖を自由に閲覧し得又室を利用し得るとか又は二三人集まつて話しが出來るとか會員が山岳に關し種々の方面に利用し得たら愉快であらうと云ふ樣な話しから、我々同人が財原は或方法で得らるゝ自信があるとして下に記する程度の山岳クラブを持つたら大變都合がよくはないか。先づ圖書や器具地圖等を陳列若しくは格納する室一個所會員が隨時來りて圖書や參考書を調べたり計畫したり又は互に會合してくつろいで話しでもすることの出來る十二疊位ゐの明るい感じのよい室内家具と裝飾を持つ室そしてタイプライターの二臺位は隅にあつて海外通信位ゐは一寸出來得る樣にし萬事快よい感じのある室一個と二三十人の會合し得る室二十疊位のもの一個（之れは時によつては賃貸しをしてもよいと）即ち合せて三室を有し及びし之れを管理する事務員一人とこれだけの設備でよいから欲しいと云ふのが提案の大體なのである、現在では會員有志が建設するクラブの形式として他日出來得れば山岳會館として世界的のものとしたいと云ふのが同人の大體の腹案

と成つた次第である。私等は此の案が單に第十六回晩餐會の坐談のみに終らず常ひに會員や又は幹事方の賛成又は計畫によつて具體化する樣進行せしめたい希望を持つて散會したことを玆に報告したいのであります。

當番幹事　濱名增雄
寺内安能
（丑生記）

（附記）會の幹事の一人も出席しませんでした事は、會員諸君に對して申わけが御座いません、どんな無理難題を云れても仕方がありませんとあきらめました、御話のあつた事に就ては、吾々は賛成と云ふよりは、吾々の希望の一つで御座います、今直ちに實行する事は、果して出來ますや否や判りませんが、必ずや此事の實現を期して居ります、私等幹部のものゝ足らざる所は、どうか諸君から御叱正を頂きたいので御座います、只だ私達は「山岳會」は私達一代のものでなく次の代も三代目も、四代目も幾代となく續けたいので御座います、一夜作りの建築物でなく、基礎の確かな建物にしたいので御座います、どうか此機を利用して諸君の御援助を願上ます、此晩餐會で語られた此事は必ず反古にはならぬ事と存じます、私はくれ〴〵も私達幹部のものが、自用にかまけて缺席した事を御詫び致します、私は十五回目迄は總て出席して居りましたが、とう〳〵十六回目に御叱りを蒙りました、然し一面斯く吾々幹部のものを重要視して頂く事は心から嬉しく御禮を申されねばなりません一言私として附記致します。（高野鷹藏記す）

次回の當番は引受け升、勿論皆樣御出席被下のでせうね。（新幹事）

◎會　報　會員芝川又之助君の死を悼む

會員芝川又之助君の死を悼む

芝川君は浪華の豪商芝川家の所謂「ぼんち」育ちの好青年でした、自分は山のお仲間として以外、昆蟲學の方面で御近づきでした、將に壯年の域に入らんとして、無くなられたのですから、所謂社會的の事業と云ふ方面の事は餘りに現れては居りませんでしたが、眞面目な優しい人でありました、自分は芝川君の小傳を物したいと思ひましたが、それよりは氏の半面を語る、氏の友人にして吾々の友人であります、榎谷君の手紙を掲げました、確に自分達が千言萬辭をつらねるよりは氏を語る事いやまさる事と思ひますから。

芝川君は同棲一年に過ぎざる美しき愛妻と忘れ形見の一子を殘して幽明所を異にしました、芝川君の死を思ひ、哀れに咲き殘れる美しき花一枝、思へば悲しい事で御座います、天かける氏の靈果して、何の涙を此一枝に注げるにや、想ふても悲う

◎會報　會員芝川又之助君の死を悼む

御座います、はら〳〵と散り行く花の春の末、芝川君は歸らぬ旅に立つだので御座います(高野生)

『御申越しの芝川君の小傳に就いて、何か書けとのことで御座いますが、勿論親友であつた好しみとして、是非とも書かして頂き度く、望む所ですが悲しい哉、殆ど何の資料も有つて居らないことを、限りなく惜しみます。唯、中學時代に私より二年下のクラスであつて、その後、山口の高商を卒業せられて、山岳會へ仲間入りをせられてから、時々宅へ來られたといふことの外、何と云つて、別に取り立てゝ言ふ程のことが有りません。兎に角、あう云ふ穩和な、至つて圭角の無い、大都會の人としては珍しい、流石、大家の育ちとして、どこか、ゆつたりした所のある人でしたから、つまり、書き出す程のことが無いのかも知れないと思つて居ます。それから何ういふ山へ登られたかといふことも、しつかり分らないやうです。趣味の方面から云へば、本來の性格上、さう極端な、狂熱的な愛着といつたやうなものも無かつたやうですが、矢張り山岳中心に、何の穩やかな情緒が動いて居

たやうでした。それに鳥渡異樣な感がせないでもないのは、あの通りの家庭に育つた、あんな富豪の息子さんにも拘はらず、常に細密の注意を拂つて、節約といふやうなことを心懸けて居られました。能く宅で、寢轉び乍らの話に、スヰスへ行つて見度いと云ひ々々して居られたことを忘れません。尙、あの君は、非常に几帳面屋で、又非常に親切であつたといふことは、或は君の全性格を總括し得る辭では有るまいかと考へられます。私個人としては山を離れて、唯の友人としても、甚だ有益な、有力な人でした。「君を惜しむ」だとか、「あなあはれ」位の辭を以て、哀悼文を公表するには、私の力は餘りに微少です。しかも單なる感情文でなく、小傳となると、右申したやうに、親友で有つたにも似ず、資料が有りませんから、何うかこの役目だけは御免にして下され度う御座います。尙、從來、私は君の訪問を受けたばかりで、一度も、往訪したことが有りません。それは、御影の方の住宅から、毎日のやうに當地の宅へ、晝間來て居られてその晝間は又、私が忙しい時間で

あつたのなども一つの原因でした。其れだから、家人は、どなたにも馴染が有りません。御影の新夫人なども、素よりまだ挨拶が濟んで居らないのです。(榎谷徹藏)

會員登山報

△七月十六日　今日も風の吹き廻し何となく面白からず候得共ウスラ〳〵と日の影見え初めては四日間の雨に氣をいらち居り候折柄なれば荒れゝば荒れた迄と嘉門次を案内に明神池より穗高三本槍をカケル事と致し候順路に三ノ池の傍より下宮川の澤に入り、夫れより明神の頭迄は先年の烏水さんの行路と同樣、其後氏はワデシヤの側を通られ小生は岳川の側を採りて三本槍の内二本目迄登り候頃をひに最前より大聲擧げ息を切つては寄せ來り候霧は凄じき勢となり雨さへ加はり今朝の惡兆たちまち現はれて荒初め危險時々に相加はり而も此荒を待つ丈の糧食も不充分附近露營の地も無之き爲め霧の内に隱見するスケ目前の東穗高を後にし涙を呑んで岳川の白出目當に未踏の地に賴り下山仕り候此日の行路の概畧を左に申上ぐれば、

先明神三ノ池より右に折れて宮川の澤を登り次に澤に離れてツカ、ゴヨウ、唐松の林に入り次で更に右折して下宮川の大ナギを登りて明神の頭に出づるものに御座候明神の頭附近一體は猪の巢とも稱せらるゝ丈に到る處猪の足跡(折には熊の足跡)を追ふて進み候明神の頭より東穗高迄は一面のガラにして殊に二本目の槍附近は此間の難場に御座候得共夫より東穗高のキヤ部迄は下りにして比較的容易に候斯くして東穗高迄ナギの渡りづめ、之れを穗高槍間の縱走に比するに後者は年々二三組の縱走者之有登路も明瞭、馬乘りに乘る處等は無之候が前者は足跡等勿論藥にしたくも無之爲めに墜石や、ぼくりとはぐる岩壁多く其險峻と相俟つて後者に劣らずとの事もあるべしと存ぜられ候、たゞ後者は口傳多きが爲め前者に比して世人のよく知る處のみ若し吾人にして穗高の峻嶺彼のキヤ部を重れた所謂岩の王樣を知らんと欲せば平々凡々たる一般登路を離れ而も案ずるよりの生が易しの言の通りさしたる困難も無之候故此登路に依らん事を御勸め致したく先は右概略御通信申上候。(上高地にて佐伯生)

△二高山岳會も今年にて中上川、石川の兩雄を送り何となく淋しくなりましたが又今年の入學者中に多數の山岳狂を發見し得る事とそれ許り待つて居ります。去五月二十日の午後より藏王のつゞき屏風岳に有志の登山を致しました、鎌先溫泉(東北本線白石驛より約一里半)に一泊の上不忘山よりリツヂをつたひ南屏風(當日命名致しました)より屏風三角點に出ました、五月の半仙臺ではもう鈴蘭が咲き出した頃でしたが屏風の名の起きた大岩壁にはまだ物凄き許りの積雪を見ました、槇山次郎君も同行にて迚も盛夏では日本アルプスでも一寸見られぬ雪だと話した位で御座いました。雪の上屏風のリツヂは偃松がありその猛烈さ加減は可成りで時々胸のあたり迄墜落したり致しました。峯には偃松の外に岩高蘭、あなのつがざくら、みねずわう、こけもものの群生がありました。岩

◎會　報　會員登山報

高闊の上に背をうづめて雲の海を距てゝ遙かに吾妻、安達太郎の諸岳を見入つたときやつぱり山へ來た人だなあと思ひました。ひまつの香と殘雪の色とをかためて作つた山の空想はやがて穗高に飛び槍に移り立山を過ぎて高山深谷で おなじみのスイスの山々にさまよつたので御座いました。時期が採集には少し早かつた爲めに胴籃は輕くて下山致しましたが、それでも白山いちげや、雪割小櫻、深山きんばい等聞いても美しい花で充ちたので御座いました、鎌先附近は白根葵の花盛りだつたのも美しい記憶の一つで御座います。いづれ詳しき事は槙山君が投書されるさうですから、これでやめに致しませう。二高山岳會の今夏の旅行は常念山脈縱走と針の木、立山、白馬方面のものと二隊であります。先日試驗が終つて歸京の途で福島から一寸吾妻へ行つて參りました。同行は槙山君だけで御座いました、

福島にて下車し庭咲迄奥羽線によりそこより微溫湯（ぬる湯）迄三里許こゝにて一泊こゝの湯は名に背かず日向水位の溫度にてその寒き事と御話しになりませんでしたが上つたら可成暖かになりました。こゝから小富士に登り爆烈火口に到つて下山致しました、安達太郎を南に北に屏風藏王の連岳を見ました。歸京して見ましたら信濃鐵道の割引を下さるとの御手紙を頂きましてありがたう御座います、御面倒ながら何卒松本より大町迄往復二枚頂き度く願上ます。

今秋仙臺にて各班の採集品等を陳列致しまして小さき乍ら展覽會でも開かうかと思つて居ります。いづれその時になりましてあらためて御願ひ致しますが。何んでもよろしう御座いますから御出品を願ひたいものと今より御願ひ致して置きます。本會明年度の目的は（年々幹事が異ひますから年によつて目的の異ふ事はまぬかれぬ事と存じます）出來る限り東北の山岳を紹介し東北人に山岳趣味を吹き込まうと思つて居ります。山岳趣味などは小島さんの御説の通り無理に吹き込む必要もないんですが、しかしこの方面の事をよく知らない爲めに折角好きになり得る人を他の下らぬ趣味に向けるのは我々として忍ばれぬ所だと思つて居ります。校長も大いに山岳會には同情がある樣ですから會務發展上大いに好都合と考へて居ります。小生等も微力ながら同趣味者の便宜の爲めに大いに働らくつもりで御座いますが、この上とも貴會の甚大なる御援助によらなければならないと存じます、何卒小生等の眞意のある所を御覽の上御教導下さい。（宮本　璋）

△七月廿三日正午福島發御嶽鼎澤に登山午後六時千本松見晴小屋着一泊廿四日午前十時頃上奥院出發王瀧に下山十二時田ノ原小屋着午後四時一合目普寛碑着 殺坡橋（二三日前釣橋竣工）の奇峭を探りほの暗き頃澤渡峠過午後七時半 常盤橋畔塚本屋到着泊り翌廿五日五時半出發常盤橋を北に渡り元橋、棧橋を經て午前八時上松着德原にて休憩午後三時半駒ヶ岳頂上（九合目）玉久保小屋泊りに決し候明朝午前四時發絶巓の壯觀を味ひ午前九時半の瀛車にて歸坂仕度候。下山は普通四時間といへば、凡べて山嶽志小島氏記事を參考とし大いに助かり候通路急峻なれども一筋道にて分り易く近年次第に小修繕を加ふる多し、小生勿論單獨にて參り候玉久保小屋主人向助吉は八年前前主と變り此主人は毎年七月三十日より九月中迄尙一人の男と共に居る由 又山上清水三太郎といふ石

工石碑建設の多きため毎年夏登山働き居候が此男は木曾口山の道のこと一切引受居るものにてどうかして敬神瀧を溯り上エンケンバ北側に到る新道開設の意有之由、面白き山なれば是非山岳會にて何とか方法を講ずる樣關係のものに御主唱相成りては如何のものにや例年登山者千人位内二割は學生、あとは道者の由（以上木曾口の話）案内者は上松堺重旅館にて取扱ふ一日上下にて一圓五十錢位午後於九合目平久保小屋にて（山崎彦麿）

七月十三日午前〇時半、同僚片岡康太郎君と同行京都出發、松本二時二分着、手荷物は列車出發後に引渡事と相成居り、爲に北松本驛發二時二十二分の列車に遲れ、三時四十四分發の列車にて有明四時四十分着、豫定の計畫を全然變更するの已を得ざるに至り、中房行を明日に延して有明金森旅館に投宿す、降雨止まず。

七月十四日、夜來の雨漸く止み、所々碧空を現す、されど白雲漂ひて山峯見えず、七時半旅亭出發、十一時半中房溫泉着、人夫の來るを待つて二時五分溫泉を發し、五時三十五分燕小屋到着、天漸く晴れ、日本アルプス主脈諸山指呼の間に在り、天候の回復と共に我等の山幸を喜び、不思痛快を叫ぶ、燕頂を極めて小屋に歸れば人夫既に來り、天幕にて小屋掛をなせり、八時就床。

十五日、天候全く復し、展望甚佳し、國惠山兎四疋捕獲す、料理して味噌汁に入るれば味甚よし、七時二十分燕小屋出發、十時二十分切通し、十一時大天井に達し、晝食す、十二時二十分出發、一時二殷小屋着、同四十分發、五時十五分槍澤二殷合流點に着人夫を督勵して六時半赤澤小屋に着す、一高登山隊既に在り、一隅に床をとり九時就床。

◎會　報　會員登山報

十六日、天候少々面白からず、雲の去來稍烈し、五時半一高登山隊と共に赤澤發、七時坊主小屋着、八時十五分槍鑓頂上に達す雲四邊を閉ち九時迄待ちたるも展望全無し、乍殘念下山、十一時赤澤着、盤食後十二時出發、五時二十五分上高地溫泉着。

此行豫定よりも稍强行なりしも一同よく勉めたり案内人夫左の如し、畠山國惠（赤澤にて引返す）矢ノ口榮作、林榮吉、明日又は明後日大町に向ひ出發三上拾造君と針の木越の豫定に御座候先は右御報知迄。

七月十七日認　上高地溫泉にて　若林祐治郎

△小生の旅程申上候。七月十五日大町出發大澤泊、十六日針木峠より蓮華岳に上り峠へ戻つてマヤクボ泊、十七日雨滯在十八日スバリ岳、赤澤岳、鳴澤岳を經て新越の池泊、十九日岩小屋澤岳、扇澤岳、祖父岳を越えて冷の池泊、二十日鹿嶋槍岳を越えて槍の南北峯の釣尾根に泊、二十一日八峯のキレットを過ぎて五龍岳の手前に泊、二十二日五龍岳に上り大黑鑛山に泊、二十三日唐松岳に上り不歸谷を過ぎ長ザクを上つて泊、二十四日不歸の三角點を過ぎ鑓岳を越えて白馬岳頂上の小屋に泊、二十五日雨滯在、二十六日杓子岳、鑓岳に上り鑓裏溫泉に泊、二十七日四ッ谷に下り大町に歸着

北澤君は雷雨を恐れて十八日朝マヤクボより一端大町に下山せられしも翌日矢澤を溯つて祖父岳に出で二十日午前冷の池にて再會し白馬迄繼行致し候。

鹿嶋槍の裏で私は四ッ這ひになつてヘバりました八峯は奇妙な所です大六君の通つた所を横切りました。

二二七

◎會　報　會員登山報

大黑鑛山で御馳走をしてくれました、不歸谷は大黑から行くと下る一方で白馬から來るのと比べると非常に困難を感じます危險と云ふ程の場所ではありません。

不歸谷で二時間も道をさがすのに費やしました、大町の人夫は皆んな初めてです山に弱い臆病者の私として此の縱走はレコードだと北澤が云つてゐます。

余から頼まれた白馬岳の案内書を持參して常盤町の大橋夫人を昨日尋ねました。（加山龍之助、北澤基幸）

△拜啓今夏巡禮の概要左に御報告申上候

今年は連れの都合が惡るく一人で大町へ踏出候處對山館にて不圖京都の會員若林祐次郎氏三上捨造氏並に小林良之助氏の一行に邂逅し共に劍登攀の目的を以て七月二十一日午前八時大町出發籠川谷に入り大澤に野營致候人夫は中村常太郎を先達に都合七人外に東京曉星中學生四人と其人夫五人亦行動を共にし總勢二十人の一隊と相成候二十二日針ノ木峠より蓮華に登り候處頂上附近にて霧小便中々霽れず一同寒氣に震るへて峠に下り焚火に暖を取りて針ノ木谷を下る、小林氏途中過つて一間許りの瀑壺に墜ちたるが幸に怪我なし、黑部川の籠渡しは今朝久々針金が切れたりと聞きしが應急修理の上小生及人夫の一部は之れを渡り他の一行は川上の瀨を渡渉致候處夕方にて水嵩増り激流腰に達して若林氏の如き危ふく流されんとしたる由、こゝの籠渡しは只一本の針金を複線に架したるのみに候へば切斷の虞れあり責めて三本縒り位に致度ものと存候平小屋泊、品右衛門翁は息子の病氣の爲めに里に下りて在らず黑部の岩魚は遂に的てが外れ候二十三日よく晴れてカヤス峠の陣翌申分なかりしがサラ峠に到りし頃遽かに雷雨來らんとして暫く偃松の下に隱れ後續部隊を待つて五色ヶ原に天幕を張り候枕頭ハクサンイチゲ、シナノキンバイ、イハカヾミなど咲亂れて實に天國の樂園と存候、二十四日槍が見えると呼ぶ聲に天幕を這ひ出し晴れたる空に四方の山々を厭かず眺め入り候天を刺す槍の穗は遠がに日本アルプスの權威に候鬼岳、龍王、淨土を越えて一ノ越野營、二十五日小林氏は昨日來氣分勝れず三上氏亦日の都合に依りて劍登山を斷念し今日芦峠寺迄下らんとて二人の人夫を具して雄山頂上に別る、殘る一行は立山連峯を北走して別山頂上硯ヶ池附近に正午過ぎ十五分に天幕を張り候此日の日沒の光景は雲と霧との變化に依つて實て見ざる壯觀を極め候二十六日二人の人夫を露營地に留め一行十四人別山を逆落しに劍澤の雪溪に下り長次郎谷より劍に登攀致候熊の岩中間の雪溪は大龜裂を生じ左の方は融解して巖石を露出致居候一行は途を三方に取り左右の巖壁を攀るもの中央の龜裂を涉るもの〻三手に別れて進み候雪溪を上り切り巖壁を攀ぢて劍の絕頂に立ち得たる時は遠がに山の征服者たる淡き誇りを感ぜずには居られず候ひし空はよく晴れて南方赤牛、黑岳、笠、黑部五郎、藥師等はよく展開せられ候も後立山連峯は頂を雲に蔽はれ白馬、杓子が僅かに頭を出しては倏ち又引込み候頂上に停まること一時間半、下りは熊ノ岩の右方の雪溪を迂回し元と來し途を辿りて別山東越より露營地に皈り海暮室堂に下り候翌二十七日若林氏は富山へ急行、曉星中學の連中は五百石へ、小生は立山溫泉へ向ふ筈にて解隊致候處昨夜室堂に於ける約貳百人の團體が今夜亦溫泉泊りと聞きて少なからず僻易し遽か

に若林氏の後を追ふて追分より直行芦峅寺に到り二十八日富山に出でゝ歸り候斯くて天下の絶嶮と稱せられ候劔岳も容易に登り得て幾分山の價値が下りたる心地致候數年前までの登攀絶對不可能とせられたる時代に於てこそ眞にこの山の權威を認め可得と存候草々

大正五年八月五日　中山益太郎

△坊主小屋より奥穗高及び穗高を攀ぢ候連日晴天可なり眼力を費し候穗高五峰説と其命名は歸宅次第可申上候少々新説がある意に候（松本にて高頭義明）

△一昨十二日（土曜日）當地出發上松一泊好晴氣に乘じ翌十三日午前六時「イタチノナベ」の俗稱を有する人夫を伴ひ出發頂上十二時着（ミイホノ小屋）本岳寶劔岳を極め午後三時出發急速力にて下山午後六時四十五分上松歸着八時六分發にて歸松仕り候當晴天氣で南アルプス赤石山系北アルプス槍ヶ峯及南方面には伊吹山部琵琶湖迄見えたる實に愉快の至りに御座候、右御屆迄如斯に御座候。（松本にて小高秀一）

△八月十日白馬入山雷雨の爲め白馬尻小屋迄會員百瀨愼太郎石川欣一兩氏同行然し兩人とも雷雨いやになり翌日下山八月十一日白馬頂上小屋泊り、百瀨氏の幼弟高男君（十二才）常に先頭たり白馬登山路は大町小林區署長辻氏の厚意にて難有き程よくなりました。（松宮三郎）

△八日中房一泊畠山新太郎の案内にて燕、大天井、二ノ股泊其晩大雷雨に襲れ閉口、翌日當念より赤澤小屋、本日槍より當處へ下り申候槍澤雪田殆んどなく失望仕り候。（松本市にて武山良次、松本幸次、青山好孝、森圓城）

△雪山は標高が新高山と伯仲の間にあります、或人は全嶋第一位だともいふて居ます經に探檢もされた筈です。（臺中藤井乾助）

△小生七月十八日芦峅寺を發し眞川を溯り岩井谷より藥師ヶ岳に匍ひ登り候穗高山まで參る豫定に候ひしも雲霧繁く天候不良の徵あり已むを得ず有峰へ降り高山に出で岐阜より歸京仕候。

眞川の谷底より直ちに二千九百三十六米突の藥師の絶巓に登ることに候間七八合目邊より溪谷俄然峻急と相成り連續せるクレバス、瀧に遭遇しその都度崩落し易き崖側をへづるには辛勞致し候。

岩井谷は立派な谿谷に候その名の如く巨岩の累々たる瀧、淵の多き支流としては比儔少きものと思ひ候殊に深邃なる積翠裡に昌昌たる雪溪を横えて連らなれる藥師の山濤を望みしときはこの旅行の目的の大部分を滿たし候樣に感じ候匆々（冠松次郎）

△拜啓其の後は意外の御無音に打ち過ぎ失禮仕り候、小生等去る七月二十四日大町を發し烏帽子、五郎、黑岳を經て雲ノ平に下りそれより祖母谷の北部の猛烈な藪を藥師ノ堂を目がけて分け降り、太郎兵衛平より藥師に登山。更に尾根を黑部五郎岳、薬師、五六と南下して、今月二日槍下に達し、穗高連山を北より縱走して、四日上高地に到着仕り候、穗高の縱走は思ひの外の困難にて殆ど全日本アルプス中危險之に勝るもの有之べしとは存ぜられず候。

されどそれと同時に岩壁の壯大雄宕は、山狂をして一驚を喫せしむるものと存ぜられ候。之迄穗高の縱走は殆ど上高地より企圖せられしに過ぎざりしも、今回の大町人夫に因り完全に縱走せら

◎會　報　會員登山報

れし事は、小生等の喜びのみならず、今後大町よりの登山客に因つて歡迎せらるゝ所と信じ申し候。案内者は大西又吉に候。先は以上一寸と御報知迄、匆々。

八月四日　上高地にて　中上川小六郎、伴野清

△小倉仲吉君―濁から槍へ（北澤は鹿坊助ですまだ鞍てゐます）

一高旅行部櫻井、澤本、佐田、小田、寺田、渡、六人針ノ木、立山、劔、大黑の二タ組が昨朝出發したきり私達二人は三番目です今年は二十日過ぎが多い樣です、昨日中房へ三高連？十人許りが行つたさうです松本で聞きました、黑部の渡しは一高の連中と一緒に人夫がかけに行つたさうです、梅雨も上つたやうです　爺と鹿嶋が朝の陽に光つてゐます、悅しくつて飛びはねてゐます。（大町にて七月十五日朝R・K生）

△本月十六日駒ケ岳山麓柳澤村に一泊登山の用意を調へ十七日駒ケ岳屏風小舍に十八日頂上より裏山を仙水峠に下り北澤小舍に十九日仙丈岳に上下北澤小舍に再泊二十日仙水峠より朝興岳に登り「ミノリ澤」と「ゴチロ澤」の間の尾根を廣河原に下り白峯の麓に一泊し二十一日早川尾根と「ゴチロ澤」の間の尾根を上り「ゴチロ澤」の頭を經て藥師岳地藏岳鳳凰岳觀音岳を縱走して御室に下り芦安村に一泊二十二日上諏訪溫泉に一泊二十三日より富士嶺野を東海道に出で歸宅の筈に候此行案内者は水石春吉及同林八の兄弟を連れ申候國境線の切明は有之候得共隨分非道き切明け方にて偃松の切株は恰も槍先を並べたる如き有樣にて見るも物凄しく候尙仙丈岳の登り口を本年初めて春吉が見出したる小澤又は朝興岳の間の尾根を「ミノリ澤」の出合に下り候箇所等に付ては別に申上る時期可有之候。匆々（七月廿二日上諏訪にて柳直次郎）

△本日午前五時半嘉義發午後五時十分阿里山へ着候天氣晴朗展望よろしく候（關口　泰）

阿里山に登つて先輩關口君におめにかゝり愉快にたえず（藤山愛一郎）

明朝新高山を見にゆくべく候こゝで會員に遇ひしは愉快に候（四月八日、阿里山にて關口　泰）

△とかく天候が惡い、立山方面に向つた者も大分降りこめられて困つた樣子未だにハッキリしない、山上りには惡い年です、僕は烏帽子より笠岳迄の呑氣旅行も此の天候では見合せる外ないと思ひます、それで先明日（人足あれば）あたりより祖父岳鹿島槍上り一旦大町へ歸着、更に五色ケ原へ出掛て立山を經て歸る豫定です三十一日大町着生憎適當なる人足が居ないので昨日も今日も滯在昨日青木湖へ遊びに行つたが今日はいかに暮すべき今日許りは君をこゝに引張て來たいれ、昨日青木湖畔で横濱の大橋辯護士に會ひました、夫人同伴白馬行は先鞭をつけられました。（大町にて八月二日、今村幸男）

△東京附近の大降雨に比して當地一帶晴天續き、白山、立山への登山者多く、金澤市中諸所に立山登山團體募集とか、白山登山者に對する鐵道の廣告を見出され申候金澤人の越人立山に登らざるを恥辱となすが如く白山登山を鼓吹する狀は名山を有する兩國人の心理面白く候昨三日の北國新聞に某人曙王山より白山を經て栃木縣に至る山脈は日本アルプスと脈を異にせるの理由を以て之れを加賀アルプスと命名せりと聞き大和アルプスの出現に於て驚き

たる小生斯くアルプスも流行的に相成りては吾人の精舍を如何せんとの聖無き能はずと存ぜられ候。(八月四日金澤にて佐伯生)

△報　告

一草鞋（マニラJuteの製）
三日間の經驗により二足乃至三足分に當ると思惟す。
一大町より履き出し針木峠大澤岩小屋泊。
一大澤より峠頂に至り蓮華岳の片石を踏み復りて針木岳中腹をからみマヤクボ泊。
一マヤクボより雨を冒し本谷に出で雪渓を下り大町まで河原を飛び歩き白澤より乾道を大町に着迄使用す
二日目に右左を交替し大町に着せし時左足は先破れたれど右足は猶ほ半日の行程に耐ゆと認む。
一白麻に比して滑らず、柔軟ならず藁より柔し。
一水に入て紐縮み足を締むるが如し。
一カンヂキを穿つには柔なるを以て宜しとす。
一紐其他の突然斷切する事なく縦の心は横糸の切るゝも一里は優に保つ。

一登山客二十日以降多きが如し。
針木、劔最も繁昌す、白馬は申す迄もなし、縦走、加山君に別れて下山明日より祖父、鹿嶋槍へ登る此頃は人夫缺乏らしく候。(七月十八日大町にて北澤生)

△十一日に箕作、矢田部の二氏が高瀬入槍に向ひました。今朝小倉伸吉氏は高瀬入烏帽子へ、一高旅行部六名は立山、劔、小黒部へ。

◎會　報　編輯係より

天候が今まで思はしくありませんでしたが此半ばすぎから快復すると思ひます。

小黒部鑛山事務所、大黒鑛山事務所へ會の名で登山者に對する便宜を依頼して頂きたく思ひますが如何でせうか、迷惑にならぬ範圍で米。みそ、草鞋のゆづり受けだけ出來れば好都合と思ひますから長い行程では是非つぎ場所がなくては困ります。今日加山様が來られる筈です。(七、一四、大町、百瀬愼太郎)

△去る廿六日出發長野一泊の上當地に參り滞在致し居候一昨日は馬の助けを借りて山に入り澁峠道の熊の湯に一泊して笠ヶ岳と横手山に登り候馬にて精々メートルは減じ置き候共双方共に中々峻しき山にて大に弱り候然し久々にて山頂の大觀に接し非常に爽快を感じ申候日本北アルプスは峠にても山にても白馬以南乘鞍まで望まれ候澁峠は變化多き路にて雄大の光景に富み候頂上には偃松あり其他高山植物種々有之候笠の途中の樹の根の穴などは光蘚澤山有之候。(八月廿一日信州安代温泉にて辻本滿丸)

編輯係より

雜誌の發行が段々遲れて參ります、今年内には四冊の雜誌を出して、明年からは年の始めに一號を出すつもりで働いて居りましたが、豫定よりは反つて遲れて、本號が益々遲れました、何んとも申わけが御座いません、一に係りのものゝ怠慢で

御座います、種々の理窟は御座いますが、一に係りのものゝ責任として御詫びを申し述べます。寛恕なる會員諸君に御赦しを願ふと同時に、本誌は、決して、吾々當務者のみの舞臺でない事を申上、幾重にも本誌の爲め御助力と御利用あらん事を願ふ次第で御座います。

本號には例年の如く、會員名簿を附しました、本年度は幸にして會員數も增加致して參りました。登山熱の普及は今年に至つて最も隆盛を極めました、從つて種々の慘事も御座いましたが、此等は要するに過渡期の一現象で御座いまして、死者に對しては、只だ御氣の毒の事と申上る外は御座いません、同趣味者として、山に永遠の禊を得た事は、死して亦瞑する事と思つて居ります、そして此等の貴い犧牲者の死は決して無駄な犬死では御座いません、日本の登山史上、登山術の上に遺すべく誌るすべき事が多いので御座います、山登りの仲間には勳章はありませんが、此貴い犧牲者の名と靈とは永遠に山行く人から忘られぬ事と思ひます。秩父の慘事の眞相は次號に幹事木暮理太郎氏の一文を載せて、將來の爲め又死者の爲め其眞事實を發表する事に致しました、本號は秩父號として秩父の記文を主と致しましたが本號を編輯しつゝありました時、學生諸氏の死を傳へ聞きまして、感慨に耐へませんでした、此れも亦何にかの因緣と云ふべきでしようか。

私達は色々の事を計畫をし又實行しつゝありますが、未だ見るべきものもありません、登山地圖も本號に附する筈でしたが、山名に就て決定を見ず、中止致しました、此れ亦會員諸君に御詫びを致さねばなりません。

それから、本號を編輯する時分より、係りのもの及び事務を扱つて居りますものが、自分の仕事の都合上旅行勝ちでありました爲めに、種々の御問合せ其他の御返事も遲れ勝ちに又御不滿足の點も多かつた事と存じます、此れは茲で御詫びを申上るのも異なもので御座いますが、外に機會も御座いませんから御詫びを致します。

本號は寫眞や繪が殆んど御座いません、此れは從來秩父方面の寫眞が少い事と編者の手元にスケ

ツチも繪もなかつた爲で御座います。

表紙は會員富田溪仙氏を勞しました、印刷上の技術が至らぬので、原畫の趣を傳へる事も出來ませんので御座います。

寄贈

神奈川縣知事有吉忠一氏は、本會幹事梅澤親光、高野鷹藏兩氏の同知事官邸にて山岳講演をなせるに對して金壹封を本會に寄贈されたり、本會は謹んで茲に謝意を表す。

新入會者

兵庫縣武庫郡西灘村ノ内岩屋村一一四　岡田英定
神戸高等商業學校山岳會代表者
紹介者　岡本治之助　古川雄郎　松本善二
東京市淺草區馬道町一ノ二〇
紹介者　佐々木高美　高野鷹藏　川村多實二
滋賀縣大津市大津臨湖實驗所
紹介者　武田久吉　高野鷹藏　田中晴野
大阪市東區湊町驛前
紹介者　朝輝記太留　竹下英一　松岡利英
名古屋市西區本町二丁目八五
紹介者　八木道三　高野鷹藏　吉澤愛三
名古屋市中區南大津町千代田生命支部
紹介者　八木道三　高野鷹藏　近藤悌助
神戸市三ノ宮町三丁目三
紹介者　今村幸男　高野鷹藏　藤田敏雄
東京市下谷區上根岸町五十二番地
紹介者　松宮三郎　高野鷹藏　Rev. Ned. John L. Macrae
朝鮮慶尙南道蓋馬山　Mrs. N. M. Macrae
紹介者　近藤茂吉　後藤正彦
兵庫縣武庫郡須磨町ノ内西須磨村五十三
紹介者　今村幸男　福田門彌　山崎彦麿
大阪府豐能郡豐中村南裏蟲木一八三
紹介者　山口竹次郎　今村幸男　田中二郎
神戸市山本通四丁目九七ノ四
紹介者　今村幸男　笠原正吉　中澤政次郎
神戸市兵庫湊町一丁目一九三番邸
紹介者　今村幸男　高城荒三　西澤平治
長岡市柳原町
紹介者　内田溢二　山田紹之助　時岡鶴吉
神戸市山本通四丁目二十一番邸
紹介者　今村幸男　有坂忠平　植村光
大阪市南區天王寺南河堀町二五二六
紹介者　竹下英一　朝輝記太留　今井五介
松本市白松七五、信濃鐵道株式會社代表者

◎會　報

紹介者　百瀨愼太郎　高野鷹藏
大阪市西區新町把通二ノ一一
紹介者　山本隆三　後藤市藏
東京市本郷區湯島四ノ三清德館方
紹介者　那須皓　木村鑛吉
大津市阪本町
紹介者　京義一　石崎光瑤
京都府立第一中學校學友會代表者
紹介者　比企忠　川村多實二
神戸市榮町通一丁目
紹介者　塚本永堯　富永恒太郎
兵庫縣東須磨板宿、武山良次氏方
紹介者　武山良次　高野鷹藏
兵庫郡西須磨公園前
紹介者　武山良次　高野鷹藏
兵庫縣武庫郡西郷町大石村十二ノ二
紹介者　武山良次　高野鷹藏
大津市京都醫科大學臨湖實驗所
紹介者　武田久吉　川村多實二
富山縣射水郡牧野村上牧野一四六二
紹介者　高野鷹藏　近藤茂吉
神戸市長田村一三三
紹介者　塚本永堯　高野鷹藏
長野縣諏訪郡川岸小學校

退會及び除名者

紹介者　百瀨愼太郎　高野鷹藏
紹介者　後藤市藏　杉浦龍之助
紹介者　堀龜雄
紹介者　木村鑛吉　辻川信治
紹介者　石崎光瑤　金井千仞
紹介者　川村多實二　横山治郎吉
紹介者　富永恒太郎　青山好孝
紹介者　高野鷹藏　森月城
紹介者　松本幸次
紹介者　高野鷹藏　西繁
紹介者　川村多實二　雄山通季
紹介者　近藤茂吉　辻莊一
紹介者　高野鷹藏　野澤滉

紹介者　矢澤米三郎　高野鷹藏
名古屋市西區玉屋町四ノ九　特別　伊藤孝一
紹介者　柴山乙彦　祖父江重兵衛
名古屋市西區玉屋町四ノ九　特別　伊藤鎭之助
紹介者　柴山乙彦　祖父江重兵衛
青森縣八戸町八日町　橋本音次郎
紹介者　關戸一平　高野鷹藏
東京市赤阪區青山南町五丁目三七　何英吉
紹介者　近藤茂吉　高野鷹藏
長野縣諏訪郡平野村七二〇　高橋幹夫
紹介者　矢澤米三郎　高野鷹藏

退會及び除名者

△申出に由り會員名簿より削除
深津彬○大塚傳三郎○鈴木清一○鈴木一隆○柿下清六○木曾義重○岡村清茂○荻野勝五郎○青木一郎○伊良子暉造○辻弘榮○岩倉道俱
△居所不明ニ付會員名簿より削除
A. R. Hall ○日南田村人○盛田保三○松本卓爾
△會則第二十條に由り會員名簿より削除
保坂定三郎○川上政八○齋藤治吉○草生鐵蕉○大塚傳三郎○井村勇吉○朝熊賴三○大江孝之○飛驒山岳會長永田小右衛門

附錄

日本に於ける氷河問題

（第九回本會大會講演速記）

大關久五郎

以前に高野幹事が御見えになり、此山岳會の成立ち、性質等を御話下さいまして、一つ話をして呉れないかと云ふ御話でございました。私は別段皆さんに御話申すやうな資格も材料も有つて居りませぬけれども、此御事業を伺ひまして、御辭退申すにも言葉なく御引受を致しまして、今日皆さんの御清聽を煩はすことになりました。矢張り山の方に趣味を有つて居りますから皆さんに今晩から御見知置を願ひます。

昨年の秋、山岳は專門の學科ではございませぬけれども、非常な趣味を有つて御研究になつて居られます所の或學生の方が御訪ね下さいまして、突然私に向つて御尋ねになりました。第一にヘットナー石に就てどう云ふ考を有つて居るかと云ふことでありました。當時私はヘットナー石はまだ調べて居りませんでしたので何とも答へる事が出來なかつた。併しながら昨年亡くなられました加藤（鐵之助）理學士が、私が向ふに居ります時に寫眞を御送り下さいまして、其御厚意でヘットナー石なるものゝ繪だけは承知を致したのでございました。さう云ふ譯で御答が出來なかつた。第二問はカールは氷河で出來るものであるかどうかでありました。私は氷河でも出來る、氷河でなくても出來ると答へた。其人

は、氷河でなくてどうして出來るかと言はれますから向ふではカールは三つの成因で說かれて居る、(一)霜や雪の地形の高い所に於て働いた一つの結果、(二)高い場所で河水の二筋三筋が一緒になつた侵蝕の結果(三)氷河の働き是である。何れの場合でも霜の盛んに働く氣候帶であれば是に因つて段々擴げらるゝ傾きがあると答へました。其人は又第三の質問を放つて、擦痕は氷河に依つてのみ出來るかと言はれた。私は自分の知る所、並に一般の世論としては、擦痕は雪頽れでも出來る、雪でなくても出來る例へば山が崩れても出來る、石と石との擦り合ひである。それ故氷河に依つて出來た擦痕といへども場合によつては上述の擦痕と辨識することが出來ないのである。只氷成の擦痕が非常に大仕掛なものであれば特殊の形態を有つて居るから判然氷成と辨別がつく。然らざる限りは擦痕を一瞥しただけで輕々に氷河が拵へたと云ふ譯にはゆかぬと答へた。其人は私を見つめて、實はヘットナー石に就ては、御覽にならなければそれ迄でありますが、後の方のカールとか擦痕とかに就ては、日本の一部にカールは氷成、擦痕も氷成と考へる人があつて段々と研究を進めた、自分も亦或はこれが本當ぢやないかと思つて、多少自分の見聞を擴めかけた、所が段々世間の批評や色々の御話を伺ふと、どうも御話を伺つたやうに擦痕もカールも氷河のみに限つて出來るものでないやうに思はれて來た。そこで自分も詰らぬものとして研究を止めかけた他の特志な研究家も大に落膽して從來の研究を棄てゝ仕舞はれた。それ故氷河問題に就ては吾輩は混沌として適從する所を知らないのであると云ふことであつたのであります。私は此方の御話に依つて初めて我國の氷河問題の現狀の一面を知ることが出來、少なくとも世間の一部に然う云ふ考へがあるのぢやないかと云ふことが分つたのでございます。尙其折此方の御話に依りまして專門の或地學者達が梓川の出口から松本平にかけて過去に飛驒の方面からの大氷河がかつてあつたと云ふ論文を御發表になつたと云ふ御話を伺ひました。それで私は實際の場所を見たいと思ひまして、間もなくヘットナー石を見がてら、梓川の出口の地形も一見致しました。此等に關して

の私だけの考へは追て幻燈でお目に懸ける折一寸申上げやうと思ひます。

そこで何故に我國の氷河問題が斯の如く世間、否學者の間にも落ち着いた形を取つて居らぬか即ち混沌たる狀況にあるか、其原因は那邊にあるかと云ふことを私かに考へて見ましたが、自分の見る所では、其原因は三つあるのではないかと思ひます。

第一は此題目の性質である。日本には御承知の通り現在は氷河はありませぬ其故に多數の御方が日本に無いものにはどうしても乘氣になれぬと云ふことは當り前である。歐米に御出になつて向ふの氷河を御覽になつた方は、日本全體から申しますと少數である。而して又其少數の方が氷河を御覽になつた程度は如何なものであるか、或御方は歐羅巴へ御見物に御出になつて其一部の時間を氷河に費されたと云ふ位かも知れぬ。人によつてはほんの通り一遍遠くから見られた位のもありませう。況や氷河其物をどう云ふ風なものであるか念を入れてお調べになつた方は恐らく多數はあるまいと思ふ。尙況や其氷河が時と云ふものに支配されてどんな風に消長するか、特に今まで氷河のあつたのが無くなつた場合には、地球の表面にどう云ふ風な印刻をするのであるかと云ふ點まで進んで御研究になつた方は尙少數であるだらうと思ひます。斯の如く考へると氷河問題は題目元來の性質上日本の多數の御方に十分明かに解かり兼ぬるものであらうと思ひます。地學者にしましても記載から獲た知識本位言はゞ傳承的で、自分で見た、研究されたと云ふ方は少ないのでありませうから此題目が明快に取扱はれてゆくことは中々六ヶしからうと思ひます。

第二の原因は其地學者の態度であると私は思ひます。日本の氷河論の歷史は、山崎博士が大正三年一月の地質學雜誌二百四十四號に御揭載になつて居ります通り、此三四十年に起源し發達したやうでございます。先鞭は外國人であるやうですがどうも判然した形にはなれ無かつた樣であります。日本人では先登は山崎博士であつて明治三十五年かに白馬嶽に於て氷河證跡があると云ふことを御發表にな

られた譯でございます。一寸御話は横道に入りますが私は決して外國人の日本の氷河論を輕く見るのではございませぬが、奈何せん日本の吾々に對する反應が極めて小なるものであります。例へて申しますと彼の日本の山川に非常に明るいと云ふウエストン氏の如きも其一例であります。氏は昨年の夏オクスフォードに私を訪ねて呉れた。實は私はウエストン氏が見えられる前に、氏の日本氷河論批評を人の噂で聞いた。それは約めて申しますと日本には氷河論があるが、自分は反對だといふことであつた。依つてウエストン氏に會ひました時に私の方からあなたは日本の氷河論を如何に御考へになつて居りますか、日本の地形は氷河の痕跡があると御認めになりますか如何でございますかと、聞いたのでございます。所がウエストン氏はカラ〳〵と笑つて私は宗教家である、山川は自分の愛する所のものであるが、研究する所のものでない、日本に氷河論のあることは自分は疾うから聞いて居るが、自分は氷河學に何等の知識も有たぬから批評一言も出來ぬと答へた。私は尙念を押しまして、丁度ウエストン氏が持つて來て私に見せてあつた槍ヶ嶽近傍の寫眞を前に出し、あなたは此繪に就いてどう御考でございますか、此邊に氷河があつたといふ御見當ですかと聞きましたら、矢張り何處までも私の問を避けまして、私は何とも言ふことが出來ない、唯私は英吉利へ歸つて同國人に斯う云ふことを言つたことがある、日本に氷河問題があるけれども自分は專門家でないから當否は解らぬ。併し日本は降水量が多く森林が到る處に茂生し溪谷はゆきわたつて發育しそれにあれ程の地震の多い所、あれ程の噴出の多い場所であるから、縱令過去に氷河があつたにしても其跡はすつかり破壞して仕舞つたに違ひない、さう云ふ事を一言したことがある。實際それ以上には何も言ふことが出來ないとの答辯でありました。ウエストン氏の如き、吾々から見まして全くの宗教家とばかりではなく尙、地形學の素養を有つて居られるかと思ひます人でさう云ふことでございますから、況や文書に徵すべきものがなく、其言に據るべきものもないと云ふことであつたならば、外人は此問題には今日までまづ學術上

から大した關係はないものと見て宜しからうと思ひます、但しヘットナー氏のことは後に申上げます。

山崎博士は明治三十五年に地質學雜誌に御發表になつたのは先生自ら實地に御研究なさいましたもので尙此御發表後も怠らずおやりなすつて居るやうに見えます。それで地質學雜誌や地學雜誌で御覽になれば御解になります通り山崎博士は氷河肯定說、氷河があつたと云ふ御說である。然るに山崎博士の氷河肯定論は或意味に於て殆ど孤立の姿であります。先生は御奮鬪なされて居りますけれども、之を助け若くは堂々と反對する御方は眞に少ないのであります。其上に十分行く所まで議論が行つて居ないやうな感じがあります。例へば横山博士は數年前に房州の珊瑚礁の問題から說を起されて東京附近の地層の發育に關し新しい御意見を發表され、其結果一見第四紀の初の氷河時代を日本には認められぬ樣にも見受けられるのですが、博士自ら氷河は此時代に於て日本に於てあり得べからざるものだと云ふやうな事を申されたやうではありませぬ。けれども世間からは何となく横山博士の所論と氷河論とは擦れ違ふやうに見えるので不得要領の形であります。昨年亡くなられた加藤理學士は、大體に於て氷河論には始終反對の態度を執つて居られたさうであります。是は御本人から屢々私に手紙を下さいました記事でも讀めました。同君はよく自分は唯研究の爲に成るべく氷河論と反對して見る、若し反對して自分の說が惡るければ氷河論を納得する、自說が良ければ研究の値打があるとして進めて行きたい、私は師匠に對して弓を牽く積りではないのである云々と記されたのであります。是は加藤君の心事を明かにしたものと思ひます。それ故に師匠に反對の態度をお執りになつても、加藤君の氷河說破壞は別段系統立つたもので無いと私は思ひます。唯ヘットナー石の擦痕に對して、是は向側の山崩れの爲に出來た石の擦痕である、之を氷河の作成と見ることは自分には納得が出來ないとお仰つしやつたこと（地質學雜誌第二百五十三號所載）があるだけで、未だ以て山崎博士の氷河論を御構成になりました諸種の地形全部に亘つて、否定の御試みはなさらずにあつたやうに思ひます。矢部博

士は理科大學紀要で山崎博士の御說を承認せられるやうなことを發表になりました。地質學者としての矢部博士の論旨は私共には御尤と讀まれるのでありますが世間では横山博士の御說と對陣されて居るやうに申します。併し矢部博士の說は地質學の方から日本の第四紀の始に氷河があつても差支ないと云ふやうなことで、地形問題に觸れて彼此と詳細に發表されたのではないのであります。斯の如く表立ては所謂肯定說も否定說も世間で彼此れ申す程詳細なものでありませぬが、獨り辻村君の氷河肯定說のみは地形に基礎を置いた議論であるやうに思ひます。是は御承知の如く大正二年七月及八月の地質學雜誌に、カールは果して氷成であるかどうかと云ふ題目で表れて居ります。是はカールが主で他の地形は客のやうに見受けますが、結論は、日本には氷河時代があつた、其氷河時代の氷河はゲヘンゲグレッチァー(懸谷氷河)であつて谷頭の傾斜の急な所を下つた氷河である。而して其氷河は凡そ二期に分れ消長したことはちやんと地形に現はれて居ると云ふやうなことであります。辻村君の研究論文は眞摯なものでありまして論旨は兎も角として研究ぶりは私大に敬服致しましたのであります。只全般に亘つて箇々の地形にはまだ〳〵議論の餘地があるやうに見受けます。それ故に矢張り山崎博士は大體孤立の姿であらるゝと思ひます。

地學者の態度につき第二に考へたいのは他の多數の地學者であります。これは其多數は沈默のやうに見受けます。其沈默に二種類ある、自重して沈默される方と、無差別の御考へから沈默される方とある。自重される方は自分は氷河を見て居ない、從つて研究が出來ないから何とも言ふことが出來ないと云ふ立場で是は尤もなことであります。所が他方には氷河が有つたらうが無かつたらうがどちらでも大勢に關係はないと、云ふやうな方にも見受けますが、是は餘り御賛成が出來ない態度と思ひます。苟も其專門の學者たる以上行く所まで行くのが本當ではないか、氷河が有つたらうが無かつたらうがどうでも宜いと云ふのは敬服しないと私は考へます。

學者の態度の第三番目に、公の言論に於ては氷河論に對し何等反對せずして、私議に於て反對される方が頗る多いやうに見受けられるのであります。是も實は感服の出來ぬ態度と存じますが影響するところは少くない。其一つの御考を漏れ承はる所に依りますと空氣の侵蝕論であります。氷河論に對しては眞に立派な根據と思ひます。空氣の侵蝕、氣蝕論とも申しませうか。後に幻燈でお目に懸けますが、氣候の非常に寒冷なる地球の表面では、氷と云ふものが働きませぬでも、雪とか霜とか働けば隨分盛んな威力を持ちまして岩壁に擦痕を生ぜしめたり、カールを造つたりするのであります。でありますから氷河ではないが氷河と同じやうなものがあつて、それが表面に働いたと云ふ地形がある、それは擬似氷河として吾々は考へて居るのであります。それで若し其等の方が氣蝕論を御信じにならるるならば堂々と日本の飛驒山脈なり赤石山脈なり、實地の問題を掲げ御討論になれば甚だ結構だらうと思ひます。然うしたならば如何に此問題がどん〳〵片附いて參るでありませうか。けれども若し私の聞く所にして誤りないとすれば、彼の飛驒山脈に於ける山崎博士の氷河地形は、あれは普通の空氣侵蝕で出來るのである、山崩れでも出來る、雪頽れでも出來る、何も氷河を持つて來る必要はないと云ふやうな說であるさうであります。果して斯う云ふ考へで氣蝕論を內々に唱導して居るとすれば、それは甚だ放慢な主張ではないかと思ひます。何故なれば唯今は空氣の侵蝕の地形でも其前に氷河があつたかも知れない、唯今は氷河と無關係の地形でも是から以後氷河が出來ぬとも限らない、即ち氣候の移動は事實吾々の認むる所であるからであります。敢て横山博士の房州の珊瑚礁に就きての氣候の移動論を引證する迄も無く古生物學上から外國と同じに日本でも過去の氣候の變遷が知られて居るところであります。それ故氣蝕論ならば其氣蝕論の根據を明かにすれば宜しからうと思ひますが、さう云ふことがないとすれば、是は矢張り學者の態度としては世間の囂々を來す原因ではないかと思ひます。

學者の態度の第四としては獨國ハイデルブルグ大學地理學教授ヘットナー氏が所謂ヘットナー石を

發見されて其面の擦痕を氷成でもあると言はれたとか云ふ所から出發した樣に見受けます議論で、或地學の大家並に其一派の方々の唱へらるゝ大々的氷河肯定論であります。其氷河肯定論は皆さん御承知でゐらつしやいませうが、飛驒山脈の南の方即ち梓川の谷の附近今日概ね二千米突以下の開圻高原は或時代に氷原を形づくつてあつたと云ふのであつて、東の松本平に其先きがずつと出て來て順次堆石の地形を拵へたのであるだらうと云ふやうな結論で、それの重要の材料と致しまして、ヘットナー石の擦痕を氷成とするは勿論、あの近邊へ持つて行つて、氷河脱却の場所に横はる地形をそれぞれ附けて行かれた形迹があるのであります。所が是は後に幻燈でお目に懸けますが、隨分想像が强過ぎて、實地踏査に際し頭の中で先づ極めて行かれたのではないかと云ふやうな點が見えます。此說は學者の間ばかりでなくて隨分世間に影響する所があつたやうに見受けます。これで折角氷河を研究したいと思つた人も、松本近邊の平地を、氷河の働きに依つて成つたとか又は氷河が解けた水の沈澱に由るとかと云ふ風に言はれて見ると、日本國中殆ど到る所斯の如きものあることゝなつて色々と疑問が起き茫然となられた方もあるさうです、又それが爲に或人は全く變な工合に自分の態度を變じまして今まで氷河肯定論であつたのが否定論になられたり、中には呆氣に取られて否定ともつかず中腰になつて居られると云ふ方も段々あるやうな御話も伺ひます。で私は現今の氷河問題は是等學者の態度も一の理由となり渾沌たる狀態になつて居りはせぬかと思ふのであります。

第三は一部上述の二原因とも關連して居りますが世間に氷河地形に關し大分誤解があることであります。本も讀まず氷河その物を見ないで日本に氷河地形があると云ふのは變だなどゝ申すものもあります。又カールや擦痕や堆石などを誤解して居る人もあるやうです。そこで順序としまして然らば一般論として氷河地形とは如何なるものであるか、之を決定すべき標準は何であるか其地形の特徵は如何と云ふ事になりますが、此等は時間が大分遲くなつて居りますから幻燈の際に申上げやうと思ひま

す。

斯樣に申しますと日本の氷河問題に關し此際私は責任上私自身の見る所を申上げなければなりませぬが、是は何も新らしいことではない、氣候は先刻申上げますやうに移動しつゝある、氣候の移動と結付いて地形も矢張移動を免れない、地形の成因は固より地殼の運動が其基礎をなすものであるけれども、表面の形はそればかりでは出來ない、寧ろ多くの場合に於て空氣がいたづらをすることによりて決定せられる即ち氣候の作用であります。熱帶は熱帶、溫帶は溫帶、寒帶は寒帶、低い所は低い所、高い所は高い所、皆空氣の支配を受けざるものはない。斯の如く地形が氣候と密接の關係がある以上は、現在氷河が無いからと云つて地形の眞相を究めないで日本の過去に氷河時代が無かつたとは何人も言ひ得るものではありませぬ。要するに實地の研究である。彼れ此れと坐上の議論をすることは禁物である。諸君も御承知でありませうが氷河地形は、或二三者の言ふやうに絕對に痕跡を失ふものとは私共は思はないのであります。地質時代で申します古生代に於て氷河時代のあつたと云ふことは、今日の地質學者も地理學者も悉く認めて居る所であります。而して吾々の歷史と云ふ尺度では計ることの出來ない大なる遙遠なる地質時代の昔に於て、氷河があつたと云ふことを肯定する材料は何であるかと云ふと地形であります。遠い過去でもこの通り氣候の變遷が地形に印づけられる。況や第四紀の初めに北半球の諸方にあつた氷期時代の遺跡が、滅茶苦茶になつて今日全然見えなくなるとは吾々は信ずることが出來ない。若し氷期を有つた土地ならば必ず遺跡がある筈である。唯比較的完全に保存されて居るのと、それが十分でないのとの區別あるに過ぎないのであります。それで私は後に幻燈で御目に懸けます材料に依て日本の過去第四紀の初めには氷河があつたと信じます、而して其氷河は從來一部の人に唱へられたケヘンゲグレッチャー（懸谷氷河）ばかりでなくタールグレッチャー（溪谷氷河）も或程度までは場所によつて發育してあつたらうと思ひます。又現在ありますカールは悉く氷成

と云ふ譯ではありませぬが、氷成のものも其中にはあると信じます。モレーンと申します堆石の地形は、是は私は立派にあると信じます。是は自分の實際見ました所を繪に依て御覽に入れます。それから氷成擦痕でございますが、擦痕の有無は、私は今日澤山の材料を有つて居りませぬ、併しお目に懸ける繪の中には在る所がございます。

要するに私の實地の觀察は未だ斷片的であつて、高山地方の總てに亘つて系統的に考へるまではまゐりませぬし、從つて當時の氷河分布も、其理由も皆さんに申上げる時期でないと思ひますが、是は一に山岳を愛せられる皆さんと共々に實地の研究をしまして、將來如何樣にか片をつくべきものではないかと思ひます。時間も遲くなりましたから是から繪を以て御話を致します。(幻燈說明畧す)

(本邦氷河地形の存在に關する部分は大正五年二月—六月號の東京地質學雜誌所載「梓川上流高地盆地附近の地形に就て」參照)。

「マツターホルン」最初の登攀に就て

(第九回本會大會講演大意)

岩　村　圓

私は唯今小暮幹事から御紹介を得ました岩村で御座ります。今夕の演題として茲に「マツターホルン」最初の登攀に就てと掲げて御座りまする爲め、何か私自身の研究に成つた新しき說でも申上る樣に聞へますが、實は左樣な譯では御座りません。最も有名で苟も「アルプス」登山のことに就て讀まれ

た方は何人でも御承知の「ウヰンバー」が「マッターホルン」先登の名譽を得た時のことを少しく詳しく御話するに過ぎないので御座ります。實は山岳會大會などへ持出すべき性質の御話ではないと信じましたので幾回か御斷りを申上たのでありますが何か本會幹事諸君の方も是非といふことで御引受をすることになりました。我會員諸君にとりましては既に御熟知の談を拙い口から御聞きになることでありますから御迷惑の段は重々御察し申上ます。併し本日御來會の諸君中には未だ斯樣に著名な登山の話をも讀まるゝ機會を持たれなかつた御方も少なからずと考へますので、我會員諸君も此等の方の爲めに御辛抱御淸聽を願ひます。

「ウヰムバー」が「マッターホルン」の頂上に達することを得ましたのは千八百六十五年のことで御座ります。五十年も昔の古めかしい話ではありますが事實が小說的で前後甚だ波瀾に富んで居ります、私は非常に興味を以て此の談を讀みました。若し達辯の人の口から聞かるゝならば必らず諸君の感興を惹起すこと丶信じます。又今夕は充分の時間がない爲めに最初の試から逐一御談を申上ることが出來ず稍や詳細に申上げるのは第九回目の試即ち成功した時のことで他は省略しなければならぬことを遺憾に存じます。又猶一つ御斷りを申上げて置くことは私自身「マッターホルン」を登攀したことはないので飛んだ誤を申上げる樣なことがあるかも知れない。又見て來た樣な口吻を洩す樣なことがあるかも知れませんが其は御聞流しを願ひます。

扨て「マッターホルン」は瑞西、伊太利兩國國境に在りまして高さは一萬四千七百八十尺氷河の上に聳ゆること五千尺程で御座ります。單に高さから申しますならば歐洲アルプス連峯中之を凌駕する者は少いとは申せません、「モンブラン」は一千尺程も高く御座りますし「モントロザ」も殆んど一千尺高く尙其外に百尺乃至二百尺高いのに「ワイスホルン」「ミシャーベルヘルネル」など丶申す峯が御座ります。併し其の風姿の崇高なる點に於ては殆んど類がないと申すことが出來ます。全峯殆んど一

塊の岩石から成つて居るが如く其の斜面は鑿を以て削りなせるが如く獨り他の峯群から離れて碧空に屹立して居る有樣は之を形容するの辭なきに苦むといふことは茲に映出しまする數葉の幻燈寫眞に依りて諸君も充分に看取せらるゝこと丶存じます。山の形は大體細長い「ピラミッド」又は「ヲベリスク」と見ることが出來ます。山の尾根は四つありまして頂上から北東に引く者は最も著名で爰に出ました幻燈寫眞でも見ゆる通り麓に一小隆起があります。此は「ヘルンリ」と申します、「ウヰムバー」は大體此の尾根を傳ふて頂上を蹈むことが出來ました。第二の尾根は頂上が東南に引いて居りまして此は「ヘルゲングラート」と呼ばれて居ります。此の二つの尾根の間の斜面を通常東側面と申して居り大體平たき大なる斜面を形成して居ります。第三の尾根は充分に連續して居らぬ爲めに少しく不明瞭ではありますが南西に引いて此の第三の尾根と第二尾根との間を通常南側と呼んで居ります。此の南側は非常に複雜した斜面で斷崖と縱溝などが錯綜して居ります、第三の尾根は「ウヰムバー」始め其競爭者が幾度か試して常に失敗した登路で御座ります。第四の尾根は頂上から西に下つて居りますが甚た不明瞭で第三と第四の尾根の間を山の西側第一と第四の尾根の間を山の北側と呼んで居ります。此の西側と北側とは共に「マッターホルン」氷河に向ふて居りまして最も嶮峻殆んど垂直なる面を示して此の方面からは翼なき人間の達し得べき望は御座りません。又事實北側を攀ぢた者は今日までないこと丶信じます。

山を回つて各方面から見た寫眞を映出致しましたので諸君に於ても「マッターホルン」の登山は容易なことではないことは御解りになつたこと丶信じます。併し其の中では第三の尾根即ち頂上から南に引いたブレイル側が比較的勾配が緩で、若し攀づるならば此の方面からすべきであるとは何人にも考へらるゝ所であります。又實際最初から登山を企てた者は十人が十人此の方面を撰びました。併し此は大なる誤であつたので今日に於きましては此の側には小屋の設備等も出來ましたが依然困難で危

險も多く普通の登山者は主として第一の尾根則ち東北の尾根傳ひに登ることゝなつて居ります。

今夕の御話の主人公たる「エドワード、ウヰムバー」は千八百四十年に英國に生れまして五年前則ち千九百十一年に七十二歳で歿せられました。「マッターホルン」最初登山に成功したのは其の廿六歳の時であります。茲に「マッターホルン」に成功して倫敦に歸られて旅姿其儘の寫眞と高齡に達せられても猶ほ氷斧を握つて居らるゝ寫眞を御目にかけます。氏は始め畫と木版彫刻を修められましたが「マッターホルン」の成功に續いて「グリーンランド」の探檢をせられ又「エクワドル」の諸高峯を跋渉し「チンボラゾー」、や「コトバキシ」などの頂點を極め數冊の著書を殘されました。

「ウヰムバー」が山岳旅行を始めましたのは千八百六十年其の廿一歳の時で或る倫敦の一書肆から「アルプス」風景畫の製作の依頼を得て海峽を渡つて佛國を經て瑞西に入りました。「ユングフラウ」の朝日夕日の美觀に接したのは勿論遠雷の如き雪崩の轟きを聞き「ラウテルブルンネン」の谷に「クーライゲン」の妙音に耳をすまし「ゲムミ」「ロイク」から「ローヌ」の谷へ出て「ウヰスプ」を訪ひ遂に「ゼルマット」に遊びまして始めて「マッターホルン」の勇姿に接しました。「マッターホルン」の麓に近く登山の根據地として最初から撰まれた村が二つあります。一つは南側伊國の「ブレイル」村で他の一つは北側の瑞西領の此の「ゼルマット」村であります。當時は見る影もない一寒村でありましたが今日では著名なる避暑地になりまして僅かに山登りの御客を迎ふるに過ぎなかつた當時に引き代へて富豪遊覽の客は各國より集まることゝなりました。昔のいぶせき小さな旅宿は高大なる「ホテル」となり季節中は電燈晝の如く輝き、毎夕催さるゝ「コンサート」の音は牧場の牛や羊を驚かして居るといふことで御座ります。「ウヰムバー」は「ゼルマット」から再び「ウヰスプ」に出まして「シャモニー」を訪ひ充分に畫囊を滿して英國へ歸りました。此の年には登山の冒險は試みて居りませんが山岳に對する憧憬を得たは勿論青年の頭腦中には登山の欲望が萠へ出て居たには相違御座りません。

果然翌六十一年には再び佛國に渡つて最初に最も險阻なる「モン、ペルブー」を攀登せんことを試みて成功し下つてから「マッターホルン」の南「ツルナンシュ」の谷へ參りまして「マッターホルン」の雄姿を再び仰ぎ見たので御座ります。歐洲で最も高い「モンブラン」は千八百年代に入る前に其頂上を極められました數多き瑞西の高峯も千八百五十年頃から盛に征服せられまして處女の峯は殘り少なくなつて此の當時最も注目せられた高峯が二ツとなりました、其の一ツは「ワイスホルン」で他の一ツは即ち「マッターホルン」で御座ります。「ウヰムバー」も又此の二つの峯を狙ふて參りましたので御座りますが「ツルナンシュ」の谷の入口の「シャテョン」といふ村で「ワイスホルン」は遂に「チンダル」教授が先登の名譽を握つた。教授は更らに續いて「マッターホルン」を試らるゝ計畫である今度こそは「マッターホルン」も愈々征服せらるゝであらうなどといふ噂を聞ました。

既に「ワイスホルン」は「チンダル」教授に依つて登られたので「ウヰムバー」は之を思斷ち早速「マッターホルン」を登る積りで「ブレイル」村に參りました「チンダル」教授は二日前に同じ村に來られたが「マッターホルン」登山を試みられないといふことであつた。其所で「ウヰムバー」は數人の案内者と會見したが名ある者は何れも其の要求が氣に入らぬので名もない一人を連れて登りましたが此奴は甚だ臆病者で二日目中途で「ウヰムバー」に隨從することが出來ず遂に引返すことゝなり「ウヰムバー」は案内者は賴むに足らず單獨では到底斯の如き岩山は登ることは出來ず此は相當な同伴者を得て登るより外ないといふ考を懷いて英國へ歸りました。翌六十二年には今度は種々な準備を整へまして「マグドナルド」といふ友人を同伴して「ブレイル」に參り七月の七日八日の兩日試みましたが目的を達せず引返し更らに九日十日と試みて又引返し「マクドナルド」は遂に絶望して立去りましたので同月十八十九の兩日單獨で出掛ましたが轉倒して大怪我を致しましたが幸に一命だけは取り止めて「ブレイル」に歸りました。傷が癒るや廿三廿四の兩日試みて又も失敗。出直して廿五廿六の兩

The first ascent of the Matterhorn.
July 13-14, 1865.

Several leaves have been torn from this part of the "Livre des Etrangers". These leaves contained an account of the first ascent of the Matterhorn, of the accident which occurred during the descent - in which Lord Francis Douglas, Mr Hadow, Revd. Charles Hudson and the guide Michel Croz lost their lives, and of the means which were taken to recover their bodies ——

This account was written for the information of the numerous travellers who visit Zermatt. It bore testimony to the courage of those who so lamentably perished, - to the devotion of Michel Croz, - and, to the gallantry of the guides Franz Andermatten and the brothers Lochmatter, who nobly volunteered to seek the bodies of those who were lost, when not a single guide of Zermatt dared move, in face of threatened excommunication by their priests ——

It spoke of the unwearying kindness of Madame and Monsieur Seiler —

This account has been appropriated by some person unknown. Other and more valuable things - esteemed by Mons. Seiler, have also been stolen from his books —

As the associate of those who lost their lives on the 14th of July, 1865, and of those who subsequently performed an act of the highest courage, and as the friend of Mons. Alex. Seiler I protest against these thefts. This book is the private property of Mons Seiler and no one has any more right to take a leaf from it than to steal his money ——

Edward Whymper Sept 1. 1869.

日又出かけて又失敗此の年には都合五回登山を試ました、翌六十三年には八月の十一十二の兩日試みましたが目的を達することが出來ません。六十四年は都合があつて瑞西に行く事が出來ず六十五年六月廿一日前七回の「ブレイル」口をあらためて東側から試みましたが之も目的を達することが出來ず引返しました。以上八回の登山に就ては一々目的を達せざりし事情を申述べる時間がありませんのは遺憾に存じます。唯だ申置くのは此間に「ウヰムバー」は種々の工夫をしたこと丶種々の危險に遭遇したことであります。梯子を携帶したこともあります。鉤付の綱を携へ投げ上げて鉤を岩に引掛け綱を力に上ることをも計畫した。前にも述べた轉倒して大怪我をした外墜石の危險は幾度か冒して居ります。昔から「マツターホルン」の麓の村人の間には岳の上には化物共が城を構へて居り下から登る者があると石を轉ばし礫を投げ付けるといふことが信ぜられ幾人も目のあたり見たといふことが傳へられて居りました。事實「マツターホルン」の墜石は恐るべき者で「ウヰンバー」の說にも夜十二時頃から曉方までが最も多い、夫は此の時刻に溫度が最も下降して晝間の水が凍結する爲め岩をゆるめ自然と墜落せしめる、勿論夜に限ることではなく晝間でも天候惡く風雪で凍結を惹起す程溫度が下ると盛に大小の石塊が墜落を始めるといふことで御座ります。

「ウヰンバー」は千八百六十年以後「マツターホルン」の周圍を幾度か回つて種々と研究を重ねた結果終に此の山は最も容易でありさうな「ブレイル」口よりも寧ろ北東の尾根を登る方が良くはないかといふ考を懷くに至りました。其の理由として「ウヰンバー」の擧げて居る所は第一に北東の尾根が非常に急勾配に見えるのは夫は誤認ではあるらしい。此の尾根は「ゼルマット」や「リツフエルベルグ」の方面から見ると七十度位の勾配に見え更らに東へ回ると殆んど九十度即ち垂直かとも見えるが北西即ち「ヅムット」氷河を隔て丶東北の尾根を望むと著しく勾配は緩に見えて漸く四十度位かと思へる。此の方面から觀望した勾配が眞の勾配らしい。又東面には終歲多量の雪が堆積して居る所が

多い。夫が溝狀をなした低い凹所にあるのでなくて大きな斜面にある。夏にも此の雪のあるのは冬期に澤山の雪が溜まつたことを示す。四十五度を多く越ゆる斜面には多量の雪の溜まることは出來ない。東側面に多量に雪のあるのは如何にしても其の勾配が四十五度を甚だしく越ゆることない一の證據であるといふことを考付いた。第二には「ブレイル」口から登つて見ると困難なのは稍やもすれば岩が自分の上に突き出て居る爲め下から登り樣がない。低い所は他人の肩の上を借るとか高い所は梯子の助を借らねばならぬ。斯の如き場所を生ずるに至つたのは全く此の「マッターホルン」を形成して居る岩の層理が北東から南西に傾斜して居る爲めで、「ブレイル」口からは頭の上に岩が突出して居る所が多い足がゝりも惡い崩壞した岩石も下に轉倒する傾向があつて墜石の瀧ともなるが反對側の東北の斜面では頭の上に岩が突出した樣な所も少なく同じ勾配でも足掛りもなく崩壞した岩石も下方へ轉げ落ちる危險が少くはないかといふことに考へ付ました。此の岩石の層理の傾斜の方向と登路の難易の關係は甚だ大きい者でありますので玆に充分此のことの御解りになる爲め「フランツ、ニーベル」氏の著書岩石の攀登と申す書籍の譯解を幻燈畫に作つて映出致しました。口で申述ますよりも之を御覽になつたら前に申述ました「ウヰンバー」氏の考へたことは最も好く御解りになるであらうと考へます。

扨て此から「ウヰンバー」の第九回目の「マッターホルン」攀登の試を稍や詳細に御話し致します。

千八百六十五年の夏七月の七日に「ウヰンバー」は又も懲りることなく「マッターホルン」を登らんと「ヴァール、ツルナンシ」に參りまして連れる可き案内者として「アントン、カーレル」を探しました。此者は既往の攀登に數回案内せしめたこともあり其の技量と不屈不撓の精神は「ウヰンバー」も充分に見拔いて居りましたので御座ります。「カーレル」の家を訪ねますと居りません近所の農夫に聞くと前日即ち六日の朝獨りで「マッターホルン」に登るとて出掛けたと申しました。併し岳を望む

と雲は厚く山にかゝつて居りますからとても登れる筈はない「ブレイル」へ行けば遇へると「ウヰンバー」は其儘「ブレイル」さして上りますと果して半途で小川の彼方草刈り小屋の傍で山から下りて來た「カーレル」外三人の人夫と出會致しました。三人の人夫も顏馴染の者のみで御座りました。「カーレル」の話に依ると「リヲン」氷河まで行くと天氣が惡くなつたので引返して來たといふことでした。其所で「ウヰンバー」は自分の計畫を「カーレル」に相談しました。夫は「カーレル」と人夫の「セザール」と外に誰か一人を連れて明後九日の月夜に「テヲデユール」峠を越へて岳の東面に出で翌十日中に出來る丈け高く登つて露宿し十一日に頂上に達せんといふことで同時に「ブレイル」口よりも東北側は必らず容易でなければならぬといふことも說明しました。然るに「カーレル」は依然「ブレイル」口を採るべきことを勸めますので「ウヰンバー」は遂に夫ならば先づ余の案に從へ若し目的を達せざるときは其時こそは更らに「ブレイル」口を登らうと夫れで愈々「カーレル」も同行を承諾致しました。斯く話が出來ましたので「ウヰンバー」は「ブレイル」迄で連れて參りました二人の山人夫「アルマー」及「ビーナー」を解雇したので二人は翌八日に「ゼルマット」の方へ下りました。八日の日には「ウヰンバー」は種々登山の準備を致しました。併し岳は雨雲一面に漲り少し荒模樣にも見えました。其の夕方に若い英人が一人「ツルナンシュ」の村で重い病氣で惱んで居るといふ報を得ましたので翌九日の朝に病人を見舞ふ積りで谷を「ツルナンシ」の方へ下る途中で下から多勢の人夫が騾馬に荷を付けて登つて來るのに出會しました。見れば「カーレル」「セザール」の兩人も其一行中に居りますので、不審になつて尋ますと「ブレイル」迄で人夫に引出されましたと申ます。宜ろしい夫なら「ブレイル」で余の歸るのを待て打合せた通り今夜は出發を仕樣と申ますと「カーレル」は御氣の毒ですが十一日から或る貴族の御伴をして「アヲスタ」の谷を御案內せねばならぬので今夜は御供は出來ません。意外のことで「ウヰンバー」は然らば「セザール」はと申ますと彼も私と一緒に行く

ことになつて居ります。左樣なことなら何故に前から言ふて呉れぬ汝が約束を得た故に二人の山人夫を返した「アヲスタ」の谷の案内なら他人でも出來やうなどゝ說得しましたが「カーレル」は前々から「アヲスタ」の谷の案内のことに約束は出來て居ましたが唯だ日がきまらず貴方に御約束して宅へ歸ると手紙が參つて十一日といふことになりました譯で御氣の毒に存じますといふ丈けで同行を承諾致しません。「ウヰンバー」は如何とも爲し難く一行は上に「ウヰンバー」は下へと別れました。「ツルナンシュ」に病人を見舞ますと大に快いといふとで其夕「ブレイル」に歸りました。其夜は雨になりました翌十日も天氣は依然惡い。其の日の夕方に病氣の英人が「ツルナンシュ」から「ブレイル」に上つて參りました。外に旅宿には客もなく至つて淋しく「ウヰンバー」は早く床に就ました次の日十一日の朝病氣であつた英人が來て珍らしい企がある多勢の人夫が今朝「マツターホルン」指して登るさうなと話しました。「ウヰンバー」は急いで宿の戸口まで出て望遠鏡で眺めますと一團の人々が「マツターホルン」の方へ參ります。中に荷を積んだ一頭の騾馬まで居ります。折柄同じ戸口に出て來た宿の主人「ファーブル」に彼の一行の案内者は誰かいと聞ますと「カーレル」で御座いますと答へた「アントン、カーレル」かねと聞直しますと左樣「セザール」も一緒で御座りますと申ました。段々と探りますと此の計畫は餘程前からのことで「カーレル」の六日の登山も下見の爲め九日の日「ツルナンシュ」へ下る途中見た多勢の一行は荷物を「ブレイル」に上げる爲であつて計畫者は伊國人「ジョルダノ」と伊太利當時の國務大臣「セラ」君であるといふことまで解りました。先づ人夫を登山せしめ道を得て兩君も登られる筈であつた。此の「マツターホルン」は瑞西、伊太利の國境にあるので伊國人は自國の山と見て居つた。此の前年に同じく伊國境の「モント、ウヰソー」が英人に先登せられた爲め伊國人は大に奮激し「トリノ」の山岳會などはせめて此の耻辱は「マツターホルン」先登の功を伊國人に收めて雪ぐべしなどと激勵した爲めに此の計畫が出來たので御座ります。

「ウヰンバー」は「カーレル」の爲めに一杯喰されたのであります。足ずりして口惜しがつたが仕方がない旅宿の主人も伊太利人であるからざまを見ろと云ふ樣に見える、「ウヰンバー」は自室に歸つて「シガー」を口にして氣を落付けて考へ始めた。彼等は騾馬に食糧まで積んで出かけたからゆつくりとかゝる量見に違ひない。二三日もかゝる積であらう、急いではやらぬ、窓を明けて岳を望むと霧は山を被ふて居る。天氣は惡い、路を或る高さ迄で探つて一度歸つて客を連れて登る者とすると六七日はかゝる。自分は今から「ゼルマット」へ回つて東北側から試みて失敗したら直ぐ此の「ブレイル」に歸つて來ても未だ彼等は客を案內して出發前の筈である、山には關門はない一行と一緒に登り始めて扨て驅けぬけて御先に頂上に達することも出來る。兎に角一日も早く「ゼルマット」へ越へやうと人夫を探しましたが屈强な七人の人夫は皆「カーレル」の一行に加つて唯の馬方一人をも得ることも出來ません。「ウヰンバー」は計畫は出來たが實行は出來ない兵卒を持たぬ將軍と同じことであつた。夫れに天氣も惡く「ゼルマット」に越へることも案ぜらるゝ程であるが夫れは餘り遺憾ではない。天氣の上で「ゼルマット」に行けぬならば「カーレル」一行も歩を進めることはないので御座ります。

翌十一日は快晴になりました。朝から「ウヰンバー」は人夫を得る爲めに奔走致しましたが得ることが出來ません。丁度午時に「ゼルマット」から若い英人が「ブレイル」に着ました。其の伴の中には豫て熟知の「ゼルマット」の山案內者の「タウグワルデル」と云ふ者も居りましたので「ウヰンバー」は若い英人に面會して「タウグワルデル」讓受の交渉を致しましたが明日は「ゼルマット」へ引返すことゆゑ御希望に應ずる事は出來ぬ、併し何れも荷は輕いことゆゑ貴君の荷を負はせることは差支がないといふ返事で御座ります。其所で不得已其樣に賴んで「ウヰンバー」は「カーレル」の爲めに欺かれたことから「マッターホルン」登山の計畫をも話しました。此の英人は「ドーグラス」侯爵でありまして最近に「ガーベルホルン」を登つたといふ話が出ました又「ブレイル」へ越へて來ると

きに麓の「ゼルンリ」で出會した老「タウグワルデル」は「ゼルマット」側から「マッターホルン」に登れぬことはないといふたなどと話ました。同國人のこと同じ若い者のことゝて話も合まして遂に「マッターホルン」を一緒に登らんとの相談が出來まして翌十二日朝早く「ブレイル」を跡に見て「テヲデユール」峠を越へて「ゼルマット」に下りました。途中「シワルツ」湖畔の堂内に山登り用の諸道具を置ました。夫れは何の道明日は此處まで來ねばならぬ故で御座ります。

「ウヰンバー」は「ゼルマット」に着くや老「タウグワルデル」を訪ね雇入れることにし旅宿なる「ホテル、モントロザ」に歸りますと宿の前で此の年六月廿六日に手を別つた案内者の「ミシエル、クロッ」に出會しました。此は必然B君の御伴をして來たのだと考へて問ふとB君は「シャモニー」で病氣で歸られたので今度は宣教師の「チャーレス、ハドソン」といふ人に雇はれて來たので明日は此方の側から「マッターホルン」の案内をするのですと答へました。「ホテル」の食堂に「ドークラス」侯爵と話して居ると「ハドソン」氏が友人と岳を見て歸つて來ました。話して居るのを聞くと果して明日しかも同時刻に出發する計畫であります。其所で「ウヰンバー」は「ドーグラス」侯とも協議を致しました。同國人が同日同時刻に同じ山を別々に登らうとするのは面白くない此は一團となるのが利益だと云ふことになつて早速「ウヰンバー」は「ハドソン」氏に交渉しましたら同意見であるので一團となつて登ることに協議が出來ました。併し「ウヰンバー」は念の爲め「ハドソン」氏の友人たる「ヘドウ」氏の山登りの履歴を問ますと「モンブラン」を登つたことがある。しかも極めて短時間に上下した殆んど從來の「レコード」を破つた御心配はないと「ハドソン」氏は申しました。

此夜「ウヰンバー」氏は床の中で「カーレル」に欺かれたことから「ドーグラス」氏との出會「クロッ」との偶然の再會から愈々明日の登山とまでなつた樣々の推移に就て頻りに考へたと書いて居ります。

明くれば七月十三日空には一朶の雲をも見ぬ好天氣に乘じまして朝五時半に一行は「ゼルマット」を出發致しました。同勢は八人で御座ります。即ち「ウヰンバー」「ドーグラス侯」「ハドソン」「ベドー」の四人と「クロッ」老「ペーター、タウグワルデル」と外に二人の彼の息子でありました。御客四人に人夫が四人食料は三日分を携へました。

此の日は餘り高く登る考はないので道を急がず朝七時半に「シワルツ」湖畔の堂に着て前日置いた登山用具を取纏める爲めに休憩し八時廿分に更らに前進を始め「ベルンリ」から「マッターホルン」に續く尾根を上り始めました。十一時半に愈々「マッターホルン」の直下に參りまして其の東側を攀ぢ始めました。此處に來て見て東側の斜面が「ゼルマット」や「リッフエルベルグ」から見たとは勿論西側から見たよりも著しく勾配が緩で殆んど走ることさへ出來る程であることに驚いた。十二時前に一萬一千尺の所へ來て野營に適當な場所を發見しました。上に適當な場所を見出すことが覺束ないので茲に野宿と決しました。茲までは「ウヰムバー」と「ハドソン」が先頭に立つて足場を切ること即ち「ステップ、カッチング」も兩人が致しました。

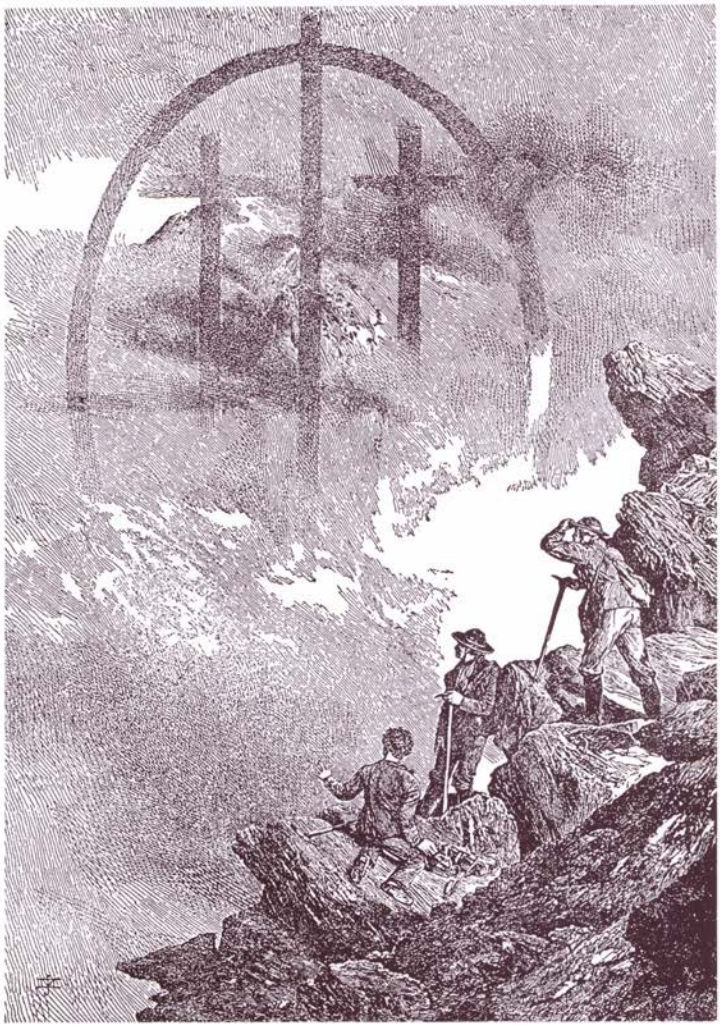
人々は野宿の準備を始めましたが「クロッ」と息子の「ピーター」は明日の道の樣子を調べかた〳〵更らに上に登りました。野宿の準備も暫時に出來たが二人は中々に下つて來ない三時過に漸く歸つて來た。二人の話に依ると登攀は甚だ樂で困難な個所は少ない。隨分頂上までも達して今日中に歸つて來られ相にも考へられましたといふ報告に一同は勇み立ました。夕食を認めて此夕は早く一行は毛布を引被いで明日を樂み眠に就ました。

十四日夜の白々と明くるや一行は攀登に取かゝりました。二人の息子の中一人は茲から返しまして七人となりました。露宿の場所から東に見た出鼻を曲ると始めて天際より一直線に引いた三千尺に餘る偉大なる斜面を見ました。露宿の場所は此の幻燈に印が御座ります。茲からの登りは好い所もあり

惡い所もあつたが一行をして躊躇せしむる程の所はなく。又難所は右か左りへからんで避けることも出來。繩を使用する迄でのこともなかつた。先頭は「ウヰンバー」か「ハドソン」であつた。六時廿分に一萬二千八百尺の點に達した。茲に初めて三十分の休憩をした。夫から又小休みもなく攀登つて十時少し前に一萬四千尺の所に達し五十分の休憩をした。此所までに二回北東の尾根へ出た少しの間は尾根を上つたが勾配も急に岩も崩壞して居るので主として東側山腹の斜面を登ることにしたが成る可く尾根を離れぬ方針であつた。此は墜石を恐れてのことである。

此からは一同の意見で雪の上を行くことにして、暫時にして北へ回つた。此時から一行の順を變じて先頭は「クロッ」次が「ウヰンバー」次は「ハドソン」「ヘドー」老「ペーター」「ドーグラス」最後は息子の「ペーター」といふことにした。「クロッ」も今度は少し模樣が變つたといふて攀登の困難に注意もせねばならず二三の箇所では待合す必要も起つた。勾配も四十度以上である。岩石の間は雪で蔽はれて居るが下は空虛の場所もある。「ウヰンバー」さへも「クロッ」に手を取つて貰ひ又は綱で引上げられた。「ハドソン」は獨り此等の助力を斥けた。「ヘドー」に至つては終始人夫の助力を要したので斯の如き登攀には經驗が少ないことが解つた。併し斯樣な困難な場所も長くはなく凡そ一時間半許りで又雪の上へ出た仰ぎ見ると頂上は目近い二百尺の登攀に過ない誰も頂上に達することを危惧する者はなくなつた。唯だ「ウヰンバー」の心にかゝるのは十一日に「ブレイル」から登つた「カーレル」一行のことである。既に四日目である。我等に先んじて頂上を極めた樣なことはあるまいか。此の朝から一行の間にも話題となつて或る時は頂上に人影が見ゆるなどゝ言出した者もあつた。高く來る程唯だ此の一事が何人の頭にも苦になつた。頂上には來たが「カーレル」等の後であつたといふ運命を見ぬであらうかと心配した。

勾配が緩になつたので身體の繩も解き放し「クロッ」と「ウヰンバー」は先頭を爭ふて急いだ。兩



ウ井ンバーが下山の途中見たる幻影（自畫）

人は遂に頂上を踏んだ夫れは一時四十分であつた。頂上の雪の上を見回すに人の足跡もないので始めて兩人は歡呼の聲を擧げた。併し「マッターホルン」の頂上は南北に凡そ三百五十尺程長く。「ブレイル」に臨んだ方は三四尺高い位故彼方の頂上に足跡があるかも知れぬので「ウヰンバー」は峯を南へ走つた。右左りと調べても雪の上に足跡もない更らに「ウヰンバー」は再度歡呼した。扨て岩に倚つて斷崖から「ブレイル」側を瞰下すと直下遙かに殆んど點程の大きさながら動く數人を認めた。「ウヰンバー」は帽を手に打振りつゝ「クロッ」を呼んだ馳せ來た「クロッ」に彼を見よと指示した。叫んだら聞へるであらうと兩人は聲を揃へて叫んだ。其れと共に上から石を轉倒せしめた。上から見た所に依ると叫聲は聞き得たらしくあつた。後に「ウヰンバー」が「カーレル」から聞き得た所に依ると彼等も叫聲を耳にした。丁度頂上から千二百尺の「クラバッタ」と稱する所に居た時である。

「ウヰンバー」は頂上先登の名譽は「カーレル」と共に仕度かつたと書いて居ります。「カーレル」は「マッターホルン」攀登し得可しと確信した最初の人で伊太利人として先登し度いといふことが一生の樂であつたが此の樂を頻りに弄んで居る中に先登の功は他人に取られた。「ウヰンバー」歡呼の聲は「カーレル」の一生の目的を粉碎したと又「ウヰンバー」は書いて居る。

後れた人々も頂上へ登り來たので北方の頂上へ歸つて携へ來たテントの棒を雪の上に押立て「クロッ」は自己の「シャツ」を竿の尖頭に縛り付けた。此の勝利の標識は「ゼルマット」「リッフエルベルグ」「ツルナンシ」「ブレイル」からも見えた相で「ブレイル」の人々は之を以て「カーレル」一行の押立てた者と考へて「カーレル」萬歲伊太利萬歲を唱へ。一行の歸るを迎へて酒宴を開くべしと準備して居る所へ十五日の朝一行は悄然として歸つて來て村人に云ふには古から人々の云ふのは眞實である山の上には化物が居る我等は之を見た。化物共は大聲に叫んで上から石を轉下したと言ふた相で御座ります。

◎附　錄　「マッターホルン」最初の登攀に就て　二四

「ウヰンバー」等は更らに石を積んで登山の證據を作り扨て展望に耽つた。此の日は珍らしき好天氣で風なく雲なく十里の外も明瞭で「アルプス」連峯中一峯も隱れた者はなかつたと申します。茲に映出したのは頂上から西方の遠望で遙かに「モンブラン」が見えて居ります。

一行は一時間餘を頂上に樂んで、扨て下山の準備を致しました。下山の順序を「ウヰンバー」「ハドソン」の兩人は協議して先頭は「クロッ」たるべし次は「ヘドー」第三番には足許の確實なる黑人に讓らず認められた「ハドソン」第四番目は「ドーグラス」侯第五番目は老「ペーター」第六番目「ウヰンバー」第七番目は息子の「ペーター」と定まりました。猶難所惡場に來たならば用心の爲め繩を岩に捲き付けることまで協議致しました。

一行は以上の順序に繩を結びなどして居る時に一行の氏名を記した紙片を壜に入れて頂上の石を積んだ中に殘さんと言出した者があつたので「ウヰンバー」が之を爲し終つた時には他の人々は早や繩を結び了つて居たので「ウヰンバー」は繩の順位に身を結んで徐々と下り始めました。一行は先づ愼重な態度であつた難所へ來ると唯だ一人づゝ動いて餘人は自分の番の來るのを待つことにした。三時頃に「ドーグラス」侯が「ウヰンバー」に云ふには自分の足許は甚だ不確である、故に若し老「ペーター」が轉倒した場合にはとても支ふることは出來ぬから自分と代つて貰ひ度といふことを言出した。此の話が出て二三分後のことである。「クロッ」は氷斧を傍に置き「ヘドー」氏の下るのを助けて足先を手に取つて一足一足の足がゝりを與へ稍々「ヘドー」が下り終つたので「クロッ」も前進せんと身體を向けかへんとする刹那。「ヘドー」氏が如何にしてか滑り轉げ前に立つ「クロッ」に後から衝き當つた。不意の衝動に「クロッ」も轉げた二人の重量に次の「ハドソン」氏も滑る續いて「ドーグラス」侯まで倒れた。「クロッ」の叫びを聞くや「ウヰンバー」と老「ペーター」は必死の力を出して突張つた二人は繩に引かれて轉倒することなく持耐へたのであるが何たる不幸ぞ繩は「ドーグラス」侯と老「ペ

ーター」との間に切斷して四人は背を下にして斷崖から四千尺下の「マッターホルン」、氷河に落ち込みました。不幸の四人は落ちつゝも兩手を擴げて岩角を握まんと試みつゝあつたと申します。暫時は彈丸の如く四人の落ち行く有樣は見えたが夫も岩に遮られて見えなくなつた。殘りし三人は立すくんだ儘である。綱の切斷した一刹那から友を救ふべき手段は何等あるべき筈もない。兩「ペーター」は唯だ泣く許りである。老「ペーター」から切れた綱の端を受取つた時に「ウヰンバー」は驚いた。意外にも夫れに携行した三本の綱の中の最も弱い古いので此は身體を縛る目的に携帶したのではなかつた。しかも强い新しい綱强いのが澤山にあまつて居つたのである。綱の世話は「クロッ」と「ハドソン」がした何故に新しき强い綱をあまして弱い者を使用したかは解らないと申すことで御座ります。

以上は「ウヰンバー」の記述に依つた所でありますが老「ペーター」が「ゼルマット」の豫審廷での陳述に依りますと「ヘドー」は突當つても「クロッ」は轉げなかつた「ハドソン」が轉げても「クロッ」は蹈み堪へた「ドーグラス」侯が轉げた時三人の重量に流石の「クロッ」も蹈み堪へることが出來ず大聲に「インポシブル」と叫んで倒れたと申すことで御座ります。

意氣沮喪殆んど失心したるが如き兩人を勵まして「ウヰンバー」は下り始めたが兩人の足許は甚だ危い。何時轉倒するやも計られぬ足取りであるので「ウヰンバー」は難所へ來る毎に綱を岩に絡み付けて萬一に備へたそして下り立つと其綱を切斷して進んだ。午後六時には夫れでも無事に怪我なく「ゼルマット」に續く尾根の雪の上に立つことが出來た稍々危險區域を脱したのであります。茲までに幾度か「ウヰンバー」は落ちた友の消息を探らんとした。「マッターホルン」氷河に向ふ崖に出る毎に聲を擧げて叫んだのであるが答ふる者は反響のみである。前夜露宿の所に殘した荷物殊に落ちた友等のかたみの品を取纒めて更らに下山の道をたどらんとした。折から遠く東方「リスカム」の高峯かけて空に白虹が現出致しました。色鮮ならざれ共雲に遮られぬ限甚だ明瞭に現はれた。中心の兩側には巨

大なる十字がある始めは淡く見る間に判然となつた。當時の光景を「ウヰンバー」が畫いたのを茲に映出致します。（圖版參照）

悲劇の後の此の天象「ウヰンバー」も別れた友の彼の世からの音信であるかと疑ふた。若し連の兩人夫が先づ此を認めなかつたならば「ウヰンバー」は自分の眼を疑つたであらうと書いて居ります。兩人夫を促して再び道を急いだ。稍もすれば兩人は「ウヰンバー」に後れる其の中に日は全く暮れて足許は見えなくなる。其でも闇を一時間も歩いた。九時半にやゝ平かな岩上に來た。三人は茲に夜明けを待つことにしてまどろむともなく横になつた。白むを待ち兼ねて更らに出發して「ヘルンリ」から「ザール」の草刈り小屋へ來て兩人の續き得ぬをも見返らず「ゼルマット」へ急いだ。十時半に「ゼルマット」の宿に着いた時に宿の主人の「ザイレル」が戸口で迎へた。不安の眼を以て如何なされましたと問ふたに對して「ウヰンバー」は悄然として我々三人丈けが歸ることが出來たと答へた。「ザイレル」はハラ〳〵と涙を流したが時を移さず全村に觸れ回つて救助隊を編成した。時を移さず一隊の村人は「マッターホルン」氷河を展望し得べき「ヅムット」を指して出發した。六時間の後に救助隊は歸村して氷河の上に倒れた數人の人影が見えるが長く見て居ても動く樣子はない。彼の方面からは澤山の「クレバス」がある爲めに到底近寄り難いと報告をした。此の日は土曜日であるから村人は明日の日曜の寺參りをして夕刻から出發して月曜の朝に屍體を收容し樣といふのであつたが「ウヰンバー」は猶は友人を救ふの希望を擲つことが出來ない。是非今夜から出掛けて救助に向はんと決心したが「ゼルマルト」の村人は寺の僧から日曜の朝の勤行に出ぬ者は破門するとの一言で從ふ者がない。稍く同宿の英人等が他地方から連れて來て居る山人夫を借り受けて此等の英人と共に深夜二時に「ゼルマット」を出發しまして登山の道を「ヘルンリ」まで戻りて朝八時半に氷河の上に出ました。望遠鏡で遍く氷河の上を探した。遂に其と覺しき者を見出して幾多の「クバレス」の危險を犯して漸くに

Michel Angust Croz.

Johann Anton Carrel.

Alerander Seiler.

友の倒れて居る所へ達することが出來ました。

其所に三人の屍體は落ちた順序にあつた。則ち最も前方に「クロッ」次に「ヘドー」少しく離れて「ハドソン」氏である唯だ「ドーグラス」侯の屍體はない。侯の革帶と靴の一方と手袋丈けが落ちて居た。三人の身を縛して居たのは新しい強い「マニラ」綱であつた。故に弱い綱は「ドーグラス」侯と老「ペーター」の間丈けに使用せられたのである。屍體はとても氷河の上を運搬することは危險であるので雪中に埋葬致しまして「ハドソン」氏の傍に落ちて居た聖書を取り上げて其の一節が誦れました。此の時の光景を詳叙した同行英人「マルコルミック」氏の「エー、サツド、ホリデー」といふ一文が御座ります。其後「ゼルマット」の官憲は嚴命を村人に下して三人の屍體を「ゼルマット」迄で運搬させました。即ち廿一人の人夫が非常に危險を冒して三人の屍體を「ゼルマット」に搬出して村の墓地に葬りました。此の時にも「ドーグラス」侯に就ては何の發見する所もありません。屍體は定めて崖の途中に引かゝつたことでありませう。

茲に出しましたのは「ゼルマット」の村の寺の寫眞で時計臺の左方角の引込んだ所に低い數個の墓標が見えます一番左りのが「ハドソン」次のは「ヘドー」其の次のは「リツフエルホルン」で慘死した英人「ウヰルソン」氏外に此も「フインデレン」氷河で「クレバス」に陷つて命を失つた露人の墓があり又十九歳を一期として逝去した「ドーグラス」侯の紀念碑があります。「クロッ」の墓は寺の後に見える巨大な十字架の下にありまして其の墓石には左の如き文言が刻んであります。

A la mémoire de Michel Croz, né au Tour, vallée de chamounix en temoignage de regrets de la perte d'un homme brave et devoué, aimé de ses compagnons, estimé des voyageurs il périt non loind'ici en homme de coeur et guide fidele.

「クロッ」の遺族たる其の妹の爲めには英人「アルフレツド、ウヰルス」が發起して義捐金が募られ

ました。暫時にして二千八百圓の金が集まりました。

最も悲慘な運命を負ふたのは老「ピーター、タウグワルデル」で御座ります。故意に弱い綱を自分と「トーグラス」侯との間に使用したとの嫌疑を受ました。又刄物を以て綱を切斷したのでないかといふ疑をも受けました。左樣なことはあり得べからずと「ウヰンバー」は斷言し綱の切れ口を裁判官に提出致しました。勿論官憲は審問の末放還したのでありますが村人は猶ほ疑を此の老人にかけた爲めに其後は氣が少しく變になつて閉居して他人に會ふことも避け可憐な晩年を送つたといふことであります。

十一日に「ブレイル」から上つた「カーレル」一行は十四日正午に「ブレイル」口の俗に「マッターホルン」の肩と稱する所まで達して「カーレル」の前進を主張したに係らず他の人夫が肯じない爲めに空しく引返しました。十五日「ブレイル」に歸着致しました。「ジョルダノ」君は大不興で再擧するの意なきかと人夫に申ますと「カーレル」は獨り進み出でゝ私丈けは目的を達するまでは幾度でも上る。茲に同行せんといふ者があれば唯今からでも上ると申しました。此の翌十六日に「カーレル」は又「ゴレー」と云ふ僧と他に二人の人夫を語ふて午前六時半に「ブレイル」を出發して午後の一時に露宿の塲所に達し翌十七日夜の明くるや行を起し十四日に引返した肩といふ所へ午前十時に達した。茲から頂上まで約八百尺あつた嘗て先年「ベンネン」の引返した斷崖をも無事に越へて頂上に迫まつた。併し更らに頂上との間に一斷崖があつた吊り下がりて下に下れば先方は登り得る見込があるので「カーレル」と他の一人丈けが「ゴレー」和尚と體重の大きい他の一人に綱で釣り下げしめて頂上へと上り二人は此方の崖上に殘つた。斯くして遂に「カーレル」と他の一人は午後三時に頂上の南端に達しました。茲で「カーレル」等は「ウヰンバー」等が殘した堆石と「テント」の竿に「クロッ」のシャツの結付けたのを見て積年の希望を達しながら永久に自分が敗れたことを知りました。北方の頂上から瞰

下した時に直下「マッターホルン」氷河に多勢の人影を見て何か變事があつたのでないかと思ふたと云ひます。此の人影は「ウヰンバー」等の屍體捜索隊でありました。「ウヰンバー」一行の「カタストローフ」は十八日に「ブレイル」に知れたと申します。

斯くして「ウヰンバー」は七月十四日に「カーレル」等は十七日に頂上に達しました。

餘談として申上ますが「ゼルマット」口の登路は「ブレイル」口に比すれば甚だ樂であるのですが最初の登山に四人も生命を失ふた爲めに後に登る者も暫時は多く「ブレイル」口を登りました。小屋も「ゼルマット」口にも「ブレイル」口にも出來ました。今日では兩方の登路ともに「ワイヤロープ」などが引かけてある爲めに登路も困難は少くなりましたが猶ほ時々此の山で生命を失ふ者がありまして。又「エングフラウ」の樣に此の山の頂上まで登山鐵道の設計を「イムフエルド」といふ技師が致しまして公に致しました。

「ウヰンバー」の競爭者であつた「カーレル」は其後「ウヰンバー」の南米の高峯探檢に案内者として同行致しましたが其後河童は河で果てるの譬に洩れず千八百九十年八月の廿六日に客を案内して頂上から「ブレイル」に下る途中で風雪に遭遇しまして。非常な困難を冒して無事に客を山麓まで連れ參りましたが心勞過度の爲めに一行の目前で息を引取つたと申します。年齡は六十二歳であつた。今日でも「ブレイル」口の其の塲所に同人の爲めに紀念の鐵の十字架が置いて御座ります。此の時の「カーレル」の働は山案内者の龜鑑として傳へられて居りますがあまりに餘事に渉りますので申上げません。

大分時刻も遲くなりましたので私の今夕の講演は終りと致します。謹んで御靜聽を賜つた來會諸君と此の講演の爲めに多數幻燈畫の作成の勞を自ら御取り下された高野幹事に御禮を申上げます。

校正者

木暮理太郎

梅澤親光

山岳第十年總目錄（大正四年）

表紙（第一號）茨木猪之吉氏圖案
（第二號）同
（第三號）同

卷頭畫（淺間山より男體山まで東京近郊赤羽臺所望）木暮理太郎第一號
（五龍岳よりの眺望）三枝守博第二號

挿畫

○臺灣山川分布圖○臺灣中央山脈○白頭山に登る○プリユームリスアルプ○ロツタールザツテルよりフインシユテラールホルンを望む○ユンクフラウヨツホよりアレツチ氷河を望む○ユンクフラウヨツホよりユンクフラウ（右）及びロツタールホルン（左）を望む○テルスカベルレより仰げるウルネルアルペン○ルガノ（サンロレンツオとモンテブレ）○ポンテトレーザ○大阪市に於ける關西大會の景況　（第一號）

○立山別山カールを距てゝ別山と劔岳を望む○赤石山麓の森林。赤石澤上流。小澁川赤石登山口。小澁溫泉○コモ○ウンテルスルツバツハタール○セガンティニ美術館○オーベルピンツガツの汽車の窓より○クーグロツケ（ウエーゼン）○ウエーゼンよりグレルニシユを望む○ウアーレンゼーの落ち口　（第二號）

○枝折峠の半腹より駒ケ岳（魚沼）を望む○駒ケ嶽（魚沼）の絶巓より中の嶽を望む○大湯村より駒ケ岳（魚沼）を望む○駒ケ岳（會津）の頂上より燧岳を望む○平ケ岳の頂上より鷄ケ岳を望む○駒ケ岳（魚沼）の絶巓より中の嶽（右）鬼嶽（左）を望む○シユトラールエツクの小屋○小屋よりフインシテラールホルンを仰ぐ○ガツグの絶壁とグロースシユレツクホルン○グロースシユレツクホルン頂上よりグロースラウテラールホルンを望む○グロースシユレツクホルン頂上よりウエツテルホルンを瞰る○グロースシユレツクホルンの西望　（第三號）

地圖

○新高山（第一號）○登山地圖第一輯劔岳（第二號）○穗高登路圖（第三號）

本欄

		號	頁	號ノ頁
櫻島火山の話	理學士 佐藤傳藏	一	一	一一
臺灣の山岳	野呂寧	一	一一	一一
白頭山に登る	法學士 杉本良	一	三一	三一
晩春の高原より（飛騨高原河畔）	大霜德次郎	一	四〇	四〇
雪の武石峠	別所梅之助	一	四九	四九
武奈岳	水上森太郎	一	五七	五七
近江國打見山と蓬萊山を極むる記	中原繁之助	一	六六	六六
わが郷國の山々	古家實三	一	七四	七四
日本山岳史料（一）	高頭式	一	八八	八八
山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）	鹿子木員信	一	九六	九六
スウイス日記	農學士 辻村伊助	一	一〇七	一〇七
阿蘇岳と阿蘇湖	大平晟	二	一	三二一
劔ケ岳登山記	冠松次郎	二	一六	三三六
赤石を横斷して	可知治夫	二	三四	三五四
スウイス日記	農學士 辻村伊助	二	四八	三六七
平ケ嶽登攀記	高頭義明	三	一	五二三
赤石岳から燈見岳まで	理學士 小倉伸吉	三	一七	五三九
東俣より燈見岳に登る記	守島五郎	三	二三	五四五
蒲田谷より穗高登山	中野善太郎	三	二八	五五〇
燧ケ岳より飯豐山まで	志村烏嶺	三	三九	五六一
淺間山の初冬	冠松次郎	三	五〇	五七二
伊吹山雪中登山	越馬境	三	五六	五七八
南湖大山方面探檢記	野呂寧	三	六六	五八八

◎第十年總目錄

スウイス日記　農學士 辻村伊助 三　七七　五九九
Akaishi-sn　H. E. Daunt 三　七四七

雜錄

○女學生と登山(竹下英一、朝鮮記太留)○甲斐駒山脈に就て(大槻禎郎)○赤城登山道案内(關口泰)○奥信丈岳に就いて(小佐野逞々)○甲斐北國境山脈に就いて(小佐野逞々)○鹿島談山(木暮理太郎)○信州駒ヶ岳遍信(河野齊藏)○比叡山より見たる白山と御岳(今村幸男)○新高山(野呂寧)○日本アルプス(短歌十九首)(大槻禎郎)○大正二年八月旅中の歌(田口虎之助)○四國山名の讀み方に就て(笠井藍水)○信州より甲州へ(松島八郎)一萬尺を越ゆる臺灣の高山(野呂寧)○六甲山の峽谷(柳直次郎)○山岳聯想(山本德次郎)○再び「東京より見ゆる山」の補遺(木暮理太郎)○新案の金カンジキ(高野鷹藏)○各地の山岳會彙報(一)○蹈雲會の發會及び建碑式○一高旅行部創立○二高山岳會大會記事○慶應義塾山岳會の設立○附中山岳會講演會○附中山岳會○神戸高等商業學校山岳會○第七高等學校内に山岳會を設立せんとする趣意書○大阪に於ける山岳講演會　(第一號)

○自然觀察の二方面を論じて山岳觀に及ぶ(古家實三)○富岳は臺灣の南湖太山よりも高し(高頭義明)○北越山岳の記事「山見立大角力」に就いて(高野義明)○乾德山(大村忠一)○塩見岳登山記(河野齊藏)○ガイドの事ども(百瀬慎太郎)○山岳の効用(山本德三郎)○机上談山(ツルモドキ生)○各地の山岳會彙報(二)○京都組合銀行徒弟講習所山岳幻燈講演記事○山梨山岳會講演會○慶應義塾山岳會の登山隊、○京都一中山岳會團體旅行概報○八高山岳會の創立○附中山岳會　(第二號)

○日本アルプス踏破團體を率ゐて得たる感想(竹下英一、朝鮮記太留)○傾斜角の感じられ方及山岳と雲霧との關係に就て(山本德三郎)○別の篇に答へて(ツルモドキ生)○藏玉山(二高山岳會)○八ヶ岳(小佐野逞々)○山岳雜話(山水と主人公)(古家實三)○汽車の窓より(岳雄)○各地の山岳會彙報(二)○京大登山部の實況○京大陸上運動部主催山岳幻燈講演會の記○一高旅行部近況　(第三號)

雜報

○火山の煙○駒ヶ岳の白雪○日本一の高山發見せれん○米國の大探檢家來る○大和アルプスの踏破○婦人の登山○登山團○燒岳登山の流行○山岳旅行顧問開始○露島山噴火の虛報○百尺低し○露島山の逆鉾又盜まる　(第一號)

○雪白き高山の一角○鳥海登山○燒岳の噴火に就きて○名物の嘉門治を訪ふ　(第二號)

○雪中登山○登山者の氣燄○一日半で大阪から富士山往復○京の山岳趣味○團體と登山研究○京都二中健兒の比叡登山競爭○山のローマンス○燒嶽爆發の農事關係○吉野群峰○大峰の花木　(第三號)

會報

○登山案内者改善の一方法○第八回大會の記○關西大會の記○各地の山岳會○幹事小島久太郎氏渡米○會員逝去○故加藤鉄之助君○會員登山報○登山用具一式の製作販賣○會員諸君の爲め登山用具の割引○會員演名金子兩氏アイスアックスを贈たんとす○會員名簿配布○新入會者　(第一號)

○高山深谷第七輯發行○會員に圖書分與○名古屋に於ける有志晩餐會○第十三回有志晩餐會記事○會員通信○本誌發行の遲れたる云ひわけ○新入會者○退會者　(第二號)

○第九回本會大會豫告○第十四回有志晩餐會記事○第十五回有志晩餐會○名古屋の第二回有志晩餐會○今村氏送別及京都有志晩餐會○奈良市に於ける山岳講演會○會員通信○會員に由りて成る近刊豫告○白馬岳案内丸山廣太郎死す○新入會者　(第三號)

附錄

○會員名簿○第一號別冊

○黑部川奥の山旅(前編)　木暮理太郎(第二號)

大正五年十月十六日印刷
大正五年十月二十日發行

定價金七拾錢

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話局長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂